





文學博士坪内雄藏著

文學
叢書

英詩文評釋

東京專門學校出版部藏版

言のついで

文學博士坪内雄藏著

文學
叢書
英詩文評釋

東京專門學校出版部藏版

文學叢書發行の趣意

我校豫て歐米に所謂「大學普及事業」の聲に倣ひ或は盛に諸科の講義録を發行し或は講義を各地方に開き以て高等國民教育の擴充を圖ること茲に年あり然るに從來は政治法律經濟外交史學等の著譯を紹介するに忙うして未だ曾て純文學の鼓吹に従事するに及ばざりしが今回漸く幾分の餘力を得たるにより乞うて斯學專門の諸家を起たしめ新に活動の端を發き文壇刻下の沈睡を攪破し兼れて文學の新機運を招致せんと企圖す乃ち其の手段として一面は古きを東洋の古傑作に溫れて斬新なる評論註釋に新智開發の道を開くと同時に一面は泰西最新の名著傑篇を翻譯若しくは評論して十九世紀末造の大思潮を紹介し髣髴新理想の投影を傳へ以て將に來らんとする人事相の豫測に便ならしめんと期す而して本校の素志は主として世の闕典を補ふにあるがゆゑに所謂東洋の古傑作の如きは既に屢々紹介せられたるもの乃至稍々陳腐に屬せるものを避けて我が未來の文學的活動に關係最も深かるべきものさなくば世間に珍とせらるべきたくひのものゝみを選び且つ最も斬新なる方法によりて其の紹介に着手したり但し追々に事業の歩武の進むにつれて餘力の前陳以外に及ぶとあるべきは固より論を俟たず

卷末に添へたる「ハムレット」の断片は評釋にあらずして翻譯なれども「マクベス」を掲げたるに因みて併せ載せたり。

明治三十五年五月

評釋者識

英詩文評釋

目次

緒言

英文學教授者の心得……………一

訓法手引

『イーソップ物語』の一節（小條の束）……………一五

評釋の一

クーバアの戯作歌……………二三

「チモン、ギルビン」……………二四

評釋の二

ペーコンの論文……………八四
 「學問につきて」……………八六

評釋の三

ドライデンの樂歌……………一〇二
 「アレクサンダアの盛宴」……………一〇五

評釋の四

テニソンの抒情詩及び物語歌……………一四一
 「シャロットの妖姬」……………一四五
 「船たび」……………一八二
 「ドラ女物語」……………二〇九

評釋の五

アゼソンの諷刺文……………二三八
 「伊達男の頭腦の解剖」……………二四二
 「男たらしの心臓の解剖」……………二六二
 「扇子の使用法」……………二八〇

評釋の六

ウオオヅチオスの抒情詩……………三〇〇
 「呼子鳥に」……………三〇四
 「幼時を憶うて不死を知るの歌」……………三一六

評釋の七

シェークスピアの劇詩……………三七七
 『マクベス』(第一段より第二段終まで)……………三七九

附 録

『ハムレット』解題……………一
『ハムレット』翻譯（第一段其の一より同其の四まで）……………一二

英詩文評釋目次終

英詩文評釋

坪内雄藏著

緒 言

英文學教授者の心得

方今我が國に行はるゝ英文學の教授法につきては、あかす思ふことゝも管に一二のみならぬなかに、最も歎ずべきは訓讀法の宜しきを得ざることなり。第二は教授者の鑑識の乏しきとなり、くはしくは、只管字句の解にのみ泥みて趣致と風調とを餘所にするの弊あることなり。第三は教課書選擇の無差別なることなり、すなはち一詩文を講ずるに當りて、其の感想の健不健、文致の新古、措辭の雅俗等、これら緊要なる辨別をもなさて、一切無差別に教授すること是れなり。もとより中央首都の教授者中には、既に夙に此の弊に心づきて改善に力を致せるもあれど、それは尙少數にて、多數の教授者の着眼は今も従前に異なることなし、まして地方なる教授者等はかゝる改善の必要なるべきをだに認めずして、死讀に泥めるもいと多しと

いふ。かくの如くにして續かば、十年英文學を修むとも其の眞の趣味は解するに由なく、偶々國文に累せんのみ。

案ずるに、此の弊習を矯治するの一策は、先づ所謂直譯法を改めて新訓讀法となすにあらんか。夫れ英語學を修むると英文學の趣致を味ふとは、其の法おのづから一なるを得ず。單に英語のみを學ばんとせば、前後六七月が間外國人の家に同棲するも、或は一斑を學ぶを得ん、されど英文學を味はんとせば、更に幾歩をか進めざるべからず。すなはち英語の意を解するにのみとめずして、其の風趣をも領せざるべからず。及ぶべくば我が國文と對照して、彼の詩文の趣致を玩味し、彼れの圓轉滑脱は我が圓轉滑脱を以て迎ふべく、彼れの森嚴莊重は我が森嚴莊重を以て迎へ、能ふべくば響の音に應ずるが如く、影の物に隨ふが如く、原趣を髣髴するをもて要とすべし、尠くとも從來の不妥拙陋なる直譯法を全廢し、語を訓ずると同時に多少原文の風趣をも傳ふべきなり。こはもとより行ひ易からざることなれども、只一步を前進するもまた一步の改修なり、ひたすら守株するの愚なるに優らん。下に掲ぐる英詩文の評釋は尙甚だ粗硬なれども、この訓讀法に對する第一歩の改

修を表せんとするもの、或は以て參考に資するに足らんか。

予嘗て思へらく、今日英文を讀み習はんとするもの、不便二あり、英和對照字彙の尙甚だ不完全なると、從來行はるゝ訓讀法(所謂譯讀)のいと／＼ほしいまゝなるとなり。其のかみ行はれし『薩摩字書』などいへるに比ぶれば、今日行はるゝ英和字典の優れること數等なれど、譯法宜しきを得ざるもの尙あまたあり。例へば、専門にのみ用ふる語にして既に殊別なる名稱の定まりたるに、孟浪杜撰なる譯語を填し、間々讀者をして一物を二物かと疑はしむることあり。且つ『薩摩字書』以來の因襲に乏たがひ、甚しき俗語をも、こちたき漢語をも、殆どわいだめなく譯語としてまじへ用ひたれば、國文を讀む心もて英和字典を見るときは、動詞を形容言と誤り、意義殆ど無き接續詞にも深き意義あるやうに思ひ誤ることあり。例へば、thatといふ語は接續詞として用ふる時は、概して國文の「と」といふ語(又は「を」といふ語)に相當するのみなるを、字典には「何々する事」と譯したるゆゑ、初學者は此の語に必しも「事」といふ義伴へるやうに心得

He said that he would not go.

といふ文を訓ずるや、よしや逐語譯にもすとも

「彼れはいへり、彼れはゆくまじと」

などいはい足るべきを

「彼れは彼れが行かぬであらうこと。をいひし」

とやうに訓ずるゆゑ、所謂譯讀に慣れぬ者はみづから訓じながら何の意とも解し
かぬるなり。或は「いひし」とは連用言にやといふかるもあらん。總じて今の英和
字典は、現在動詞を譯するに、常語（れのことば）の使用法によりたれば、「刑す」「稱す」などありて當然
なるをば、「刑する」「稱する」と譯して通用言かと疑はしめ、過去動詞を一概に「刑せし」
「稱せし」「殺せし」「そしりし」と譯して國語法を紊したり。

畢竟これは國文法の一定せざりしに因ることなり、即ち正當なる英和對照文典の
成りがたかりしに因るなり。或は明治新文法の制定せらるゝの時來たらば、「刑す」
「稱する」等は現在動詞として許認せらるゝに到るならん、而も今行はるゝ文法上
よりいへば破格の言たること勿論なり、すなはち俗語上には許さるべきも文章上
には許さるまじきものなり。

又英語の代名詞はくさくさにて、非情有情の別あり、男女の別あり、又主位、賓位、領位
などいふ位置の格あり。男性の代名詞は he, his, him 等にして、女性の代名詞は she, her
等なり。字典之れを譯して男性は「彼れは」「彼れの」、彼れになど、女性は「彼の女は」「彼
の女の」「彼の女に」など管々しく物せり、是れ又訓を冗漫ならしめし一因なり。國文
の代名詞もくさくさなれど、「彼」といふに男女の別なければ、男をも女をも「彼れ」と稱
すべく、又そがもてる物を指さんに、必しも「彼れの帽」「彼の女の帯」といはずともある
べく、皆おしなべて「其の若しくは」「そが」などいはい足るべくや。多くはかゝる代名
詞さへ省かれても至當なるが如し。例へば、今の直譯法によれば、「彼れ帽をとりて
起ちぬ」といはい足らんを、「彼れは彼れの帽をとり而して起ちあがりし」と訓むなり、
冗長の至ならずや。かゝる例一々説かば限なからん。

又所謂譯讀法の不都合は字典の杜撰よりも甚し。例へば、「(手)をわたくし」と俗訓
しながら、*von* (爾)を「なんぢ」と雅に訓じて、「わたくしは爾を愛する」などいふ不等（ちがひ）の訓
を成し、若しくは接續詞 *and* をいつも同じに「ソウシテ」又は「而して」と訓じて、「蟻と蛛
又は「蟻と蛛」とあるべきを「蟻とソウシテ蛛」と訓み、廉且正なる若しくは「廉正なる」

と訓じて妥當ならんを、廉直なる而して公正なるとやうに冗長なる熟語を繋ぎ合はせて訓むなどはいふも更なり、足下がそを知らざりしは不思議なりといはゞ足るべきを、汝がそれを知りなさいりしこと、そのことが不思議である」と讀むなど、笑ふべきよりはむしろ我が國文を害ふものとして憂ふべきなり。よしや聰明なる讀者輩はかゝる拙譯に拘らずして原文の趣致を解すとするも、其の會得の遅かるべきは多く辯ずるを俟たざるべきなり。按ふに維新以後國文の法格のみだりがはしうなりたるには種々の由縁あれど、所謂直譯法もまた與りて力ありしは明かなり。奇怪なる熟語、耳なれぬ造語の用ひらるゝに至りし、若しくは文のおしなべて冗漫になりし、皆此の直譯法の弊なり。

予嘗て或國學の學校に聘せられて英文學を教へたりしことあり。かしこの學生はなべて國文法には通じたらん筈なるに、尙英文を譯するには所謂直譯の法によりて甚しき破格の言葉をつらね、屢々正しにけれど其の甲斐なかりき。一方に於て矯正するも、他の教授法舊の如くならば且つ直うして且つ曲ぐるのたぐひなるべく、國文家が一方に於て頻に國語法を講ずるも、他方に於て英學家があやしき直

譯の句法を教へば、國文の一定は到底行はるべき時なからん。正當なる英和對照文典を編纂すること明治文壇の急務の一なり。

更に一例を擧げん、我が愛する同胞といはゞ足らんを、我が親愛する所の同胞といふ。親の字に必しも深き意あるにあらず、所詮は直譯口吻のうつれるのみ。又此の所のといふ語の維新以後いたく行はるゝに至りしも、按ふに英語の關係代名詞 *that, who, which*, などをあしく訓じたるが遂に筆癖となれるにやあらん。此等のことわり、一々にいへばくだくし。もとより予の訓讀法とても悉く妥ならざらんは勿論なり、されど從來廣く行はれたるに比せば、國語を害ふこと尠かるべしと思ふのみ。またかゝる訓讀法を行はまほしく思ふ同感の士今は世に乏しからず、増田藤之助氏をはじめ辰己小次郎氏、岡倉由三郎氏、其の他雜誌やうの發見物にては『日本英學新誌』『英語學講義』など、なほ其の他予が知らざるあたり、同感の士あまたあらん、只久しき因襲を破ることの難くて世に新訓の行はれぬなるべし。さて上に説ける所は予が新訓論の一斑にして、只訓讀法に關する改善の一策のみ。而して此の策も未だもとより万全なるにあらず。或は謂はん、英語と國語とは到

底語の脈を殊にせるものかゝる國語法に拘泥したるの訓は却りて英文の眞意を害ふ。英語を解するには宜しく大意譯を主とすべし、若干の語をひきくるめて俗語をもて綜譯し、全軀の眞義を傳へんを要とし、強ちに語脈に泥むべからず。足下の所謂新訓は幾分か逐語譯の趣あり、又恐らくはひとり文章家の教授者を俟ちてのみ行はるべきことにして、尋常の教授者には望みがたからんと。或は然らん。但し予は英語學の教授を論ずるにあらず、主と英文學の教授法を説けるなり、而して英文學の教授者は多少國文に通達し、并ひに文章に達せざるべからず、然らざるは争でか英詩文の趣味を講ずるを得ん。

さて第二の弊といふは英文學を教授する者の美文上の鑑識批判力乏しきことなり。詳しくいへば、ひたすら一語一句を解釋するにのみ汲々として、一篇の眞意と風趣餘韻とを傳ふるに力めざることなり。げにや英語を教ふるをのみ主とせば、必しも風趣を談ずるに及ばざるべし、まかれどもかりにも英文學を講ずとせば、作家の精神のこもれる所、其の文致の殊なる所、其の風調の妙、其の餘韻の多少、若しくは其の作家の特質なども併せて講ぜざれば、不具足にあらずや。例へば、アチソン

の文の如き、若し之れを單に語義の解釋にとめれば、大かたは平々坦々、其の何の邊に談諧の妙あるか、其の何が故にジョンソンの小品と異なるか、其の如何なる特質がゴールドスミスの散文に異なるか、殆ど見分くるに由なからん。若しくはシェイクスピアの劇詩の如き、既に演技すべきものとせば、たとへこれを口譯するも幾分か其の科介との關係を示し、其の語の緩急鹽梅、若しくは輕重の度合等を示さずば、其の何が故に古今空絶の傑作なるか、いづこが人情の精髓なるか、其の近松、竹田等に比して如何なる著き逕庭あるか、殆ど判知するに由なかるべし。蓋しアチソンもペーコンも、シェイクスピアも、テニソンも、方今行はるゝ直譯法によりて譯せられ、而も語義以外の風趣につきては殆ど傳へらるゝ所なくば、其に是れ異風の怪文字、重くるしく、まはりくどく、然らざれば言ひまはしいと幼びたる舌たらずの言葉に似て、其の何が故に妙なるかは、殆ど片影だに知らんに由なし。もとより英國の詩文章は我が國文に比するときは、全く語の質を殊にすれば、ひとり訓讀の方法のみによりて趣味と風韻とを傳ふるは所詮望みがたきことなれども、さりとして教授者の着眼にしてをさく、風韻を傳ふるにあらば、其の法必無とは斷ずべからず。例へ

ば、一詩文を講ずるに先だち、まづ該作家の畧歴を語り、其の境遇、時勢を叙し、又其の作家の特質を説き、其の作の由來を述べ、及び其の作の趣味を指摘し、或は和漢の作物につきて類同を求め、或は和漢のと對照して其の感想の異なるを示さば、多少眞趣味を髣髴するに庶幾からんか。然るに從來の教授者は、概してかゝる點に留意せざるなり、彼等は森嚴なる論文をも、輕妙なる戯文をも、同じ口吻にて譯し去り、同じ着眼にて講じ去るなり。甚しきは第一リーダーダアの文章とシェイクスピアの句とをだに區別せざるなり。

Ant and spider. (蟻とそうして蜘蛛)

To be or not to be! that is the question: (あるべく或はあらぬべくよ、それが問題である)

二者共に殆ど何の義とも解しがたし。而して教授者は曰はく、「後者はシェイクスピアの傑作『ハムレット』中の名文句、デンマークの太子ハムレットが父の讐を殺さんとして殺すを得ず、煩悶苦惱のあまり發したる獨語なり。即ち、生きてゐるやうか又は生きてゐまいかの義即ち「死ぬるがましか、生きるがましか、若しくは「存らふべきか但しまた存らふべきにあらざるかなど、意譯すべきか。何等の妙文句ぞ。是れハムレット公子が生死の間に苦悶する時の劈頭の警句」と。讚歎幾百言、聽く者呆然、恐らくは只謂はれを聽いて不精々々に感服するの外なかるべし。何となれば所謂意譯を聽くも尙其の妙を認むるに由なければなり。蓋し「死ぬるがましか」云々を聽くや、人恐らくはまづ地方の盆歌調などを想起すべく、「存らふべきか」云々をかば、其の七五調の悠長なるに感じて原語の風調をさとらざるべし。すなはち千百言の講釋も、到底風韻を傳ふるに益せざるなり。然らば如何にせば可ならん。無上の良法は最良の意譯を施すにあれども、その大文學者を俟ちて成るべきこと、尋常の教授者の能ふべきことにあらず。要は教授者をして批判家、鑑賞家、たるの資格を具へしむるにあり、たとへ具象的に眞趣味を傳ふる能はざるも抽象的に之れを講ずるの能なかるべからず。前の例についていはば、此の劈頭の苦悶の語の如何に簡潔なるかを説き、如何に獨語の冒頭のかくあらざるべからざるかを説き、拙き意譯を施さんよりはむしろ忠實なる逐語訓を下すべし。例へば

To be (or) not to be! that is (the) question: (存ふると 存へざると 此れ也 疑問)

この譯もとより何の風韻をも傳へざるなり、されども原意を増減するの弊はなし。蓋しこの譯に必しも應。當。須。などやうの「ベシ」の義はあらず、まして「孰れか勝れる」とやうの強き意はなし。名優の此の段を演じたる型によるも、此の一句はいと靜に言はるべきものにて、意譯にもせよ、直譯にもせよ、一語たりとも増減すべからざる筈なり。こは只一例にとゞまれど、總じて鑑識なき講釋ほど原作の眞趣味を害ふものはなし、到底説明する能はずば忠實なる逐語訓を施すが、却りて万全に近き策なるべし。所詮英語の教授ならば知らず、苟も英文學を教へんとせば鑑賞の識ほどは具へざるべからず。

さて第三は教課用書選擇の無差別なることなり。從來の教授法によれば、英國十八世紀の名家も現十九世紀の佳什も、殆どわいだめなく採用せられ、而も教授者は其の新古の説明をもせず、二百餘年前の名家の詩文の語法又は文脈さへ頗る今は異なれるをも現時の英文のやうに講じ去り、些の注意をも施さざるなり。或はまた破格の名文を採用して之れを教課書となすことあり、例へば、カーライルの晩年の作の如きこれなり。其の議論の是非はあばらく措く、其の破格文たるは争ふ

べからず、例へば、我が西鶴の作の如し、其の破格の甚しきにも拘らず美文たるの價値はこれあり、而もこれをもて國文の模範とし教課に用ふべしといふものあらば、眉を蹙むる者十中八九ならん。いはんや何等の説明もなくして尋常の詩文の如く講じ去るをや。但し予は英文學の教授法を論ず、故にカーライルの晩作といふともこれを排除せよといはんとはせず、只其の教授者の粗放と不深切とを非とするのみ。カーライルの如き情熱者の所論は、論としても若干の批評を附加するの要あり、况や文として一種特別の性質あり、充分の評釋を加へざれば徒に初學の讀者を惑はし、單に英文學の本質を誤解せしむるのみならず、尙他に歎ずべき弊を生ぜん。かくの如きはまだよし、甚だしきに至りては其の文辭こそはめてたけれ、其の論述せる事柄はもはや彼なたにては陳腐に屬したるを、今尙新しき説のやうに誇張附會して講ずるため、我が年少の子弟をして圖らずも時勢に後れしむることあり、若しくは不健全の感想を傳へて、感じ易き頭腦に累することあり。例へば、バイロン、シェレ、バアンス等の詩はをさへ、時勢に胚胎して成れるものゆゑ、それを講述するや毎に歐洲の當代を併叙し、何故にバアンスの感慨、バイロンの憤激の志

かく猛烈ならざるを得ざりしか、何故にシェレの感想のさしも理想界に逸したりしか、佛蘭西革命の狂暴が如何に人心を震蕩せしか、個人と社會との軋轢の如何に極端に達したりしか、此等密接せる大事件を併せて叙説する所なくんば、ひとり彼等の詩篇をして幾分の氣焰を減せしむるのみならず、感じ易き年少の子弟をして間々不健全の感想に感染せしめ、不測の弊害を醸すことあるべし。今や我が思想の潮流は將に泰西の大潮に合流し相ならびて理想の大海に向かはんとす、否、或は泰西のに駕して真先に理想海に注がんものは我が日東の思潮ならんか、電の如き今日の潮勢より觀れば、いまだ如何にとも斷ずべからず。時勢既にかくの如し、然るに退潮とも名けつべき過去の感想を代表せる彼なたの詩文章を講讀するにあり、此等緊要の説明を怠り、或は語義のみを講じ去り、或は甚しく誇張敷衍し、更に甚しきに至りては作家が不健全の感想をさへ讚歎稱揚して措かざる如き、教授者の沒鑑識に因るとはいへども、歎くべき弊にあらざや。バイロン、シェレ等は例として挙げたるのみ、ジョンソンの『ラセラス』、アチソンの『スベクテートア』、ポーアの『人間論』、スヰフト、エマアソン、ゲーテが壯時の作など、皆注意して講ぜざんば不測

の弊害を醸すの虞れあらん。英語のみを教ふるにはかゝる虞れなきとなれど、總じて文學的講習は幾分か情操上に影響を及ぼすものなり、思はざるべけんや。

訓法手引

初學者の手引草として左に訓法の一例を示さん。即ち『イロツプ物語』中の一節なり。訓釋甚だくだくだしけれど、此の一節は後の手本に態と細やかに物したるなればよく／＼會得して讀まれたし。

以下原文に()印を附したるは大抵語の接續關係等を指示する語、若しくは焉哉乎也などに類する添字、時に訓ずべき場合もあれど、必しも訓ずべきにはあらず。又 | 印を附して繋ぎたるは、便宜のため連ねて訓ずべきもの又は彼の國語の定格として相分離すべからざるもの。くはしくは下註を看てさとりべし。

束の小條

(The) Bundle of Sticks.

▲ the という語時としては、此の「其の」「件の」「彼の」など訓ずべき場合もあれど、こゝは訓せずして足るべし。強ひて直譯せば、「小條のその束などあるべし。又「束の小えだ」と上より読みあろしてもよし。▲ Sticks という語くはしくは「杖の形したる細長き木」必しも「えだ」の義にあらざ、こゝには假譯せり。

ある 父 もちき 七 男(チ)

ありし 常に 争ふ(テ)

互 に

A—father had seven—sons (who) were always quarreling with—one—another.

「ある父常に相争へりし七男をもたりき」と訓せば更に妥なるべし。▲ a は the と同じく冠詞といふものゆゑ、時としては訓せざるをよしとすることもあり。▲ who は關係を示す詞、前にコムマ、印其の他の句讀點無きときは、概して訓せざるを可とす。(the, which 等また同例)。

若し句讀點前(本文について)は Seven sons, who とやうにあらばある父七子をもたり、そは互に」とやうに上の句と切りはなして訓するを可とす。

▲ with one another は熟語、いづも互に又は相と訓すべし。▲ quarreling は「争ふ」といふ動詞に種々の活用あるを示す ing といふ語尾の添はれるなり。▲ ing は「テ」又は「

ッ」と訓すべき時と、「レバ」「ケレバ」と訓すべき時と、「タル」と訓すべき時とあり。本文の如き場合にては「テ」と訓すべし、即ち「争うて」と訓むべきなり。

かば 此れ 困せしめし

父(チ)

いたく 彼れ

一 日

望みぬ

皆 の 彼等(ニ)

As this distressed (the) father very—much, he one—day desired all—of—them to

來ん(チ) 其の 居間

come to his—chamber.

「此の事七男相争へることいたく父(の心)を困せしめしかば、彼れ一日彼等の皆に望みぬ、其の居間へ來んを」と訓む。▲ this は「此れ」「彼れ」「其れ」と場合に應じて訓む。形容言の時「此の」「彼の」「その」と訓む。▲ very much は熟語、いづも「はなはだ」「さう」「さう」など訓す。▲ as は本文の如く接續詞の時「かば」「如く」「隨」など訓むべし。▲ so come の to は繫辭、to の後に來たる動詞の活用自在なるを示す辭。本文の如きは或は「彼れ一日望むらく、其の居間へ來よ」とも訓すべし。さにも必しも「ん」の義あるにはあらず。さて to his chamber の to は「テ」「ハ」の義、時としては「に」の義ともなることにては「ハ」の義なり。

「父の心を困せしむ」といはずして、「父を困せしむ」といひ、「我が言を聽け」といはずし

て hear me (我れを聽け)といふ、これ英語の格なり。

彼れ 置きぬ 前に 彼等(ノ) 七 小條(ヲ) ありし 結束せられ

He (there) laid before them seven sticks (which) were fastened together.

「彼れ彼等の前に、結束せられありし七小條を置きぬ」と訓む。▲thereは添字、大概は訓せざるをよしとす。▲fasten together は熟語、總じて英語には「何々せられたる」とやうに、他動風に讀むべき句いと多し、概して自動風に譯すべきものなり。「結束せられありし」は「結束したる」といふ義也。

今(イマ) 彼れ 我れ んとらせ 一 百 クラウン(ヲ) に その 者 の
“Now”, said he, “I will give a hundred crowns to that one of
汝等 得ん 折り 此の 束(ヲ)の 小條 ふたつに
you (who) can break this bundle of sticks asunder.”

「彼れいへらく、いでや我れ汝等の(中)此の小條の束をふたつに折り得ん其の者に、一百クラウンを與せん」と。▲nowは發語、▲willは「ん」「らん」の義、又「欲す」の義。▲crownは貨幣の名、▲break asunder は熟語、熟して「折り割く」と訓ずるを優れりとす。▲canは從來「能ふ」と訓じたれど、概しては「得ん」と訓む方可なるが如し、隨うてcanの過去couldを得べし、「得き」「得べかりき」など訓むを可とす。

各 の 彼等 試みき まて(モ) 至極 の 其の 力 而も 各 せざるを得ざりき
Each of them tried to (the) utmost of his strength, and each was obliged
自由 と 彼れ 得ざりき 折り 其(ヲ)
to confess that he could not break it.

「彼等のもの、其の力の至極までも試みぬ、而ももの、自由せざるを得ざりき、彼れはそれを折り得ざりき」と。▲to the utmostは熟語、「及ばん限り」とも訓すべし。▲was obliged toは「つ」も熟して「せざるを得ざりき」と訓むを可とす。▲thatは接續詞、「と」又は「を」と訓む。▲彼れ折り得ざりき」の「彼れ」は國語の格よりいへば「我れ」とあるべく、「得ざりき」も「得ず」と現在動詞風に改むべきなれど、總じてかゝる場合を三人稱にて通じて過去動詞を用ふるが英語の文格なり。

而も 尙 いへらく 父 あり、何の(ヲ)難き(ト)も(モ)つきつ 其れ(ニ)
“And yet” said (the) father, “(there) is no difficulty about it.”

「父いへらく、而も尙それにつきて、何の難きこともあらず」。▲andは間、而も」と訓む、而をまかして」とも、まかるも」とも訓むにひとし。▲and yetの二語を熟して「まかしながら」又は「まかも」など訓みてもよし。▲isはまづ「何の」と訓じて後、更に動詞を添へ

てず」の義に訓ずべし。▲aboutは「つきて」「關して」又は「軽く」といふほどの義にとり
てもよし。

彼れ 其の時 解きぬ 件の 束(チ) 而して 折りぬ 一 小條(チ) 後に 他(ノ) もて
He then untied the—bundle, and broke one—stick after (the) other with (the)
最大の たやすさ
greatest—ease.

彼れ其の時件の束を解きぬ、而して最大のたやすさもて一小條を他小條の後に折
りぬ。更になだらかに訓ずれば下の如し、「彼れ其の時件の束をほぐして小條をつ
ぎくに折りぬ」といふたやすく。▲one after the other はいづも熟して「相つぎ」
など訓ずべし。▲andもかゝる句取のときは「軽く」と訓ずるをよしとす。▲with
pleasure, with pain, with anxiety, などいふ句法は、いづも引きくるめて副詞と見るを
正當とす、すなはち「喜びて」「うれしく」「苦しみて」「心苦しく」「きづかひて」「きづかは
しく」など訓むべし。本文は「しく」と訓ずべき場合也。

其の時 彼れいづらへ如く ある もて 此等 小條(チ) 我が見等(ヨ) 然り もて(ヨ) 汝等(チ)
Then he said, "As (it) is with these sticks, my—sons, so—(it)—is with you.

「其の時彼れいづらへ如く、此等小條をもてある如く、我が見等よ、汝等をもても然りと」
▲この「は」は訓ぜざるを可とす。▲「もてある如く」は「於けるが如く」の義。

間は 汝等 共同(ト) 汝等(ノ) たり 匹敵 對して なて 汝等の 敵(ニ)
As—long—as you hold—together, you are (a) match for all—your—enemies;

「汝等共同する間は、汝等はなべて汝等が敵に對して匹敵たり。」▲as long as は「い
つも」「間は」「限りは」と訓む。▲hold together も熟語。

されど若しならば汝等 争ひ 且つ 分る(ト) (カ) へ 起らに 汝等 如き 此等
but if you quarrel and separate, (it) will—happen to you as—to these—
小條 汝等(チ) 見る 横はる(チ) 折れ(チ) 上に 此の 地
sticks (which) you see lying broken on the ground.

「されど若し汝等争ひ且つ分かるれば、汝等が折れて此の地上に横はるを見る此等
小條に起こりし(如き)ことが、汝等の身上に起こらん。」▲butは概して簡に訓ずべ
し、俗語ならば「が」といはんほどなり。▲「は」は本文の如き場合には下の句の義を代
示する語なるゆゑ「若しく」「は」といふほどのテニハに譯して至當なり。

寓意 一致(ヘ) なり 力
Moral—Union is strength.

「寓意」に曰はく、「一致は力なり」。▲moral 教訓の義かゝる場合には寓意と譯するを
 妥當とす▲——印はこゝにては「に曰はく」といふほどの義を含む時としては「くはし
 くいへば」又は「すなはち」等の義をも示す。

評釋の一

クーバアの戯作歌

下に釋するは、英國近世の詩人のうち、眞ごゝろの深く其の作にあらはれたるをも
 て名ありしウィルヤム、クーバアの作なり。クーバアは、今より百年ほど前の人、『夕
 スク』と題せる長篇の詩によりて廣く世に知られたれど、眞の傑作は却りて其の小
 品の作中にあり。此の人知命の齡のころ、或人より幼少にて死別かれし實母の肖
 像畫を得て物せし作など、取りわけてたへなり。又此の人不幸數奇なりし上に、う
 まれつき多病にて、物事に感じ易く、それが爲、後には一種の憂鬱病を醸し、日夜怏々
 として閉居したりし折、其の友なる女性、某の夫人、深く之れを憐み、おのが家に宿ら
 せて、くさくさのをかしき物語などして鬱散せさせんと欲し、或日ヂェン、ギルピンと
 いふロンドン市人の失策に關する一場の逸話を語りたり。其の話あまりにをか
 しかりしたため、クーバアは其の夜いねもやらず、幾たびか思ひいでゝはひとり笑ひ
 し、果ては得たへずして起きあがり、其の話の筋を題として一篇のをかしき物語歌

を作らまくせり。さて一たび興來たりては、筆おのづから走りて、其の夜のうちに全篇の成りし、これ下に釋する歌なり。翌くるあした之れを彼の夫人に示し、作者も聽く人も、ふしまるびて笑ひ興じ、まばらしくは日ごろの憂愁を忘れきといふ。世には滑稽談話の作は、愁を知らぬ人の手にのみ成ると思ふもあれど、まことのをしみは却りて深き憂愁を知れる人の手に成ることあり。クーバアの作の如き、其の一例なり。此の作もとみづから慰めんためにもあらず、また人に見せんためにもあらず、只をかしさの餘り、一氣呵成せしなれば、其の妙は不用意の所にあり。あしなべて平易流暢、俗語をも自由にまじへ用ひて、句どり面白く、所詮は輕妙をもて優るものなり。訓釋の邪魔なれば、下には一々に品評せざれど、原句を讀み味はば、説かずとも餘韻は知らるべし。但し寓意あるにも、非ず、隱微あるにも、非ず、只をかしみの、人情の誠よりいでも、俗に所謂滑稽談話の卑陋なるに似ぬ所味ふべき也。

ジョン、ギルピン

John Gilpin

ジョン、ギルピン(ト)なりき 一市民

John—Gilpin was a—citizen

の 信用 聲譽

Of credit (and) renown;

一 民兵隊(ト) 長 また なりき 彼れ(ト)

A—train-band—captain—eke was he

の 名高き ロンドン 府

Of famous—London—town.

ジョン、ギルピンは、信用、聲譽の一市民なりき、彼れはまた名高きロンドン府の一民兵隊長なりき。

▲「信用、聲譽ある市人」とやうにいふべきを「信用、聲譽の市人」といふは英語の常格なり、かゝる場合に用ひたる and は「又」の義なれど、訓せずともあるべくや。總じて英語の詩文には、and といふ接續詞を用ふることもひたししけれど、國文にひきなほせば、大抵は用なきもの也、「山川草木」の四字も、英語に譯せば、「山 and 川、草 and 木」とやうに物するを通例とす。訓讀の折は兎も角も、翻譯せん折には心得べきことなり。

クーバアの戯作歌

ジョン・ギルピンの しま くらゝに 其のいとしき(人)
John—Gilpin's—spouse said to her—dear,

くらゝ くれそびて 我等 あり たり(ト)
“Though wedded—we—have—been

此の心たゆまるゝ二十年

These—twice—ten—tedious—years, yet (we)

何等のまつり日(チダニ)見(す)ありたり

No holiday have—seen.

ジョン、ギルピンの婦、そのいとしき人にいらく、「吾等此の心たゆまるゝ二十年(があひだ)つれそびてありたれども、何等のまつり日をだに見ずありたり。(一日だに)楽しき遊びせしことなしの意)

▲「いとしき人」とは夫の義「心たゆまるゝ」とは長きといはんほどの義。▲「は」は何のと先に訓じて、更に後に來たる動詞を打消すやうに訓ずべきもの。▲「まつり日」とは遊興の日、といはんほどの心。

あす(ト) なり 我等が 結婚日

“To-morrow is our—wedding-day,

われは べし 修むべし

And (we) will—(then)—repair

く 彼の ヤニ なる エドモンタ

Unto the—'Bell' at Edmonton,

皆 につ 二頭立の馬車

All in a—chaise—and—pair.

「明日は我等が結婚(の)當日なり、されば彼のエドモンタなるベル軒へおもむくべし、皆(が)二頭立の馬車にて。

「明日は我等がはじめて夫婦となりし日にあたれば、家内中が二頭立の馬車にのりて、エドモンタといふ所のベル軒といふ旗亭へおもむきて遊山せんはいかに」と細君がいひいてたるなり。▲ and then の二字は熟して「されば」と訓ずべし、二字相ならびたる時には間と、而して後に「さて後に」など訓ずることあり、本文は「されば」の義。 and 一字にても「されば」と訓ずべき場合あり。

我が 妹 と 我が 妹の 兄(ト)

“My—sister, and my—sister's—child,

クローメアの戯作歌

我が身 と 三人の兒等(ト)
Myself and children—three,

塞ぎなん その車(チ) されば御身(シ) 乗りたまふべき也

Will—fill the—chaise: so you must—ride

に 馬背 後に 我等(ノ)

On horseback after we.”

「我が妹と我が妹の兒と、我が身と三人の兒等とが、その車をば塞ぎなん、されば御身は我等の後に馬背に乗りたまふべき也。」(我が夫は別に馬に乗りて、我々の後より來ますべき也の義)。

▲sisterは姉妹共通なれど、こゝは妹と見るかた穩ならん。▲〇は、軽く「されば」といはんほどの義に釋すべし。▲mustは俗に「何々せねばならぬ」と譯したれど、其の實は「何々すべきなり」といふときの「すべき也」といふ意、強くとぢめたる語也。これを「何々せねばならぬ」と直譯し慣れたればこそ、近ごろの文章に「何々せざるべからず」といふ句いたく行はるれ、まか譯しても妥當なる場合あれど、一概にはいひがたし。「すべき也」は、然定言「せざるべからず」は、否定言、同一視すべからず。

彼れやがて答へけらく、予(コ)めてたしとす

He soon replied, “I do—admire

就きて女性(ノ中ニ) 只一人(ヲ)

Of womankind but one;

而して御身(コ)なれ彼れ我がいとまうつくしのうつくし(人ヲ)

And you are she, my—dearest—dear,

かゝる故に 其(シ) なるべきなり

Therefore it shall—be—done.

彼れ(キルビン)やがて答へけらく「予れは女性の中に就きて、只ひとり(のみ)をめでたしとす、御身こそは彼れ其の人なれ、我がいとま(うつくし)のうつくし人よ、かゝるがゆゑに其(御身)の欲することはなざるべき也。(御身の欲すること、何事をかなさざるべきの義)

▲〇といふ語、かゝる場合にては「中に就きて」と訓ず、すべて「天下の人物に就きては某は最大の人」又は「億萬の中に就きて彼れ一人のみは云々」などいふ最大級の意籠れる時の〇は、本文の如く訓ずるを可とす。▲dearは「愛らし」の意。▲shall beは「べし」

といふ義のいと強きもの「何々せざるべしや」と反語のやうに譯しても可なることあり。本文の如き然り。

予(ハ)なり 麻布商 聞えたる
"I am (a) linen-draper—bold,

しかなくて 世の人 知りてあり
As all the—world doth—know;

されば 我が 良 友 彼の 光布匠(ガ)
And my—good—friend the—calender

貸さん 其の 馬(チ) 往く入く
Will—lend his—horse to—go."

予は聞えたる麻布商なり、まかなべて世の人知りてあり、されば我が良友たる彼の光布匠が往くべく其の馬を貸さん。其の馬を貸して往かしめんの義

▲^三は、かゝる場合には「然か」と訓ずるをよしとす、但し「人皆の知れる如く」とやうに訓ずるも差支なし。▲^四dothはdoと同義なれど、意義や、重し。▲光布匠は布の

光澤だしを營業とする者。

う(チ)へ キルビンが妻 さ(ン)たり う(チ)へ(チ)のたまひ

Quoth Mrs.—Gilpin, "That's well said;

わ(チ) は 葡萄酒(ン)めれ 價たふへ
And, for—that wine is dear,

吾等(ン) 供せられてさ(チ)なん も(チ) 自家の(チ)
We will—be—furnished with our—own,

さ(ン) あり 色もよく 又 澄み(チ) (P)
Which is both bright and clear.

キルビンが妻いへらく「そはいしくものたまひたり、さて葡萄酒は價たふとくあれば吾等は自家のをもて供せられてあらなん、宅にあるのを持参せん」の義、そは色もよく澄みてもあり。

▲物語の人物にても、現在の人らしくものするときは、Mr.又はMrs.といふ尊稱を附して物する、彼の國文の例なり。▲for thatは「二字にて今のbecauseの義 both andは二字にて「且つ又」といはんほどの義、何々にてもあり又何々にてもあり」といふ

折の「も」の義に釋すべし。▲此の段夫婦が貨殖に用心深く、つゞまやかなるを畫きたり。

ジョン・ギルピン(ト) 類(ト) 彼の深き妻(ニ)
John—Gilpin kissed (his) loving wife:

ただ喜ぶ(ト) 彼(ト) 知(ト)

Enjoyed—was he to—find

と 遊興(ト) 彼(ト) ありける(ト) 心傾けて

That, though on pleasure she was bent,

心(ト) 傾(ト) け(ト)

(She) had (a) frugal—mind.

ジョン、ギルピンは真心深き妻に類ずりしつ、彼れは彼れ(妻)が遊興に心傾けてありけるものから、つましき心もちぬと知りて、いたくよろこべりき。

▲pleasureは快樂の意(ト)にては遊興の義。▲to findは「知りて」など訓ずべし。▲kissは接吻と譯し來りたれど妥ならず、「くちつけ」と訓ずるもいかゞ、こゝには假譯を施したり。

そのあした(ト) 來ぬ 車(ト) もて來られつ

The—morning came, (the) chaise was—brought,

しふはあはれ(ト) 許(ト) せ(ト) せ(ト)

But—yet was—not—allowed

追(ト) 寄(ト) する(ト) 軒口(ト) 恐(ト) れ(ト) て(ト) (ト) 人(ト) 皆(ト) (ト) け(ト)

To—drive—up to (the) door, lest all

いふ(ト) からん(ト) と 彼れ(ト) ありき(ト) 傲(ト) り(ト) て

Should—say that she was—proud.

その朝は來ぬ、車はもて來られつ、まかはあれども軒口へ(車馬を)追ひ寄する(車をつける)を許さざりき、人皆が彼れ(ギルピンが妻)傲りてありといふべからんを恐れて也。

▲was not allowed 直譯は「許されざりき也」也、車といふ語此の動詞の主位を占む。前にもいへる如く「車を寄する」といはずして「車を寄せらる」などいふは彼なたの語法なり。▲door(軒口)とは我が家の表口也。▲ギルピンが妻の注意周密なる女房かたり。

ぎを見るべし。

ちぢは 三 軒 はなれつ 車(くるま) ちぢらわや
So three—doors off (the) chaise was—stayed

そ、(に)ち) 彼等 にき 皆々 乗り込み くはしくは
Where they did all get—in,——

むたりの いみつき 人々(也) ちつ 皆 熱中して
Six—precious—souls, and all agog

衝き進まんと ちぢにむに
To—dash through—thick—and—thin.

されば三軒はなれて三軒かなたに車は停められき、そこにて彼等皆々乗込みにき、くはしくは六人のいみじき人々也、さて皆いづれも志やにむに衝き進まんと熱中して。

▲ did は添字、國文の休め字のたぐひ、意味を強むる語なり。場合によりて訓一様なるべからず、命令語に添はりたる go などは「何々せよかし」の「かし」にあたるべくや。
▲ through thick and thin は熟語「大小、厚薄、如何なる障壁をも貫いて」といはんほどの義。

ちしちしりく〜と 行(い)る

鞭(むち) くるり〜と ちぢる

輪(わ) ぐるり〜と ちぢる

Smack went (the) whip, round went (the) wheels,

ちしちちちぢぢぢぢ 人々 ちしちちぢぢぢぢ

Were—never folks so glad!

石どもは にき とちぢるき 底に

(The) stones did—rattle underneath

ちぢに、チープサイド街(ガ) ありし 亂(みだ)りして

As—if Cheapside were—mad.

びしやり〜と鞭はゆきぬ、くるり〜と輪はゆきぬ、人々曾てさしもたのしみてあらざりけり。石ども(街上の敷石)はチープサイド街が亂心したりしやうに(車の)底にとちぢるきにき。

▲ never は俗に「決して」とまづ訓じて更に次の動詞を打消す語とす、まかしても妙な場合もあれど、實は「いまだ曾て」と先に訓じて、後に打消すの優れるに如かず。本文の如きは「かばかり楽しきことは人々のいまだ曾て経験せざりしところ」の義、ギルピン等一同が質樸なる心をおもひやりてかく物したる也。▲！印は詠歎の

符、概して「けり」かな等に當たる。▲末段も質素なる家族の心を寫せり、彼等の心より見れば、けふの遊山は天にも上る樂しさなり、さればチーフサイドの街頭も、けふばかりは例に異りて、亂心などしたらんやうなりとの義。

ジョン・ギルピン(John Gilpin)にて、其の馬の かたはら

John—Gilpin at his—horse's—side

捉りの ぶいとそが 垂れたる たてがみ(チ)

Seized fast the—flowing—mane,

おし またがりし うたせんと(チ)

And up—(he)—got, in—haste to—ride,

が やがて 下り來ぬ また

But soon came—down again;

ジョン、ギルピンは其の馬のかたはらに(立ち)て、そが垂れたるたてがみをまかと捉りつ、さて急ぎて(馬)を打たせんとて(馬)にまたがりしが、やがて又下り來ぬ。

▲ to ride は「乗らんとて」と訓みても可なれど、こゝはむしろ「馬を歩ませんと」とい

ふ義勝ちたり。

故也 鞍(ニ) やゝ 及びたりし 彼れ(ガ)

For saddle-tree scarce—reached—had he,

その 行(チ) はーめん(ト)(チ)

His—journey to—begin,

時しも ふりむくる(ヤ) 頭(チ) 見し

When, turning—round (his) head, (he) saw

三人の 顧客(チ) 入り來る

Three—customers come—in.

(其の故はいかにといふに)彼れがその行をはじめんとて、やゝ鞍に及びたりし時しも、鞍にやゝまたがり得たる時しも、頭を(ふと)ふりむくるや、三人の顧客の入り來るを見し故也。

▲ saddle-tree は鞍を組立つる木框也、こゝは平仄の都合にて鞍といふ語に代用せり。

▲ scarce は下の when と熟して「何々するや否や」など訓む例もあり。▲ 此の段ギルピンが貨殖に用心深きを示す、妻子のあとを追うて早く出掛けたくもあり、顧客を

失ふも惜しといふ所をかしみなり。

されば(モン)下り彼れ(ン)來し(ヤ)故也 損(モ)の 時間

So down he came; for loss-of-time,

と(ク)な(モ) なげのしめき彼れをいたく

Although (it) grieved him sore,

オチが(ニ)損(ノ)の 錢 (ト)よ(ク) 知れりし

Yet loss-of-pence, full-well (he) knew,

ト(キ)ナ(ク) 困(レ)しむ 彼れを 更に 幾層

Would-trouble him much-more.

さればこそ彼れは下り來しなれ、時間の損もいたく彼れをなげかしめきといふども、さすがに錢の損の更に幾層(か)彼れを困せしむべきをいとよく知れりし故也。

▲ loss of time かのる場合の of はテムソンの「チ」に訓じて、loss 「失ふこと」と訓ずるかた勝れり。 loss of pence も同前。「錢を失ふこと」也。

久しウリキ 前 件の 顧客等(カ)

'I was—long before the—customers

あらし 適って に 其の ち

Were—suited to their—mind

時(シ)も ヲチ 叫び(イ)も 降り(来)ぬ 階子(チ)

When Betty, screaming, came—down stairs,

葡萄酒(カ) 取残(カ)ちてあ(ラ) 後(ニ)

“(The) wine is—left behind!”

件の顧客等が其の心に適うてありし前久しかりき、其が心に適へる買物をなし果てしまて程ありき(時しも)オチ(下婢の名)叫びつゝも階子を降り來ぬ、「葡萄酒が後に取残されてあり」也。

▲ 'I was は ti was の略、律呂の爲に略ける也、「といふ」を約して「て」とするたぐひなり。

▲ Betty は Elizabeth の略稱。 ▲ screaming は、かんばしりたる聲にて叫ぶをいふ。

▲ 此の段、取急ぎて立出でし爲、ギルピンが妻の折角の用心も危く水泡に歸せんとしたるをいふ。

はれされ い(ち)へ 彼れ(キ)し(モ)ソ(ン) そ(チ)

“Good lack!” quoth he; “yet bring it (me).”

ターミアの戯作歌

なめし革の帯(チモ) また

(My)—leathern—belt Hkewise,

なる 予(ガ)帯ぶ 予(ガ) わざもの(チ)

In—which I bear my—trusty—sword

折に 予(ガ) 操練すなる

When I do—exercise.”

彼れいへらく「はれやれ、まかしそをもてこ、また我が操練すなる折に、予がわざものを帯ぶなる、なめし革の帯をも(持てこ)」と。

▲good lack は「とんだことかな」といはんほどの詠歎の語なれば「はれやれ」など義譯すべくや。▲yet は「上に」なすがに「とも訓じたれど」尙「まかも」まかしながらなど相通と知るべし、時としては「いまだ」といふ義に取らるゝ場合もあり。▲he は「我れに」の義「其の酒を我が手もとへもてこ」の義なり、訓には略きたり。▲trusty sword は「たしかに用をなす劔」といはんほどの語「おぼえのわざもの」などあるべし。

こつや キヤロムが妻(オン) 「心細(ウ)キ人(カナ)」

Now, Mistress—Gilpin (careful—soul!)

けり 二箇の 石 塚(チ) 獲たり

Had two—stone—bottles found,

容れん 酒(チ) 其が 好めりし

To—hold (the) liquor (that) she loved,

而して 保たん 其(チ) 安全(ニ)

And keep it safe—(and)—sound.

いでヤキルピンが妻は、心細かき人かな、(あらかじめ)そが(日ごろ)好めりし酒を容れて、それを安全に保たん二箇の石塚を獲たりけり。

▲found は find の過去、こゝにては「手に入れたり」といはんほどの義 ▲心細かき人かなは作者の挿評「用意周密なる人なれや」と稱へたるなり。▲此の段ヤキルピンが妻の用心いと細やかにして準備にぬかりなかりしをたゞふるなり、此の用心の後に至りて悉くいすかの嘴となる所、一層のをかしみなり。

各 塚 もてり 一の墓がたの 耳(チ)

Each—bottle had a—curling—ear

纏て 一(チ) 帯紐(チ) 彼れ(ハ) 走らしめ

through which (the) belt he drew,

クーバアの戯作歌

而して懸けき 一壘(チ) に 各方
And hung a—bottle on each—side,

なさんため(ナリ) 其の つりあひ(チ) 正しく

To—make his—balance true.

各壘^{とく}はいづれも一の蔓形の耳をもてり、そを経て彼れ(キルピン)は帯紐を
走らしぬ、而して各方に(右に左に)一壘を壘を一箇づゝ懸けき、其(身の)つり
あひを正しくせんためなり(左と右と軽重なからしめんため也)。

▲蔓形の耳をもてりは「蔓の形したる耳めくものを具へたり」との義なり。▲ drew
は draw の過去、引く、延長すなどいふ義、走らすとも訓むべし。▲ to make true は熟し
て「宜しうす」とも訓むべし。

さて なるの上(ト) と(チ) ちらん
Then over—all, that (he) might—be

装束して 頭の頂より 足の爪先まで(モ)

Equipped from—top to—toe,

其の 長き 赤 羽織(チバ) いみじう拂ひて うつくしき

His—long—red—cloak, well—brushed (and) neat,

彼れ 雄々しげに 投げかけにき

He manfully did—throw.

さて、なべての(服装の)上に、(尙)頭のいたゞきより、足の爪さきまでも装束し
てあらんとて、彼れはいみじう(塵)拂ひてうつくしき、其の長き赤羽織をば、雄
々しげに(身に)投げかけにき。

▲ manfully は意氣揚々たるを形容したる詞なり、▲此の盛装を後段の失策と相照
らして一段の好笑なり。

今や 見よ 彼れを またがりて またもや

Now see—him mounted once—again

に 其の 駿き 馬

Upon his—nimble—steed,

いと 徐かに 歩まする 石の上を

Full—slowly—pacing o'er—the—stones

戒心して 且つ よく心を付けて

With—caution—and—good—heed.

クーバアの戯作歌

今や見よ彼れを、またもや其の駿き馬にまたがりて、戒心して且つよく心をつけて、石の上を歩ます(彼れを)。

▲爰の now は時を示す語なれば「今や」と訓む。▲fall は間々 very と同義。▲with caution は「戒慎を以て」と直譯す、其の次の good heed の前にも with といふ語略かれたり、共に例の語格なれば、合はせ訓じて副詞とすべし。

見る(ヤ) やがて ぞ一平滑なる 道(マルサ)

But finding soon a smoother road

底に 其の いみじう装うたる脚

Beneath his well-shod feet,

こやほよ 駈(ン) 疾歩しは(マ)ヤ

(The) snorting beast began to trot,

そは 苦惱せしめき 彼れを に 其の 座

Which galled him in his seat.

されど其のいみじう装うたる脚底に、や、平滑なる道(ある)を知るや、いきほふ獸は疾歩しはじめき、そは其の座に彼れを苦惱せしめき(居た、まらぬま

てに苦惱せしむるをいふ)。

▲find は前節にての如く「獲たり」と訓じても通ずべけれど、「さとり知る」といふ義や、勝ちたれば「見るや」と訓ませたり、「知るや」の義に解すべし。▲shod は「鞍はきたる」といふ義、馬のよく装具したるをいふ。▲snorting は鼻息の荒々しきをいふ、いきほふ競ふの意也。

そ、 おだやかに しひかに(ト) ヤ、 彼れ(ン) いはひて

"So I fair—and slowly," John he cried;

さはれ ヤ、 彼れ(ン) いはひて かひなく

But John he cried in vain:

件の 疾歩(ン) なりぬ 疾き駈(ト) やがて

That trot became a gallop soon

か、はらす とめたづな 又ひかへたづな(ニ)

In spite of curb and rein.

「そ、おだやかに、しづかに」と彼れジョンはよばひぬ、さはれ彼れジョンはよばひぬ甲斐なく。件の疾歩はやがて疾き駈となりぬ、とめたづな、ひかへたづ

なにかゝはらず。(とめても抑へても其の甲斐なくの義)

▲³⁰は意譯せば「ウウ〜」などいふ俗語に當たるべし。

さたは ころみて 如く必ずや 人(ノ) すべめる
So stooping—down, as needs he must

(Who) can—not—sit upright,
坐し得ざらん ますぐに

彼れ(ノ) 掴みぬ たてがみ(ヲ) もて 其の 雙手
He grasped (the) mane with both—his—hands,
而も また もて 其の 全力
And eke with all—his—might.

されば、ますぐに坐し得ざらん人の、必ずや爲^すべかめる如く、彼れはこゝみて
其の雙手もて馬(ノ)たてがみを掴みぬ、而も其の全力をもて、(一生懸命にてと
いふ義)。

▲かゝる場合に用ひたる He は、人といふ義に相當す、次の Who といふ語よりさかの
ぼりてつけ讀むべし。

彼れ(ノ) 馬(ノ)

曾て 斯うやうに

His—horse, (which) never in—that—sort

もて扱はれ(ズ)ありし 前に

Had—handled—been before,

如何なる物(ヲ)

其の背に 得たりし(カト)

What—thing upon—his—back had—got

おどろきにき じよんまか〜

Did—wonder more—and—more.

斯うやうには曾て前にもて扱はれざりし彼れが馬は、(そも)如何なる(怪物
をば、其の背に得たりしかと)、ギルピンが抑へといめんとすればするほどい
よゝます〜おどろきにき。

▲wonder は驚き且つ怪むの義、只驚の字のみの義にては解きがたし。▲此の段以
下次第に好笑の境に入る。

あなた(ト) おきぬ ギルピン(ト) 命からんべ

Away went Gilpin, neck—or—nought,

クローバアの戯作歌

あなたへ(ナ) のきり 朝あさ 假髪かみ

Away went hat—(and)—wig:

彼れ(ハ) ほとく思はざりき 時には 彼れ(ガ) たちいでし

He little—dreamt, when he set—out,

を(ス) 行ふと かくるを(ス) 戯れ(チ)

Of running such—a—rig.

あなたへとキルピンは(かけ)往きぬ、命からく、あなたへと(飛ひ)ゆきぬ、朝もかづらも。彼れ(其の家を)たちいでし時には、かゝるをかしき戯れを行ふことをば、ほとく(夢にだに)思はざりき。

▲neck or nought は熟語、「命を取りとめるか、又は一切を失ふか、一かばちか」といはんほどの義。命からく、と訓じて妥當也。▲little といふ副詞は「といふ冠詞副はらざる時は、いとく少き意を表す、こゝにては先づほとくと訓を置きて次に來たる動詞を打消すべし。▲run a rig は「笑ふべき事をなす」といはんほどの義。▲假鬘を戴くは中流以上の習俗也。

風(ハ) 吹きにき

羽織(ハ) ひらめきにき

(The) wind did—blow, (the) cloak did—fly

やうに 流旗(ハ) 長く 且つ はべでなる

Like streamer long—and—gay,

きへ 紐あな(モ) 鈕(モ) はつれて 共に

Till, loop—(and)—button failing both,

終に ぞ(ガ) ひるがへり去りし

At—last it flew—away.

風は吹きにき、羽織はひらめきにき、長く且つはてやかなる流旗のやうに紐孔も鈕も共にはづれて、終にぞが翻り去りしまで。

▲loop は紐を通して結ぶべき孔、俗に謂ふチのたぐひなり。

其の時(コト) 得しならめ 昔人(ガ) よく(モ) 認め

Then might all—people well discern

堪(チ) 彼れ(ガ) 吊下げたりし くほしくは

(The) bottles he had—slung,—

クーバアの戯作歌

場(チヤ) 各方向

(A) bottle swinging at each side,

如く 語られ又は歌はれたる

As hath been said—or sung.

其の時こそは皆人が彼れ(キルビン)がつり下げたりし場をばよくも認め得しならめ、くはしくは各方向(右に左に)打ゆらぐ場をば、語られ又は歌はれる如く。

▲swinging 鞞のやうに左右前後にゆらくと動くをいふ。▲語られ又は歌はれる如くとは、此の逸話の世に名高き故に云々。

犬ども(ン) 吠えにき ちんども(ン) さげびき

(The) dogs did bark, (the) children screamed,

打ら(ン) 聲々(ン) 皆

Up-flew (the) windows all,

而して 各人 しばらぬ したりやく(ト)

And every-soul cried-out, "Well done!"

よびひ得ん

As-loud-as (he) could-bawl.

犬どもは吠えにき、兒どもは叫びき、窓々は皆打ひらきつ、而して各人よびひぬ、したりやくとよびひ得んかざり聲高く。

▲up flew は「はた」とひるがへり開くといはん程の義を含めり、人窓を開くといはずして窓がみづから打ひらくやうに物する、例の彼の國ぶりなり。

あなた(ト) 往きぬ キルビン(ン) 思ふに たそならぬ 彼れ

Away went Gilpin—who but he?

彼れが名(ン) やらば ひるがりぬ あたりに

His-name soon spread-around:

彼れ(ン) 運ぶ(ン) 重きもの(ヲ) 彼れ(ン) 走らす(ン) くらゐ馬(ヲ)

"He carries weight! he rides (a) race!"

こは(なり)トヨ 對して 一千ポンド(ニ)

"'Tis for a-thousand-pound!"

あなたへとキルピンは(駈けり)ゆきぬ。思ふに彼れならぬ誰ぞ(駈けり)ゆき

し。彼れが名(評判)はやがてあたりひろがりぬ。(人皆いつらく)彼れは重きものを運ぶぞや。彼れはくらべ馬を走らすぞや。こは一千ポンドの(賭)に對して(す)なりとよと。

禿頭爺の只ひとり石どくりふたつまで吊し下げて、駿馬を街頭に走らするが全府民の注目を牽きたる、さもあるべし、物見高き都人が思ひくくの揣摩臆測のをかしさ、よろしく原文に就きて味ふべし。

而して毎に いなや 彼れ(か) 近づき(キ)

And still, as—fast—as he drew—near,

(ソ) 不思議なりし 見る

'Twas—wonderful to—view,

如何に たちまち 關もろなの(等)か)

How in—a—trice (the) turnpike-men

其が 木戸(チ) 廣く 打ひらき(カ)

Their—gates wide open—threw.

而して毎に彼れ(ギルビン)が近づきしやいなや、(街端々々の)關(の)戸)守る男

等が如何にたちまち其が木戸を廣く(さつと)打ひらきしか、(そを)見るぞ不思議なりし。

名高きギルビンが賭馬の邪魔あらせじと、關もる男等が心きゝたるふるまひのなか、く馬の逸するを助けしをかしみ、ギルビンが近づくやいな、はたりく、この木戸、かしの木戸の打ひらき打ひらく響さへ、原文にはよく見えたるを訓に如何ともなしがたし。▲turnpike は我が停車場又は博物館の入口に設けたるやうなる車馬止めの關なり。木戸錢取りて後に車馬を通すを例とす。▲「不思議なりし」は、くはしくいへば「目ざましくもまた不思議なりし」といはんほどの意なり。

さて 今やほどに彼れ(カ) 往きし

And now, as he went bowing—down

その 湯氣だつ ぶう、(チ) いと 低く

His—reeking—head full—low,

彼の 二箇の壘(ノ) 後に 其の背

The—bottles—twain behind his—back

クーバアの戯作歌

推されけれ 二(コン) 一撃
Were—shattered at a—blow.

さて今や彼れがその湯氣だつかうべをばいと低くこゝめつゝ往きしほどに、あはれ彼の二箇の壘は、其の背後にて、一撃にこそ摧かれけれ。

▲是は時に「ほごに」「まゝに」「つれて」「いづれにてもよし」。▲湯氣だつ汗の蒸發するさま「汗もまとい」などいはんほどの意。▲落ちじ、おとされじと、ひたもの、馬の頸にかぢりつきしたため、壘と壘と背後にて撞突し、只一撃に摧けたるなり。

流れ下りぬ 酒(ウ) に 途
Down—ran (the) wine into (the) road.

いとく 哀れ(也) 見らるゝ(モ)
Most piteous to—be—seen,

そは しぢぢ 彼れが馬の 脇腹(チ) 煙ぢ
Which made his—horse's—flanks to—smoke

やうに 炙られたらん
As (they) had—basted—been.

酒は途に流れ下りぬ、見らるゝもいとく、あはれなり(けり)、そは彼れが馬の脇腹を炙られたらんやうに煙らしめき。

▲「見らるゝも」は國語ならば「見るも」とあるべき處也。▲「そは」とは酒の馬背より淋漓たることを指す、汗馬の腹に酒のかゝりたるため、蒸すが如く煙だち、さながら炙肉を見るやうとの義。比喩のをかしみを味ふべし。

さはれ 尙 彼れ(ハ) 見えし 運ぶ(ト) 重(キ) 物
But still he seemed to—carry weight,

もつ なめし革の帯 括りて
With—leathern—girdle braced;

故(也) 昔(ガ) 見る(ハ) 彼(ノ) 壘(ノ) 頸(チ)
For all might—see the—bottle-necks

尙 ぶらつく に 彼れが胴
Still dangling at his—waist.

さはれなほ彼れ(ギルピン)はなめし革の帯もて括りて重き物運ぶとぞ見えし、皆(人)が彼れが胴の(ほとり)に尙ぶらくとぶらつく、彼の壘の頸を見るべし、皆(人)が彼れが胴の(ほとり)に尙ぶらくとぶらつく、彼の壘の頸を見るべし。

かりしゆゑなり。

鬘は摧けながら、其の首ほどは残りて、ぶらつく假鬘はとび去りて赤でりにひかる
禿頭翁の汗まといなる面つき、説破せずして妙甚し。

Thus all through merry—Islington

These—ganbols he did—play,

Until he came unto (the) Wash

Of Edmonton so gay;

And there he threw (the) Wash (about)

On—both—sides of (the) way,

Just like—unto a—trundling—mop,

Or a—wild—goose at—play.

斯く彼れは樂しきイスリングトン(地名)をなべて經て(ゆく間)かゝるをかし
き(道)戯踊をば演じにき。竟に彼れはさしも花々しきエドモントンのウ
シユの流小川の名(にぞ)來たりける。
さて、そこにて彼れは荒れまざる馬を制し得ずして流の中に乗り入れ、
道の兩邊に(右に左に)流の水をばとばしらせき、恰もくるく廻る(やうに)製
りたる(布)箒の(水)をたばしらせんやうに、若しくは(水)に浴して(戯れ)遊ぶ(鴈の
やうに)。

▲「布箒」は西洋雜布也。▲ at play は「遊戯に於て」と直譯す、例の彼の國ぶりなれば、本
文の如く熟して訓むべし。▲ threw about の二語を熟して「ほとばしらす」又は「たば
しらす」又は俗語の「とばしらす」の義によむべし。

At—Edmonton his—loving—wife

クーバアの戯作歌

露臺 見いだしつ

From (the) balcony espied

其の やさしき 夫(チ) 露臺いぶかりつゝ いたく

Her—tender—husband, wondering muen

見て やうを 彼れ(ガ) 馬打たせし

Tees—o (how) he did—ride.

エドモントン街にては彼れが誠ある妻夫が來ぬにまちあぐみ露臺にたちいで、待ちたりしが今しもはるかに其のやさしき夫を露臺より見いだしつ、彼れが馬打たせしやうを見ていたく驚き訝りつゝ。

▲Howは通常まづ「如何に」と訓じて「か」とかへるを例とすれど、其の實は必しも如何にと訓まん必要なし、本文の如き場合には前後の句を繋ぐ接續辭の専ら容子を指示するものと解して可也。▲did rideは「乗りにき」と直譯してもほゞ通ずべきなれど釋の煩しさに意譯しつ。以下かゝる例一々にことわらざるべし。

オチたまへ(ノ) ナオンギルピン(ガ) ニ(ノ) 家

“Stop, stop, John—Gilpin! Here’s the—house,”

彼等 皆 聲高く 叫び出し

They all aloud did—cry;

料理(ト) ナトリ 且つ我等(モ) 倦みはてぬ(ト)

“(The) dinner waits, and we are—tired.”

オ(ラ)へ キルピン 然(ト) 我(ガ)

Said Gilpin, “So—am I”

「待ちたまへ〜、ジョン、ギルピンぬし、彼等皆聲高くよばひにき、料理はまてり、且つや我等も倦みはてぬ」と。キルピンいへらく「我れ(と)ても亦然り」と。

▲「料理はまてり」の直譯は「中食は待てり」にて、其の意は「いひつけし下物の準備は悉く整ひたり」の義、例の非情の物を有情にいひなす彼の國ぶりなり。▲末句「我れも然り(おれだつて)」と只一言、疾驅する馬をとめもあへて、忽ち約束の旗亭を後にし、最愛の妻兒を後にし、雲を霞とかけてゆく其の姿、餘韻此の一句に爛々たり。所詮此の間の消息は、義譯してだにかゝと思はるゝを、いかで訓讀の間に求むべけんや。

まかはあれども 彼れが馬(ノ) ちかやうけり ちとせ

But—yet his—horse was—not a—whit

クーバアの戯作歌

Inclined to-tarry there;

For-why? his-owner had (a) house

Full-ten-miles off at-Ware.

So like-(an)-arrow swift he flew,

Shot by-(an)-archer-strong;

So did he fly-which brings me to

(The) middle-of-my-song.

まかはあれども、彼れが(乗れる)馬は、ちともそこに止まらんと心傾けてあらざりけり。何ゆゑぞや。(他なし)其の(まことの)主が、ちよそ十英里(ほど)かな

たに、ウエーアといふ處に家をもたりし故也。

されば剛力の射手に射放たれし矢のやうに、疾く彼れ(馬)は飛びぬ、彼れ(ギルピン)も止むを得ずして、まか(同じさまに)飛びにき。すなはち、そは(その)一段は(我れを)將て我が(物語)歌のなかばへ來たる。

▲「將て來」云々は「此の段を叙するに及びて我が物語正に其の半に達す」といふ義、然るを我れ(作家)をゐて歌のなかばに達せしやうにいふは、例の語格也。

あなた(ト)往きぬ ギルピン(ン) 息なかりせし

Away went Gilpin, out-of-breath,

而も したく 本意ならずも

And sore against-his-will.

ま(ン)にて 其の友(ナル) 光布匠が(家)

Till at his-friend-the-calender's

その 馬(ン) 終に たちどまつこ

His-horse at-last stood-still.

光布匠(ハク) 打駭きて 見て

(The) calender, amazed to-see

クーバアの戯作歌

其の 隣人(チ) かゝる服装せる
His—neighbor in—such—trim,

なげやり(ツ) その煙管(チ) とびいで(ツ) 木戸
Laid—down his—pipe, Flew to (the) gate,

わづ(チ) らん(ナン) 言葉(けい) 彼(ヒ) (イ)
And thus accosted him:—

あなたへとギルピンは駈け往きぬ、息をきらせて而も痛く本意ならずも、そが友なる光布匠が家にて、その(乗れる)馬の終にたちとまりしまでは。
光布匠は其隣人(の)かゝる(奇異なる)服装せるを見て打駈きて、そが(今吸ひか)けたる(煙管を)もなげやりつゝ木戸(口)へとびいでつゝ、さて斯くなん彼れに言葉かけし。

此のあたりは格段に釋するに及ばず、眞面目の間にをかしみあるを見るべし。

如何の珍聞

如何の珍聞

君が報知(チ)

語れ

“What—news? What—news? your—tidings tell;”

語る 我れに 君 へき也 又 ちる(く)ちる也

Tell me you must and shall:

言へ 何が故に 露頭に於て 君(ガ) 來たれる(カ)

Say why bareheaded you are—come,

又は 何が故に 君が 來たる(カ) 兎に角

Or why you come at—all?

「奈何の珍聞(ぞ)如何の珍聞ぞ。とく／＼君が報(しらせ)を語れ、君是非とも我れに其の故を語るべき也又(語ら)ざるべからざる也。言へ、何が故に君が(斯く)露頭に於て來たれるか、又は何が故に兎に角(こゝ)來たれるか」

光布匠がギルピンの奇異なる打扮に駈き、如何なる珍事の起こりしかといきまきて問ふちまぢもしるし。▲ must and shall は只意を強めんとて語を重ねたるまてなり。

こい(チ) キルピ(ン) 面(オ) 面白(カ) オ(チ)

Now, Gilpi had (a) pleasant—w

また 好(ミ) 折(に) あ(ふ) た(は) ぶ(れ) (ト) (チ)

And loved (a) timely—joke;

わづ(チ) らん(ナン) 光布匠

And thus unto (the) calender

クローバの戯作歌

たはぶれて 彼れ 語りける
 In—merry—guise he spoke:—
 いでや、キルピンは面白き才をもたり、また折にあふ戯言を好みければ、かく
 なん光布匠に、たはぶれて彼れ語りける。

▲「面白き才」とは滑稽戯謔の才、折にあふ戯言とは當意即妙の秀句などをいふ。▲
 loveとさふ語一概に「愛す」と訓じ來たりたれど、間々好むとよみておだやかなるが
 あり。▲guiseは一語にては「風」又は「やうす」などいふ義。

我れ(ン)來つ ゆゑ 足下(ガ) 馬(カ) 來まくほりせし
 “I came because your—horse would—come;

さああれ 若し 我れ いみづく 豫言(セヌ)
 And, if I well forebode,

我が朝も假鬘も ちぢん やがて あらん 今に
 My—hat—and—wig will soon be here—

彼等 あり 上に 途
 They are upon—(the)—road.”

「我れは來つ、そこが馬が來まくほりせしゆゑ(止むことを得ずこゝへは來つ、

(牛に牽かれて善光寺参りとはこれぞ)さあ、あれ若し我れいみづく豫言し得
 べくば、我が朝も我が假鬘もやがてここに來たらんずらん(くはしくはいば、
 今は主にあくれて、彼等尙途上にあり)。

困む果てながらも洒々落落たる輕口をかしからずや。▲第二行の and は「さて」「而
 して」などいはんよりは意味輕し、淨瑠璃などに用ふる「シタガ」といふ詞などに當た
 るべし。假に「さああれ」と訓ませつ。▲豫言し得べくば」とあるべきを「豫言せば」と
 やうにいふ、これも彼の國ぢり也。

光布匠(ン) いたく 悦びて 見て
 (The) calender, right glad to—find,

其の友(ン) きげんよき(チ)
 His—friend in—merry—pin,

答へ 彼れに(ン) オ 一言(ナダニ)
 Returned him not a—single—word,

して 其の家に(ン) 入りし
 But to—the—house went—in;

クーバアの戯作歌

Whence straight he came with hat and wig—

(A) wig (that) flowed behind,

帽子 ちらぬ いたくわるく(ク) 着ふるしたれど

(A) hat not much—the worse for—wear,—

Each comely in—its—kind.

光布匠は其の友(ギルピン)のいつもながら落々として(きげんよきを見てい)たく悦びて(彼れ(ギルピン)に(對して)は一言をだに答へずして(つと)其の家(の内)にぞ入りし(かくて)かして(其の家の中よりたちどころに)帽と假鬘とをもちて來つ(其の帽と假鬘とは如何なる品かといふに)假鬘は(あとべに)長き髪(の)ふさくと垂れしかづら(帽子は)着ふるしたれど(痛くわろくは)あらぬ帽子(畢竟するに)いづれも(其のたぐひにて)はめやすきを。

同氣相求むる光布匠がギルピンの戲言に興を催し、急に奥に入りて當座の進物をとりにだし來たる洒落氣輕なる英國商人の氣轉見えたり。▲ in merry pin の pin は humour といふ語に同じ、廢語也、ひきくるめて「打戯れたる」又は「浮々したる」機嫌などと釋すべし。▲第四行の but は特に注意して訓むべし、原義は「却りて」の意なれば、かゝるところは總じて「して」と訓ずるを妥とす、即ち其の前句に「何々せず」といふ語ありて其の次に but の來たる時は概して「何々せずして」と訓みてよし、尤も but を without の義に訓ずる場合もあれば混すべからず。又——印の釋に注意すべし。

He held them up, and in—his—turn

Thus showed his—ready—wit:

“My—head is twice—as—big—as—yours,

They therefore needs must—fit.

クーバアの戲作歌

ちもあれして我れを 拂ひ 汚ちよの(チ) 去ら(ミンモ)
"But let me scrape (the) dirt away

垂るゝ 二 足下(ノ) 面

(That) hangs upon your-face;

且 ちもまりて 物食く 何となれば 正しく 足下(ノ) 去ら

And stop and eat, for well you may

あらん 物ほし(ナン)

Be in-a-hungry-case."

彼れ其(そ)を(朝)とかづらとを(さ)ゝげもちて、さてたちかはりて、かくなん其が頓才をぞ示しける。「我が頭は足下の(頭)と比ぶれば二倍だけでも大なり、さるかに此れらの品々必ずや(足下)の頭に(適)しつべし。さもあれ(まづ)その前に我れをして足下が(面)に垂るゝ(附着)したる(汚)きもの(汗)にまみれたる塵埃を拂ひ去らしめよ、且つや(まづ)しばしと(まり)て物食(ひたま)へ、何となればもはや時分、どきなれば正しく足下は(嘸)物ほしうなん、ちはさんずらん。」

▲ in his turn とは前にはギルピンが頓才をあらはしたれば、此のたびは光布匠の番

となり、彼れたちかはりて頓智を示すの意。▲「物ほしう、逐語譯は「飢ゑたる場合に、てなり、これら例の熟語なれば、ひきくるめて、義譯すべきこと勿論也。」

い(ち)く(ヤ)ン けふは なり 子が 結婚日

Said John, "It is my-wedding-day,

されば 皆 世間の人 目をそばたつ(ん)

and all the-world would-stare

若し(妻(ノ)) 物(く)む(ん)く H(マ)ン(ト)ン(ト)

If wife should-dine at-Edmonton,

而(し)つ(お)の(れ(ノ)) 物(く)む(ん)く(ス) ウ(エ)ー(マ)ニ(ト)

And I should-dine at-Ware."

乃ち 打向かひてに 其の馬 彼れ 去らへ

So, turning to his-horse, he said,

我れ あり ちもまり 物(く)む(ん)く

"I am in-haste to-dine:

なりき 汝が勝手の爲 汝が 来た(り)し(ん) ハ(マ)ニ

'Twas for-yow-pleasure you came here,

クーバアの戯作歌

汝 歸りのくへき也 我(勝手の)爲に
You shall—go—back for—mine.

ジョンいへらく「けふは予が結婚日なり、されば世の人皆目をそばだつべし、若し妻なる者はエドモントンにて物くひ、而して(夫たる)あのれはウエーアにて物くふべくば。」

すなはち其の馬に打向かひて彼れいへらく「予はいそきて(時の)物くふべかり、さきに汝がこゝに來たりしは(我れ來まくほりせしが爲ならで)汝が勝手の爲なりき、今や我れ元來しかたへ歸らまくす、汝すべからく(我が爲に)元來し道へ歸りゆくべき也。」

▲は不定代名詞なり、かゝるところは「今日」は「と義譯すべし。」▲stare は睨視するの義、目をそばだつ、「目をみはる」など譯して當然なり。▲前段は光布匠に答へて結婚の賀筵を夫婦處を異にして開くことの理ならざるをいへり、さて後段は非情の馬に向かひて、ことごとくしく理窟をいふ所に、ギルピンが洒落ながら、どことなく理窟ばりたる隊長かたぎ見えたり。▲Pleasure といふ語を「快樂」と訓ずるは pain (苦

痛に對したる時のみ、其の場合にては「好み」「隨意」「御意」など、譯すべし。

あはれ 幸なき 言の葉や また むやくしき高言や
Ah, luckless—speech and bootless—boast!

その爲に 彼れ(ン) 償ひける ごと ぐみ(ウ)(ナム)
For—while he paid full—dear;

何となれば ほむ 彼れ(ガ) 語りし 荒ぶる 驢(ガ)
For while he spake (a) braying ass

鳴きこげれ(ム) どん 聲高く 且つ ほがらかに
Did—sing most—loud—and—clear;

カレリしかば 彼れが馬(ク) かなんかにか せんこ
Whereat his—horse did—snort, as (he)

聞きたりひん 吼ゆる獅子(サ)
Had—heard (a) lion—roar,

而して 疾驅し去りぬ 一生懸命に
And galloped—off with—all—his—might,

せんこ かなんかにか 前こ
As (he) had—done before.

ケーニアの戯作歌

▲あはれ、幸もなき言の葉や、またむやくしき高言や、そが爲に(生中かゝるこ
といひし報に)彼れ(ギルピン)はいといみじうなん償ひける。何となれば彼
れが(かく馬に)打語りし間(あなた)の厩の、かたにあたりて(あらぶる 驢が(如
何なる、ことにか駭きけん俄に)いと聲高く且つほがらかに鳴きにければ、(馬
は忽ち驚きて下に語る如き不慮の結果を生ぜしゆゑなり)。

かゝりしかば(驢のいなゝくを聞きしかば)彼れが馬(ギルピン)が乗りたる馬
は、愕然と打驚き、さながら吼ゆる獅子を聞きたりけんやうに嘶きにき、而し
て前に(こゝへ來し折に)なせりしやうに、一生懸命に(まつしぐらに)元來し方
へと疾驅し去りぬ。

▲with all his might は前段には「其が全力もて」とよませたり、それにてもよし。其の
他は殆ど評釋を要せざるべし。▲齟齬又齟齬、是れ好笑の好材料『藤栗毛』『八笑人』
の作家等が慣用の脚色なり。思ふに、事と思ふことゝ、くひちがふは人の世の常態
にて、をかしきことも悲しきことも間々これよりして生ずる也、さればかゝる偶然
の間ちがひも稀に用ふれば好き脚色なるべし、されど多きに過ぐるときはうそら

しくして拙し。我が國の小説などには此の偶然の齟齬といふと、悲しき話例へば
淨瑠璃の『朝顔日記』の如きにも、をかしき話『八笑人』の如きにもあまりに多く用ひ
られて漸く活世態の趣にとほざかれり。こゝには要なきことなれども序ゆゑに
いひ及びり。

あなた(ト) ちかけり ぎんごん(ト) あなた(ト)

Away went Gilpin, (and) away

ちかけり ぎんごんが帽をばいふ

Went Gilpin's—hat—and—wig:

彼れ(ト) なくしつ 其を はやく ようも 初手

He lost them sooner than at—first;

なうて、 其(ト) なりし也 あまり大

For—why? they were too—big.

あなたへと(驅けも)ゆきけりギルピンは、あなたへと(飛びも)ゆきけりギルピ
ンが帽もかづらも。彼れはそを初手よりもはやく失しつ。(そはまた)何故
か。其は(件の帽とかづらとは)あまり大なりし(が故)也。

▲第一行の and は「而して」と訓ずべきなれど、略きてもさしつかへなかるべし。▲
光布匠が好意の贈物も、たちまち、あとかたなく翻り去りて、もとの禿頭翁となりし
をかしみが此の章の山なり。

今(イマ) 時(トキ) 見(ミ) 見(ミ)

Now, Mistress—Gilpin, when (she) saw

其(コノ) 夫(ウサ) 疾(ハヤ) 驅(カ) 去(ル) (ヤ)

Her—husband posting—down

に 郭(クワク) 外(ガハ) 是(コノ) 處(トコロ) へ

Into (the) country far—away,

半(ハ) クラウン(クラン) 名(ナ) を

(She) pulled—out half—a—crown;

其(コノ) 若(ニヤ) 者(ヤ) 其(コノ) 若(ニヤ) 者(ヤ) 夫(ウサ) 夫(ウサ)

And thus unto the—youth (she) said

驅(カ) 去(ル) (ヤ) 彼(カノ) 等(ト) へ 此(コノ) 鐘(カネ) 軒(ケン)

(That) drove them to the—“Bell.”

此(コノ) 鐘(カネ) 軒(ケン) 名(ナ) を 此(コノ) 鐘(カネ) 軒(ケン) 名(ナ) を

“This shall—be yours when (you) bring—back

我が夫(ウサ) (ヤ) 夫(ウサ) が なく

My—husband safe—and—well.”

いでや、ギルピンが妻女は之れよりさきエドモントンなる旗亭にゆくりな
くも其の夫がそこにしもといまらてはるかあなたなる郭外へと疾風の如
く疾驅し去るを見し時しも、且つ驚き且つ危ぶみ、このまゝ棄ておかば變わ
らんと、急ぎ衣袋のうちよりして半クラウン(金貨の名)をとりいだしつ。

さて(先刻彼等を)彼等が乗れる馬車を此のベル軒へ驅りて來し其の壯丁に
(打向かひ)かくなん言ひける、此は此の金は汝がものなるべきぞ、汝若し努め
て我が夫の後を追ひかけ、恙なく我が夫をつれかへらん時には。

▲この how は「してや」と例の如く訓ませたれど、さるほどに又は「さて」など訓ま
んかた、みくにぶりなるべし、how に「さて」といふ義もあり。▲into は「中へ」の義、
はしくは「郭外」の義。▲country は「洛外」又は「郭外」の義、處によりては「地方」「田舎」など
の義ともなる。▲pulled out は「カクシ」のうちより引きいだすをいふ。

件(ケン) の 若(ニヤ) 者(ヤ) 乗(ノリ) 込(こ) め 而(シテ) や が 夫(ウサ) 逢(ア) 合(あ) へ

The—youth did—ride, and soon did—meet

ジョン(三) たちかへり来る マッしぐらに

John coming—back again;

彼れを(三) 咄嗟の間に 彼れ とらめんと試みけり

Whom in—a—trice he tried—to—stop

がいつのみて

そがたうな(チ)

By—catching—at his—rein;

さばれ 得成し遂げずして

念せしこと(チ)

But not—performing what—(he)—meant,

而も よろこびて まとげたりけん(コトチ)

And gladly would—have—done,

おどろける馬(チ)

おどろかし じふ

(The) frightened—steed (he) frightened more,

て しつぎ

一しほ疾く(ソ) 走り

And made (him) faster run.

件の若者は(妻女が)いひつけを心得て馬にうちまたがり、ギルピンがあとを追うて(乗り)いでにき、而してやがて、マッしぐらに立ち歸り来る。ジョンに逢

ひにき(若者は)こゝぞと思ひて(咄嗟の間に)彼れ(ギルピン)をばとらめんと試みけり、そが(ギルピン)がたづなを搔いつかみて。

さはれ念せしことを、而もよろこびてしとげたりけんことを、得成しとげずして得成しとげざ(意)さらぬだに(おどろける馬を)いよ(ますく)おどろかし、一しほ疾くぞ走らしめし。

▲「念せしこと」とは、「かくもせば」と心の中に念じてありし事の義。▲「よろこびてまとげたりけんことを」のことは前句の what へ戻りて訓むなり、なだらかに義譯すれば、「いかでまとげまほし」ともへりしことをの義也。▲ whom は代名詞なれば「其の人をば」と訓じても「彼れをば」と訓じても同一也。▲ by catching at の如き場合は前置詞の目を動詞の方へ附屬せしめ、熟語として訓ずるを妥當とす、かゝる例間々あり、心すべし。▲ in a trice 前段には「たちまち」とよませたりしが、こゝは「咄嗟の間」と訓まんかた原句の本意にちかかるべし。

あなた(ト) (ゆきけり)ギルピン(ソ) あなた(ト)

Away went Gilpin, (and) away

クーバアの戯作歌

ゆきけりわらもの(ト) 其のあとにつぎて

went postboy at his heels;

わかものが 馬(ト) いたくふるこびて 失うて

(The) postboy's—horse right—glad to—miss

重荷(チ) の 車輪

(The) lumbering of (the) wheels.

あなたへと(驅けも)ゆきけりギルピンは、あなたへと(驅けも)ゆきけり車丁は、
其があとにつぎて車丁が馬は(日ごろ重き車のみひかされたるに、此の時ば
かりは常に似ず)車輪の重荷を失うていたくよろこびて。

▲postboyの本義郵便馬車の壯丁なり、こゝは、わか、い、もの、とよみて可也。▲末二句
は純然たる彼の國ぶりなれば訓じにくし、意は「平生重きものゝみをひきなれたる
馬が、此の時ばかりは重き車を離れたるうれしさに、一しほ勢ひよく疾驅せり」とい
ふ義なり。重き車といはば足らんを、車輪の重荷といふは別に深き意義あるにも
あらず。heels, wheelsと韻を踏まんためのみ。▲to miss'くはしくは「見失うて」也。▲
今まではギルピンひとりなりしに、生中に若者が追ひすがりて馬を走らせしかば

一段人の注意を牽き、世の物笑ひとなりし重ねくのぐれは、ま、是れ此の作の骨子
なり。

六人の紳士

途上に

Six—gentlemen upon—the—road,

かく 見て ギルピン(ガ) 飛びゆく(チ)

Thus seeing Gilpin fly

あつ 車丁(チ)

疾走する まりに

With postboy scampering in—the—rear,

あびける 非常の呼びひ(チヤ)

(They) raised (the) hue—and—cry:—

待て 盗人(ヨ) 待て 盗人(ヨ) おひはぎ(メ)

“Stop thief! stop thief! (a) highwayman!”

彼等の一人(タニ) ちら(ズ)ありき 黙して

Not one—of—them was mute;

而して 皆おの(カ) 一きりし その方へ

And all—and—each (that) passed that—way

クローマアの戯作歌

合しにき 此の追跡に
Did—join in—the—pursuit.

六人の紳士途上に於て、かくギルピンが去りへに、疾走する車丁を將て(雲を霞と)とびゆくを見て(思へらく、是れ必ず賊ならん、追ひゆくは物をとられたる人ならんと、すなはち六人聲を揃へて)非常の呼ばひをぞ擧げゝる。
(曰はく)「待て盗人よ、待て盗人よ、おひはぎめ(まちねく)と。彼等(六人の中)の一人だに黙りてはあらざりき、而して(かく呼ばふものは、ひとり彼等のみならず)その方角へよざりし(輩は、我れもく)とみなおのく此の追跡に合しにき。

▲ hue and cry は非常の事起りたる時に發する呼聲をいふ、火事又は盜賊などを他に知らする時の叫聲也、假譯して「非常聲」又は「非常の呼ばひ」などすべくや。▲ 物見高き都大路のことゝて、所謂野次馬のあまた加はりてかしましく立騒ぐさま、さこそと思はれてをかし。

さて 今や 彼の 關の戸(ン) 又
And now the-turnpike-gates again

たつとびらき たちひらきに
Flew—open in—short—space,

彼の關もる男(ン) 思へればなり(タリ) 前にひとく
The—tollmen thinking as—before

と ギルピン(ガ) 走りし くらへ馬(チ)
That Gilpin rode (a) race.

而して 彼れ(ン) なしし也 且 獲たりけり(チ) また
And so he did; and won it too,

何となれば彼れ(ン) 達せし(故)也 市に
For he got first to—town;

はた、とちまらざりし(故)也 途に 彼れ(ガ) たちいでたりし
Nor—stopped till where he had—got—up

にし 再び おりたす
(He) did again get—down.

さて今や、彼の關の戸は、又たちどころにさと開きつ、なにゆゑに然りしかと
いふに彼の關もるをのこらは(今も尙前にひとしく、ギルピンが(人と賭して、

くらべ馬を走らしぬと思ひ其の妨なからしめんと思へればなり。
 而して(げに)彼れは志かなし、也(げに)ギルピンはくらべ馬を走らしぬといひつべし、且つまたそのくらべ馬に(勝)獲たりけり(輸)ちたりともいひつべし、何となれば彼れはまさきに市(ロンドン)の市に達せしゆゑ也、はた(最初)彼れがたちいでたりし處(す)なはち我が家の門口(かどぐち)に再び下りたちにしまては(曾て)といまらざりし故也。

折角の祝ひ日の催しことごとく書餅となりて、難なく我が宿へかけ戻りし失策のをかしみ、エドモンソンなる妻子が氣づかひと失望、ギルピンが慚愧と當惑、すべてこれらを言外に説き残して餘韻としたる手ぎは、おはくしてめでたし。

今や

して我曹を歌はしめよ萬歳(ト)

今上王陛下

Now let us sing, Long—live the—king,

ちて

萬歳(ト)

彼れ

And Gilpin, long—live he;

而して

時

彼れ 此の次に 乗りいてなん

and, when he next doth—ride—abroad,

まほし我れあらそこに 見るべく

May I be there to—see!

今や我がともがらをして謳歌せしめよ、今上王陛下萬歳と、さてギルピンや、彼れ(もまた)萬歳と。而して此の次に彼れ(また)乗りいてなん時(し)あらば、願はくは我れそこに在らまほし、その面白きありさまを(見る)べく。

以上一場のをかしき話を洒々たる物語歌に物したるまでにて、上にもいへる如く何の寓意あるにもあらねば、また評すべきことばもなし。思ふに、以上の訓釋によりて、讀者はほゞ予が所謂訓讀の鹽梅をも會得せられたるならん。

評釋の二

ベーコンの論文

フランス、ベーコンは英國散文大家の隨一、今より三百餘年前の人なり、其の文は語法、文脈共に今とはやゝ異なりたれど、人尙之れを棄てず、あがめて英國々文の模範とす、其の簡淨と明瞭とは眞に及び易からざればなり。ベーコンの名は早く我が國にも知られて、其の著名なる論文エッセイズの如きは、諸所の英語學校の教科書ともせられ、既に一二の註釋書さへ成りにき。其の傳は予の『英文學史』に詳なればこゝには只あらしをいふべし。

ベーコンは英國の平安朝又は元祿時代ともいふべきエリザベス女王朝の貴紳にして時の掌璽官たりしニコラス、ベーコンといふ人の子なり。女王の嗣子ジェームス一世王に寵用せられて、ヴェルラムの男爵に叙せられ、やがてまたセント、アルバンスの子爵となり、竟には經昇りて大司法官となりし人なり。其の一生の行實につきては、まぢく論もあれど、學者、文章家といふ資格よりいへば、ゆたかに英文學の

大家たるに耻ぢざる人なり。

さて此の人をして其の名を一代に博せしめしは専ら哲學上の著述なれど、尙其の外に『エッセイズ』と題したる小品の論文集あり、ベーコンの、後世俗間に知らるゝは、重に此の論集によりてなり。

件の論文は總禮にて五十八篇、いづれも『文章軌範』、『唐宋八大家文集』などにありふれたる如き短篇にて、近世に謂ふエッセイ(論文)とは趣異なり。もとエッセイといふ語は、試筆又は試文などいはんほどの義にて、思ひよれるまゝを咄嗟の筆に物したるを指せるなりき。さればベーコンのエッセイも、大抵は隨筆めく論文にて、近世に謂ふこちたき物々しき論文にはあらず、さりとして我が國の隨筆物のやうに、秩序もなく隨感のまゝに筆を走らせたるにはあらず、句々洗鍊にして言々圓熟し、加ふるに條理はた井然たり。尤もよろこぶべきは、其の文の簡淨なることなり、歐文のかたはしのみを見て、歐文はなべて冗長なりと思へる者、若しベーコンの論文を讀みて、其の眞趣致を味ふを得ば、必ずや其の速斷の謬れりしを悟るべし。或は稱して、ベーコンの句々は皆格言なり、其の一句を敷衍せば以て一大論文を成すに足ら

んといふ、まことに然り。其の言ふ所こそ同じからざれ、語の簡にして意の長きは、ほゞ『論語』などの章句にも似たり。一言一句、皆記して以て座右の銘となすに足る。是れ彼の人の文の今尙愛重せらるゝ所以なり。前にもいへる如く、ペーコンの論文は早く我が國にももてはやされ、處々の學校の英語教科書に用ひられき。又下に釋する一篇の如きは、夙に中村敬字翁の漢文譯もあり、又坊間の註釋書などにも、其の解ありしかとおぼゆれば、こゝに今更に解釋せんは、蛇足を畫き添ふるたぐひなれども、予が評釋は、強ち珍らしきをのみ紹介せんの主意にあらで、訓讀法を講ずるかたはら、及ぶべくば英文の眞旨を傳へんとするにあり、されば人皆のよく知りたらんは、舊訓と新訓とを對照せんに、却りて一しほの便宜あらん。

つきて 學問(二)
Of Studies.

▲study としん語、俗にはちしなべて勉強と訓ませたれど、名詞として用ふるとき

は、勤勉と訓せんかた、妥當なるべし。すべて心を或事物に傾注して勤勉するの謂なり、よりて一轉して、勤學の義となり、學問の義となる。學問の二字は尤も的當なり。序ながら、今俗に學童の懶惰を責めて、勉強をなさいといふ、思ふに、學問をなさいといふ、舊慕言葉のかたは、はるかに妥當なる言葉ならんに、いつのほどよりか、勉強といふ語は、やりそめたり、これも直譯語の影響にはあらぬか。嘗て或英國紳士客と談話の間に、其の下婢に命じて、勉強部屋に燈をといへりき。こは study を直譯せるならん、study 或は訓じて「書齋」とすべし、學問の間の謂なり。

學問(一) 資すに 娛樂に 修飾 又 に 器能
Studies serve for delight, for ornament, and for ability.

學問は娛樂に(資し)修飾に(資し)又器能に資す。

釋に曰はく、學問は各人の見聞を廣めて種々の娛樂を供するもの、又人の天賦を琢磨して一層の光澤を發せしめ、以て交遊談論の際に於ける其の人の品位を高めしむるもの、又各人が世に處し事を行ふの器能を砥礪し、そをして一段の効力あらしむるものと。

以下や、詳細に説くすなはち簡より繁、粗より精に入るの文法にして、東西同轍なり。

其の主なる用(ト) 關する娛樂(ニ) ありに 靜閑 と 退隱(ト) 關する(ト) 修飾(ニ)

Their—chief—use for delight, is in privateness and retiring; for ornament,

ありに 談論 而して關する(ト) 器能(ニ) ありに 裁斷 と 處理(ト) の

is in discourse; and for ability, is in (the) judgment and disposition of

事務

business.

娛樂に關する其の主なる用は、靜閑と退隱とにあり、修飾に關するは、談論にあり、而して器能に關するは、事業の裁斷と處理とにあり。

▲Forは例のテニハに類したる語なれば、一定の訓によりがたし。通例は「關する」向うて、「とりて」爲に「など訓ずれど、場合によりては前段の一句にての如く、只に」と訓むても足ることあり。▲「靜閑と退隱とにあり」とは、閑居の折の樂しみは讀書にまさるものなしといはんほどの意と知るべし。いづれも冒頭の一句を敷衍したるに過ぎず。

蓋し 老練の 徒(ト) 得ん 行ひ 且つ 或は 判ずる(ト) を 箇々の件 箇々別々

For expert men can execute, and perhaps judge of particulars, one—by—

には 各(ト) の 總通の 議 及び 計畫 と 整理(ト) の 事務

one; but the—general—counsels, and (the) plots and marshalling of affairs,

來たる 最も(ト) より (ト) ともがら 學ぶ

come best from those (that) are—learned.

蓋し老練の徒は、箇々別々には、箇々の件を行ひ、且、或は判ずるを得ん、され、かの總通の議及び事務の計畫と整理とは、學べるとも、がら、最もいみじく來たる。

▲Men かくる場合には、「徒」や「から」など訓むべし。▲perhaps 從來「恐らくは」と訓むなれて國文に累をなせり、必しも「恐るゝ」の義なし。近年の時文には「恐らくは某氏の病は全癒すべし」など物したるがあり、不都合の語にあらざや、こは全く直譯風より移したる文病なり。▲Those は代名詞「その人々」そのものどもの「義」下の句より訓み上るべき等の語、ゆゑに義譯して「ともがら」となせり。▲「最もいみじく來たる」こは直譯のまゝなれど、其の義はほゞ通じぬべし。

此の一段は「學無きも、日常の世わたりにはさしつかへあるまじけれど、大事業を行ふには、不都合あらん」との意を説く。▲「老練の徒」とは「學問は無けれど、世故に老いたる者」といふ義。

費やす(ク) あまり 多き 時(チ) に 學問 なり 惰 用ふる(ク) 之れを あまり 多く
To—spend too—much—time in studies, is sloth; to—use them too—much
に 粧飾 なり 矯 なす(ク) 斷(チ) 悉く によりて 其が規矩(ニ) なり
for ornament, is affectation; to—make judgment wholly by their—rules, is
癖 の 學者
(the) humour of (a) scholar.

學問にあまり多き時を費やすは惰なり、粧飾にあまり多く之れを用ふるは矯なり、悉くそが規矩によりて斷ずるは學者癖なり。

▲slothとは俗にいふ「ぶらぶらやう」といふ義、徒に死讀に耽るはぶしやうの至なりとの義。▲humourは俗語の「氣質」といふ字に的當す、母親かたぎ、繼子かたぎなど、皆 humourと譯してよし。▲「矯」とは「矯飾」の謂、俗に謂ふ「キザ」「キドリ」の義。

此の段別に評釋すべきほどのこともなし。マローコンの言は、其の旨き所平庸なる

にあり、平庸はやがて三世相通、何人もいなむ能はざる通理なり。以下一々は評釋せず、おのづから明かなればなり。所詮妙は措辭にあり、原文につきてよくく含味すべし。

學(ク) 完全にす 性(チ) 又 完全にせらる によりて 經驗(ニ) 蓋し 天然の 器能(ク)
They perfect nature, and are—perfected by experience: for natural—abilities
ひとし 天然の草木(ニ) 要す 剪裁する(チ) によりて 學問(ニ) 而して 學問といふもの(ク)
are—like natural—plants, (that) need pruning by study; and studies—themselves
指導するなり あまりに 放縱に あらすば 限界せらる(ニ) によりて
do—give—forth—directions too—much at—large, except (they) be—bound—in by
經驗(ニ)
experience.

學は性を完全にす、又經驗によりて完全にせらる、蓋し天然(天稟)の器能は、天然の草木にひとし、學問によりて剪裁するを要す、而して學問といふものは、經驗によりて限界せらるゝにあらすば、あまりに放縱に指導するの弊あるなり。

▲劈頭の they は代名詞なれど、訓はむしろ「學問」とあるべし、代名詞をおびたゞしく用ふるはかの國の手ぶりなれば、訓は臨機應變たるべし。釋に曰はく「學理は廣漠に失する弊あり、實驗によりて學理を安排すべし、實驗以て學理を宜うし、學問以て賦性の足らざるを補ふべし」と。

巧智の徒(ハ) 輕んず 學問(ナ) 無智の徒(ハ) あがむ 之れを 而して 賢明の徒(ハ) 用ふ
Crafty—men contemn studies; simple—men admire them; and wise—men use them; for they teach—not their—own—use: but that is (a) wisdom without—them, and above—them, won by observation.

巧智の徒は學問を輕んず、無智の徒は之れをあがむ、賢明の徒は之れを用ふ、蓋し學問は學問其者の用を教へず、否、そ(學問を用ふる)は觀察もて得たる學問以外、又學問以上の智慧(の力)なり。

▲crafty は前段に見えたる expert men と殆ど同義、世故に練熟せる者を指す。たゞし巧智と訓じて「世才あるやから」など釋せば適當なるべし。▲simple は無學無智

の義。▲admire は只ひたすらに呆れ驚きて尊敬するのみなるをいふ、學を利用するを知らぬる也。▲wisdom は佛教などに用ふる「智慧」の義に近し、眞智をいふ。▲won by observation 直譯は「觀察によりて得られたる」とあるべきなれど、意味にさほり無き限りは、前訓の如く訓まんかた、國人には通じ易からん。「によりて」もて「同義也。彼の國ぶりは、兎角に所動風に句を物したるが多かれど、強ちに原語の法格に泥まんは例の杓子定規の訓なるべし。▲but は反語ならざれば「さはれ」とも「あらず」とも「あれど」とも、時宜にしたがひて訓むべし。

讀む勿れ 反抗論駁せん(カ爲ニ) 又 信ト 且ツ 既定なりとせ
Read—not to—contradict—(and)—confute; nor to—believe—and—take—for—
ん(カ爲ニ) 又 獲ん(カ爲ニ) 談論(ナ) 否 酌量 稽査せん(カ爲ニ讀メ)
granted; nor to—find talk—(and)—discourse; but to—weigh—(and)—consider.
或書(ハ) 含味せらる(ト) 他(ハ) 一吞せらる(ト) 而して 或少數(ハ)
Some—books are—to—be—tasted, others to—be—swallowed, and some—few to—
咀嚼消化せらる(ト) へは(ハ) 或書(ハ) 讀めらる(ト) 只
be—chewed—(and)—digested: that—is, some—books are—to—be—read only in—
キーンンの論文 九三

幾分、他(ハ) 讀まるべし されば 精細に(讀マルベキニ)あらず 而して 或少数(ハ) 讀まるべし
 parts; others—to—be—read, but not—curiously; and some—few to—be—read
 悉く 而も 匪勉留意して
 wholly, and with—diligence—and—attention.

反抗論駁せんが爲に讀む勿れ、又信じ且つ既定の眞理なりとせんが爲に讀む勿れ、又談論の料を得んが爲に讀む勿れ、否、酌量稽查せんが爲に讀め、或書は含味せらるべく、他は一吞せらるべし、而して或少数は咀嚼消化せらるべし、くはしくは、或書は只幾分か讀まるべし、他は(悉く)讀まるべけれど、ざりとて精細に讀まるべからず(讀まん要なし)、而して或少数は悉く、而かも匪勉留意して、讀まるべし。

▲「讀まるべし」は例の直譯ぶり「讀むべし」の義也。

或書(ハ) また 讀まるも可ならん 代人によりて 面して 拔萃(ガ) 成さるゝ 其の書につきて
 Some—booke also may—be—read by—deputy, and extracts made of—them by—
 他人によりて されど 成る(ハ) あるべき也 只(のみ)に 一緊要ならざる 論題 及び
 others; but that would—be only in (the) less—important—arguments, and

やゝ卑しき種類の 書 まからざれば 蒸溜せる 書(ハ) たり ひとしく 尋常の
 (the) meener—sort—of—books: else distilled—books are like common—
 蒸溜水(ト) 空しくきらめく物
 distilled—water, flashy—things.

或書はまた代人によりて、讀まれ(人)にいひつけて讀ませ、其の書につきて、拔萃の、他人(の手)によりて、成さるゝも可ならん、されどさることは、只、やゝ緊要ならざる論題、及びやゝ卑しき種類の書にのみあるべき(こと)也、まからざれば蒸溜せる書、撮要は尋常の蒸溜水とひとしく、只空しくきらめく物たるに止まり、何の風味もなかるべきなり、

▲argument は「主題」と譯するが正譯なり、「論題」と訓ませたれど必しも議論の意にはあらず、書中に含まれたる事柄といはんほどのことゝなり。▲wouldはこゝにてはshouldの義に通へり、これは古格なりと知るべし。

讀書(ハ) 『造り 充足の 人(チ) 談論(ハ) 機敏の 人(チ) 而して 筆録(ハ)』
 Reading maketh (a) full—man; conference (a) ready—man; and writing (an)
 ヲノノシの論文

精密の 人(チ) さるからに 若し 人 筆録する少(ナラバ) 有せざるべからず
 exact—man. And—therefore, if (a) man write little, (he) had—need—have (a)
 大なる 記臆力(チ) 若し 談論する 少(ナラバ) 有せざるべからず 敏き即智(チ)
 Great memory; if (he) confer little, (he) had—need—have (a) present—wit
 而して若し 讀書する 少(ナラバ) 有せざるべからず 多量の巧智(チ) 見えん爲(ニ)
 and if (he) read little, (he) had—need—have much—cunning, to—seem to—
 知れり(ト) を 其の (知ラ)ざる
 know that he doth—not.

讀書は充足の人を造り、談論は機敏の人を造り、而して筆録は精密の人を造る。さるからに若し人筆録する少ならば、その缺を補ふ爲に大なる記臆力を有せざるべからず、若し談論する少ならば敏き即智を有せざるべからず、而して若し讀書する少ならば、多量の巧智を有せざるべからず、其の知らざるを知れりと見えん爲に、

▲「充足の人」とは「思想のゆたかなる人」といはんほどの義にて、學なき人の知見狭きに對していふ。▲「筆録」の二字妥當ならずと雖も、今好譯語を得ざれば假に用ひつ、

蓋し筆録といふうちに述、作の義も多少含まれたりと知るべし。さて此の一節は屢々引用せらるヘーロンの名言なり、旨言なり

史(ン) しめ 人(チ) 賢なら 詩家(ン) 慧利なら(シメ) 數學、 精細なら(シメ)
 Histories make men wise; poets, witty; (the) mathematics, subtle;
 博物學(ン) 深遠なら(シメ) 道義學(ン) 慎嚴なら(シメ) 論理 及び 修辭(ン) 適せ(シム) 辯論する(ニ)
 natural—philosophy, deep; moral, grave; logic—and—rhetoric, able to—contend.
 學は以て 習辭を作るに足る 否 一もあらず 障碍阻礙(ニシテ) 於ける
 “Abent studia in mores.” Nay, (there) is—no stound—or—impediment in (the)
 智(ニ) 排除せられざらん(ン) よりて 適當の學問(ニ) 一般(也) と 病(ン) の
 wit, but—may—be—wrought—out by fit—studies; like as diseases of
 彼の 肉體 有し得る 適宜なる體操法(チ) 投球戲(ン) 長し 爲に 畢丸
 the—body may—have appropriate—exercises: bowling is—good for the stone—
 及び 腎臟(ノ) 射(ン) 爲に 肺 及び 胸(ノ) 徐歩(ン) 爲に
 and—reins; shooting for (the) lungs—and—breast; gentle—walking for (the)
 胃(ノ) 騎(ン) 爲に 頭(ノ) なり
 stomach; riding for (the) head; and—the—like.

史は人をして賢明ならしめ、詩家の作は慧利ならしめ、數學は精細ならしめ、博物學は深邃ならしめ、道義學は慎嚴ならしめ、論理及び修辭の學は辯論するに適せしむ、所謂「學は以て習癖を作るに足る」とは是れ也、否、(およそ)智に於ける障碍又は阻礙にして、適當の學問によりて、排除せられざらんは、一もあらず、彼の肉體の病の、適宜なる體操(療法)を有し得ると一般なり、たとへば、(投球戲の、)翠丸及び腎臟の爲に良く、射の、肺及び胸の爲に(良く)、徐歩の、胃の爲に(良く)、騎の、頭の爲に(良き)など。

▲“abent studia in notes.”は羅句語なり。案ずるに、エリザベス王朝のころには、羅句語の尊まるゝこと、今日に幾倍せり、猶平安朝に支那文字の尊重せられしがごとし。ペーロンは當時の碩學なれば、其の哲學上の著述などは、總じて羅句文をもて物したり。國文(英語)をもて著述するは、其のころはやゝおとしめられたりし觀あり、此の故に、たとへ國文にて作するも、學者の尊嚴を保たん爲め、幾らか羅句語を引用するが例にて、演劇脚本のはかなきだに、こちたき羅句語を引きたる例、間々あり。要するに、我が國文家の間々漢文章を引用すると同一味のことゝ知るべし。

若し 其の 智 散漫ならん(ニ) して 彼れを 學ば(シメモ) 數學(チ) 何とならば
So, if (a) man's wit be wandering, let him study (the) mathematics; for
證明にあたりてや 若し 其の智 外に散ら(ス) ためしなきほど 少(ク) 彼れ 創始せざる
in—demonstrations, if his wit be called—away never—so little, he must—
入からざれば也また 若し 其の智 適せらる(カ) 分別し 若しくは 發見する(ニ) 差異(チ)
begin again; if his wit be not—apt to—distinguish or find differences,
して 彼れを 學ば(シメモ) 彼の博士派(ノ) 學(チ) 何とならば 彼等(ハ) なり 割毛者 若し 彼れ
let him study the—Schoolmen; for they are cymini—sectores; if he
適せらる(カ) 事を周査し て 呈出する(ニ) 甲事(チ)
be—not—apt to—beat—over—matters, and to—call—up one—thing to—prove—
證明せん(タメモ) 乙事(チ) して 彼れを 學ば(シメモ) かの狀師が判決例(チ) さらば 各種の
(and)—illustrate another, let him study the—lawyer's—cases; so every—
缺點 の 人心 有するを得ん 各種の 醫方(チ)
defect of (the) mind may—have (a) special—receipt.
されば若し人の智散漫ならんには、彼れをして數學を學ばしめよ、何とならば、
數理を(證明する)に當たりてや、若し其の智、ためしなきほど、少しだに(いと
少)少しだに(外に散らば、)彼れまた創始せざるべからざればなり、(たちまち

計算上に過誤を生じて、まなほしの必要を感ずべければ也。若し其の智(事物の)差異を分別、若しくは發見するに適せざらんか、彼れをして彼の博士派の學を學ばしめよ、何とならば彼等は割毛者、微細の事物を剖析するに長じたる學者なればなり、若し彼れ事を周査して、乙事を證明せん爲に甲事を呈出するに適せざらんか、彼れをしてかの狀師が判決例を學ばしめよ、さらば(然らば即ち)人心各種の缺點(庶幾はくば各種の療治法を有するを得ん)。

▲demonstrations' 此に用ひたるは、特に「數學上の證明」を指す。▲never so は熟語、直譯は「未曾有なるほどに」の義、就中「異常に」など譯してもよし、etiam とあるも大概同義なり。▲「博士派」とは所謂スコラ學派のこと、歐洲中古の世に盛なりし學派也、或は煩瑣學派とも稱す、専ら教義、神學を研究せし學徒にして、其の煩瑣といふ譯名を附せらるゝに至りしは、其の講究する所の、あまりに煩瑣なりしが爲也。▲「彼等は割毛者也」とは、其の穿細に過ぎたるをいふ。cymini sectores とは「cumin といふ植物の種を剖析する人」といふ義、cumin の種子は至りて微小なるが故に比喩として用ひたるなり。「割毛者」は間にあはせの意譯也。▲「周査する」とは「萬遍なく考査

する」の謂。▲special とは「殊別の義」ちの「特殊なる」といはんほどの義。

評釋の二

ドライデンの樂歌

詩歌に三體あり、抒情、敘事、劇の三なり。此の中抒情の種類最も多し、我が短歌長歌のたぐひより、鄙歌、俗謠、唱歌、樂歌に至るまで、あらゆる風詠の作を含む、すべて情感を抒するをもて本領とするなり。さてこゝに樂歌といふは樂器にあはせて歌ふべき者をいふ。

ジョン・ドライデンは英國十七世紀文學の名家なり、今よりは二百六十餘年前に生まれたり。其の著す所、諷刺詩あり、敘事様の長歌あり、批評的論文あり、又樂歌あり、譯詩あり、又數十篇の劇の詩(脚本)あり。其の縦横の才、該博の學、當時能く並ぶものなかりき。但し其の最も多作せし脚本には傑作と稱すべきものなし、其の作の數は二十有八篇に及びぬと聞こえたれど、今は其の中の一編だにあまねくはもてはやされず、また殆ど重すべき價值なし。さるはいづれも皆當時の好尚に媚びて作りたるものにて、眞の劇詩たるの妙趣を缺けり、さすがに大才の筆なるゆゑ、詞句の面

白きは尠からねど、篇中の人物いづれも生氣無き木偶人に似て、自然活動の妙なし。所詮ドライデンが長所は、かゝる種類の作にあらで、寫景狀物又は敘事、又は諷嘲、又は議論めく詩歌にあり、特に其の律呂を整ふるの如意にして、韻を踏むの自在なる、恰も日常語を綴るが如く、一氣呵成、咄嗟篇を成すの技倆、前後其の比いと稀なり。批判家此の故に彼れを評して、ドライデンは詩人にあらずして技倆家なりといふ。さもあれ彼れが一代の作豈悉く技工のみの作ならんや、下に評釋する樂歌の如きは、明かに古今英詩中の絶品にして、優にドライデンの詩名をして長く後世に垂れしむるに足るものなり。

もと此の歌は一千六百九十七年に、一音樂會の囑托に應じて作りしものにて、一篇の大意は、主として音樂の偉力を稱ふるにあり。案ずるに、基督教會の尊信する諸尊者のうち、シ、リヤといふ女尊者は専ら音樂を司る聖者なり、此の女の世に在りしや、道心堅固にして樂を好み、且つ最も其の技に秀て、はじめて風琴を製作しきといふ傳説あり。この故にシ、リヤ女は斯道の守護尊者と崇められ、年毎に其の祭典ありき。ドライデンが樂歌は、此の例祭の會に用ひしもの、其の末段に該尊者を

頌するの句あるは之れが爲なり。

ドライデンと世を同じうせし貴紳にホリングアローク侯といふあり、其の所記によれば、一日、侯ドライデンを訪ひしに、彼れ曰ひけらく、予は昨夜徹宵せり、其の故は我が知れる樂人某々等、予に命じて女尊者シ、リヤを祭るの歌一篇を作らしめき、予うべなひて案を構ふる程に、興來たり神浮かれて、まばらくも息ふ能はず、立地に筆を走らして此の篇成りぬと、すなはち一篇の樂歌を示しき、云々と。是れ下に擧ぐる『アレクサンダアの盛宴』なり。かゝる絶唱の僅かに一夜間に作られしは驚絶の事なりとマコーレーのいへる、理なり。傳説によれば、ドライデンみづからも此の作を評して、『空前絶後の樂歌』なりといへりきとか。よしや此の自讃は溢美なりとするも、其の古今有數の樂歌たるは疑ふべからず、又尠くともドライデンが作中の絶唱たるは萬口一致する所なり。

本來此の作は樂曲なる故、趣味の半分は、其の風調の妙にあり、翻譯若しくは訓釋するに及びては、其の妙半ば沒了す。讀む人あらかじめ此の理を會得し、以下訓釋を讀むのかたはら、毎に原詞に心を注ぎて其の風調(律呂)の美を味はんと勉むべし。

アレクサンダアの盛宴

Alexander's—Feast;

又の名 音樂の偉力

Or, (The) Power—Of—Music.

此の篇は、歐南マセドンの王アレクサンダア(歴山大王)がヘルシヤ國征服後の盛なる賀宴を主題とし、樂匠チモシユースが奏樂の妙を骨子とせり。此の故に題して『歴山が盛宴』とし、又名けて『音樂の偉力』とすへり。樂の調の轉ずるにつれて、且つ喜び且つ悲み、忽ち愁へ、忽ち怒り、百戰百勝の大歴山王が七情、一老樂師が指頭に醜弄せらるゝの狀、殆どまのあたりを觀るが如し。下の原詞につきて、如何に句々言々飛舞活動するの妙あるかを見よ。

其の一

I.

そは、なりき 王者盛宴(の席)にて 關したる 獲られたるヘルシヤ(ニ)

'Twas at—the—royal—feast for Persia—won

ドライデンの樂歌

By—Philip's—warlike—son,

高々と いがめしき容態にて

aloft in—awful—state

The—godlike—hero sate

に 其の皇帝の高みへち

On his—imperial—throne;

其が勇猛なる公卿等(ハ)

列なれりき 周邊に

His—valiant—peers were—plac'd around,

此の人々の前額(ニ)

薔薇イブトネ(ハ)

纏はざり

Their—brows with—roses—(and)—with—myrtles bound;

(So should desert—in—arms be—crown'd.)

彼のうつくしき ティス女(ハ) 王がたたくに

The—lovely Thais, by—his—side,

坐しき 如く

咲匂ふ

東洋の

新婦(ハ)

Sate like (a) blooming—Eastern—bride,

今を春邊の妙齡にて

今を盛りの婚態(ニテ)

In—flow'r—of—youth (and) beauty's—pride,

たのしき

たのしき

たのしき 妹背(ヤ)

Happy, happy, happy pair!

何者(カ) 英雄ならむ

None but—the—brave,

何者(カ) 英雄ならむ

None but—the—brave,

何者(カ) 英雄ならむ

當りなき 傾國の美(ニ)

None but—the—brave deserve the fair.

そは故マセドン王(フィリップ)が勇敢兒(歴山王)によりて獲られたるヘルシャ國に
關したる王者が盛宴の席にてなりき(下に物語る事件の起こりしは)。

高々といかめしき容態にて彼の神々しき英雄(歴山王)は坐しき、其の皇帝の
高みくらに。

其が勇猛なる公卿等は、皆周邊に列なれりき。此人々の前額は薔薇番石榴もて纏はれて。武に勳あるともがらはかくなん加冠せらるべかりし。彼のうつくしきティス女は、王がかたへに座を占めき、咲き匂ふ東洋の新婦の如く、今を春への妙齡にて今を盛りの嬌態にて。たのしき、たのしき、妹背や。

英雄ならぬ何者か、
英雄ならぬ何者か、

英雄ならぬ何者か傾國の美に當すべき。

▲「薔薇番石榴」をもて花鬘とするは希臘古代の宴席の禮なり。武勳ある者のかゝる冠を戴き以て其の榮譽を表す。蓋し其の當を得たりといふ意。▲「ティス女」はアレクサンダアの嬖姫、ベルシヤ征討の軍に隨行しきと傳へたり。▲「東洋の新婦」とはベルシヤの妙齡女といはんほどの義、古代の列國中、ベルシヤ國は豪華浮華、就中服裝の富麗をもて聞こえたり、こゝはティス女が盛裝の美を稱せるなり。▲ youth の flower とあるは「今を盛りの妙齡」といはんほどの意なり、▲ beauty's pride の pride は

た「全盛」の義なり、本文の訓は更にまた義譯せるもの。▲末段の意は「窈窕たる淑女は君子の好速」の義に近し、かゝる英雄なればこそかゝる佳人と相伴へ、英雄ならぬ何者か、かゝる佳人に相當せん」といふに外ならず。妙は重に風調にありと知るべし。總じてドライデンの句は、句作り、風調、又は思ひつきに生命を有すると多し。

其〇二
II.

チモシユース(ト) 据ゑられて 一々は高く
Timothens, plac'd on—high

中二 唱歌班(ト) Amid (the) tuneful—quire,
疾く飛ぶ指もて 颯々 琴(線二)
With flying—fingers touched (the) lyre;

打震ふ 爪音(ト) 登つ 虚空(ト)
(The) trembling notes ascend (the) sky,

ドライデンの樂歌

て 天上界の歡樂を鼓吹し來たる
And Heavenly—joys—inspire.

樂の歌(シ) はてまりける ヤモウ神(カ事)より(シ)

(The) song began from—Jove,

彼の神(シ) 去りたまひき 其の至福なる居(キ) 天上の

Who left his—blissful—seats above,

ウツギ(カミ) 偉なる 戀の力(シ)

(Such—is the power—of—mighty—Love.)

神龍の烈火の姿にいづたたまひキ 彼の神(シ)

(A) dragon's—fery—form—bely'd the—god;

大空高く きらめく螺旋の形して 乗りたまひき

Sublime on—radiant—spires (he) rode,

折(シカミ) うつくしのオリムピヤに よびたまひし

When (he) to—fair—Olympia press'd

折(シカミ) 近びきたたまひし 雪はうかこ其の胸(シ)

(And) while (he) sought her—snowy—breast;

ウツギ(カミ) 彼の姫がやちし腰に

Then round—her—slender—waist (he) curled

ふべし(シ) 印し残ちたまひし 世の面影(キ)

And stamp'd (an) image—of—himself, (a) sov'raign—of—the—world.

感に入つたる群衆(シ) はめたなく けだるき音色(キ)

(The) listening—crowd admire (the) lofty—sound,

ヘビノの神(モウ) 皆にみ 四面に

(A) present—deity, (they) shout around;

ウツギの神(モウ) 尊座(キ) 反響ナ

(A) present—deity, (the) vaulted—roofs rebound.

恍惚たる耳もし

With—ravish'd—ears

大王(シ) カミ

(The) monarch hears,

(カミ) 彼の神に擬し

Assumes—the—god,

フライテンの樂歌

うなづく眞似し
Affects—to—nod,

天上世界をゆりうごかさん面地す
(And) seems—to—shake—the—spheres.

樂師チモシユースは唱歌班のうち一段高く据ゑられて、疾く飛び走る十指もて、其の琴線ことばとに觸れければ、打震ふ爪音は虚空おぼろに高く沖りて、天上界の歡樂を鼓吹し來たる。

(まづ第一の樂の歌は彼の希臘の神ヂョーヴが御事よりぞはじまりける。(あはれ彼の御神は、其の天上の至福なるおましどころを去りたまひき、(オリムピヤと云ふ姫にあこがれて、浮かれいでさせたまひける)あはれ戀の力のいみじさは(神代さへも)かくぞかし。

さて彼の神は神龍の烈火の姿にいであちたまひて、きらめく螺旋の形して大空高く乗りたまひき、これはこれ彼の神がうつくしのオリムピヤに呼ばひたまひし折ぞかし、雪はづかしき其の肌はだに近よりたまひし折ぞかし。さるほどに彼の姫がやさしき腰に、七重ななへに八重やへに彼の神纏まとひつきたまひて

さてなん神の御影をふるし残させたまひける、是れ現世うつしの君ぞかし。

▲「オリムピヤ」はアレクサンダア大王の母なり。王はヂョーヴ神の子なりといふ荒唐無稽なる傳説あり、チモシユースが歌ふ所は是れなり。▲「神龍の烈火の姿」とあるは猛火烈々として其の身邊に燃ゆる火龍の謂なり。ヂョーヴ火龍に化してオリムピヤ女に媾むすひきといふ傳説あり。▲「Pheasant」の原意は「近寄る」といふに外ならねど、其の次行の意より推せば、よばふなど譯して當然なり。▲「sought」もほゞ「近寄る」のに近し。▲「雪はづかしき胸は乳のあるあたりをいふなれば、肌と訓せんかた原に近かるべし。▲「腰に纏ひつきて其の面影を印す」云々は、やゝ猥雑の嫌ある故にや、教科書などにては毎に省畧する所なれど、神代の架空談なれば、必しも咎むまじくや。

末段は此のオリムピヤ女に生ませたるが今現世に君臨せるアレクサンダア大王なりとの意なり。

感に入つたる群衆もろびとはけだかき音色ねいしきをほめたゝ、げにやこゝに在す大王は現の神よと四面に呼べは、穹窿くわうりゆうもこれが爲に震動して、現の神よと反響す。

ドライテンの樂歌

王は恍惚と聽きほれて、竊に天神ヂョーヴに擬し、いかめしげに點頭ウツノブく爲し、且つ天上の全世界をゆりうごかすらん面地おもてちす。

▲アレクサンダアが自稱して「神子」と誇り、尊大倨傲なりし由は史にも見えたり。今チモシユースが樂歌の中に我れを神子なりと歌へるを聽き、且つ其の諂諛の徒が異口同音に我れを神とし崇むるを視て、意氣軒昂、心ますく傲る、すなはち得々として天神ヂョーヴをもて自ら擬し、いかめしげにうなづく爲し、且つ天上界を震蕩するの容を粧ふ。案ずるに、希臘の詩仙ホーマアが作「イリヤム物語」の中にいへるあり、ヂョーヴ嚴然として點頭するときは天上天下震ひ動く」と。本文の句は此の意に因める也。

其の三

III.

バッカスの神バカスノカミ(ヲ)

次には

妙なる樂師は歌ひけり

(The) praise—of—Bacchus, then (the) sweet—musician—sang,

バッカスの神が(頌ヲ)と(こゝな)に麗しき且つ(こゝしな)にうら若キ

Of—Bacchus ever—fair,—and—ever—young.

彼の快活の神

いと樂しげに

來降す

The—jolly—god in—triumph comes;

鳴らば

喇叭を

打てや

太鼓を

Sound—(the)—trumpets, beat—(the)—drums;

おんぎきで

くれないの美しきもて

Flush'd with—(a)—purple—grace

彼れ 現はしたまふ

其の美貌(ヲ)

He shows his—honest—face;

いで 入れよ

たて笛(ニ)

息(ヲ)

彼の神 來ます

彼の神 來ます

Now give (the) hantboys breath; he comes, he comes,

バッカス(ヲ)

と(こゝしな)に年若く且つ(うら)るはしき

Bacchus, ever—fair—and—young,

酒宴の

樂み(ヲ)

つら

はやめて (此ノ世ニ)定め行ひたまひ

Drinking—joys did first ordain;

バッカスが

おほみめぐみ(ヲ)

寶なる

Bacchus' blessings are—(a)—treasure,

ドライテンの樂歌

酒宴(ン) 　　もさが けらくなる

Drinking is—the soldier's—pleasure;

たふとこや 此のたから

Rich the—treasure,

あなうまし 此のけらく

Sweet the—pleasure,

うまし 　　勞苦の後のけらく(ン)

Sweet—is pleasure—after—pain.

次には(酒神とあがめらるゝ)バッカス神の讚美歌を妙なる樂師は歌ひけり(彼の)とこしなへに麗しく且つとこしなへに嫩若きバッカス神が讚美歌を。
バッカス神はチョーゲの子、専ら宴樂を司るの神、容顏常に紅を帯びて童の如く麗しと傳へたり。此の一段は樂師チモシユースが飲酒の快樂を歌うて大王の心を動かし、神明に擬せる彼れをして、忽ち俗界の人たらしめ、且つ興じ且つ誇り、殆ど狂人の如くならしむるの端、以下たくみに琴線を弄して、まのあたりにバッカスを呼びいだし來たる。

(見よや見よ)彼の快活の御神はいと樂しげに降り來ます、
鳴らせや喇叭を、打てや太鼓を。

から紅にうつくしく、照りかゝやきて彼の神は(今しも)美貌をあらはしたまふ、

いで豎笛に息を入れよ、彼の神來ます、彼の神來ます、

とこしなへに麗しく且つ嫩若きバッカスぞ、はじめて酒宴のたのしみを此の

世に定め行ひたまひし、(あはれ酒道の祖神ぞ)

バッカスがおほみめぐみぞ實なる、

酒宴ぞ猛者が快樂なる、

たふとこしや此のたから、

あなうまし此の快樂、

うまし勞苦の後の快樂は。

▲「からくれなるに美しく」云々は酒醺を帯びたるをいふ。原文に purple(紫)とあれど「紅」の義なり、紫色を紅色に代用する例、彼なたの詩歌には間々あることなり。▲

原文に in triumph とあるは熟語なり、いと樂しげになどいはんほどの義。▲ honest
といふ語、今は「正直」「貞良」などいふ意義にのみ用ふれど、古くは「端麗」などいふ意味あり。▲ 豎笛の原語「ホーボイ」はほゞ我が尺八などに似たる樂器なり。豎笛と訓じたるは急に好譯語を得ざるが爲のみ、尙再考すべし。

其の四

IV.

其の聲になぐらふらわて

王は心次第に傲りぬ

Sooth'd—with—the—sound the—king—grew—vain;

ちかゆる過去りて戦争を再び戦へる心地なり

Fought—all—his—battles—o'er—again;

またびごとく敵を破り 既に殺せるをもまたび殺しつ

And—thrice—he—routed—all—his—foes,—and—thrice—he—slew—the—slain.

樂師は狂熱の騰るを見

The—master—saw—the—madness—rise,

王が頬のエンマクを見 王が眼の熱するを見

His—glowing—cheeks, his—ardent—eyes;

すなはち 王が(意氣昂然と)天地をのしれる折から

And while—he—heaven—and—earth—defy'd,

(突然)ちかゆるの手を變へて王の慢心を抑へけり

Chang'd—his—hand,—and—check'd—his—pride.

(すなはち)樂師は哀絶なる一種の曲を選びこけり

He—chose—a—mournful—Muse,

仁慈のこころを吹きこまん

Soft—pity—to—infuse;

チモシユースが妙曲に、王が心浮きたちて、げに我ればかり多福なるいみじき猛將は
あらし」と思ひ、心傲り、意たかぶり、過去の戦勝を想ひ起こし、過去の勇戦を追憶し、恍
々然たる心の目のうちに、往時の戦況を書きいだし來たる。樂師北叟^{はくそ}をみして王
が狂熱の騰上するを見、王が頬のかくやくを見、王が眼の熱するを見て、時分よしと
うなづき、王のかくとしも知らずして、勢ひに乗り傲りに傲りて、天何爲者ぞ、地何爲
者ぞ、汝等よく朕に敵し得るや、來たれ」と、心裡にいひのしり誇り狂ふもなか
に、突然と樂のまらべをあらため、沈痛悲哀なる曲を奏し、王が慢心を挫折し來たる。

すなはち彼れは一轉して、極めて悲哀なる主題を惹らびき、そは王が驕慢なる胸中に仁慈のこゝろを注入せんと欲せしなりけり。

▲ *thrice* は「幾たびも」の意、必しも「三たび」の意にあらず。▲「既に殺せるをも」とは往時の戦にて殺せる敵を又あらためて敵とし更に戦ひつゝあるやうに想へる也、すなはち過去の戦勝を追憶せるさまを形容したる書きぶり也。▲「頬のかゝやく」とは上氣して紅を潮せるをいふ。▲「天地をのしれる」とは上の釋に見えたる如く、天地にむかひて戦を挑むをいふ。▲ *Muse* とは「曲」と訓じて可也、本來は「音樂の力」など譯すべきものなり。▲ *soft pity* の *soft* は「やさしき」など訓ずべし「仁慈」の二字に「やさしき」といふ意こもりたれば前訓には省きたり。

彼れは威徳兼ねそなへし(故ヘルシヤ王)デライアス(其事)を歌ひぬ

He—sung—Darius—great—and—good,

こともつれなき運命にふりて

By—too—severe—a—fate,

おちて おちて おちて おちて

Fallen, fallen, fallen, fallen,

高みくへりおちまらぶおちて

Fallen—from—his—high—estate,

なのち血汐にぬたくれる(故デライアスが身の上を)

And weltering—in—his—blood.

上なき危急のきはにのぞみ(臣下の爲に)見棄てられ

Deserted—at—his—utmost—need

我が年來の恩恵のはこくみし臣等の爲に(見棄てられ)

By—those—his—former—bounty—fed,

むしろも敷かぬ土の上に さらされて横たはる

Or—the—bare—earth expos'd—he—yes,

(いまはの)眠ふたぐべき友ひとりだにまたずして

With—not—a—friend—to—close—his—eyes.

樂師は大王をして仁慈の情念を起こさしめんために、曩に王の爲に大敗し、ついで逆臣の毒手にかゝり、落行く途上にて横死せし故ヘルシヤ王デライアス三世が最後を題とし、盛者必衰、有爲無常の哀むべき原理を諷し來たる。歌うて曰はく「見ずや彼のヘルシヤ王を、威權富貴兼ね備はり、徳はた高かりし王にあらずや、然るに

宿命のまぬかれがたく、無慚にも忽然と高き位よりまろびおちて、滾々として流れ
 いづる血汐にまみれてぬたうちたまひき。惘れむべし、きのふまでは、一天萬乗の
 きみとおほがれし身ながらも、けふ大危急のきはにのぞみ、あさましや、此の年ごろ
 恩を施してはごくみし譜代の腹心にも見すてられ、剩へ彼等の爲に、非業の最後を
 遂げたまひ、蓆だに敷かぬ土の上に、最後の正念をすゝむべき友ひとりだに得る能
 はて、弊履の如く投げいだされ、雨露にさらされて臥したまふ。これを思へば憂き
 世の中は、げに頼まれぬ夢まぼろし、如露亦如電うたかたの、おはれはかなし、あなう
 世の中と

▲「アライアス」はヘルシヤ國の王にして、歴山王と連戦して連敗し、竟に臣下の爲に、弑
 せられし人なり。▲「そのたかみくら」まことは、高き身分、又は位置などあるべきな
 れど、まろびおつる」といふ比喻よりいへば、「高御座」の譯や、叶へり。▲「眼ふたぐべ
 き友」とは彼なたの手ぶりなり。「人の臨終には、心友縁者其の枕邊に臨み、慰諭介抱
 して瞑せしむるならはしなり。さもあれ此の一句の本意は、臨終を看護する友ひ
 とりだになくて」といふに過ぎず。▲「さらされて」必しも「雨風にさらされて」といふ

意に泥むの要なし、投げいだされて」といはん程の意勝ちたりと思ふべし。

意氣沮喪はるおもへうして わびしげなる戦勝王は坐しにき

With—downcast—looks the—joyless—victor—sate,

思ひめぐるこころ 其の一變せる心のうらみに

Revolving in—his—alter'd—soul

世のちかむへの變轉を

The various—turns—of—chance—below:

さて折々に(人目をしのびて)ひそやかにとこきつかり

And,—now—and—then—a—sigh—he—stole,

わび涙(こころ)流れにぞち

And—tears—began—to—flow.

此の悲しく哀れなる琴の曲を聴くうちに王が心は漸く傷み、昂然たりし意氣も頓
 に沮み虚榮の頼むべからざるをも感じ、人生のはかなきをもさとりそめつ、すなは
 ち悵然として黙坐し、無常轉變の種々相を念ふ、竟にえたへずして吁嗟し、涙の襟を
 うるほすを覺えず。▲below とは下界、即ち世の中」といふ意。

其の五

V.

いみじき楽師は ことりて笑みぬ

The—mighty—master smil'd—to—see

戀といふ題は此の次に來へむれど

That—love—was—in—the—next—degree;

それは只似られる他の聲なるなり

'Twas—but—a—kindred—sound—to—move,

蓋し惻隱の情は人の心を溶かし戀愛といふ情を醸せばなり

For—pity—melts—mind—to—love.

むかしと愛のこころ(はなびら) リチアよりといふ曲調にて

Softly—sweet, in—Lydian—measures,

たまに王が心ななごめあつたのこぼれ

Soon—he—sooth'd—his—soul—to—pleasures.

兵戦は 彼れ歌ひけらく 苦なりまた勞なり

War, he—sung, is—toil—and—trouble,

譽は只うたかたのみなりのみ

Honor—but—an—empty—bubble,

(世とは)曾て滅盡せしことな(くに創始)

Never—ending,—still—beginning,

(彼れは)つしな(くに闘戦)つしな(くに破壊)

Fighting—still,—and—still—destroying;

若し此の世君の物とする慣あらんか

If—the—world—be—worth—thy—winning,

思へ ちし思へ 是は享け樂むべき價あるを

Think,—O—think—it—worth—enjoying;

愛らしのテイス女は君がまた(に)侍坐せるなり

Lovely—Thais—sits—beside—thee.

取れや 神々が賜へるものを

Take—the—good—the—gods—proved—thee.

さるほどにいみじき楽師チモシユースは、王のいたく悲しめるを見て、又もや曲調を變ぜんと欲し、やがて莞爾として打笑みぬ。蓋し此の次に來たらん主題は、戀に

ドライデムの樂歌

外ならずと知れ、ばなり。具にいへば、前に功名の念に訴へ、次に惻隱の情に訴へ、種々に大王を弄び來たりたり、最早煩惱の司といふ戀愛の情に訴ふべきなり、是れ適當の順序なりと思へり。さて惻隱の曲より轉じて、戀愛の曲に移るは、チモシ、
 一スに取りてはいと容易きとなりき、此の二者は旨意ほゞ相似たるが故に、只少しく曲調をあらため、手を變ふれば足りしなり。何となれば、およそ惻隱の情はおのづから人の心を溶解し、やがて愛憐の情を惹起すればなり、慈悲は愛戀の又の名なればなり。すなはち、希臘古樂式のうちにて、最も愉快なる、最も柔和なる、最も可憐なる樂式として知られたるリヂヤ式の樂曲をえらび、やさしく面白くかなでたり。さるほどに靈妙なる音樂は、たちどころに王が憂愁を拂ひ、王が心、また頗るたのしめり。

樂師すなはち歌うて曰はく

「兵戰は苦なり、また勞なり。名譽は只うたかたの水沫のみ。あながちに兵戰をのみ思ふ勿れ、あながちに名譽に懸念する勿れ。所謂名譽は夢幻泡沫、あるかと思へば無し、消えぬと思へば在り。消えぬればとて歎くことかは、また倏忽に生ずるな

り、詮ずるに無始無終のものぞ。さてまた所謂兵戰は、苦なり勞なり、宛然に無終の修羅鬪諍、とこしなへに争ひ鬪ふをつとめとし、またとこしなへに破壊毀損するをつとめとす。是れ豈至極の苦楚にあらざや。嗚呼、大王賢なるか、何ぞひたすらに此の勞苦をよろこび、彼の泡沫にのみ心を注げる。世の中別に樂しむべきことあり、何を苦みてか勞苦と空名とに偏局するを須ひん。蓋し大王の大兵を擧げて普く天下を征したまふは、略るべき價值ありとおぼせばならん。我が有とする價值あらんか、思へ、あゝ思へ、そはまた享樂すべき價值あらんを。御覽せよ、御座の側には、顔花の如き絶世の佳人在り。あはれ、ティス女は現世間の至寶にあらざや。既に美人備はり、富貴威權備はる、人間の福分何時の時か之れに越えん。皆是れ神祇の大王に賜ふ所。享樂せよや」と。

衆皆高く喝采し其の聲を響かす

The many—reud—the—skies—with—loud—applause;

さてこそ戀は上もなき尊き者とせられけれ

So—love—was—crown'd, but—Musique—won—the—cause.

ドライデンの樂歌

王は苦惱をかくし得ず

The prince, — unable — to — conceal — his — pain,

佳人のおもてを打ながめ

Gaz'd — on — the — fair

らゝかひの元たりし

Who — caus'd — his — care,

とゞきうつきは打みやり

And — sigh'd — and — look'd, sigh'd — and — look'd,

またとゞきうつき打みやり またとゞきうつはおはしけり

Sigh'd — and — look'd, — and — sigh'd — again ;

はつはひのこ 戀と酒とに(身も心も)つかれはし

At — length, with — love — and — wine, — at — once — oppress'd,

敗勝王は(いつしかに) 佳人が胸下に眠りてけり

The — vanquish'd — victor — sunk — upon — her — breast.

樂師曲を奏し終れば、公卿皆歡呼し、喝采す、其の聲大空をつんざかんとするものゝ如し。嗚呼、天上天下、戀ばかり尊きものなし、佳人あり、また何をか望まん、王も志か

思ひ、衆はたまか思ひぬ。さもあらばあれ、戀愛といふものをして、かゝる大なる譽を得しめたるはひとへに音樂の靈力也、此のくしきいさは立てたるは、ひとへにチモシユースが妙技なり。見よ、絶代の英傑アレクサンダアも、彼れが妙手に醜弄せられて、百感錯出、悲喜紛糾し、心緒方に絲の如く亂れ、或は盛衰の常なきを歎き、或は威武の頼みがたきを感じ、テイスが可憐なるを見るにつけても、我れ若し一朝運極まり、彼のドライアスと最後を同うせば如何。鴻龐たる領土は惜むに足らず、只汝を奈何せん、嗚呼汝を奈何せんと、更に愁然とテイスを凝視す。やがて得堪へずして長吁し、又凝視し、又長吁し、又凝視し、又長吁す。かくすること幾回か、竟に酒と愛と合一の力に、身心ふたつながら綿の如く、惘々然として眠を催し、嬖姫が膝を枕として、其胸下に沈睡す。

▲最後の「敗勝王」の句は作家の巧を弄したる所、百萬の勁敵にも打勝ちし王なれど、戀と酒とは敗れたりとの意。▲sunkは胸に倚りかゝりてクタリと首うなだれたる形を指す、椅子などにクタリと身を投ぐるやうに倚りかゝるにもいふ。勿論こゝにては寐、入るといふ意をも含ませたり。

(嗚呼)これに戦場にて非業の最後を遂げたりし希臘兵の怨靈ぞや

Those—are—Grecian—ghosts—that—in—battle—were—slain,

葬られたる魂ぞや

And—unbury'd—remain—

荒野が原に残られたる(希臘兵の怨靈ぞや)

Inglorious—on—the—plain;

相當の復讐(つと)らざたまへ

Give—the—vengeance—due

(あはむ)此のつとめを

To—the—valiant—crew.

見よ〜如何に亡者等がたゞまじ虚空に投げあげて

Rehold—how—they—toss—their—torches—on—high,

(怒りなる)希臘人の住居のかた(指す)

How—they—point—to—the—Percian—abodes,

怒りなる神々のきらめく社殿(指す)

And—glittering—temples—of—their—hostile—gods.

此の段尤も妙をきはむ。讀みてこゝに至れば作家も、チモシユースも、大王も、テイスも、公卿も、讀者も、皆混合して一となり、彼れ當年の聽客か、我れ當年の聽客か、殆ど辨知する能はざるの感あり。すなはち何者のいふともなく、天外に聲ありて叫んで曰はく

「面白や〜、いで〜更に調をあらため、悲壯の曲を奏し來たれ、激越の調を聴かしめよ。高く〜尙高く、否、尙高き悲壯のあらべを。いざや天地を震撼する彈撥を試みよ。歴山が睡魔を驚破し來たれ、彼れが懶眠の緒を斷てや。雷の如く彈じ來たれ、霹靂の如く彈じ來たれ」と。己にして琴線數彈、梁棟之れが爲にゆすり動く。狂濤の突として寄するが如く、山嶽の俄に崩るゝが如し。其の怖ろしき物音に、驚破や大王驚きさめ、愕然として頭を擡げ、さながら死者の蘇したる如く、且つ呆れ且つ驚き、恍惚として四邊を睨視す。チモシユース斯くと見て、急彈、急撥、千變萬化の奧秘を盡くし、絶壯、絶慘、絶悽、絶槍の調を奏し來たる。すなはち歌うて曰はく

「復讐せよ〜、見よや驟起するフーリーズを

フーリーズは希臘古代の女神三昧より成る、一昧をチシホ子と稱し、一昧をアレクトールと稱し、他の一昧をミギラと稱す、專ら復讐をつかさどる怖ろしき女神也、眼よりは鮮血をまなこに、常に其の髪のうち、に數頭の毒蛇を飼養せり。

見よやそ

が飼へるあまたの毒蛇が鎌首もたげぬたくりて、女神等が頭髮の中に出没し、愀々と聲をなして打鳴くを。且見よ女神が眼中より、ひらめきいづる猛火の光を。見よ、かしこへ群れ來たる世になきたまの一團を。手に手に松炬ふりてらし、むらがり來たる一隊を。嗚呼、あれこそは戰場にて非業の最後を遂げたりし陛下が旗下のつはものぞや、ベルシヤ勢と戦ひて、荒野の露と消えたりし希臘兵の怨靈ぞや、葬られもせて淺ましく、荒野が原に取殘されし希臘兵の怨靈ぞや。あはれ、此の勇敢なるやからの爲に、相當の復讐せよ修羅の妄執を晴らさせよ。見よ、如何にかのともがらが炬火高く投げあげ、怨重なるベルシヤ人が住居の方へ指ざしするか。彼等が仇たる異國の神祇の、金碧燦爛たる社殿を指ざし、頻に炬火打ふるは、疾く燒きうてとの合圖ぞや。疾く燒き拂へ、燒きうちてよと、もだふる勇士の怨靈を、あはれと見ずや、嗚、人々よ」と。

▲「眠の緒」とは形容の詞、無形の眠を有形に取りなせる也。形なき命を魂の緒などいふに同じ、かなたの詩歌には「Death」(死)の緒「罪業の緒」など物したる句もあり、總べて「断離せざる間は連続する傾ある者」には「緒」といふ語を添ふる例なり。▲「hiss」と

は、シウ〜といふ音を發するをいふ、正當に〜は蛇がぬたくる時に自然に發する音にて、鳴く聲にはあらず。▲「ghastly」の語、ところによりては物すごきといはんほどの意ともなる、こゝは「亡者の」といふ意に用ひたり。

公卿等は(此の曲を聴くうちに)勇みたけりて歡呼せり

The princes applaud with a furious joy;

而して大王は一箇の松炬をかきつゝ、只ひとみつきと熱中して

And the king seizes a flambœu with zeal to destroy;

テイス女はさきに立ちて

Thais led the way,

王がふ下きへ道照らさんと

To light him to his prey,

かくて第二のトロイの如く第二のトロイを燒きてけり

And, like another Helen, fired another Troy.

此の樂曲を聴くうちに、諸公卿は狂し、熱し、勇みたちて歡呼す、王はた憤慨して我れかを辨ぜず、我が勇兵等の當の怨敵、只ひとみじきと氣はさかのぼり、ありあふ大炬

をかいつかみて、驟然としてかけ出づれば、テイス女もまた柳眉をさかだて、紅裙を
蹴して庭上に降り、王のさきに立ち炬を援りて道を照らし、ベルシヤ王城の方へと向
かひぬ。傳へきく、三千年の昔、希臘にヘレンといふ絶類絶世の美人ありき、スバル
タ王メテレヤスの妃なり、志かるに魔國小亞細亞なるトロイ王國の王子パリステ
いふ者此の妃と相見て慇懃相通じ、竟にひそかに其の國に奔りけり。メネレ
ヤス大に怒り、希臘列國と議して問罪の師を起し、攻圍十年、竟にトロイ城を焼土
となしにき。彼れも美女の爲に國傾き、此れも美女の爲に城市皆灰。眞に是れ第
二のヘレン、第二のトロイ。

案ずるに、歴山がヘルシヤの首都ヘルセポリスを灰燼となし、は其の嬖姫テイスが
教唆に因れりといふ傳説あり、ドライデンの此の作以來、いよく事實なりとせら
れたれど、所詮は野史氏の架空談なるべし。▲王がゑじきへ道照らさんとは、王
を鷲鳥に比し、王の爲に焼き殺されしヘルシヤ人を餌食に喩へ、ベルシヤ人が住居及び
社殿の方へ行く道々の案内せんとテイス女がたいまつを取りて先にたちしをい
ふ。すなはち王を煽動して都を焼かしめしをいふ。

其の七

VII.

斯うしものはるけきにしに

Thus long ago,

息する風櫃、鳴ることをまた學ばせり其のふるに

Ere heaving bellows—learn'd to—blow,

風琴(といふ音楽器)のいまだ黙してありける、なら

While—organs—yet—were—mute,

チモシユース(といふ名匠)が其の吹きならす聲僅に

Timotheus,—to—his—breathing—Aute

其のかきならす聲のねに

And—sounding—lyre,

人の心を鼓吹して憤怒の情をも起し、やこしき欲をも燃やらしめや

Could—swell—the—soul—to—rage,—or—kindle—soft—desire.

ふくつひに、その風琴の開祖たる

At—last—divine—Cecilia—came,—

ドライデンの樂歌

女聖ミ、リヤニそいでましけれ

Inventress—of—the—vocal—frame;

此の妙音の熱誠者

そのいと尊き智囊を絞り

The—sweet—enthusiast, from—her—sacred—store,

狭まかりし範圍をひろげ

Enlarg'd—the—former—narrow—bounds,

こともけだかき樂のれに度量を加へたまひけり

And—added—length—to—solemn—sounds,

造化の神が本然智

また

未曾知の妙工もて

With—Nature's—mother-wit, and arts—unknown—before.

(あはむ)モモシユースの翁をして賞を(女聖に)譲らしめよ

Let—old—Timothens—yield—the—prize,

まなくば名譽のかんむりを二者平等に分かつしめよ

Or—both—divide—the—crown:

彼れは(いみじや)人間を天つそらまでのぼらせき

He—rais'd—a—mortal—to—the—skies

此れは(たふとや)天つ人をおり來させき)といひつたふ)

She—drew—an—angel—down.

▲ thus(かうしも)は第七節以上全體の物語を總括して「まづこの如く」といへるなれば、下の全文にかゝる副詞と見るべし。▲「息する風櫃」云々は風琴のいまだ工夫せられざりしところといはんほどの心。風琴は風櫃といふ機械の作用にて、人の呼吸するが如く空氣を吞吐し、さて聲をいだすものなり。▲ to his breathing Aute の to は意味の上よりいへば with といふ語とや、同じ to をかゝる意に用ふるは古文法也。▲「やさしき欲」とは惻隱戀愛等の情欲をいふ。▲ inventress とは「女の發明者」といふ義。▲「此の妙音の熱誠者」云々、enthusiast とは「おのが信ずる所に熱狂して死をだに辭せざるが如き者をいふ、主に宗教家などにいふ。▲「尊き知囊」とは、神に事ふる女聖の智慧といふほどの意。▲「狭まかりし範圍」云々とは、音樂の音色に限ありしを、女聖いで、大におしひろげきといふ意。▲「造化の神が本然智」云々とは、造化が賦與せる先天の才智、即ち自然智(天才)と、おのが修鍊より得來たりし前古未曾有の妙工とを凝らして云々の意。▲「賞を女聖に譲らしめよ」とは音樂の妙手たる譽は、老

チモシースといふとも、此の女聖に及ばじの意。▲「さなくば」云々、さなくば二者兄妹たりがたしといはん、何となれば、チモシースは人間をして天上に昇らしむるの妙匠、女聖は人を來降せしむるの靈手といふ意。こはシ、リヤの音楽に聴き惚れて、某といふ天使深く眷戀し、つひに天降りてシ、リヤが許へ忍び通ひきといふ傳説を指す。さてチモシースが人間を昇天せしめきといふは、歴山大王の名を不滅となしぬといふほどのことを、例の張喩して天に昇らせきといふ也。此の結末の一句尤も作家の才を示す。

▲「さなくば」云々、さなくば二者兄妹たりがたしといはん、何となれば、チモシースは人間をして天上に昇らしむるの妙匠、女聖は人を來降せしむるの靈手といふ意。こはシ、リヤの音楽に聴き惚れて、某といふ天使深く眷戀し、つひに天降りてシ、リヤが許へ忍び通ひきといふ傳説を指す。さてチモシースが人間を昇天せしめきといふは、歴山大王の名を不滅となしぬといふほどのことを、例の張喩して天に昇らせきといふ也。此の結末の一句尤も作家の才を示す。

評釋の四

テニソンの抒情詩及び物語歌

英國文學の全盛期は第一をエリザベス女王朝とし、第二をアン女王朝とし、第三をギョットリヤ女王朝となす。此のうち第一は情熱と創新とを以て勝り、第二は詞藻の美と結構の巧とを以て勝り、第三は觀念の深邃を以て勝る、而してテニソンの如きは實に第三者の先驅者の一にして其の代表者たるに耻ぢざるものなり。テニソンは多才多方面にして其の作せし所一様ならず、所謂 *Idyllic Poetry* に屬する山野の風物に關係せる物語歌あれば、幽玄深邃なる哲理に關係せる冥想の作あり、尋常の物語歌もあれば、寫景狀物を主としたる作もあり。又尋常の抒情歌あり、又純然たる劇の詩あり。いづれも刻苦洗鍊の作、就中狀寫諷詠の趣致はゆたかに當世紀を代表するに足れり。但し其の劇の詩はむしろ其の短所を表せるものなり、第一、科介の妙乏しく、第二、篇中の人物に彼のシェイクスピアに見るが如き宛然入神の妙相無し。所詮テニソンは抒情狀景の巨擘兼ねては物語歌の妙手な

テニソンが世間に示したる莊麗なる詩篇はいづれも經營慘憺の結果なりき。英國の詞壇古來名家に富めりと雖も、みづから詩人の天職を意識し、其の天職の神聖なるを信じ、十年一日の如く忠實に熱心に績嚴に眞摯に勇猛精進、片時も其の理想を忘れざりし者は、按ふに五指を屈するに過ぎざるべし。ミルトン、ウォヅワース、アラウニング、此等二三者の名を挙げ、更にテニソンの名を掲げば、また他を擧ぐる能はざらん。テニソンが理想は其の由りて來たる、深くして遠し、二十一歳の詩集に既に其の明瞭なる表白あり、『詩人』及び『詩人の心』の如き是れなり。又ついで世に出だせる其の第二の詩集中にも其の理想の見えたるものあり、『シャロットの妖姬』の如き、『美術殿』の如き、共に肺肝底よりいでたる聲、其の由る所深しといふべし。予は下の評釋に於て二三の小品に就きてテニソンを讀者に紹介し、此の大作家の片影を寫すべし。

テニソンが傳は之れを『英文學史』に譲りて、只少しくいふべき必要あるは彼れと時勢との關係なり。總じて文學は當時を反映するものにはあれど、時勢に後るい

と時勢に併行すると時勢を先導するとの間に、作家の品質の優劣あり。テニソンの如きはもとよりいまだ時勢を先導せし作家とはいひがたければ、之れを豫言者と稱せんは溢美なれど、毎に當時を代表せりといふ稱は、何人も否拒せざる所ならん。按ずるに、彼れが作には、毎に宗教上、道德上、社會上すべて此等の問題に關する當時の進歩せる輿論の影映れり。勿論嚴密にいふときは、彼れが歌へる所は必しも當年最勝の思想にはあらず、最も創新なる思索、最も進歩せる思想にはあらず、而も其の作に見ゆる所は當時の眞相を反射せるもの、最も聰明なる英國人全體の最近年に於ける修鍊と經驗との結果、苟も當代の聰明者が自家の影なりとして首肯せざるを得ざりし者なり。これ豈時勢を代表せる者にあらざらんや。或は晩年のテニソンを貶する者あり、曰はく彼れは最早英人の理想を歌ふ能はずと、夫れ或は然りしならん。さはれ晩年のテニソンが時勢に後れしを實とするも、そは功成り名遂げて簀を易へんとせしころのテニソンなり、其の壯時のテニソンはたとへ最も進歩せる思想に副ふ能はざりしも、たしかに新しき思想の謳歌者にして、時には新理想の鼓吹者なりき。例へば、千八百四十二年にいだし、『ロクスレー、ホー

ル』を見よ彼れは人物の口を假りて、自家の感慨の影を抒らして更に轉じて將來の希望を歌へり、是れ明かに時の改進黨の希望なりき、猶後年に及び『六十年後のロクスレー・ホール』を著して時の保守派が抱ける思想と疑惑とを歌へるがごとし。或はまた『Princess』を見よ、これはた當時の新問題たる女權論の旨に密接せる者なり。若しくは『美術殿』の旨を味へ、是れはこれ當代の一弊たりし出世間熱の誤謬を諷刺し、暗に眞善美の相關を説き世間と出世間との關係を歌へるものなり。『美術殿』の美術に於けるは『St. Simeon Stylites』の宗教上の僻見に於けるが如し、後者は主我的枯禪主義の弊を難じ、世間義務の重んずべきを説けり。いづれもテニソンが理想の影にしてまた當代の思想の粹なり。要するに、テニソンが終生の理想は天法を畏敬するにあり、精進を推奨するにあり、秩序を紊さずして進歩するにあり、義理を重んじ、つゝも人情を重んじ、平等を愛し、つゝも差別を愛し、出世間に遊びつゝも現世間に處するにあり。其の平素の行實も此の理想に副へりしに似たり、テニソンの如きは、思ふに詩人中の君子人たるに近かるべし。

予は此の評釋の緒言中に彼れが全豹を詳述するの餘地を得ざれば、まばらく評論

をこゝに止め、たゞちに訓釋に着手すべし。尙くはしきことは『英文學史』につきて見るべし、以上はたゞ彼れが片影を紹介せるのみ。

妖姫のシャロット

(The) Lady of Shalott.

『シャロットの妖姫』は『Donna di Scalotta』と題せる伊太利小説より思ひつきて案を構へたるものと聞こゆ。ふと見れば、何のことも無き一小話に類するものなり。其の筋の要をいへば、古英國の英雄王と聞こえしアーサーといふ君がカメラットの王城に在しけるころ、其の王城へ流るゝ一道の小川あり、其の川上に一の小島ありてシャロットの島といへり。此の島の樓上に只ひとりの妖姫ありて、常にあやしき織物をす、然るに宿世の業因ありて、憫むべし此の姫は、終生此の樓に幽せられ、曾て他にいづるを許されざるのみか、其が面前に据ゑられたる一大明鏡に映じ來たる山河、

草木花鳥舟車人獸の外は、絶えて他を見るを許されず、若しかりそめにも機織る手をとめて、樓外の景物を見ることあらば、不測の災厄を蒙るべしといふ神明のいましめあるが爲に、姫はとこしなへに鏡にのみむかひ、山川、田野をそびらにし、只管織物にいそしむものから、未來に何の望もなく、樂しみも無く、恐れも無く、また存ふる甲斐も無く、殆ど死にたる身と異なることなし。さるほどに、ある日のことなり、アーサアの君に仕ふる武士にランスロットといふ好丈夫あり、甲冑はなやかに取りよろうて、背後の岸頭をよぎりけり。さて其の姿の鏡の面に映るを見るや、さしも日ごろは謹慎なりし心も戀風にゆらぎそめて、物織る手をとめて、つとふりかへり見るとそのまゝ、鏡は微塵に碎け散りて、不祥の兆^{あき}歴然たりけり。姫は宿業のまぬかれがたきを悟り、竟にみづから死を決して、さゝやかなる舟に打乗り、やがて流れ／＼てカメロットの城下にいたり、そこに息をひきとりけりといふ、是れ此の篇の大要なり。されども深く其の言外に立入りて作の真相を窺ふときは、所謂シャロットの妖姫とは天地の美を歌ふ詩人にして、荒唐奇怪なる篇中の事件はすべて世間界即ち詩的本領と、俗界即ち世間との關係、矛盾衝突及び其の悲むべき結果等を

暗示諷諭せるに外ならずと見ゆ、即ちテニソンが觀念の影なり。章を分かつこと四、其の一に於てはまづシャロット島の四圍の光景を叙寫し來たる。

其の一

Part I.

河の兩邊に

横はる

On—either—side—the—river lie

大麥及びライ麥の長むなる畑地

Long—fields—of—barley—and—of—rye,

此の畑 岡を覆ひ

又 空に接す

That—clothe—the—world—and meet—the—sky;

さて 此の畑を貫いて

道は 走る

And thro'—the—field the—road—runs—by

多樓臺のカメロット城

To—many—tower'd—Camelot;

テニソンの小説

さへ 上に また 下に 人は行く
And up—and—down the—people—go,

うちながめつゝ 蓮咲くあたりを
Gazing where—the—lilies—blow

島根に添うて かなた 下手の
Round—an—*island* there—below,

シャロットの島(トイン)
The—*island*—of—Shalott.

是れ「其の一」中の第一解なり。律は昂起四歩格即ちアイヤムビック、テトラミータアにして首の四行は相つぎて押韻し、第五行にいたりて更に律を約して調をあらため、更に又一轉して低起格を併用し、巧に次に三行を押韻し、尾におよびて第五行と和韻す。昂起格と低起格とのことは『英文學史』チローサーの條下に畧説し置きたれば参照すべし。所詮律格及び風調の事は口授するに易く、筆談し難し、否、なし難きにあらず、解せしめ難し、又管々しく煩はし、故に予はすべて以下の評釋にては只意義と風韻とのみを談じ、律呂の説明には及ばざるべし。讀者此れを諒せられよ。

前に訓じたる一解は、殆どおのづから明かにて釋を要すべき節すくなし。▲「多樓臺」の訓はやゝ妥當を缺く「城樓」など譯すべくや、我が國にいへる城櫓やぐらやうのものゝあまた巍々として聳えたるをいふ也。▲すべてシャロット島外の風景を簡叙す。寓意の上よりいへば世間日常の景况、來往する行客は世間尋常の俗衆なり。

垂柳は しろみ 白楊は 頭ぶ

Willows—whiten, aspens—quiver,

そよ風は 黒みくそよぐ

Little—breezes dusk—and—shiver

ソよ風なくに流れるへ河浪のうはよこ

Thro'—the—wave—that—runs—for—ever

河心の島根に添つて

By—the—*island*—in—the—river

流れくへて カメロットく

Flowing—down to—Camelot.

四のしらけたる城櫓や 四の白らたる高臺と

Four—gray—walls, and—four—gray—towers,

シャロットの小唄

一帯の花野見おろし

Overlook—a space—of—flowers,

此の寂寥たる島が根は 蔵すなり

(And) the—silent—isle—imbowers

彼のシヤロットの妖しの姫を

The—Lady—of—Shalott.

原詞に就きて律調の波瀾を味ふべし。前解は昂起格をもてはじまり、此れは却りて低起格をもて起こる。かゝるたぐひの作は、單に意義のみを讀みては旨味のなかばを没了すべし、韻語の佳什の譯すべからざるは此の故なり。此の段はた意義明白なり、特に譯すべき要あるを見ず。只一句「黒みてそよぐ」とあるは國文の許さざる所ならん。原意は河浪の風にもまれて黒みわたれるをいふ。浪を賓とし風を主としたるにちのづから一種の情趣あり、是れ亦譯するに術なし。

岸の ほとりを きたれ柳にうゝまらるゝ

By—the—margin, willow-veil'd,

重げなる大船ぞすへる 牽かれて

Slide—the—heavy—barges trail'd

徐歩の馬に かつ 呼びよめる人もなへ

By—slow—horses; and unhail'd

此の船は 飛ぶぞや 綾の帆あげて

The—shallop Afteth silken-sail'd

走つし かもろてん

Skimming—down to—Camelot:

さかばあね 誰れもは見つる 彼の姫の其の手をば打つるを

But who—hath—seen her—wave—her—hand?

若しくは かの窓の下に (誰が) 見つる 立し彼れを

Or at—the—casement seen her—stand?

はた 彼れはしも知らるゝや なつて此のあたりの人に

Or is—she—known in—all—the—land,

彼のシヤロットの妖しの姫は

The—Lady—of—Shalott?

▲「重げなる大船」とは物あまた積み載せたる船をいふ。按ふに、カメロットに在城せ
テニソンの小品

るアーサアの用船か又は乗客貨物を送る船なるべし。▲「すべる」とは船の下りゆく形容也。▲「よびかくる人もなく」とは日々に船は川下へくだりゆけど、彼の姫のたちいで、之れを見る影もなく、また人のひとりだに此の船に物いひかくることなしとの意。▲船も寂として下り、人も寂として在り、彼れ此れ相關する所なし。彼れは現世間、此れは出世間境。

ひとり只 夢を刈る男らが 朝まだき夢を刈りて

Only reapers, reaping—early

髻のひし大麥のうらに

In—among—the—bearded—barley,

歌うたふ聲を聞くとぞ そはいきくとひらくなり

Hear—a—song that—echoes—cheerly

清けく流れり流れのくかななる河邊より

From—the—river—winding—clearly,

多樓臺のカメロット

Down—to—tower'd—Camelot:

うくて 夜々の月の下に 疲れたる畑の男が

And by—the—moon the—reaper—weary,

束れたる刈穂積みつゝ 風通ふ高き岡に

Piling—sheaves in—uplands—airy,

其の耳をすましてきこへ ひそひそにひびくめり これぞかのシャロットの

Listening, whispers 'Tis—the—fairy—

あやこの姫

Lady—of—shalott.

▲「髻のひし大麥」とは麥の穂の生ひのびたるを髻の延びたるに喩へていふ也。
▲「clearly」といふ語今は「快活に」「樂しげに」など譯するを常とすれど、古くは「いき〜」と「さちましく」などいふ義に用ひたり、こゝは briskly の義なれば本譯の如く物しつ。
▲以上本尊たる妖姫が周邊を叙せり、以下妖姫が平生の起居におよぶ。

其の二

Part II.

テニソンの小説

そこに 彼の姫は

よもぎ書

There she (weaves) by—night—and—day

くしく怪しき綾を織る はつやかなる色したる

A—magic—web of—colours—gay.

兼ねても彼れは聞きつ そこともなくちよちよく聲を

She—has—heard a—whisper—say,

身の上にもなるいひぢらんと 若し言ひ手をなとんぢぢ

A—curse—is—on—her if—she—stay

あなたカメロットを見ぢらんとつ

To—look—down—to—Camelot.

彼れは知らず

そのまぢつひのいひならんものかをも

She—knows—not what—the—curse—may—be,

それば

たのぢぢも綾織りつ

And—so (she) weaves—steadily,—

ほかの心絶えてなし

(And) little—other—care—hath (she),

此のシヤロットの妖しの姫は

The—Lady—of—Shalott.

▲「奇しく怪しき綾を織るとは暗に靈妙なる詩歌又は他の美術を作するを指せるならん。▲「美術は清淨潔白なる出世間の技なれば些も俗感の伴ふをゆるさず、塵俗の世間を樂欲するの念いさゝかも添ふときは美術はたちまち穢き物となり、作家また禍を受くべし、ゆめ世間に執着の目を注ぐな。是れそこともなくさゝやく聲の美術家に警告する所なり。すなはち「カメロット城は俗世間を代表せるなり。而して妖姫即ち美術家は其の心清淨無邪もとよりいまだ其の災厄の如何ならんをも知らねば、只管織物を織るの外絶えて餘念あることなし、是れ美術家か初一念にしてすなはち其の本相なり。たゞ、しかく釋するは、蓋し、言外の隱微といふもの、かゝる穿鑿を立離れて別に此の詩の旨を味はざるべからず。

その かのまぢつひのいひならんものかをも

And moving thro'—a—mirror—clear

年中つれに

其が前にまはる

(That) hangs—before—her—all—the—year,

カメロットの小屋

くさがしき浮世の影や ちかほる

Shadows—of—the—world appear.

そらに 眼に見る ちかほるか大路をば

There she—sees the—highway—near

カメロットく うれけれ

Winding—down—to—Camelot :

そらに 河水も 渦がかりかかまへ

There the—river eddy—whirls,

又 そらに ちかへれる村のなのら

And there the—surly—village-churls,

きぬ赤き市の乙女

(And) the—red—cloaks—of—market—girls,

この島よ

此の島よ

Pass—onward from—Shalott.

▲妖姫の面前に終年懸けられたる一大明鏡あり、窓外なる山川艸木はいふに及ばず彼なたの岸頭に往來するありとある世人の影は皆まどくとうつりあらはる。

所謂明鏡は詩人美術家が想像の鏡なるべし。▲「いそがしき浮世の影」原詞には「忙しき」といふ語はなければ、movingあるによりて繁き來往の義見えれば、かくは譯しつ。▲「うねくれる」とは大路の曲折してカメロット城のかたへ通じたるをいふ。▲「あらくれる」とは粗野といはんほどの義。▲「きぬ赤き市の乙女」とは赤き色の羽織やうのもの被たる少女の物賣をいふ。此の島にてつくりたるを賣らんために又はかなたにて買ひだしせん爲に市へゆくなり。すべて叙寫の妙は一々評するに違なければ省く、宜しく原詞を咀嚼し、其の旨のめでたきを知るべし。

あるときば うれしげなる乙女子の一むね

Sometimes a—troop—of—damsels—glad,

(わしは)とちちらに駒あめする老法師

An—abbot—on—an—ambling—pad,

あるときば 羊飼ふちかたのむら

Sometimes a—curly—shepherd—lad,

カニンマンの小唄

若しくは 長髪の小殿原 くれなゐのきぬ着たる

Or long-hair'd—page in—erimson—clad,

通じやく(影でうしろ)多機臺のカメロット

Goes—by to—tower'd—Camelot;

あるはまた 其の習はず鏡のうしろ

And—sometimes thro'—the—mirror—blue

ものふぞ駒に乗りくる ふたりまたふたり

The—knights—come—riding two—and—two:

アハレまたひとりだに眞心を傾けて此の姫にかしづく武士もなし

She—hath—no—loyal—knight—and—true,

此のシャロットの しの姫に

The—Lady—of—Shalott.

鏡面にうつり來たる浮世の現象を叙するに、まづ無邪快活なる少女の一群を以てし次には嚴肅なる老法師を點出し、更に里びたる羊かひのわらは、又花やかなる殿上人、やがて一轉して本篇の骨子たる美丈夫の上に及ばんために、三々伍々騎して來たる武士の^{ものぶ}とに及ぶ。▲「長髪の小殿原」とはカメロットの王城に奉仕せるわらは

小姓の謂なり。むかしは長髪をたくはふるは殿上人の特權なりき。▲「アハレまたひとりだに」云々はシャロットの姫に意中の人無きをいふ。西洋封建のむかしには東洋に例なき一種の習慣ありて、苟も當時の眞武士たらんものは必ず一貴女を選びて其の女君とのがむるの例なりき。貴女もまたかゝる武士を得ることを譽とせり。▲knightとは勳爵ある武士の謂なれば、予は之れを士爵と譯す。正當に謂へば貴女と士爵との關係は主と従との關係に外ならねど、後には人情の自然によりて此の主従の關係のうちより切なる戀愛の成りたちしこと間々あり、隨うて貴女は士の意中の人士は貴女の情人たりし趣あり。こゝにシャロットの姫をあはれみて未だかしづきのものゝふなしといふは其の意中の人の無きを謂ふ也。士爵と貴女との關係は泰西の中古史に通じたる人の熟知する所なれど、不案内の人は予が嘗て『文武叢誌』といふ雜誌に「西洋中古の武士道」と題して叙説せるを見るべし。

さばれ 姫はいつも〜綾ざめを織ることを樂とす

But in—her—web—she—still—delights

テニソンの小説

鏡なる怪しの影を織りいだすことな

To—weave—the—mirror's—magic—sights,

けだしとすればは ちかご夜半に

For often thro'—the—silent—nights

亡き人の野へ送りする行列 喪の服に烏毛を飾り松明をともしつられ

A—funeral, with—plumes—and—lights,—

ちかごとぶらひの樂を奏しカメラロットとしてれりゆきけり

And—music, went—to—Camelot:

又は 夕月の高うなれるころ

Or when—the—moon—was—overhead,

まだきのふけふつれそひし若き男女のむつやに打語りつゝ來たりけり

Came—two—young—lovers—lately—wed;

アハハ倦みはてつ影見ると

'I—am—half-sick—of—shadows,' said—

妖しの姫はこくつげり

The—Lady—of—Shalott.

志かはあれど一心不亂に織物に身を委ねたるシャロットの妖姫は、戀の何たるかも

知らねばこそ、鏡に映る影を種にくさくの世のさまを綾のきぬに織りいだし、志ばらくも休むことなく、絶えて餘念なきものゝ如し。蓋し此の不可思議なる鏡にはあらゆる人世の影はうつれり、あはれなる野邊送りの悲しき影も、むつまじき男女が月下の影も、およそ人間の悲喜哀歡、物として映らぬはなかりけり。按ふに不思議なる魔鏡は詩人及び美術家が想像の魔力、妖姫はすなはち醇乎たる美術家、綾きぬはすなはち詩歌繪畫。

夫れ美術家は超然として塵欲の外に立ち、常に想像の世界に住し、自在に人生の苦樂を冥想し、自在に人生の悲喜を描畫し、以て至淨の悅樂を享受す、須からく他に求むる所なかるべきなり。志かれども人はもと木石にあらず、多感多情の美術家、いつまでかよく超然たるを得ん。彼れが出世間の悅樂は、動もすれば他の世間的悅樂を羨み、此れを棄て、彼れを取らんとす。是れを美術家が最も危険の試験期とす。シャロットの妖姫の如きは今方に此の危険の淵に臨みたり。彼れは月下の男女を見、其のむつまじきさゝめごとを聞き、我れまらず艶羨の心を生ぜり、されどみづからは夢にだに羨む心ありと意識せぬなり。すなはち獨語して曰はく、あはれ

倦み果てつ影を見るもと。彼れはいまだ自家を知らず、自家の本心を會せざるなり、塵欲肉欲などいふ怖ろしき悪魔がさりげなき假面をかぶりてひそかに忍びよりつゝあるに氣附かざるなり、危いかな。

其の三

Part III.

矢ころばかりに 姫が住むたかどの軒端より

A—bow-shot from—her—bow—reaves,

彼の人は騎馬にてゆきぬ 大麥の穂の間を

He—rode between—the—barley—sheaves,

日の光 きはやくも葉越しにぞつ

The—sun came—dazzling—thro—the—leaves,

やぶるやぶ 黄銅の胸當の上に

And flamed upon—the—brazen—greaves

勇敢なるキア、ランスロットが(胸當の上に)

Of—bold—Sir—Lancelot.

此の節に至りてはじめて男主人公ランスロットを點出し來たる。彼の人とまづほかに指し、やがてサア、ランスロットと明叙し、ついで其が携へたる楯に及ぶ。

一個の赤十字架のもの、常に 一佳人(の脚下)に

A—red-cross—knight for—ever kneel'd—

跪坐せり 彼れが持てる楯(の面)に

To—a—lady—in—his—shield,

その楯 燦爛たり 黄ばめる畑に映りて

That sparkled on—the—yellow—field,

はるかなるシヤロットの島外に

Beside—remote—Shalott.

ランスロットが携へたる燦爛たる楯の面に赤十字架を徽章とせる一個の武士の一貴嬢の足下に跪けるかたをゑがきたり、(赤十字架は士爵が本來の標章)。蓋し神明を崇尊し婦人を敬愛するの意を示したる畫様なり。すなはち暗に此の楯の持主ランスロットが平生の主義を標示す。さて此の金銀を鑲めたる楯の其の背後な

る黄雲に映じて燦爛的際たる風情いゝ簡に寫されたり。前の節の青白き夜景と此のはてやかなる晝の景と相對照して一段の趣致あり。

珠玉を鑲めたる手づなは

くまもなくきらめきぬ

The—gemmy—bridle gliter'd—free,

とある連なれる星のやうに

我れ人の

Like—to—some—branch—of—stars we—see

懸るを見る 彼の黄金なす天の河に

Hung—in—the—golden—Galaxy.

此の手綱につけたる鈴 心浮き立つやう鳴りのしきり

The—bridle—bells rang—merrily

カメロットへ志して彼れが駒を進めけるとぞ

As—he—rode—down—to—Camelot:

▲「とあるつらなれる星」とは銀河はつらなれる星の集合より成れるなれば、其のうちの一つらに似たりとの意。原文には「一枝とあれど一連の義なり。支那にては銀河、銀漢などいへるをこゝに「黄金なす」といへるは詩人の形容なり、實にはたがへり。

ど銀といふよりも一段きはやかなり。▲As he rode の as は「何々するにつれて」などいふ時のつれての義あり、こゝには「時に」と訓ませたれど處によりては「まさに」「隨うて」「何々せしかば」「何々するからに」など便宜の訓を施すも可なり。こゝはランスロットが駒を進むるにつれて、手綱の鈴樂しく面白く鳴りひびくといふほどの意なり。

また

其の盛飾せる革帶よりは

つるがれて

And from—his—blazon'd—baldric slung

一のいみじき白がねの角ぶえが

懸りたる

A—mighty—silver—buckle hung

かくて駒の進むにつれて物の具は箭々として鳴りわたりの

And as—he—rode his—armour—rang

あなたシヤロットの島邊かしら

Beside—remote—Shalott.

訓はすべて便宜に志たがひて物したれば、同じ原語にありながら前後訓を異にせるものあり、意味を咀嚼して訓讀の鹽梅をさとりべし。例へば、remote は「はるかかな

る又は「隔たれる」といふが本義なれど、こゝには「かなた」と訓じ、前に「島外」と訓ませし beside をこゝにては「島邊まで」と訓めるなど。▲mighty は俗語にていはゞ「スバラシキ」といはんほどの義を含めり、大なるの義にはあらず。

此の段及び次の段は筆を極めてランスロットが盛装と其の風丰の美とを状叙す。只目に見て立派なる由をほのめかせるのみならず、耳にも美しき銀鈴の音、鏘々たる甲冑の響、文外に含ませたる蹄の音、馬の嘶など、くさくさくと物の音をも叙しいだしてまづ讀者の心を動かし、竟に妖姫をも動かし來たる。筆簡にして老成。

なごて 青空の雲もなく晴れたる日に

All in the blue—unclouded—weather

まげく珠玉もて飾られて輝けり 鞍のなめし革は

Thick-jewell'd shone the—saddle-leather.

兜も兜の羽根飾も

The—helmet—and—the—helmet-feather

炎々たり 合して一團の猛火の如く

Burn'd like one—burning—flame—together,

カメロットへ志して彼れか駒を進めけるとき

As—he—rode—down—to—Camelot.

▲*is* は一字一句には係らて此の段悉皆に係る、俗語に碎きて説かば、すべて此の事たるや青天白日最もうらくと晴れ渡りたる日に起こりたる事なり、されば日光と盛装とが相映じて其のきはやかさもまた一しほなりといはんほどの意なるべし。▲「鞍のなめし革とは柔革もて被ひたる鞍のと也。▲「炎々たり」云々とあるは、疋の鳥毛つきたる金色燦爛たる兜の眞晝の日光に反射して遠目には猛火の燃ゆるが如く見ゆるをいふ。

譬へば折々に 彼の紫だつ夜半の雲を破りて

As often thro'—the—purple—night,

燦然たる群星底に

Below—the—starry—clusters—bright,

さる長髯のひかりもの、 ささやく尾を長く牽きて

Some—bearded—meteor, trailing—light,

テニソンの小品

此の孤島頭を過ぐるに似たり
Moves—over—still—Shalott.

陰鬱静寂なるは島内の景致、燦爛目を奪ふは島外の風物、就中ランスロットの盛装、此の二者の對照を以て彗星の突として星づき夜に飛び過ぐるに喩ふ、着想既に妙詞調更に妙、これまた到底訓じがたきもの。▲「さる長髯のひかり物」とは彗星をいふ。▲ trailing は尾を牽くといふ義。▲ この as は「猶」の字にあたるまづ猶と訓み後にごとしと訓み戻りてもよし。▲ still は「寂寞」の義、こゝは孤と假譯せり。

彼れが廣やかなる麗しき額は

日の光に

かつやどり

His—broad—clear—brow in—sunlight glow'd;

美しく磨きたる蹄もて

彼れが軍まきは 踏歩しめちり

On—burnish'd—hooves his—war-horse trode;

彼れが兜の下よりは

石すみにもまがふ黒きまげれ毛

From—underneath—his—helmet flow'd

房々と垂れがへり流るゝ如くゆるめきむ 其の駒の進むにつれて

His—coal-black—curls as—on—he—rode,

カメロットとておしてのく其の駒のすゝむにつれて
As—he—rode—down—to—Camelot.

岸より

また 河より

From—the—bank and from—the—river,

其の人の面影はひらめきて映りけり 水晶の鏡のうちに

He flash'd into—crystal—mirror,

テラ リラと 河邊にそそり

'Tirra lirra,' by—the—river

サア、ランスロットは歌ひけり

Sang—Sir—Lancelot.

▲「廣やかなる額」は美丈夫の相也、かなたにては男女とも額の高くして廣きを尊ぶ。▲「踏歩しゆきぬ」の原語 trode は tread の過去にて昂然として歩行するの意あり、今好譯語を得ず。▲「石すみにまがふ」云々、彼なたにては黒きを石炭に喩ふること珍らしからず、和漢の文章に「漆黒」とあると同じ心と知るべし。▲「岸よりも又河よりも」とあるは、ランスロットの影の岸よりすぐに鏡に映れる外に河にうつりたる影の更

にまた鏡に映るの義、實際はあるまじきことのやうにも思はるれど、こゝは妖姫が心の動かざるを得ざりし因縁を著くせん爲に、間接にも又直接にも誘惑物の襲來せるさまをほのめかしたるならん。▲例の寓意の方面より臆測の解を下さば、直に映る影は自家の想像に浮ぶところ即ち我が直覺によりて見いだしたる浮世の姿、水面より反映せる影は他人が想像に浮びたるを更にまた想像したるたぐひにて、喩へば古詩古歌などに寫せるを讀みて浮世の有様を想像し、かくもあるべしと思ふのたぐひか。そはとまれ、さらでも月下に逍遙する情夫、情婦の影を見てより、心漸く動きそめて、織物織ることに倦みたりし妖姫は、此の俊爽なる美丈夫の影を見て心恍惚と我れを忘れ、思慕の情禁ずる能はず、折しもあれかなたの岸にいと朗かなる聲音してテラリラと誦するものあり。嗚呼、これ此の影の主の聲か。目既に美しき姿を見、耳また此の美なる聲を聞く、姫が心動いて更に動かざるを得んや。(「テラリラ」とは歌うたふ節なり意義なし) すなはち姫は突として起ち

姫は 織物を打棄つ 姫は 機をも打棄つ

She left—the web, she left—the loom,

姫は 居間を三めしめみ

She made—three—paces—thro—the—room,

咲く蓮の花を見

(She) saw—the—water-lily—bloom,

兎をも羽根をも見

(She) saw—the—helmet—(and)—the—plume,

姫はカメロットを見わたした

She—look'd—down—to—Camelot.

突然織物はひるがへり糸は入散した

Out—flew—the—web—(and)—floated—wide;

悠然として明鏡はまっただなを、より割れてけり

The—mirror—crack'd—from—side—to—side;

天爵我が身にくだりぬ

'The—curse—is—come—upon—me,' cried—

シャロットの姫は

The—Lady—of—Shalott.

此の段殆ど解釋すべきこともなし。

其の四
Part IV.

吹きかきさらしうたぐひのなご風じ
 In—the stormy—east-wind—straining,
 青ぐんく黄はあもる緑は 良ふふじに葉落ら瘦せゆへ
 The—pale—yellow—woods were—waning,
 はら廣き川の浪は 其の社じ 葉じへべたぢ
 The—broad—stream in—his—banks complaining,
 碧はらふ波うたぐひしやわがふへ極はつるんへ
 Heavily—the—low—sky—raining
 冬霧のハスロマンじ
 Over—tower'd—Camelot;
 姫は高みのをならちり ぞたはたを柳のふちじ
 Down—she—came—and found—a—boat—
 ままなへたシムくもをちかき良ふなうへ
 Beneath—a—willow—left—afloat,

カハ 其の舟の舳のめぐりに 姫は書きぬ
 And round—about—the—prow she—wrote
 ハスロマンの囀頭じ

The—Lady—of—Shalott.

カハ 蒼茫たる川のあなた(カメロットの方)を
 And down—the—river's—dim—expanse—
 あらかしめおのがわとほひを知悉せるある膽太き豫言者の
 Like—some—bold—seer—in—a—trance,
 カハ 観念せる時のやうじ
 Seeing—all—his—own—mischance—
 玻璃の如き面地じ
 With—a—glassy—countenance
 姫はカメロットの方を見つめち
 Did—she—look—to—Camelot.
 カハ 日のへだなるかに
 And at—the—closing—of—the—day
 カシマンのたぢ

つなげるくさりを解きて姫は(舟底に)打臥しぬ
 She—loosed—the—chain,—and—down—she—lay;

滔々たる河水は姫を載せてはるゝあなたへと流れ去りぬ

The—broad—stream—bore—her—far—away,

此のシャロットの姫を(載せし)

The—Lady—of—Shalott.

妖姫死を決して舟に上る、心はひとへにランスロットに集る、恍としてカメロットを遠望するのみ、また些の他念なし。戀の魔力の大なるを見るべし。此の段寓意の方面より見れば、恐るべき煩惱の明なる眞如を蝕せるため、神聖なる天職中道に破れ、忽然として悲境に墜落せるものとも見るべし、更に悉しくいへば、我が理想中の幻影を何等の手續をも履むことなくして直に實現せんと欲したるによりて、自招自致したるの悲劇とも見るべし。然れども、あながち此の寓意に泥むべからず、戀の魔力といふことを眼目なりと見て此の詩を味ふも頗る可也。蓋し春女の吉士を思ふは造化必然の妙作用にして、水火も之れを禁むる能はず、死もまた之れを威喝する能はず、女をして甘じて死地に就かしむといふ、是れ此の篇の一面の想なり。

打臥して 雪よりも白き衣をきて

Lying, robed—in—snowy—white

右に左にのたくとひるがくる

(That)—loosely—flew—to—left—and—right—

さふさふに散りかゝる木の葉のまたに

The—leaves—upon—her—falling—light—

あわがしき夜宴のまなかに

Thro'—the—noises—of—the—night

姫はカメロットの舟にのりて

She—floated—down—to—Camelot:

あつて 姫が(乗れる)舟の垂柳の岡にそひ夢畑の間を經て

And—as—the—boat—head—wound—along

あつて 舟の頭を沿へて

The—willow—hills—and—fields—among,

城内の人々は いまはの歌をうたふ姫をきく

They heard—her—singing—her—last—song,

テニソンの小説

(歌うたふ) シャロットの姫を
The Lady of Shalott.

聽きぬ 神の徳たゝふる歌を かなしうまたふとばなる

Heard (a) carol, mournful, holy,

(by) (a) 高へ(後には)低く歌はれぬ(歌を)

Chanted—loudly,—chanted—lowly,

しるに由はせりしるに由はせり

Till—her—blood—was—frozen—slowly,

多樓臺のカメロットながめしめし姫が目は

And—her—eyes—were—darken'd—wholly,—

ハッとくへ昏らなりになつ

Turn'd—to—tower'd—Camelot;

▲「悉皆昏らなりにけり」とは「全く見えざる」の意。▲歌ひながら死にゆくさまの如何に美しきぞ、詩人は醜を美にすとはこゝらの筆つきをいふなるべし。

蓋し流れくへ屈やこせくこ

For—ere—she—reach'd—upon—the—tide

水涯なる第一屋に

The—first—house—by—the—water-side,

うまはの歌をうたひしうまはの姫はみまかりけり

Singing—in—her—song—she—died,

カメロットの塔に

The—Lady—of—Shalott.

▲「とゞく」とは「あり着く」の意。▲upon the tideとは潮流に押し流されての意。▲「水涯なる第一屋とはカメロット市に着くや否」といふ意を目に見るやうにいひあらはせるなり、水に臨める町はづれの家屋とす意。

高きノ下を 露臺の下を

Under—tower and balcony,

園のむすしのぼとちを 長廊のぼとちを

By—garden-wall and gallery,

かたむきにやめく姿となりてまかばねはたしやらの

A—gleaming—shape—she—floated—by,

カニンハンの心

土氣色に青ざりて 高き家々のひまを

Dead-pale between—houses—high,

寂然と音もたてカメロットの城内まで

Silent—into—Camelot.

うづまきの波戸に 皆入

Out—upon—the—wharfs—they—came,

ものふも 市人も あて人も 女房も

Knight—and—burgher, lord—and—dame,

ふくへ船首に皆讀みり姫が名を

And—round—the—prow—they—read—her—name,

シヤロットの姫(とこと)

The Lady of Shalott.

▲「かすかにきらめく姿」とはたそがれの星あかりに姫が白衣のきらめくをいふ。
▲此のあたりの詞調を味へば、水のまゝに流れゆく舟の姿見ゆるやうなり、高樓櫓
比せるひま／＼を物まづかに流るゝ川の、息たえしなきがらを寂然と載せてゆく
さま、あはれにもまた物淋し。▲「波戸」とは波戸場といふに同じ。▲dameとは高貴

の女性をいふ、官女などを指す、假に「女房」と譯しつ。▲round the prowとは「舟首の周
邊」の意、すなはち舟の胸ともいふべきあたり、に姫が名を一行に横書せるを指す、
roundの語、今良き訓を得ず。

これはたそ かくんにはあるは何ぞ

Who—is—this? And—what—is—here?

ふくへ程近きともしびのふんやける館に

And—in—the—lighted—palace—near

あて人等の夜遊のさわぎも歌みつ

Died—the—sound—of—royal—cheer;

人々はせぢて十字を切りつ

And—they—crossed—themselves—for—fear,

カメロットなるものふは昔

All—the—knights—at—Camelot;

まきはあれでランズロットはまばし沈吟し

But—Lancelot—mused—a—little—space;

テニマンの小唄

いひけらく 此のをみなをつらうたし

He—said, 'She—has—a—lovely—face;

神よ大慈心もて此の女子にめぐみを垂れてよ

God—in—his—mercy—lend—her—grace,

此のシャロットの姫ごと

The—Lady—of—Shalott'

▲「これはたそ云々」とは、市人等が舟をみつけたる時の言葉ならんを、突然借り來たりて地の文(作者が語)とまじへつらねたる、面白し、但しかゝる筆つきは彼なたの詩文には常に見る所也。▲「ともしびのかいやる館」とは、案ずるにアーサーの王宮也。▲「あて人等が夜遊」とは舞踏會などにや。▲「cheer」とは正當にいへば宴樂といふ意也。又royalも王宮のと訓ずるかた原義に適へり。▲忌はしき妖婦の屍骸が流れ寄りたりとき、人々皆悚然とおそれおのゝき、今までざんざめきたりし歌吹海も、忽然として聲を歛め、四下閑として、人籟の頓に死に果てたる索然たる趣、いとよくdiedといふ一語に見えたり。▲「人々おどて十字を切りぬ」とは、魔を攘ふまじなひ

のたぐひ也、十字を我が指もて我が躰に書する眞似する也、九字を切るたぐひと知るべし。十字は例の十字架に因める也。▲妖姫をおそれ、猛きものゝふだに物いみをするは上代の手ぶり也、譬へば維新前の國俗が、牛を食ふとき、て外國人を忌み嫌ひしと同理なり、我が身の穢れんを怖るゝなり。あはれむべしシャロットの姫は勢ひかくの如くなれば、志かばねとなりてだに蛇蝎の如く忌まれ、誰れひとり葬りえさせんといふものもなし。全くうつゝ世とかけはなれたる生活せし報まるべく、天地廣しと雖も、唯ひとり知已もなく、同感の友もなし。只管美の爲にのみ美を愛して、些も人生の利害を考へざる、美術家の到底かゝる業果をまぬがれざる由は、テニソンが常に信念せりし所にや。『Palace of Art』『美術殿』のうちにも同じ筋の思想見えたり。さはれまごゝろの力ばかり偉なるはなし、妖姫が身を棄てゝも、ランスロットを慕ひし赤きこゝろは、流石にかなたにも通せりとおぼしく、ランスロットが追吊の一言は妖姫をして地下に冥せしむるに足る。此の靈妙不思議の感應は、眞個不可言、不可説の妙境也、個人と個人との上にもいふべく、詩歌、美術の上にもいふべし。蓋し無上無等々の神呪は至誠也、至誠の前

には魔障なく、至誠の前には距離なし、至誠は直に其の的を貫く、正に是れ説明をも
媒介をも要せざる以心傳心の境なり。

一八二

船たび

The Voyage.

『船たび』は明かにテニソンが處世上の觀念を歌へるものなり。テニソンは思へら
く、人生は理想の追求に外ならず」と。具にいへば、人は缺陷の現世に満足する能は
ずして常に理想的境涯を想像し、件の極致的生活を實現せんと欲し、無限無窮に精
進するものなり、すなはち謙々として曾て知足する所無し、かゝる精進の氣根のあ
ればこそ人間の世界は漸進漸化して、幾段づゝか遷善の實を擧ぐるを得るなれ、若
し此の心なかりせば、人生はやかて沈澱腐敗し、退轉墮落するの外なかるべし。無
限精進は人間必須の要訣、隨うて人間の歴史はとこしなへに理想を追求する無終
的旅行の記録なり、猶地球周遊の船が其の航路の極まるを知らざるが如しと。く
はしくは、下の節々に釋する所によりて會得すべし。

其の一

I.

(わらほほどに)我がともがらは彩れる錨標をまうへに残しつ
We left behind the painted buoy

港ぐらに浮き沈む錨のうまな(まうへ)に残しつ

That tosses at the harbour-mouth;

(わらわがつ)舞し舞しは狂ふがら舞を踊つ

And madly danced our hearts with joy,

南をわこつ我がのる船の(矢)の如く疾く走るにうたつ

As fast we heeled to the South;

あはれ見らるの聞へもの(うた)とへく新鮮なうた

How fresh was every sight and sound

大海ばらに(見聞へもの)長き浦曲に(見聞へもの)

On open main or winding shore!

此の樂しき世界は球の如くまらかれば

We knew the merry world was round,

テニソンの小説

一八三

知んぬ船たびの果はあらと

And we might sail for evermore.

▲bonyは錨につけたる浮標なり、通常目にたつやう彩色せるものなり。▲「南をさして」とは、寓意の方面よりいへば理想の在る所を指す、すなはち光明赫耀たる方角なり。樂天の觀念を抱いて世の海にいつれば、聞睹一として樂しからざるはなし。▲此の樂しき世界云々の二句は、作者が樂天的觀念を簡説せる者、以爲へらく、人間の進化は無限無窮なるべし、喩へば地球の圓形なるがゆゑに、之れを周航するにあたりて些の限界もなきが如く、人智の發達には限なくして、人の努力には限あるがゆゑに、所謂理想の本體は到底捕捉して實現するに由なく、隨うて如何に勇猛に精進するも、眞の理想其の物を捕らへ、之れを實現し得るの期は望むべからず、理想を捉らへ得たりと思ふは、おしなべてその影又はまぼろしを捉らへ得たるにて、眞の理想は常に毎に幾段か彼なたにたいよへるものなり。蓋し從來理想たりしものも一たび捉らへ得て現實とすれば、たちまち醜き若干の缺陷を現じ、再び人をして第二の理想を追求せしむるに至る。かるがゆゑに理想追求を本願とせる人生の

航程は、所詮極する期を知らざるべしと也。

其の二
II.

軟風わたしく額を拂つて吹せしむ

Warm broke the breeze against the brow,

網具も鳴らし帆の鳴らし

Dry sang the tackle, sang the sail:

船首なる美人の頭は

The Lady's-head upon the prow

列たるうしほを被りて吹きくる風をつん

Caught the shrill salt, and sheer'd the gale.

大海の浪は船體を迎へて逆巻きかへ

The broad sea swell'd to meet the keel,

やがて忽ちにあとみに奔馳す

And swept behind; so quick the run,

テニソンの小説

いみじき大船のゆらめきよるめくをおほえし程に(いとも疾き船の脚)
We felt the good ship shake and reel,

あはれ我がともがらは朝日のたゞなかに乗り入るかと思見えし
We seem'd to sail into the Sun!

▲Dry sang etc. の dry は「きびしく」「するどく」の義。▲船首なる美人の頭とは我が龍頭鷁首などいへるに同じく船首に美女の半身像を彫り添へたるをいふ、多くは希臘古代の女神の像也。▲大海の浪は云々とは、高浪の船を迎へて膨張し、やがて船の過ぐると共に船體を拂うて艦のかたへ疾走し去るをいふ。▲此のあたり原詞はすべて過去動詞もて物したれど、訓はわざと現在時法を用ひたり。▲朝日のただなかに云々とは、船を東方に進むること急なるをいへるなり、矢を射る如く旭日の昇れるかたへ行くを形容していへるなり。第一節にては船南に向ひ、今はまた東に向ふ、こは人生旅行の變轉常なきを諷示せり。之れを一個人の上の喩へば、はじめて社會(世の海)に出でたる時の姿なり。年少く氣鋭にして前途の望海の如し、未だ樂しきことあるを知りて悲しきことあるを知らず、一意我が往かんと思ふ方に向つて直行せんとす。

されどすべて詩歌は(たとへ寓意を主とせる作とも)あながちに寓意に泥むべからず、此の作の如きはもとより隱微あるが爲に妙なりと雖も、其の隱微の寓意を離れて單に航海行として翫味するも尙且つ美なる故に更に妙なり。以下の諸節皆然り、讀者宜しくまづ尋常の航海として其の情姿を味ひ、さて後に寓意の妙に及ぶべきなり。

其の三

III.

あはれ幾たびか我がともがら見しぞ日輪の退くを

How oft we saw the Sun retire,

退きて夜の戸口に燃え

And burn the threshold of the night,

海原の火路を下りて

Fall from his Ocean-lane of fire,

柱なす殘光の底に眠る(日を)

And sleep beneath his pillar'd light!

テニソムの小説

あはれ幾たびか黄昏の(着る)むらさき裾の服を(見し)

How oft the purple-skirted robe

おもむろに垂下する(紫裾の服を)

Of twilight slowly downward drawn,

全地球の眠れるもなかに

As thro' the slumber of the globe

又も我が船の志のゝめの空に突き入りし時

Again we dash'd into the dawn!

此の一節最も訓じにくし、我が國ぶりとは痛く異なる比喩多ければなり。まづ夕陽の次第々に西海に退きて、終に水平線底に没し去るさまを形容せる詞など、殆ど國文には譯しがたし。

▲「夜の戸口」とは將に暮れなんとする西の空といはん程の義、而して「海原の火路」とは夕陽の反射して火の燃ゆるが如く見ゆる西の海をいへるにて、假に之れを太陽の通過する街路に喩へたり。▲「柱なす殘光の底云々」とは、既に水平線下に没し去れる日の光の譬へば火柱^{ひしち}あまた打立てたらんやうに天に向つて直射し、まばらく

殘照を留めたるをいふ。▲「眠る日」とは太陽の西するをば人の寢室に退き蔭に就くに喩へたるなり。▲「黄昏の着るむらさき裾の服」とは日の入り果てし、あたりのやうく昏うなりゆくさまを天邊より紫色の裾つけたる長上被の垂下せらるゝやうなりと見たて、さて之れを薄暮^{たそがれ}が着る服の如く言ひなしたる所、此の作者の妙想なり。▲「全地球の眠れるもなかに」とは、猶「夜」といはんがごとし。▲「志のゝめの空に云々」とは、再び東方をさしてまつしぐらに船を進めたりし時といふ意。此の一節の大意は、幾たびも日の沈むを見、幾たびも日の暮るゝを見、尙まばらくも退轉せずして、常に東方へこゝろざし晝夜休まずして精進せりとの意なり。

其の四

IV.

目なれぬあまたの星 夜もすがら水の端に

New stars all night above the brim

かゝんちやべつちのほたけ

Of waters lighten'd into view;

テニソンの小語

其の昇ること急なる其の現るゝにひとしかりき 又は水平線の
They climb'd as quickly, for the rim

毎瞬に變化せしに知らる

船の走るにつれて

Changed every moment as we flew.

はるかにむきだしのまゝの玉兎は走りぬ

Far ran the naked moon across

落窶たる高浪の海原を渡りて

The houseless ocean's heaving field,

若しくは飛びつゝも、つゞきに、まぶしがねの凸飾(でんご)

Or flying shone, the silver boss

いたちけるおのが峯を照すめる楯とも見せて

Of her own halo's dusky shield;

こゝは船の進行するにつれて四圍の現象の變はり行くさまを寫したり。星なども今まで航行せりし半球上にては見も慣れざりしがかゝやき、剩へ見るが中にそれ等の星影は天に中して、空の様も海の姿も毎瞬間にかはりゆくとなり。

▲「水の端」とは、水と天と接するあたりをいふ。▲「むきだしの玉兎」とは、周邊に雲な

く澄みわたりたる月なり。▲Houseless とは、荒れたる原の落窶たるさまに喩へていふ、くはしくは、些の蔽ふものもなく、只ひとへに茫々たる海原といはん程の意。▲若しくは飛びつゝも云々とは、澄みわたりたる月の間、其の周邊に暈をいただき、船の疾行するにつれてさながら中空を飛び走るやうに見ゆる。喩へば、中古武士の携へし圓形の楯の黒色なるに、銀の凸飾を施せるが、日に映じて輝けるが如しといふ意。中古の楯は、概して圓形若しくは橢圓形なり、而して其の中央には凸出せる圓き飾がねを加ふるを例とせり、爰には其の凸飾を月に見たて、楯の地を暈に見たてたり。▲最後の一句は直訓しかねたれば意を取りて義譯せり。

其の五

V

峯多くある小島さま々々に姿を、

The peaky islet shifted shapes,

圓のへの高き里せほろげに見らむ

High towns on hills were dimly seen,

ラニンマンの小島

北の方の長くつらなれる岬も過せし

We past long lines of Northern capes

また霧深き北の方の緑野もよきぞし

And dewy Northern meadows green.

(ついでに)温き波路に入りし

We came to warmer waves, and deep

果まらぬ東の海をほるかにも走り渡りし

Across the boundless east we drove,

彼の高き波に逆巻きて碎くる浪の

Where those long swells of breaker sweep

ニラツクの生へる岩根と丁子生へる島が根を洗ふ(東の海を)

The nutmeg rocks and isles of clove.

船やうやく進みて北洋に入る、季候と風色と見る／＼變化す。峯多くある小島の船の位置と共に姿をあらたむる、見るやうなり。

▲「岡のべの高き里」のちぼろげに見らるゝは、船やゝ濱に近ければなるべし。▲「高き里」といへるは岡の上にある里なれば也。▲さて北方の海岸に沿うて次第々々

に進航し、船は既に温帯海に入りぬ、肉豆蔻を産する島及び丁子の産する島は、いづれも東洋の島々なり。例へば、モラツカ群島の如き、フィリッピン群島の如き、是れなり。▲「Deep」「遠く」又は「はるか」の意。

其の六

VI

火の燃ゆる峯々のほとりを

又は

またく打疊りて

By peaks that flamed, or, all in shade,

灰の雨からほし、麓の濱もふるふ沖も薄昏りする(峯々のほとりを)

Gloom'd the low coast and quivering brine

その灰の雨は舞ひ廣がりし

With ashy rains, that spreading made

あやしき羽根のかたとも見え黒き松とも見られし

Fantastic plume or sable pine;

(ある時は)眞砂路近く又(ある時は)湯氣たちのぼる平地に近く

By sands and steaming flats, and floods

テロツマンの小唄

また(ある時は)口いと廣き河流のほとりを我が船すみやかに飛びすぐれば
Of mighty mouth, we scudded fast,

紅花咲きまどる森や小山や

And hills and scarlet-mingled woods

まばしはまなこにきらめきぬ 我が船の飛びゆくはしに

Glow'd for a moment as we past.

此の一節はむねと南洋の風景を叙したり。▲「火の燃ゆる峯々」とは噴火山也。▲「打疊りて灰の雨ふらせ云々」は噴火山の奇現象なり、灰雨の中天に舞ひ廣がりて、或は大なる羽根飾の如く見え、或は墨繪の松杉の如く見ゆる由は、彼なたの航海記に往々詳叙せる所なり。▲「ふるふ沖」とは、灰の雨に撲たれて浪の揺動するさまをいへる也、浪の荒るゝを形容して「鞭もて打れたる海」などいふこと彼なたの詩文には屢々見る例なり。▲「湯氣たちのぼる平地」とあるも熱帯地方の殊なる現象を描ける也。▲「紅花咲きまじる森」の岸に沿うて船の疾行するはしに、ちらく〜と目に映ずる、ともありげなり。

其の七

VII.

あはれ數知らぬ風土めつたき津々浦々

O hundred shores of happy climes,

如何に疾く汝等は我が乗れる船に間近く走りし

How swiftly stream'd ye by the bark!

ある時は海じら悉く炎々たりき

ある時は

At times the whole sea burn'd, at times

ほのはなす跡を残して

船は烏婆玉の闇を破りし

With wakes of the fire we tore the dark;

ある時は物えれる獨木舟の突として來しことあり

At times a carven craft would shoot

神仙や棲むと見ゆる森陸の港より

From havens hid in fairy bowers,

赤裸々の腕や脚や花くだものを積み載せて

With naked limbs and flowers and fruits,

テニンソンの小呂

さもあらばあれ 我がともがらは船をとめしことぞなき花見もくだもの見るも
But we nor paused for fruit nor flowers.

こゝに住まば樂しからんと、流石に心も目も牽かるゝ浦は、幾ばくといふ數を知らず、志かるを仇にのみ見すごし、船は矢の如く疾行す。最初の二句は、流石に未練の残れば、後にせし津々浦々を追懐し、「汝等」云々と呼びかけたるなり。按ふに、理想を追ふものはかりそめにも中道に停まるべきにあらざ、現在の幸福は、所詮理想上の淨樂に易へがたし。疾行する船は向、上、無、限、の、淨、願、を代表し、風土めてたき津々浦々は現、世、間、の、利、福、を代表す。

さて更に勇を鼓してますく、船を進むる程に、或時は燐火海に満ちて、浪悉く青白きことあり、或はそを乗り切りて、志りへに炎々たる船跡とちあとを残すこともあり、共に南洋に於ける特殊の壯觀なり。また或る時は、突爾として南海島に棲める裸體の蠻人、野花、果實等を獨木舟に積み載せて、近づき來たれる外國船をみとめて商あきなひせんとなす。其の花美なりと雖も、其の果うまげなりと雖も、船中の者一人として之れが爲に精進の本願を忘れしものなし、一意前進せんとするのみ、曾て船を停めしことな

し。▲物えられる獨木舟とは獨木舟の外面を種々に彫刻して飾りたるをいふ。

其の八

VIII.

何となれば一個の美なる影の髣髴として毎に走ればなり

For one fair vision ever fled

茫々たる水のあなたへ

晝も夜も

Down the waste waters day and night,

とこへに我々は追ひつゝ其の影の導く方へ

And still we follow'd where she led,

遊ぐる彼れに追ひつかむと頼みて

In hope to gain upon her flight.

彼れが面はこゝも見えず

Her face was evermore unseen,

はるなる海線の上に

And fixt upon the far sea-line;

チニンノの小冊

さばれ人皆のひそかにいへらく

あはれ我が女大君

But each man murr'd, 'O my Queen,

我れは汝れに追隨せむ 我がものとすらむまて

I follow till I make thee mine.

現在の利福をも棄て、只管に船を進むるは何故ぞ、といふに、他なし、我がさしてゆく浪のあなたに嬋妍たる一個の神女の髣髴として影を現し、船にさきだちて走ればなり。こゝに謂ふ神女の幻影とは何ぞ。朦朧たる理想の影をいふ也。人々は其の心の目に此の美しき幻影を見るが故に、片時も現在にのみ執着せん、の心はなく、晝夜休息せずして精進する也、いつかは彼れに追いつきて宿望を達したしと念願すればなり。されど此の理想の影は、常に毎におぼろげなるゆゑ、未だ一人だに明白には理想の本相を認め得たる者なし、理想の面はとこしなへに未來に向かひ、とこしなへに前のかたに向かへり。其の確定不動の本相は哲士も未だ明説する能はず、天才も未だ詳狀する能はず。さもあれ衆皆ひそやかに獨語すらく、あはれ、我が儂、我が本尊、たとへ汝れが本相は明かならずとも、我れは汝があとを尾ひゆか

む、竟に汝れを捉らへ得て我が有となさむまでと。すなはち世の海を渡らむ者に
して、苟くも理想を實現せむことを期せざるものはなしいふ意。
▲「海線の上に」とは「水平線上に」の義、前釋によりて其の義をさとるべし。

其の九

IX.

さて其の影は或時は見えたり又或時はきらめけり

And now we lost her, now she gleam'd

金色の氣より成れるまはらしのやうに

Like Fancy made of golden air,

或時は船首に近く見らわし

Now nearer to the prow she seem'd

毅然たる美德のやうに 正しき知識のやうに

Like Virtue firm, like Knowledge fair,

或時は徒に碎くる浪の上に高々と(姿を現して)

Now high on waves that idly burst

テニソムの小説

天上界の豫望のやうに海原の飾となりつ

Like Heavenly Hope she crown'd the sea,

また或時は

血のらゝ尖を逆にして

And now, the bloodless point reversed

眞自由の刃を掲げし

She bore the blade of Liberty.

此の段は理想の變幻無窮なるを説けり。或時は理想全く消盡して人々其の影を認め得ざることあり、或時は其の影燦として金色の光明を放ち、人々の心眼に照り輝き、えも言はず尊くは拜まがまるれど、而も何物とも名状しがたきことあり。或時は又目近く現れ、一舉せば實現し得らるべきが如く思はるゝことあり。或時は理想の本體は、或哲學者の唱へたるが如く、毅然たる圓滿の淑徳じゆつとくに外ならじとも見え、又或時は「如々たる正智」に外ならじとも見ゆ。又或時は無常有漏の浮世の浪間に逆風怒濤を恐るゝ色なく、泰然として高々と妙なる姿を現すを見れば、所謂理想とは現世に實現すべきものといはんよりは、未來世すなはち天上界に對する人間の信仰希望ともいふべく、此の苦海を渡る唯一の舟筏なるが如し。又或時は理想の風

姿一變し、譬へば手に一利劍を掲げて立てる一個の女神とも見ゆ。此の利劍は圓滿なる眞自由を獲る利劍なり、但し、其の銳尖さびは地の方へ向かひ、且つ其の刃邊には些の血斑ちまだにも無し。按ずるに、テニソンは温和なる改進黨を奉じ、痛く過激の改革を惡めり、故に刃に刺らずして自由を獲るをもて理想とせる也。▲ Knowledge fair の fair を「美しき」といふ義に釋したるもあり、いかにや。按ふに、美德の毅然たるものに對して「正智」といはん程の心に用ひたるにはあらぬか。Fair には「公正」といふ義あり、偏せず局せざる正智とこゝには釋しつ。

其の十

X.

さて我が黨のうちに只ひとり

彼れをば

And only one among us—him

我々の悦ばせしめしなし 彼れの悦ばしは稀なりき

We pleased not—he was seldom pleased:

テニソンの小説

彼れは遠くは見えざりき 彼れが目はかすみたりき

He saw not far: his eyes were dim:

それども彼れは斷言すらく我々は皆惑亂せり

But ours he swore were all diseased.

あゝ痴駄の船なと

彼れは卑みて絶叫しき

'A ship of fools,' he shriek'd in spite,

あゝ痴駄の船なと

彼れはさげすみつ打泣きり

'A ship of fools,' he sneer'd and wept.

かくて或あらしの夜彼れは船の外に身を投じにき

And overboard one stormy night

わがて我々はゆき過かり

He cast his body, and on we swept.

凡そ人として理想の貴きを念はざるはあらじと思へど、數多き人の中には絶えてかゝる念のなきもあり。同じ船に乗り込める者の中に、唯ひとり異なる考へを抱きて、只管現在にのみ執着せるがありけり。彼れは常に氣むづかしく、ふさがちにて、面持例ならず、何人のいふことも彼れが心には叶はぬらしく、曾て悦べりし例

なし。按ふに、彼れは只目前そのまへのみを見るなるべし、遠方に美しき物の影見ゆるを彼れは打詠むる能はざるなり、彼れの視みはかすめる也。「こは世間にのみ執着せる俗人を指す」。されどみづからは然思はず、却りて理想を追ふ我が黨をば惑亂狂妄の愚人と卑しめ、嗚呼此の船は痴駄ばかぶたの乗れる船と絶叫して、或はさげすみ、或は歎じ、果はえたへずや打泣けりき。さてかく目前の事にのみ執着せるがゆゑに、偶々目前の不幸に遭遇する時は、當來たつとを頼として一時を忍耐せんたより無く、隨うて苦悶を遣らんに由なし、此の世頼まれずと思ひ入りては、世を厭ふ念も禁じがたき道理なり。されば或あらしの夜、人々の眠れる間に、彼れはひそかに抜けいで、遂に船外に身を投じ、大海の藻屑となりにき。あはれは限なしと雖も、今更に如何ともせんすべなし、我々が乗れる船はやがて其のまゝに疾走せり。

其の十一

XI

さて我が船の帆布は皆てたゞみしことなく

And never sail of ours was fur'd,

テニソンの小説

又々にもあしたにも錨をちろしことなし

Nor anchor dropt at eve or morn;

うつゝ世の光榮は我々もゆつゝいたし

We lov'd the glories of the world,

所謂天然の制規をば我々は常にさげすみたり

But laws of nature were our scorn.

何となれば暴風は吹き起り吹き荒れさて後に吹き歇みぬし

For blasts would rise and rave and cease,

されど那邊より来つる 船を驅る彼の物は

But whence were those that drove the sail

つむぐ風の繯なる中心を横切り

Across the whirlwind's heart of peace,

刺し逆風に向ひ且つ之れを貫きて(船を驅る彼の物は)

And to and thro' the counter gale?

現世間に如何なる變あるも理想を追ふ船は停まることなし。我が黨は當來に希望を屬すること甚深なればなり。かくいはば人或は言はん、汝等は現世を愛せざる

か、ひとへに出世間を道なりとせるかと。否、我が黨は現世を度外視する者にあらざ、現世の光榮を認むることに於ては、我々豈人後におちんや、現世を愛することに於ては我々豈餘人に劣らんや。只謂ふ所の俗人は、只管現在に執着し自然の進化をのみ是れ法とし、天の爲す所は人一毫も之れに加ふるの力無しとなす。彼等の天法を重ざるや、人間の進化をひとへに自然作用に一任せんとす、彼等は自然法の狂ぐべからざるを唱へて、竟に人間を偶人視する也。我が黨は然らず、深く人爲の重すべきを信ずるが故に、理想の追求をもて人間の爲さざるべからざる大なる務となし、隨うて彼等が唱ふるが如き制限を卑しむ。何が故に然るか。答へて曰はく、現世の事業には障魔多し、譬へば暴風の吹き起り、吹き荒れて、船の進行をとむるが如し、吹き起るも偶然、吹き歇むも偶然、現世の障害は殆ど豫め期すべからざるものなり。されどかゝる障礙あるに拘らず、船の能く行くは何故ぞ。尤も怖ろしき旋風の中心をも横切り、逆風にもさかひ、颶風をも貫き、能く其のさすかたへ向ふは如何。何物が船を驅るぞ。逆風は帆にさかへる也、而も船の進むは如何。是れ豈靈妙なる人心の作用に因らざらんや。船を進むる、蓋し人間の偉力にあらざや、

若し偶然と自然とのみに依頼せば、嚴密にいへば、一段も船を進むるの機無からん。偶然及び自然の障魔は、突然として來たり、又卒然として去る、必しも恐るゝに及ばず、また決して頼むに足らず。

▲「帆を驅る」(drove the sail)と原詞にあるは「風は帆に逆へるに、何物が帆を驅るぞ」の意なり。▲「されど那邊より來つる云々」は「何物に由來せる」の義也。▲「旋風の穩かなる中心」とは、旋風の周邊は近づき難きほど風浪の荒ること激しきものなれど、其の中心は却りて平穩なりといふ意、こは理學家の唱ふる所なり、されど此の中心に入らば、恐らく出づること叶ひがたかるべく、最も怖ろしき境涯なり。此の段の解釋はマクミラン版の釋をも參照せしが、心得がたきふし多ければ、こゝには専ら予が見る所によりて解を下せり、疑ふらくは、彼の釋はテニソンの本意とはたがへるにはあらむか。

其の十二

XII

又も我がともがらは寒帯の沙路に來りぬ

Again to colder climes we came,

彼の影の導く方へとこしなへに追隨せしかば

For still we foll'd where she led:

今や副船長は目まひたり

船長はあしなへたり

Now mate is blind and captain lame,

又舟子等もなればは病み又は死にぬ

And half the crew are sick or dead,

さもあれ言すとも跛すとも病むとも健なりとも

But, blind or lame or sick or sound

我の黨は追尾す 前驅する其の物に

We follow that which flies before:

豈し此の樂しき世界は球の如くまるかれば

We know the merry world is round,

知る船たびの果はあらと

And we may sail for evermore.

無限向上の船旅ははてしなく、船は再び寒帯の海に入りぬ。巨山の如き氷塊に船幾たびも危く、肌を劈く寒風に耳鼻ことごとく腐り爛る。遮莫いかなる艱苦に遭ふも、我が黨は宿願を絶つ能はず。今や我が黨の木鐸たりし者も、多年の艱難に身神共に疲憊し、同志はたなかばは枯槁せり、され我が黨の素志は奪ふべからず、尙も理想の片影を追ひ、百難を排除して精進の勇を鼓す。何となれば無限進歩の確信は、依然として抜くべからざればなり。

以上此の一篇にあらはれたる觀念は、作者が確信せし所、有名なる『イムメモリアム』以後の作には此の觀念常に見えたり。蓋し此の『船たび』はテニソンが觀念と理想とを窺ふには、頗る便宜なる作なり、こゝに之れを評釋せしも、早う我が國の讀者に此の作者の片影を知らせんとて也。

前には説き洩らし、が、此の作の律格は昂起格にて、四歩を一行とし、始終同一の律格也。

ドラ女物語

Dora.

上に訓釋せる二篇は、テニソンが作のうちにて、隱微の寓意に富み、ひとへに表面のみを讀みては十分の旨味を悟りがたきたぐひなるが、下に物する『ドラ女』が物語は、素樸淡雅の好小話、その味ひは釋を俟たずして知らるべし、妙は理窟の上にあらずして人情の上にあり、殊にドラ女の如きは此の作者が得意の人物、温順貞良の權化とも評すべし。ドラといふ名、我が國にては聞き苦しけれど、彼なたにてはいと可憐なる名とせり、美代、千代などいふ名と同一程によろこばるゝ少女の名と知るべし。

此の小話はもとメーリリー、ロッセル、ミットフォード女といふ女作家の作『我が村』といふ小話集中に見えたるを、其の筋の大むねだけを借り來て更に新工夫を加へたるものなり。風調のいと美しうして、辭の簡樸雅馴なるところ、尤も翫味すべし。

農夫アランと共に

曉の屋に

With farmer Allan at the farm abode

テニソンの小品

ウィルヤムとドラと

ウィルヤムはアラシが子にて

William and Dora.

William was his son,

ドラは其が姪なりき

彼れまば／＼ふたりをながめて

And she his niece.

He often look'd at them,

まば／＼思のけらく

「我れ彼等をばめたとせん」と

And often thought, 'I'll make them man and wife.'

ついでドラは其の叔父が思へるまゝを感じて

Now Dora felt her uncle's will in all,

ウィルヤムに焦れけり

されど彼の若人は

And yearn'd towards William; but the youth, because

共に常に同一家に棲めりしゆゑ

He had been always with her in the house,

ドラを戀のしとも思はざりけり

Thought not of Dora.

▲「まば／＼二人をながめて」「ふさはしき一對よと打ながめての意。▲「叔父が思へるまゝを」云々、in all は「悉く」の義にてこゝは「悉く叔父の意に同じて」といはんほど

の意也。▲「同じ家に在りし故に」「我が同胞のやうに思ひ做して行末妻とすべきものとは思はずとなり。

***ほどにふる日の来たりし

Then there came a day

時 アラシは其の子を呼びつゝ「我が兒よ

When Allan called his son, and said, 'My son:

我れは晩う娶りしかど

見まくはりし

I married late, but I would wish to see

膝の／＼に孫を

我が死なん前に

My grandchild on my knees before I die:

されば我れ心を配偶のこゝとてなぐり

And I have set my heart upon a match.

いづや ざるからに ドラなばうつくしと見れ 彼れはうつくしうなんある

Now therefore look to Dora; she is well

また年にましてひましようなん

To look to; thrifty too beyond her age.

彼は我が弟の女なり

弟と我れと

She is my brother's daughter: he and I

むかし言葉争ひして引分かれり

さて弟は死にせ

Had once hawl words, and parted, and he died

外国にて

されど彼れが爲に我れはさだてき

In foreign lands; but for his sake I bred

その女ドラを

彼れを取りにいましてが妻に

His daughter Dora: take her for your wife;

我れ此の結婚を願ひむねは

書よるに

For I have wish'd this marriage, night and day,

此のと同じく

されどウィルヤムは言葉短う答へけり

For many years.

But William answer'd short;

「我れはドラをめとらざらん

命かけし

I cannot marry Dora; by my life,

我れはドラをめとらざらん

おれは死にせ

I will not marry Dora.

Then the old man

怒りて手をふりかぶりて云ふ

Was wroth, and doubled up his hands, and said:

「あつてつとむものれ

敢てまを答ふること

'You will not, boy! you dare to answer thus!

死もあれ我が若き人には父の語は堪なりき

But in my time a father's word was law,

されば然あるべし今我が上にも

ぞを思へ

And so it shall be now for me.

Look to it;

吾みよもウィルヤム

一月かけて思案し

Consider, William: take a month to think,

我がことごとくに叶ふ答を聽せよ

And let me have an answer to my wish;

然せずば我れを造りましし神も見そなはせ

Or, by the Lord that made me, you shall pack,

而して決して再び我が家の戸口を昏うせざるべし也

And never more darken my doors again.'

▲ Look to Dora はほゞ本文に訓じたる意其の次の Look to は「打ながむる」の意。
 ▲ Brother は兄とも弟ともわきがたけれど、物語の筋を案じ、ドラのウィルヤムより年
 下なるを思へば、弟と訓ずるが妥なるべし。▲ 命かけては「誓うて」の義。

ウィルヤムが妹愛せりしドラを妻とせよといはれて、案外を感じ、「滅相な」と思へるま
 をに、べなく、いひあらはし、端なくも父子の仲たがひを醸せるは、是非も無き行き
 ちがひ也。一方は一圖に思ひ込める老人かたぎ、一方は思ひやり無き少年、かゝる
 譯もなき行ちがひが元にて浮世の悲劇は演ぜらるゝなり。▲ 「兎まれ」云々、bit を
 かゝる場合に用ふること聞えあり、悉しくは、汝の意はとまれかくまれ」の義。▲ 「我
 が若き頃には」云々、當今は知らず、我が若きころには父の命、法律同然にて背き悖ら
 ざるを孝子の本分とせり、我れはた其の子に對しては専制君主的權力を有すべき
 筈なり、若し我が命に背かば、一日も此の家に住ますまじきぞ、汝それ之れを思へ」の
 意。▲ 一度はいたく怒りながら、また言葉を重ねて反省せよと諭すさま、親心見え
 ていとめてたし。▲ 「速に旅装すべき也」とは「速に此の家を立去るべき也」の意。
 ▲ 「我が家の戸口を昏うせざるべきなり」とは「汝の面を見れば我が家爲に昏うなる

心地すくはしくいへば、不快の影を生ず、また來たる勿れの義。

ウィルヤムは狂者の如くに答へり 唇を噛み

But William answer'd madly; bit his lips,

ちて走りこゆり 彼れはドラを見ることよく多くて

And broke away. The more he look'd at her

こちへ眼をさ されば其のまむけつれなかりしを

The less he liked her; and his ways were harsh;

ドラはおとなしく怒りしげさ せむはまじ

But Dora bore them meekly. Then before

其の月果てぬる前にウィルヤムは父の家を去りて

The month was out he left his father's house,

野原に働く日雇ひとならり

And hired himself to work within the fields;

半ばは種まきはははらひあつて

And half in love, half spite, he woo'd and wed

ある作はとこのむすめマリー、モリソンといふに(いひ寄りてめとりぬ)
A labourer's daughter, Mary Morrison.

僅々數行のうちに、尋常作家が幾ヘーシの小説文中に叙状しいだすべき事を簡叙し盡くし、而も短慮なる少年の輕舉、かたくななる老父の怒、温良なる女子が可憐なる面影さへも見えたり。▲「ひらあてに」とは父への面あてをいふ。

ある程に祝ひの鐘の鳴り渡りぬる折

Then, when the bells were ringing, Allan call'd

姪を呼びていひけらく

「我がご女を我れはいまこそうつくしむ

His niece and said: 'My girl, I love you well;

さばあれど若し我が子なりし彼奴と物さひかはし」

But if you speak with him that was my son,

又は 彼奴が妻と呼ぶなみなと言葉はさば

Or change a word with her he calls his wife,

此の家はいまもものにもあらぬ

我の言はば誰なるぞ」

My home is none of yours. My will is law.

なめて下ラは約束してけり、心すなほなるさうに 彼れは思ひけらく

And Dora promised, being meek. She thought,

「あり得んか」とかは 叔父御の心ちがて變はらん」

'It cannot be: my uncle's mind will change!'

▲「祝ひの鐘」婚禮の時教會堂にて鳴らす鐘なり。▲「あり得べきことかは」とは、叔父がウィルヤムを怒る心の、いつまでもかくてつゝかにはあり得べきことならずと思へるなり。▲末段の一句、無邪温良なる少女子の口吻を摸しいだして餘蘊なし。

幾日もすぎぬまてウィルヤムにひとり男の子生れけり

And days went on, and there was born a boy

知らばあつてわらはひは彼れが身にさきり來りぬ

To William; then distresses came on him:

されば日ごとく折れて父が門入なまきりひれど

And day by day he pass'd his father's gate,

父は助けんとともぢかりけり

Heart-broken, and his father help'd him not.

さああれドラは省き得しわづかばかりを貯めて
 But Dora stored what little she could save,
 ひそやかにそな夫婦に送りぬ 彼等はた知らざりけり
 And sent it them by stealth, nor did they know
 たが送りしひな さて竟に熱病サイルヤムを襲ひて
 Who sent it; till at last a fever seized
 彼れはとり入れ時にはかなくなりぬ
 On William, and in harvest time he died.

此の段すべて釋を要せざるべし。只辭のしよく簡にして意のしよく長かるを味ふべし。

わなみはあつてドラはメーリー許のきこつ
 Then Dora went to Mary. Mary sat
 涙ぐみて其のちちを打見て
 And look'd with tears upon her boy, and thought
 ドラをちこやまに思へりけり
 Hard things of Dora. Dora came and said:

「ちちをよへはわなみ叔父御のいひつけに従ひぬれど
 'I have obey'd my uncle until now,
 (思へり)ちこやまをこつてけり 此の禍のはじめサイルヤムの身に起りては
 And I have sinn'd, for it was all thro' me
 皆わなみより生じなれば
 This evil came on William at the first.
 さああれメーリーも 往きにし彼の人の爲に
 But, Mary, for the sake of him that's gone,
 又御身の爲に 彼の人の擇びにし女性の爲に
 And for your sake, the woman that he chose,
 又此のみなしの爲に わなみ御身をおとつれ侍り
 And for this orphan, I am come to you:
 御身も知りません此の五年程の間つゝる豊かなるみいりは曾てあちざりしを
 You know there has not been for these five years
 わなみに其の子をつれゆせせてよ、
 So full a harvest: let me take the boy,

さらばわなみ其の子をば叔父御が見たまはん處に置かなん

And I will set him in my uncle's eye

小麥畑のうちに

叔父御が豊なるみいりを

Among the wheat; that when his heart is glad

悦びておぼすらん折

ふと其の子を見て

Of the full harvest, he may see the boy,

往きにと彼の人の爲にいとしがりたまはんやうに」と

And bless him for the sake of him that's gone.

▲第五行の端に在る and は「而も」の義に當たる。其の心して訓ずべし。▲ you know かゝる場合に用ひたる現在動詞は、國文にては未來又は未定の義となるが通例なるが如し、故に「知る」と訓せずして「知りまさん」と訓むたれど、若し俗言もて訓ずれば you know の語は、單に「何々てござりませう」といふ時の「ませう」に相當す、極めて輕き詞なり、すなはち「かゝる豊年は近年稀なこととござんせう、ぢやによつて其の子をば云々」と訓みつくべきなり。▲ bless は當人の爲に「幸福を禱る」といふ義也、親の子を bless するといふは「取りも直らず深くいつくしむ」の義なり、curse (呪咀) の反

對なり。

ちてドラはなをならんをむ

小麥畑を通りて

And Dora took the child, and went her way

進みゆきて

種まかへありし岡のへに坐わりし

Across the wheat, and sat upon a mound

播粟めまた生ノリ(岡のへに)

That was unsown, where many poppies grew.

はるがはなれて彼の農翁は畑中に入り來わねん

Far off the farmer came into the field

ドラをば認めざりけり

ひとりだに下男等のうちこ

And spied her not; for none of all his men

敢て告ぐる者なかりしは

ドラ女をななをわて俟てりと

Dare tell him Dora waited with the child;

さればドラは起ちあがりて叔父がもとへ往かまくせしならん

And Dora would have risen and gone to him,

テニソムの小唄

されどあすがに氣おくれしつ

さる程に麥蒔る男等は麥蒔りぬ

But her heart fail'd her; and the reapers reap'd,

やがて日は沈みぬ やがて 四面やまも 昏うなりぬ

And the sun fell and all the land was dark.

▲「種まかてありし岡の上」とは「麥の生へてあらぬ岡」すなはち遠方よりもよく見らるべきところ也、こゝに彼の孤兒をすわらせて、片意地なる叔父の目に觸れしめんとする也。▲「彼の農翁」とは「アランをいふ」。▲「嬰粟あまた生へりし」云々、かゝる淡墨畫の間に此の一點紅、作者が點彩の巧なるを味ふべし。▲「her heart」「勇氣を落す」といはん程の義。▲「さる程に麥蒔る男等」云々、こゝの and は「かゝりければ」又は「すなはち」などの義に近し、故に其の次行なるはすべて「やがて」と訓じつ。▲「all the land は恰も「四面やま」の義也。

されどそのあしたの來たりし時ドラは起きいへ

But when the morrow came, she rose and took

又彼のなまなをめて岡のノにすわりつ

The child once more, and sat upon the mound;

And made a little wreath of all the flowers

さななをなまなを、帽子に纏ひ

That grew about, and tied it round his hat

彼れなば叔父が目にあらし見えんとて

To make him pleasing in her uncle's eye.

さるほどに彼の農翁が畑に入り來ぬる時

Then when the farmer pass'd into the field

彼れはドラと認めつ すなはち働ける下男等に分かれ

He spied her, and he left his men at work,

やがて來りてこゝらへ 「さななをなまなを」に纏ひ

And came and said: 'Where were you yesterday?

そはたが兒や? こまし爰に何事なかなさる」と

Whose child is that? What are you doing here?'

▲「Pleasing」「目易う」「愛らしう」の義。▲「ドラ女が優美なる工夫はたちまち此の一段をして一幅の好畫圖と成らしむ、白頭の老農、可憐なる淡装の田舎乙女、花鬘をいた

いける紅顔の稚兒、綠樹黃麥、遠山近水、正に是れ圓山派得意の好田家山水。

二三四

おつ下らはわしうひひやうし

So Dora cast her eyes upon the ground,

まごかに答へけりへ 「これはウイリアムの子なり」と

And answer'd softly, 'This is William's child!'

「シテ我れ禁むせりしや」と アランはこひき 「我れ禁むせりしや

'And did I not,' said Allan, 'did I not

(わい(アラン)エト) エト女まがこくへ

Forbid you, Dora?' Dora said again:

「わが身をばみんかのみまじになしたまへ されど此の子をばむてのまじ

'Do with me as you will, but take the child,

往きにし彼の人の爲にこくへたまはしたまへ」と

And bless him for the sake of him that's gone!

おつ下らはまごかへ 「知る 道は小細工なるを

And Allan said, 'I see it is a trick

らまじとあしひなる女とがもくふるめる(小細工なるを)

Got up betwixt you and the woman there.

我れ我が子(アラン)を教へらるるべしと云ふ 而もまじの口を

I must be taught my duty, and by you!

いましは我が言の推なりしを知れり 而も敢てそを輕んじたり

You knew my word was law, and yet you dared

よからん 我れそのわざをむつべへてければ

To slight it. Well—for I will take the boy;

されどいましは疾くいね 又決して我れを見るな

But go you hence, and never see me more.

▲「我れ我がすべきことを」云々「白頭翁たる我れ、おのが爲すべき義務を知らずあらんや、汝等の指圖を受くるとは奇怪也」の意。かた意地ぢやぢの性よく見えたり。

▲Wellは「ト、ト」とうなづく程の意也、悉しくいへば「それも宜からん、我が命に背くもよからん、其の小僧は我れ將てゆくべければ」の義。

かくこゝにて彼れわらへを捉へき 聲高く叫ぶ

So saying, he took the boy that cried aloud

チニンノ小僧

二二五

And struggled hard. The wreath of flowers fell
 Dora女が足元に 手の上にクラ女は伏して
 At Dora's feet. She bow'd upon her hands,
 花はほかに彼のわらにも哭く聲は畑のかたまりを隔てた
 And the boy's cry came to her from the field,
 叫ぶ〜 遠くからいつ ドラはあんなうなだむ
 More and more distant. She bow'd down her head
 はぐめて来たこの事を思ひつゝ
 Remembering the day when first she came,
 又は過ぎにしる〜の事をもを思ひつゝ 彼れは打伏して
 And all the things that had been. She bow'd down
 そのひやみに泣きけり ほとほとに麥刈男等は麥刈りぬ
 And wept in secret; and the reapers reap'd,
 さがて日は沈みぬ さがて四面山も昏らなりぬ
 And the sun fell, and all the land was dark.

▲「手の上に伏す」とは我が手の上に顔伏せて打泣くの意也。▲此の段の趣致は通

讀してちのづから明かなり。

Then Dora went to the Mary's house and stood
 其の門口に ンローは見き 我が見ぬ
 Upon the threshold. Mary saw the boy
 ドラと共にあらりしを ンローは俄に頌徳の言葉なもらしぬ
 Was not with Dora. She broke out in praise
 神に 寡婦となれる身を助けたまへる神に
 To God, that help'd her in her widowhood.

▲ broke out in praise は 畧く傍訓に物せる義なり突如として稱讚の言を發せるを
 540

And Dora said, 'My uncle took the boy;
 さはあれどンローはわなみを御身と共に棲まはせて働かせた
 But, Mary, let me live and work with you:

叔父は「おれはまたわなみを見ず」と

He says that he will never see me more.

その時メリーの答へは「それとゆふ／＼あふんかちや」

Then answer'd Mary, 'This shall never be,

我が厄難をば御身が身に負ふべしなと」

That thou shouldst take my trouble on thyself:

今はしも我れ思ふに彼の人我が兒をば有つべからず

And, now I think, he shall not have the boy,

彼の人我が子に無情を教へまた其の母をささげにすべしとな

For he will teach him hardness, and to slight

教ふべければ

His mother; therefore thou and I will go,

我れは我が兒を得て

將て歸らん

And I will have my boy, and bring him home;

さて我れ彼の人に乞はなん

御身をば取戻して」と

And I will beg of him to take thee back:

されど若し彼の人御身を取戻すことないなまは
 But if he will not take thee back again,
 その時こそ御身我れと 一ツ家に棲みて
 Then thou and I will live within one house,
 ウィルヤムが兒の爲に働かなん あの子が生ひたゝんまへ
 And work for William's child, until he grows
 わなみらを扶くべき年ばくじ
 Of age to help us.

此の段はた殆ど解釋を要せざるべし。田舎乙女の口吻の、此れ彼れ共に質樸に寫されたり、そがなかにメリーは稍々世慣れて思慮もありげなるだけにアラランを怨めしと思ふ心も、女心のまはり氣も、其のいひまはしにほの見えたり。かゝる無情き人に我が兒を養はせなば、我が兒もちのづから情知らずとなりて、其の母をも忘るゝに至らん、母を母とも思はざるに至らんと、行末を思ひやりて、其の兒を取戻さんといふあたり、ドラに對する義理のみにはあらで、母親かたぎの自然なるべし。▲「さることはゆめ／＼あるべからず」云々は「ゆめ／＼さることあらしむべからず」

と云ふと同義。hisは次の行のthat以下の句の代詞と知るべし。

さて二女は互に接吻して

So the women kiss'd

立ち上りて

さへ彼に農家に到りぬ

Each other, and set out, and reach'd the farm.

扉はさげがねをばうしてありけり

二女はさしてのぞきぬ

とみれば

The door was off the latch: they peep'd, and saw

童は

祖父が膝のあひにたきあげられ

The boy set up betwixt his grandsire's knees,

祖父はそが腋の下に童をば突き入れし

Who thrust him in the hollows of his arm,

さへ其の手をば叩きつ又其の頬をもたゞきり

And clapt him on the hands and on the cheeks,

彼れを愛しぬる人のやうに

さへ童は伸びあがりて

Like one that loved him: and the lad stretch'd out

かたがへにてれたりの其の金印をたゞきり

And babbled for the golden seal, that hung

フランが時計より垂れて燵火にきらめける金印を

From Allan's watch, and sparkled by the fire.

▲「とみれば」云々、原詞にては「抱きあげられたる童を見き」とあれど、訓は態と語を前後して物せり。▲「金印」とは懐中時計に添へて鎖もて吊し垂れたる黄金の印形也。▲かたいちなる翁なれば如何にをさなごをむごくすらんかと心元ながりて往きて見れば、思ひの外なる様なり。▲嬉しげなる見のふるまひ、愛情深げなる翁のあしらひ、ふたりが貌見合はせてまばし立もとほりしさま、見るやうなり。

さるほどにふたりは入り來ぬ

まひすがに童は其の母を見ける時

Then they came in: but when the boy beheld

なきいだしり

母のもとへかんとて

His mother, he cried out to come to her:

さへフランが童をば膝よりおろしければメーリーのいひけらく

And Allan set him down, and Mary said:

▲but といふ語かゝる處にては「流石に」の義となる。今までは祖父と共に機嫌よく遊びをりし見なれど、今ふと母親の影を見つけて流石に得たへずや母のもとへ

行かんとして泣きいだせるなり。▲to come は「往かん」と訓ずべし、英語にて「come」といふは往々我が「往かん」の義なり。I will come といふは「予が往くべし」
「僕参るべし」の義也。

「嗚呼男御」 若し嗚呼おことな許したまはば

・O Father!—if you let me call you so——

わなみいまだ曾てれぎにことには來たらざりき 我が爲には

I never came a begging for myself,

はたウィルヤムの爲にも將た此の兒の爲にも され今ぞ來ぬ

Or William, or this child; but now I come

ドラ女の爲に 姪御を元に復してたふ 姪御前より愛すること切なるぞや

For Dora: take her back; she loves you well.

嗚呼 ウィルヤムは逝りし時皆人と和して死にけり

O Sir; when William died, he died at peace

さるは(ウィルヤムは)彼れに問ひぬれば彼の人のいひけらく

With all men: for I ask'd him, and he said,

わなみをば娶りしことを絶えて悔ゆるを能はざりけん

He could not ever rue his marrying me——

わなみは辛防よく能う仕たりし妻とぞや され大人よ彼れのいへらく

I had been a patient wife: but, Sir, he said

わく父を困めしむらうは悪しかりけり

That he was wrong to cross his father thus:

「神よ父を護らせたまへ」 彼れはいひにき 「あはれ父のえ知らてあれし

“God bless him!” he said, “and may he never know

我が經つる憂き難儀を」 され彼れは面を

The troubles I have gone thro'!” Then he turn'd

そむけり され(竟に)みまかりにき あはれ幸なこそや 我れは

His face and pass'd——unhappy that I am!

そは死まれ今 大人よ 我子をわなみにとらせたまへ 何故となれば

But now, Sir, let me lave my boy, for you

大人は此の兒を不人情の兒とならせたまはん 此の兒(竟に)亡き父なまびきすみ

Will make him hard, and he will learn to slight

らうしむことを學ばんぞらん さて又ドラ女を元に復し
His father's memory; and take Dora back,
な入ての事を皆元のやうにあらせてた入」と
And let all this be as it was before.

▲「ウイラムは逝りし時云々夫ウイラムは死に瀕みて天をも怨みず人をも怨みず
してみまかりにき、又我れ(メーリー)を娶りしために大人の勘氣を受けにしをも悔
いず、彼れの曰はく「メーリーよ御身は貞實にして能く我れと艱苦を共にせり、我れ御
身を妻とせしことを悔ゆる能はず」と。▲「メーリーが歎歎して亡夫が遺言を語る
の状、ちのづから言外に溢れたり。▲此の見(竟に)亡き父を云々、こは前段に見え
る、彼の人我が子に無情を教へ、また其の母をあるそかにすることを教ふべければ
といへると同じ意よりいでたるなれど、前には母をといひ爰にては亡き父をとい
ふ、作者の用意の精緻なるを玩味すべし。

かくなんメーリーのいひけるほどにドラは面をかくしつ
So Mary said, and Dora hid her face

そのそばに まはしは室のうち間然たりき
By Mary. There was silence in the room;
わがてだしむけに翁はナリ泣きに泣きいだしつ
and all at once the old man burst in sobs:—

▲all at once はいつも突爾の義。▲burst は前にも見えたり、いつも突然の義を
含む、又我れ知らず物することになりふ。こゝは堪へかねて我れ知らず泣きいだせる
なり。

嗚呼我れちもまらぬ 過ちぬ 我れこそは我が子を殺しつれ
I have been to blame—to blame. I have kill'd my son.
我れこそは彼れを殺しつれ さはれ彼れをば愛せしぞや いとをしの我が見や
I have kill'd him—but I loved him—my dear son.
神と我れを想したまへ 我れ過ちぬ
May God forgive me!—I have been to blame,
嗚接吻せよ 我が見らんと
Kiss me, my children!

如何に腸を斷つ老父が悔恨の僅々數句のうちに寫し盡くされたるかを見よ。

▲「さはれ彼れをば愛せしぞや」の一句は老翁が肺肝底より沸きいてたるの語、さきに過酷と見られたりし處措は、其の實此の慈父が愛子に對する切愛の反動に外ならざりしなり。▲「喃接吻せよ」云々、姪をも嫁をも今は我が實の子ぞと頑固なる翁の我も折れ意地も摧けたる、一しほに哀れなり。

この時ふたりの女らは翁がうなちに

Then they clung about

からみつきつ

あまたび彼れに接吻しつ

The old man's neck, and kiss'd him many times.

さるほどに男の意地は悉く悔いに摧けり

And all the man was broken with remorse;

さるほどに慈愛の念は百倍に戻り來たりし

And all his love came back a hundred-fold;

さつ凡そ三時がほどは孫をばさうださてマノリなきや

And for three hours he sobb'd o'er William's child

ウィリアムを思ひてつひ

Thinking of William.

此の段とところゝ義訓したれば原詞をよく讀みて會得すべし。

かくて此の四たりは諸共に

So those four abode

一ひ家のうちに住みけり

さるほどに年の

Within one house together; and as years

進みのけるまに

メーリーは又のいまを迎へけるが

Went forward, Mary took another mate;

ドラは死ぬるまへも嫁せざるけりや

But Dora lived unmarried till her death.

末一句餘韻爛々たり。

評釋の五

二三八

アヂソンの諷刺文

英國散文の名家として、今もなほ推重せられ、普く我が國の英語學生にも知らるゝは、エリザベス朝の著述家にては、上に評釋せしベークソン所謂十八世紀の詞客にてはアヂソン、ジョンソン、スウィフトの三名家なるべし。就中アヂソンは其の爲人も温厚にして、其の文はた雅馴、喩へば彼の徳川期に行はれし雅俗折衷の文章に似て平易通俗ながら、些も卑野に流れざる所、尤も愛すべし。更によろこぶべきは其の思想の穩健にして、偏僻の弊なきことなり。最も諷諧の文に長せり、面白くをかしく世を諷して、悠々迫らざるうちに、おのづから誨味啓蒙の力あるはアヂソンが特詣なり。

アヂソンは一千六百七十二年に生まれ、同七百十九年に逝り、今よりは殆ど三百年ばかり前の人なり。幼きころはチャーチターハウスといふ學舎にて修學せしが、後にオックスフォード大學に入りて業を卒へ、さて後幾ばくもなく、時の國王の爲に頌徳の詩を作りて献りし功にて、一年三百ポンドの年俸を給はり、剩へ歐洲大陸漫遊の費をも賜與せられき。アヂソンが閑雅なる天性と優美なる文才とは、當時歐洲第一の文華の國たりし佛蘭西、伊太利を歴遊せしが爲に、いよく圓美の致を極めき。彼れは恭謙寡黙、何事につけても他と争ふことを好まざりし人なり。政治上の意見は自由改進黨の主義なりしが、反對の黨人をも口ぎたなく攻撃せしことは絶えてなきゆゑ、如何なる黨派にも惡まれずして、改進黨大敗の秋にも衆議院の議員に再選せられ、該黨全盛のころとなりては、累進して國務總官の高官までも經登りき。こはもとより節を二三にせしが爲にあらず、其の自然の愛敬と温雅なる天性との然らしめし所なりき。

アヂソンは博學多才なりしと同時に、廣く人情世態に通じ、俗に謂ふ通人の高雅なるものに似たり。我が化政度の作者中に似たるを求むれば、人柄もどことなく柳亭種彦の面影ありて、文もまた時としては幾分か似たる所あり、但し種彦の文章は概して遊戯三昧の趣あれども、アヂソンの本願は俗を誨へ蒙を啓くにありて、その諷刺の鹽梅は故成島柳北が『朝野』の雜錄に似て、更にはるかに巧妙なるものなり。

其の著述は種々あれども尤も世にもてはやさるゝは『スペクテーター』、『觀察者』といふ定期刊行物なり。こは彼れが其の友スチールと共に發行せし鈴木田時代の『讀賣新聞』に幾らか似たる刊行物にて英國の社會的新聞の開祖とも稱すべきものなり。毎朝の發兌にて六百三十五號まで續きたり。専ら誠世諷俗の文章を掲録せるものにて主筆の本意は英國の領外に非徳と蒙昧とを驅逐せん爲に外ならざりしなり。該誌に載せたるアチソンが文章は種々雑多にて堂々たる長論文もあればをかしき滑稽の諷刺文もあり考證に類する文章もあれば端物小説に似たる物語もあり輕妙なる寓意譚もあれば洒々落落たる論文もあり。假に種々の人物をつくりて眞に實在せる人の如くに狀寫し殆ど寫實小説を讀むが如く思はしむる文もあれば嚴肅なる倫理を談じてそらに讀者をして襟を正さしむる文もあり。まことに千變萬化の筆前後に其の比類稀なりとす。而も要するに其の旨は皆修身齊家の訓、陋野を懲治し、高雅を扶掖し、肉慾をいやしみ、道義を獎勵するの意にいでざるはなし。まかれどもアチソンの意見は曾て實際と離るゝことなし、すなはち世間的道義論にして哲學としては高遠ならざること勿論なり。されば其

の宗教思想の如きも今日の目をもて見れば、毎に幾分の俗臭を帯べり。彼れは屢々未來を説くも、決して現世間の禍福を忘れず、否、むしろ未來世の幸福を餌として現世間の善行を釣りいださんと力むるものゝ如し。彼れはいへらく、現世にての人々の務は知るにあらで、行ふにありと、其の實踐躬行を旨とせる、儒學と一なり。論者動もすれば之れを失としてアチソンが想の高からざるを譏れども、通俗雜誌の記者としては、蓋し止むを得ざる所なりしならん。

アチソンは其の存生中には詩人として名高く、劇の作家としても知られたりしが、今日の標準より見れば、此等の作には殆ど稱すべきほどのものなし。所詮彼れは散文の名家にして眞の詩人にはあらず。吾々のアチソンに於て最も服する所は、其の觀察の精細なること、其の頓智滑稽の上品にして自在なること、其の思想の穩當公平なること、其の措辭の巧妙なること、のみ、而して其の觀察は彼のベリコンの如く抽象的にもあらず、はた其の文章もベリコンの如く高雅に失することなく、平易通俗にして靈妙なる所實にアチソンが文章の特質にしてまた十八世紀文學の特質也。

アチソンが『スペクター』に掲げたる論文、諷刺文、比喩談、戯文等は、とりくにをかしからぬはなきが中にも、とりわけて其の頃の浮靡遊惰なる風俗の見えるをかしきは、つぎに譯する二篇なるべし。其の一は「伊達男が頭腦の解剖」と題し、其の二は「男たらし(媚婦)が心臓の解剖」と題せり、共に遊惰淫逸なる當時の社會を諷刺せるものなれど、筆つきの高雅にして婉曲なるは、此の作者の特得にて、他人の企て及ばざる所なり。但しアチソンの滑稽は我が一九三馬などとは、いたく趣を異にして、専ら含蓄を以て勝るものなれば、深く咀嚼せざれば旨味をさとりがたし。文體は頗る平淡なる雅俗折衷文にして、語法文格なども正しきものなり、勿論下の譯は、そのかたかけをも現するに足らずと知るべし。

伊達男の頭腦の解剖

Dissection of a Beau's Head.

「伊達男」とは伊達を專とする男の謂にて、俗に謂ふキドリヤなり、艶冶郎なり、京傳の

洒落本などに見ゆる遊冶郎に似たるものなれど、彼れは中流(町家)のキドリヤ、これに紳士社會の艶冶郎なり。我が國の例もていは、緋縮緬の襦袢など着るやからなり。近ごろ所謂ハイカラアの昔ぶりなり。

I was yesterday engaged in an assembly of virtuosos, where one of them produced many curious observations which he had lately made in the anatomy of a human body. Another of the company communicated to us several wonderful discoveries, which he had also made on the same subject, by the help of very fine glasses. This gave birth to a great variety of uncommon remarks, and furnished discourse for the remaining part of the day.

右の一節をほゞ語を逐うて譯すれば、左の如し

おのれ昨日、好事家連の一會あそびつらに参したりき、その折列席者の一人が、近ごろ解剖せし人體のことに關して、おまたの奇しき觀察を語りいでしに、他のひとりもまた、同じことながら、つきて、いみじき顯微鏡の助けにても、のせりし種々の不思議なる發見を報じたりしかば、やがて種々の珍らしき批評を生みて、其の日の殘晷の話柄となりき。

まぢめだちて言ひいてたる口吻ながら老練なる落語家の序説を聴くがごとし。はじめより笑諺するは所謂前座の駄洒落なり、アヂソンの滑稽は真面目の裏のをかしみにてえも言はぬ妙味なり。原文を細嚼して、如何に言々の温厚篤實なる紳士の微笑しつゝ低語する面影を映出せるかを見よ。

The different opinions which were started on this occasion presented to my imagination so many new ideas, that by mixing with those which were already there, they employed my fancy all the last night, and composed a very wild, extravagant dream.

その折提出せられしいろ／＼の説は、予が想像にあまたの新しき想念を浮べしめたり、かくてその新しき想念は兼ねて胸にありし他の想念と打混じて、昨夜はよもすがら予が空想を役し、いと／＼荒唐なる夢を醸さしめき。

▲「想像にあまたの新しき想念」云々は、詳しくは、予が想像力を刺戟して、許多の新しき空想を醸しださしめき」といはんほどの義なり。こゝの「想像」といふ語も、末段の「空想」といふ語も、國文にてはおしなべて「こゝろ」と譯して可なるべし、共に心の作用をいふなり、詳しくは「想像を司る心のはたらき」、「空想を司る心のはたらき」と

いふことに、二者同義也。

和漢の寓意談にもかなたのにも、まづはじめは現の事らくし物して、最後に愕然と驚き覺むれば南柯の一夢なりきとやうに巧を弄せる例さはにあれど、そはなかなかのことふりてをかしからず、初めよりむきだしに夢と斷れる筆つきいとちとなびたり。

I was invited, methought, to the dissection of a beau's head and of a coquette's heart, which were both of them laid on a table before us. An imaginary operator opened the first with a great deal of nicety, which, upon a cursory and superficial view, appeared like the head of another man; but upon applying our glasses to it, we made a very odd discovery, namely, that what we looked upon as brains, were not such in reality, but an heap of strange materials wound up in that shape and texture, and packed together with wonderful art in the several cavities of the skull. For, as Homer tells us, that the blood of the gods is not real blood, but only something like it; so we found that the brain of a beau is not a real brain, but only something like it.

予は思ひけらく、予は艶冶郎の頭脳と媚婦の心臓との解剖の席に招かれたりしに、件の品はふたつとも前なる卓上に置かれたりきと。さて予が空想の生みいだせる手術家(外科醫)は許多の精練なる技倆もてまづ前者(艶冶郎)の頭を截開せり、そはふと打見たる所にては、餘の人の頭脳とあなじげに見えたりしが、顕微鏡を適用するに及びて、いと奇妙なる發見をなしぬ。即ち腦髓と見たりしは、實はさるものにはあらで、奇なる一つがねの品を彼の物の形に編みあはせ捲きつけて、顛骨の種々の凹處に驚くべく巧みに詰めこめるなりけり。蓋し希の詩人ホーマアが、神祇の血汐はまことの血にはあらず、幾分かそれに似たる物なりといへる如く、艶冶郎の頭脳も、まことの頭脳にはあらず、只幾分かそれに似たる物たるを知りぬ。

生理上の試験法たる解剖を心性の上に借り來たれる着想、眞個人意の表にいでたり。尤も妙なるは、あくまでも謹厚げなる作家の筆つきなり、事柄いよ／＼をかしうして、語る人はいよ／＼まぢめなり。

希の詩人ホーマアは、古今屈指の大詩人『イリヤム物語』といへるを著して、其のうち
に神祇相闘ふことを記せり。希臘の古神祇は、尋常の人とあなじく、傷して血汐を流すことあり、されど其の血は「アイコル」といふものにて人間の血とは別なりといふこと、彼の物語のうちに見えたり。かゝる滑稽の諷刺文の中にかめしう古典を引用し、尤もらしう粧へる作者のつらつきをかしからずや。

The pineal gland, which many of our modern philosophers suppose to be the seat of the soul, smelt very strong of essence and orange-flower water, and was encompassed with a kind of horny substance, cut into a thousand little faces or mirrors, which were imperceptible to the naked eye; inasmuch, that the soul, if there had been any here, must have been always taken up in contemplating her own beauties.

我が近世の理學者等の多數が、魂の在所と假定せる松子腺は、香水と橙花水との爲にいと鋭くにほひ、且つ肉眼には見えざりし無數のさゝやかなる面(鏡面)だつものに刻まれたる角やうの物質もて圍まれたり、されば魂にして此にありしならんには、必や常におのがつらつきの美しさを打詠むるとにのみ耽りたりしならん。

▲「理學者」の原語 Philosophers 今は「哲學者」と訓ずるが常なれど、昔は醫學者、天文學者などやうの窮理學者をもフィロソファといへりき、本文の場合の如き是れなり。▲「松子腺」とは、脊椎動物の頭腦中にある腺形の物なり、松子に似たるゆゑ、かくは譯せり、人間の靈魂は此の物の裡に住せりといふ説、十八世紀のころ行はれたり。▲「橙花水」も香水の一種。▲insomuch は次の that といふ字と合譯して「されば」又は「さるからに」と訓ずべし、場合によりては「云々なる程に」「云々と思はるゝばかりに」など次の句より訓み戻りてもよし。▲any の次に soul といふ字はぶかれたりと思ふべし。▲taken up は「心を奪はる」又は「耽る」の意。▲beauties と複数に物せるは、美しき目、美しき鼻、眉、口元など、種々に見らるゝゆゑ也。▲contemplating は「瞑想」なども譯す、つくづく」と打詠むる意なり。

此の一段落の可笑味は結句にあり、我れぼめの男女を嘲りて、山鳥のちろの鏡を引き事にするはめづらしからねど、眞面目なる學説を小楯に取りて、自惚子の腸をえぐりたるは面白し。魂の在所といへる松子腺が「鏡だつものもて圍まれたり」とは、自惚子の平生を諷刺し得て痛切なり。總じてアチソンの滑稽は、俗に謂ふ「落」

なり、讀者須からく熟考して、其の諷誠の妙を覺るべし。

We observed a large antrum or cavity in the sinicput, that was filled with ribbons, lace, and embroidery, wrought together in a most curious piece of network, the parts of which were likewise imperceptible to the naked eye.

(つて)前頭部なる一大腔、即ち凹める處を觀察せしに、そはいと珍奇なる一種の網細工風に編みあはせたる飾紐、笹縁、刺繡などをもて充たされたり、是れはたその細き部分は肉眼には見えがたかりき。

▲あくまでも眞面目なる解剖學者の口吻をまねびて、シンシット(前頭部)アントラム(腔)など仔細らしく言ひ做したるところ、をかしみ也。▲「飾紐」「笹縁」のたぐひは虚飾品也、我が國の例もていはば、羽織の裏地に數寄を盡くし、帶又は羽織の紐などに伊達を銜ひ、華奢風流に浮身をやつすたぐひ也。「ニヤケ男の頭腦中には必定かゝる品のみ充滿せらるゝならん、彼れが一念は晝夜かゝる虚飾にのみ傾ければなり」といふ意を、尤も婉曲にいひあらはせるなり。「其の細き部分は肉眼には見えがたかりき」とわざと餘韻を残して逃げたる書きぶり、いと巧み也。

Another of these antrums or cavities was stuffed with invisible billet-doux, love-letters, pricked dances, and other trumpery of the same nature.

他の一腔即ち凹みも、同じく肉眼には見分けがたき艶書、玉章、舞踏會の紙牌、さては同じたぐひの浮きたる品々 (trumpery) もて塞がりたり。

▲billet-doux は佛蘭西語、次の「玉章」と同様に専ら戀の書簡を指す、常は二者同義也、こゝにてはやゝ簡短なる端書やうの艶書を billet-doux と名けたるにや。▲「舞踏會の紙牌」とは舞踏會の番組をまるせる紙牌なり、總べて彼なたの舞踏は、男女ふたりづゝ打連れて踊るなれば、開會に先だちてあらかじめ組合を定むる也。▲pricked とは我れと組合ふべき女の定まりし時に、其の紙牌の番組に、針もて印を附くるをいふ。畢竟踊は人前をつくらふ道具にて、まことは此れを傳手に、みだりがはしき縁邊を求むるなり。▲アヂソンの意は、如何にニヤケ男の腦中のきたなくあさましく、色情又は浮氣又は虚飾などいふ念の外に無一物なるを示すにあり。

In another we found a kind of powder, which set the whole company a sneezing, and by the scent discovered itself to be right Spanish.

(又)他の凹みには散藥やうのものありて、一同を嚏せさせき、そは其の芬にて、^{スペイン}西班牙と知られたりき。

此の段尤も妙なり、一同がおぼえずたぢろぎて嚏せる面持、見るやうなり。▲「^{スペイン}西班牙」とは、其のころの洒落者、半可通などの賞翫せし煙草の一種にて、嗅煙草と稱するもの也。西班牙産を本場物と稱して珍重せり、鼻先にあてゝ嗅ぐまでの贅澤品にて、香のいと高きものとぞ。「^酒醇」とは、まがひにあらざとの意。ニヤケ男などは兎もすればかゝる品を懐中して、芬々たる異臭を放ち、傍人の迷惑を思はぬもの也。

The several other cells were stored with commodities of the same kind, of which it would be tedious to give the reader an exact inventory.

他の種々の凹處にも、同じ様の品あまたありしが、その精細なる目錄をば、讀者に擧示せんは管々しかるべし。

There was a large cavity on each side of the head which I must not omit.

頭の左右に、大なる一凹處ありき、こは(さすがに)説き洩らすまじきものなり。

That on the right side was filled with fictions, flatteries, and falsehoods, vows, promises,

and protestations ; that on the left with oaths and imprecations.

右の方なるは、虚構、追従、詐偽、誓言、約束、分疏などをもて、又左なるは、起請と呪咀とをもて、充たされたりき。

遊冶郎の脳中には、卑劣なる情慾の外は、宿れるものなし、常に婦女をあざむきて我がものとし、ほし、いまゝに弄ばんと思ふ、心のみが盛なる故に、上に擧げたるやうの物のみ頭腦の凹處に充滿せりとなり。▲虚構以下、の文、平々淡々として簡潔なりと雖も、苟も人情に通じたらん讀者は、此の簡短なる乾文字の中に、痴男痴女が相戯るゝさま、相罵るさま、相狎るゝさま、相あざむくさまなど、總じては浮靡狎褻なる當時の社會の鬚髯として浮動せるを見るべし。

There issued out a duct from each of these cells, which ran into the root of the tongue, where both joined together, and passed forward in one common duct to the tip of it.

(さて)件の穴の雙方より、一筋の管さし、いで、舌の根がたに達き、そこにて相合して同一道の管となり、さて舌の尖に達したり。

解剖の順序のいとく、精細なるを見るべし。三馬等の諷刺は鳥羽繪の如く、アチ

ソンの諷刺は油繪の如し。此の段は腦裡の「虚構」追従等が、單に腦裡に存せしのみにあらず、常に口に傳はりし由を諷示せるなり。

We discovered several little roads or canals running from the ear into the brain, and took particular care to trace them out through their several passages.

(又)耳よりして腦髓に流れ入れる種々の小き路、即ち溝(の如きもの)を發見せしかば、其のさまゝの通路を尾ひて、その行くへを探らんと欲し、特別に意を注ぎしに、

One of them extended itself to a bundle of sonnets and little musical instrument.

其の一は一束の小歌集と、さゝやかなる樂器とに達し、

遊冶郎の耳に聞き腦にとめたる事は、如何なる事どもならんと、一きは留意して解剖すれば、耳より腦に入れる溝の奥に、一束の小歌集、浪花ぶし、どい一、はうた、と、ちりとんと、さゝやかなる樂器、三味線、尺八又は月琴などを發見せりとなり。尤も、聞くばかりにはあらず、小歌を作り、樂器を弄しなどして、徒らに遊び暮せるをも諷したり。

Others ended in several bladders, which were filled with wind or froth.

他の諸溝は風と泡とをもて充ちたる種々の膀胱に至りてとゞまりぬ。

他の諸溝の奥には、風(の如き何の益もなき談話)泡(の如き何の意味もなき謔語)ありしのみ。

But the large canal entered into a great cavity of the skull, from whence there went another canal into the tongue.

さもあれ其の中の大なる溝は、頭顱骨の一大凹處中に流れ入り(さて)そこよりまた一溝發て、舌の中に流れ入れり。

This great cavity was filled with a kind of spongy substance, which the French anatomists call *galinatics*; and the English, nonsense.

此の大なる凹處は、海綿やうの物質もて充たされたり、これを佛蘭西の解剖學者等は「ガリメーシヤ」と名け、英國の學者等は謔語といふなり。

遊治郎が腦より發して其の舌に出づるものは、一つとして取るに足る價值なし、其の言ふこと彌と多くして其の價值彌と少なし、すなはち悉く謔語のみ、ムダゴトの

みといふ意。

むねくしく佛蘭西語を取りいだし來て、さも科語らしく見せかけたる、尤もをかし。「ガリメーシヤ」とは英語 nonsense と同義、ムチャクチャ「メチャメチャ」無意義「又は「たはごと」の義也。▲海綿やうの物質云々とは、海綿は能く水を吸ひこむ物ゆゑ、遊治郎の頭腦のクダラヌコトを際限もなく記臆するに長せるを、海綿の水を含蓄せるに喩へたる也。

The skins of the forehead were extremely tough and thick, and what very much surprised us, had not in them any single blood-vessel that we were able to discover either with or without our glasses;

前額の皮は甚しく剛うして厚かりき、さていたく驚かれしは、件の皮膚のうち唯一の血管をだに發見する能はざりしことなり、顯微鏡を用ふるも、將用ひゆるる。

from whence we concluded, that the party, when alive, must have been entirely deprived of the faculty of blushing.

さるによりて一同断じけらく、必定此の者は、其の世に在りし間、全く顔を赧かほする作用はたらきを缺きたりしならんと。

半可通が鐵面皮を罵り得て餘蘊なしといふべし。▲partyといふ語かゝる場合には、此の輩たぐひなど譯しても可也、但し必しも、複數たぐひの義に解するの要なし、彼の法廷語にて被告原告をpartyと稱すると同用法なればなり。

The os cribiforme was exceedingly stuffed, and in some places damaged with snuff.

篩ふるい狀骨は甚しく填塞せられ、且つ處々嗅煙艸かいえんそうの爲ためにてそこなはれたり。

▲篩狀骨とは嗅神經の纖維が通過せる骨なり。▲この一句は、半可通が伊達たての爲に嗅煙艸を用ふるの甚しきを嘲り、彼れの如く、断えず用ひなば竟には嗅神經に損害を及ぼさるを得ざるべしと笑ひたるなり。其の他香水又は薰物を用ふることの甚しきをも諷せり。

We could not but take notice in particular of that small muscle, which is not often discovered in dissections, and draws the nose upwards, when it expresses the contempt which the owner of it has upon seeing anything he does not like, or hearing anything he does not

understand.

さて彼の稀にのみ剖拆中に發見せらるゝ鼻を引き揚ぐる小筋肉につきては、特に意を留めて檢せざるを得ざりき、件の筋肉は其の主(鼻の持主)がその好まざる物を見、若しくは會得せざることを聽きて蔑如の意を表する時、鼻をうごめかすに用ふる者なり。

此の段嚴密に語を逐うて訓ずれば解しにくくなる恐れあれば、わざと末句だけは義訓せり。▲凡そ半可通の氣障きさうなる心術は、兎角に鼻の先さきにぶらつくものなり。我が國の俗言に「鼻であしらふ」又は「鼻うごめかす」高慢が鼻にぶらつくなどの語あり、思ひあはせて此の段の隱微を味ふべし。▲could not butは「つゝも」「何々せざるを得ざりき」と訓ずべし。

I need not tell my learned reader, that this is that muscle which performs the motion so often mentioned by the Latin poets, when they talk of a man's cocking his nose, or playing rhinoceros.

我が博覽の讀者に予は敢て告ぐるを要せじ、此の筋肉は、彼の羅甸詩人等が人

の鼻を勃起いらすこと、即ち、まねぶことを言ふ折に、いと屢々筆にせる(鼻の)運動はたらきを成さしむる筋肉なり。

此の句の可笑味は今日の讀者には傳へがたし、按ふに、物躰らしく羅句詩人が句中の語を引き來たれる所にあるべし。當時は何事もいにしへを尊崇せし時代とて、取りわけ詩文などを論評するには、必ず羅句の作を例證とせしこと猶こなたにて唐宋の作例、又は『古今』『萬葉』などの例を引合ひきあひに出だすが如し。▲「まねぶ」とは、蔑如嘲侮の意をあらはす爲に鼻をいからすることを、まねぶといふ獸が鼻頭をそりかへらするに喩へたるなり。總べて詩人は、失火といふべきをも「祝融怒る」といひ、「風」といふべきをも「風伯」などいひ、兎角に物に比していふがならひなり、まねぶとは「鼻をうごめかす」といふことに對する慣用譬喩と知るべし。

We did not find anything very remarkable in the eye, saying only that the *musculi amatori*, or, as we may translate it into English, the ogling muscles, were very much worn and decayed with use;

眼には何等の深く注意すべきものをも見いださざりしが、只秋波筋、即ち英語

に譯して斜視いん筋肉ともいふべきものは、たび／＼用ひたりと見えて、痛く磨りへらされ、破れ損じたり、

whereas, on the contrary, the elevator, or the muscle which turns the eye towards heaven, did not appear to have been used at all.

然るに之れに反して、昂起筋、即ち眼を天邊に向かはしむる筋肉は、絶えて用ひられたりとも見えざりき。

半可通が眼は常に美女を斜視するの用にのみ供せられ、曾て敬神、崇天の爲に用ひられたることなし。天を仰ぐは敬虔の念深き者に限る、遊治郎等の曾てせざることなり。

We were informed, that the person to whom this head belonged, had passed for a man above five-and-thirty years; during which time he eat and drank like other people, dressed well, talked loud, laughed frequently, and on particular occasions had acquainted himself tolerably at a ball or an assembly;

聞く所によれば、此の頭腦の主は、三十五年間以上、一個の男おとこと見做されたりき

とか、その間餘の人々にひとしく、飲食し、善装し、高聲に談話し、まば／＼笑ひ、又格別の折々には、舞蹈會もしくは集會などにて、頗る見にくからず振舞ひにきとか。

▲「一個の男云々、嘲り得て痛快也。」▲「飲食し、善装し」以下、よく半可通の平生を簡叙し盡くせり。▲eatといふ語今は現在動詞としてのみ用ふれど、アヂソンの頃には今のateにひとしく、過去動詞にも用ひたり。

to which one of the company added, that a certain knot of ladies took him for a wit.

一座中のなにかし、此の話につきて、さる一團の婦人等が、彼れをば才子視してありし由を語れり。

かゝる卑しむべき遊冶郎も、或種類の婦人等には、才子とも通客とも思ひなされ、存外に悦ばるゝなり。▲certain といふ語は「或」といはんよりは一段確實なる意味を含めり、「さる」も「ある」も國語にては同じなれど、今好譯語を得ざれば假に「さる」といふ言葉を「ある」といはんよりはやく重き意と見做して用ひつ。▲tookは「信ず」「思ふ」「考ふ」などの義に解すべし。

He was cut off in the flower of his age by the blow of a paring-shovel, having been surprised by an eminent citizen as he was tendering some civilities to his wife.

彼れはその男盛りのところに、勦もて毆打せられてみまかりにき、名ある一市人が妻に或慰勸を施しつゝありし折、突然其の夫なる人に襲はれしに因るとなり。

▲surprise は「突然襲ひ驚かす」の義。▲「或慰勸、説破せずして妙なり。」▲flowerは「真盛り」といはん程の義。▲eminent「卓越」の義、こゝは「名ある」と訓じて可なり。

He applied himself in the next place to the coquette's heart, which he likewise laid open with great dexterity.

手術家は、次に媚婦の心臓に着手し、これをもいと巧みに截開せり。

There occurred to us many particularities in this dissection;

此の剖拆中にも、許多の殊やうなる事起こりたりしが、

▲「殊やうなる事ども」とは、ほと「珍らしき事」といはんが如し、「格段なる事」の義也。

but being unwilling to burden my reader's memory too much, I shall reserve this subject

for the speculation of another day.

あまり多く読者の記憶力を困しめんも好ましからねば、こは他日の考案の料に保存し置くべし。

『スベクテートア』に掲げたる原文は、上に訓釋せるよりも、尙二三節がた長きものなれど、管々しく興味無きを、其のまゝ譯し、いださんも要なからんとて省きつ、原文と併せ看ん人怪しみたまふ勿れ。尤も近年出版に成りし教科書類に見えたる此の寫しは、此に譯出せるよりも尙一層省かれたり。

男たらしの心臓の解剖

Dissection of a Coquette's Heart.

「媚婦が心臓の解剖」と題したる諷刺文は、上の戯文の掲げられて後一週日を経て、『スベクテートア』の紙上に出でたり。旨意は前のにひとしく、當時の輕薄なる風俗を

諷するにあり。「媚婦」とは我が國の娼婦若しくは白拍子の如く男の心をとらかし、露ほども誠なうして情深げにもてなすものをいふ、但し娼婦にはあらず。十八世紀のころは更なり、現今の社會にも歐米には「媚婦」といふもの中流上流に夥多あり。蓋し男女混合の交際盛に行はるゝ社會にては、肉をころ賣らざれ、自家の才藝、容色に誇りて、年若き紳士等を掌上に弄び、媚を呈し、情ありげにもてなし、いざといふ場合となりて、俄に之れを打すて、顧ざる浮薄なる女性尠からず。彼等の心術は我が國の藝娼妓などに異なることなし。而して十八世紀の社會は其の最も甚しかりし時にて、當時の交際社會は、一種の高雅なる娼樓ともいふべく、所謂上流中流の貴婦人は、躰のよき白拍子にもたぐへつべし。只其の白拍子と異なる所は、女尊男卑の國柄とて、みづから高く標置し、常に威嚴を保ち、男に媚ぶるにも秋波を第一の武器とし、嬌態を第二の方便とし、自家の品位を下さずして、男性の心を籠絡せしに在り。白拍子の場合にては、男は顧客なるが故に主位を占む、彼れに在りては、所謂媚婦は皆貴婦人なるが故に、男子却りて賓位に立てり、此の區別をわきまへて下の文を味はば、アチソンが諷刺の隱微、掌紋を數ふるが如くなるべし。

Having already given an account of the dissection of a beaver's head, with the several discoveries made on that occasion, I shall here, according to my promise, enter upon the dissection of a coquette's heart, and communicate to the public such particularities as we observed in that curious piece of anatomy.

伊達男が頭脳解剖の件は既に其の折發見せし種々の事柄と共に語りつれば、こゝには約に従うて媚婦が心臓の解剖に及び此の珍らしき一種の解剖術に於て予等が觀得たりし殊なる事どもを報ずべし。

▲ to the public とは「世間に」の義、則ち「世人に報ずべし」の意也。

Our operator, before he engaged in this visionary dissection, told us, that there was nothing in his art more difficult, than to lay open the heart of a coquette, by reason of the many labyrinths and recesses which are to be found in it, and which do not appear in the heart of any other animal.

手術家は此の架空の剖拆に着手せし前に予等に語りけらく、凡そ解剖術のうちにて媚婦が心臓を截開するばかりむづかしきことはなし、その故は、曾て他

の動物の心臓中には見えざる、許多の迷路やうのもの、隠處めくもの、其の裡に見いださるればなりと。

媚婦が心に定操なく、表裏常なく、殆ど端倪すべからざるを諷せんとして、まづ其の心臓の組織を略説して、彼等が行ふ所の變幻極無きは、其の心臓の組織の香の圖の如く、八重櫛の如く、摸索しがたきに基くと做す妙想といふべし。 ▲ visionary 夢裡の解剖なるが故にいふ、架空若しくは夢幻のなぞ譯して可也。

He desired us first of all to observe the *pericardium*, or outward case of the heart, which we did very attentively;

彼れは、まづ第一に心胞すなはち心臓の外被を觀察せよと要めしかば、すなはち細心して之れをなし。

and, by the help of our glasses, discerned in it millions of little scars, which seemed to have been occasioned by the points of innumerable darts and arrows, that from time to time had glanced upon the outward coat;

さて顕微鏡の助けによりて、それが表面に數百萬のいとさゝやかなる傷痕ある

を認めき、この傷は間なく其の外皮上に閃きし無数の箭、投矢などの尖に基けるものなるべきか、

though we could not discover the smallest orifice, by which any of them had entered and pierced the inward substance.

そがかりそめにも内質に透入せし時の孔と見ゆるは、いとく小かなるをだにえみざりき。

好色の男子等が、ちのく媚婦に心を奪はれ、我れはくちの惚れて慕ひ寄れど、只ひとりだに、媚婦がまことの情にあづかりし者は無し。▲「箭、投矢」とは暗に好者が秋波に喩へたるなり。▲俗説に謂ふ小野小町が話などは、上流社會の媚婦の一例なり、九十九夜まで深草の少將を翻弄せし手ぎはは、彼なたの媚婦に於て常に見る所なり。

Every snatterer in anatomy knows, that this pericardium, or case of the heart, contains in it a thin reddish liquor, supposed to be bred from the vapours which exhale out of the heart, and being stopped here, are condensed into this watery substance.

少しく解剖學を心得たる者は皆知る如く、此の心胞即ち心臓の外被の中には、赤味を帯びたる薄き液躰あり、そは心臓より發生する蒸氣が、此の外被内に停められて、やがて凝り做して、水質となれるなりと假定せらる。

Upon examining this liquor, we found that it had in it all the qualities of that spirit which is made use of in the thermometer, to show the change of weather.

此の液躰を試験するに及びて、予等はさとりぬ、こは彼の寒暖計といふものを用ひられて、天氣の變動を表示する、酒精の諸性能をば具備したりと。

此の意表に出でたる落想のをかしみは、説明を加へずとも、下文を読みゆくうちに、ちのづから明瞭となるべし。

Nor must I here omit an experiment one of the company assures us he himself had made with this liquor, which he found in great quantity about the heart of a coquette whom he had formerly dissected.

こゝに語り洩らすまじきは、列席者の一人が、嘗てみづから此の液もて物したりと斷言せる一條の實驗なり、彼れは其が嘗て剖拆せし媚婦が心臓の周邊に

あびたゞしく此の液を發見せりとなり。

He affirmed to us, that he had actually enclosed it in a small tube made after the manner of a weather-glass; but that, instead of acquainting him with the variations of the atmosphere, it showed him the qualities of those persons who entered the room where it stood.

彼は斷證すらく、彼れは現に、そをば風雨鍼にならひて作れる一小管のうちに入れたりしが、(案外にも)そは(尋常の風雨鍼とはちがひ)太氣の變動を知らしむることをばせて、そを置ける室に入來る諸人の資質のみを示したりきと。

He affirmed also, that it rose at the approach of a plume of feathers, an embroidered coat, or a pair of fringed gloves; and that it fell as soon as an ill-shaped periwig, a clumsy pair of shoes, or an unfashionable coat came into his house:

又斷證すらく、そは羽根飾刺繡せる外衣、又は縁飾ある手袋の近寄ればすなはち昇り、醜き假髮ぶぢまなる靴、又は不風流なる外衣の其の家に入り來るや、廳て降りきと。

nay, he proceeded so far as to assure us, that, upon his laughing aloud when he stood by it,

the liquor mounted very sensibly, and immediately sunk again upon his looking serious.

加之、彼れは(更に進みて)彼れそが傍に立ちて聲高に笑ふときは、此の液いちじるく昇上し、さて眞面目なる面地すればやがて忽然と降下せりとまで確言するに至りき。

In short, he told us, that he knew very well by this invention whenever he had a man of sense or a coxcomb in his room.

要するに、彼れは語りけらく、彼れは此の新發明によりて室内なる人々の賢と愚とを毎に詳かに知ることを得たりと。

媚婦のよろこぶ所は華奢と浮靡となり、されば媚婦によるこぼるゝは遊冶の徒にあらざれば輕薄の徒なり。其の友を見れば以て其の人の人柄を知るに足るべし。遊冶、嫵媚の徒は只管無意義笑諛を喜ぶものなり、されば談ずること眞面目となれば擧縮し、碎易す、アチソンが婉曲の筆は彼の輩が弱處を痛刺して精妙なり。

Having cleared away the pericardium, or the case and liquor above mentioned, we came to the heart itself.

かくて心胞、即ち外被^{よくら}並びに上にいへる液脉を取り除きて後予等はいよ／＼
心臓の解剖に着手せり。

▲かゝる場合の *itself* は「心臓の本脉」といはんほどの義なればこゝには「いよ／＼」といふ言を用ひて其の意をあらはさせたり。 *itself* を「其の物」と訓ずるは近ごろのな
らはしなれどいかにや。

The outward surface of it was extremely slippery, and the *nerve*, or point, so very cold
withal, that upon endeavouring to take hold of it, it glided through the fingers like a
smooth piece of ice.

(まがるに)その外面^{うへめん}ことの外平滑^{なまなめ}にて細尖^{さいせん}即ちトガリ^{とがり}たるところいと冷^{ひや}なり
しかば、そを把らへんと力むる程に、さながら滑かなる氷片のやうに、つと指の
間^まをすべりぬけき。

媚婦が心の浮薄冷淡なるを諷刺せるなり。 ▲細尖^{さいせん}とは解剖學上の語、心臓の頂點
の尖りたるあたりを指す。

The fibres were turned and twisted in a more intricate and perplexed manner than they are

usually found in other hearts; insomuch, that the whole heart was wound up together like a
Gordian knot, and must have had very irregular and unequal motions, whilst it was employed
in its vital function.

(つて)纖維は、他の心臓中に、通例發見せらるゝよりも、更に幾層か紛糾錯雜して
纏綿したれば、心臓全體はさながら一箇のゴルヂオス纒^{むす}のやうに捲き束ねら
れたり。さればそが活作用に用ひられたりし折には、一定不規律^{ふたいり}且つ不平等
なる運動をなせりしならん。

此の段はた媚婦の無節操なるを説く、其の定見なうして多情なる性は其の心臓の
組織に見えたりとなり。「浮草やきのふは東^{あづま}けふは西^{よし}なる浮氣心のすこしも定ま
らぬからは、心の臓の組織もこゝに物したる如く、複雑至極の物なるべしとなり。

▲「ゴルヂオス纒^{むす}とは希臘の古事也、昔フリツヤといふ國の王にゴルヂオスといふ
君あり、天神ヂュースといふに、車一輛を獻じ、その柱の傍に其の車を繋ぐとて木皮も
て長き紐を作り、さて軛^{くわ}に結びたるが、其の纒^{むす}堅うして解くべからざりき、さるほど
にヂュース神の託宣ありけり、曰はく此の纒^{むす}を解きほぐし得ん者は全亞細亞に君た

るべしと。後年歴山大王の此の地に來たるや、かゝる纈のときほぐしがたき理あらんやとて、まばらくは手もて試みけるが、やがて佩劔を抜きて只一撃に結び目を切斷し、我れこそはゴルヂオス纈を解きたれ、やがて全亞細亞に君たらんといひけり。此の古事によりすべて紛糾錯雜せる纈のことを「ゴルヂオス纈」といふ間、盤根錯節若しくは「亂麻」といふ意味にも用ふ。

One thing we thought very observable, namely, that upon examining all the vessels which came into it, or issued out of it, we could not discover any communication that it had with the tongue.

一事の甚だ注意すべく思はれたるが、ありき、他なし、こゝに通へる、又はこゝより出でたる一切の管どもを検するに及びて、心の臓と舌との間に、何等の通傳をもえみいださざりしことなり。

媚婦が口にいふ所は一もまごころより出でずといふ意。諷刺のいと婉曲にしてせまらぬうち、おのづから他を慚死せしむる力あるを味ふべし。

We could not but take notice likewise, that several of those little nerves in the heart

which are affected by the sentiments of love, hatred, and other passions, did not descend to this before us from the brain, but from the muscles which lie about the eye.

同じく注目せざるを得ざりし事は、彼の戀慕、怨惡、及び其の他の情慾の爲に動かさるゝ心臓神經の種々が、我が前なる此の物にありては、腦髓よりは來たらずして眼邊の筋肉より來たりしこと是れなり。

媚婦が愛慕、怨惡等は、すべて分別、智慮の結果にあらざりして、目に見たる醜美の感覺にのみ基くといふ意。

Upon weighing the heart in my hand, I found it to be extremely light, and consequently very hollow, which I did not wonder at, when, upon looking into the inside of it, I saw multitudes of cells and cavities running one within another, as our historians describe the apartments of Rosamond's Bower.

手をもて心臓を量り見るに及びて、予は、その甚しく輕やかなること、隨うていと空虚なることをもさとりぬ、そをば訝しとも思はざりき、何となれば、その内部を検するに及びて、我が歴史家等が叙状せる彼のロザモンド姫が林亭の秘

房のやうに、次第に内部に重疊せる無數の胞腔を見つればなり。

▲「ロザモンド姫」は英國王ヘンリー二世の寵姫なり、王其の皇后の嫉妬をおそれて、一大林園中に人知らぬ林亭を設け、そこに姫を棲ませたり、件の林亭の建てかたはいといと不思議なるものにて、譬へば八重襷のやうに造られたり、いにしへの飛驒の匠や物しげんと思はるゝばかりに、室内にまた室ありて入れどもくまことの奥の間に達することなし、すなはち稀有の迷殿なり、故に彼方にて「ロザモンドの林亭」といへば、我が國の「八幡知らず」など、同じ義に解せらるゝ也。こゝにては媚婦が心底の變幻窮なくして端倪すべからざるに喩へたり。▲「胞腔」は「胞」と「腔」と別にして見るべし、共に解剖學の語、胞の形したるもの、腔の如く凹みたる處といふ義。

Several of these little hollows were stuffed with innumerable sorts of trifles, which I shall forbear giving any particular account of, and shall, therefore, only take notice of what lay first and uppermost, which, upon our unfolding it, and applying our microscope to it, appeared to be a flame-coloured hood.

此の種々の空處は、無數の贅具類もて充たされたり、その詳細なる説明は、こゝ

に物することを忍ぶべければ、只最上部にまさきに横はれりしものゝみに注意を下さん、そは開き展べて、顕微鏡を應用するに及びて、火炎色の帽子なりと見られき。

▲「火炎色の帽子」とは當時の風流女等の好みて着用せりし帽子也。火炎色とは橙色のやゝ赤味の勝ちたるをいふ。かゝる媚婦等が念頭に來、往せる事は、總じてタハイもなき事のみなり、美しき衣裳着たし、流行の帽子かぶりたしなどいふ念のみなりといふ意。帽子の色を火炎色といへるは男をたらし、焦れさせんと思ふ下心を諷示せるなりといへる説あり、いかにや。

We were informed that the lady of this heart, when living, received the addresses of several who made love to her, and did not only give each of them encouragement, but made every one she conversed with believe that she regarded him with an eye of kindness:

聞く所によれば、此の心臓の主たりし婦人は、世に在りしころ彼れを戀ひ慕へる種々の男等のいひ寄れるを聽きて、其の人々の皆に未頼もしう思はしめしのみか、かりにも相語りし人皆をして、此の姫、我れに情ありと信ぜしめきと。

▲此の姫我れに情あり云々原文には「情深き目もて我れを見るなりと信ぜしめき」とあり、同義也。媚婦が口さきほどは誰れにも愛想よきをいふ。

for which reason, we expected to have seen the impression of multitudes of faces among the several plates and foldings of the heart:

さるからに、われ人ともに此の心臓の種々の褶折目の間には、面の數百萬の印象を見るならんと待ち設けたりしに、

but, to our great surprise, not a single print of this nature discovered itself, till we came into the very core and centre of it.

大案外にも、さるたぐひの印跡は、其の心核に達しにしまては、只一つだにあらはれざりき。

媚婦は何人にも情ありげにもてなしたりといへば、其の意中の人の無數なりしは思ひやらる、さすれば一定其の心臓面には、無數の戀男の面の印銘せられてあるべしと豫期しつるに、取調の結果は案外なりきとの意。

We there observed a little figure, which, upon applying our glasses to it, appeared dressed

in a very fantastic manner:

さてそこには(心核に)一のさゝやかなる人の姿を見たり、眼鏡を應用するに及びて、さはいと嗚呼なる風躰に服装せりと見えにき。

The more I looked upon it, the more I thought I had seen the face before, but could not possibly recollect either the place or time:

そをながむればながむるほど、前に見し面なりと思ひけれど、いつことも、いつとも、さちもひいて、ちりし程に、

when at length one of the company, who had examined this figure more nicely than the rest, showed us plainly by the make of its face, and the several turns of its features, that the little idol which was thus lodged in the very middle of the heart, was the deceased beau, whose head I gave some account of in my last paper.

竟に、餘人よりも一層綿密に件の姿を取調べをりし列席者の一人が、其の面の格好と其の容貌の種々の特質とによりて、明白に證示しけらく、此の心臓の眞中心に、かく安置せられたる小やかなる本尊は、予が往ぬる日の紙上に語りし

彼の頭腦の持主なりし故伊達男に外ならずと。

浮薄婦人が唯一の意中の人は故伊達男なりと結びたる筆つきをいはず老成なれど、訓釋しては些の旨味もなし、よくノ原文を咀嚼して其の綽々たる諷諧の餘韻を知るべし。

As soon as we had finished our dissection, we resolved to make an experiment of the heart, not being able to determine among ourselves the nature of its substance, which differed in so many particulars from that of the heart in other females.

解剖を終へしや、やがて人々は此の心の臓を試験すべしと決定しき、蓋し他の女性の心の臓とは夥多の要點に於て異なる此の心の臓の本質をば、理論にては到底決論しかねし故なり。

▲ among ourselves 云々とは異論紛出して一決しかねたりといはんほどの義。▲「試験すべし」とは化學的實驗を行ふべしといふ義。

Accordingly we laid it into a pan of burning coals, when we observed in it a certain salamandrine quality, that made it capable of living in the midst of fire and flame, without

being consumed, or so much as singed.

かゝりければ予等はそを炎々たる石炭の皿のうちに置きぬ、その時一同は觀察せり、此の心臓には、一種山椒魚的性能ありて、たとへ火焰の真中にあるも、焼き盡くさるゝことなく、はた焦さるゝことだになく、依然として生存し得べき性質あることを。

これも浮薄女子が心の冷やかなるをいふ也、又其の情熱の爲に我れを忘るなどいふこと無きを刺る。こゝに「火焰」といふは専ら戀情の切なるを指す。

As we were admiring this strange phenomenon, and standing round the heart in the circle, it gave a most prodigious sigh, or rather crack, and dispersed all at once in smoke and vapour.

人々が此の奇なる現象に駭歎して、件の心臓の周邊に環立してありし折から、そはいとあろろしきうめき聲、否、むしろ破るゝ如き響を發しつゝ、さて突然と煙と化し、湯氣となりて八散しき。

This imaginary noise, which methought was louder than the burst of a cannon, produced

such a violent shake in my brain, that it dissipated the fumes of sleep, and left me in an instant broad awake.

予が夢心に大砲の響よりもすさまじくと覺えし此の架空の物音は、我が頭腦にいと激しき振蕩を生ぜしかば、眠の霧はたちどころに消散し、予はやがて全く目ざめき。

醒め來たれば南柯の一夢といふ結末は平凡なれど、前以て夢と斷りたるだけに大人びたり。總じてアチソンの諷諧は、其の筆致と共に、從容としてせいこまじからざる所に不可言の妙あり、一々は品評せず、また品評せんとするも能ふまじき也、看ん人之れを諒せよ。

扇子の使用法

Exercise of the Fan.

此の一篇は前の二篇にひとしく頗るよくアチソンが婉曲なる諷刺を表示するに

足るものなり。其の旨意は、當時の上流婦女が時尚の扇子を弄びて媚惑の具とし、種々の妖態を事とせるを笑へるなり。すなはち是れも媚婦を諷刺したる文章也、前に釋したる文と相照らして味は、所謂媚婦の情態を髣髴するに足るべし。總じて本文中に見えたる諸般の舉動はいさゝか誇張して寫しだされたれど、要するに、當時の貴女等が實際相ひきりて行へりし所にて、一として寫實的ならざるはなし、同代の人が此の文を読みし時には恰も文化、文政の江戸市人が京傳、三馬等の諷刺文を読みし時とほゞ同様の興を感ぜしなるべし。されども其のころの時様を知らずして只文字のまゝに卒讀しゆかば、或は何等の妙味をも感ぜざるべきか、こは蓋し諷俗文の多少まぬがれがたき不幸なるべし、而も予が前段に説明せる所によりてアチソンが文章の特質を了解し、十八世紀の風俗を追想し、而して善く此の文を味はば諷刺文の極意を研究するに於て裨益する所尠からざるべし。原文は例の如く平易雅淡、表はあくまでも眞面目にして裏には洒脱の滑稽あり、而して諷刺の間殆ど些の惡意をもさしはさまざる所、實に此の作家の特得なり。

I do not know whether to call the following letter a satire upon coquettes, or a

representation of their several fantastical accomplishments, or what other title to give it; but as it is I shall communicate it to the public.

予は左の寄書を媚婦メイトに於ける諷刺と名くべきか、又はろが種々の嗚呼なる藝能の記事と呼ぶべきか、はた如何なる名稱を與ふべきか知らず、さけれ只ありのまゝに世に示さむ。

『スペクテーター』の主筆として勿躰ぶり、大人ぶりたる口吻いとをかし。みづから物したるを寄書のやうにもてなして、かくは前書まへがきしたるなり。

It will sufficiently explain its own intentions, so that I shall give it my readers at length, without either preface or postscript.

その旨意はちのづから明かなるべければ、序も附書つけがきもせて、全文を讀者に供すべし。

此の前書の口真似ならねど、本篇は文章平易にして、旨意もほと／＼明かなれば、成るべく細釋を略き、又評言をも省くべし。

“Mr. Spectator,

“Women are armed with fans as men with swords, and sometimes do more execution with them.

觀察者足下 女子の扇をもて武器といたし候ふは男子の劔に於けると一般の儀に候へども、而も時としてはそれをもて一層の殺傷をいたし候ふとあり。婀娜たる女子が一本の扇子を利用して頻に媚態を凝らすときは男子の惱殺せらるゝもの數を知らずといふ意を四角ばつていひいでたるところ、例のをかしみ也。

To the end, therefore, that ladies may be entire mistresses of the weapon which they bear, I have erected an Academy for the training up of young women in the Exercise of the Fan, according to the most fashionable airs and motions that are now practised at court. かるが故に予は婦人たちをして其の携ふる武器の完全なる達人ニキルヤクたらしめん爲に、方今宮中にて行はるゝ最も时尚的タイムリッシュなる風格作法エラスモーションによりて年少なる女性達に、扇子の使用法を傳授せんと欲し、一の學校を設立いたし候。

扇子を弄して媚を銜ふことの上流女子社會に流行するを諷刺せんとして、扇子使用法、學校を設立せる者の廣告を擬造し來たる、奇想といふべし。

The ladies who carry fans under me are drawn up twice a day in my great hall, where they are instructed in the use of their arms, and exercised by the following words of command:

Handle your Fans,

Unfurl your Fans,

Discharge your Fans,

Ground your Fans,

Recover your Fans,

Flutter your Fans.

予に就いて扇子を携ふる婦人たちは一日に二度予が家の廣堂に排列してその武器の用を學び且つ左の號令によりて傳習に従事することに御座候。

扇を把れし

扇を開けし

扇を發射せし

扇を攔けし

扇を復せし

扇をはたしかせし

By the right observation of these few plain words of command, a woman of a tolerable genius who will apply herself diligently to her exercise for the space of one half year, shall be able to give her fan all the graces that can possibly enter into that little modish machine. これら少許の平明なる號令を守り候はゞ、凡そ半ヶ年間その練習に勉勵せん相應の才ある女子は必ずや其の扇に此の小やかなる風流器の領し得べき一切の妙趣を與へ得べく候。

以上いづれも根も葉も無きこしらへごとなるを、いかにまことらしく、尤らしく、真にさる講習所出來たるかと思はしむるやうに物したる筆つき、老練なり。尙以下の記事を熟讀せば、諷刺の趣味次第に瞭然たるべし。

“But to the end that my readers may form to themselves a right notion of this exercise, I beg leave to explain it to them in all its parts.

さりながら讀者諸君をして正しく此の練習の旨を解せしめんが爲に、希はくは更に詳細なる説明をなすことを許容せられたく候。

When my female regiment is drawn up in array, with every one her weapon in her hand, upon my giving the word to Handle their Fans, each of them shakes her fan at me with a smile, then gives her right-hand woman a tap upon the shoulder, then presses her lips with the extremity of her fan, then lets her arms fall in an easy motion, and stands in readiness to receive the next word of command.

我が女隊がもの／＼其の武器を手にして整然と排列いたし候ふや、予が扇を把れいと號令するを合圖に、もの／＼一齊に嫣然と打笑み、予に向かひて扇を打揮り、そが右手なる女子の肩をそと打ち、さてもの／＼扇の端もて一齊にそが唇頭をおさへ、やがてまなやかに武器を下して次ぎなる號令の掛けらるゝを相俟ち候。

當時宮廷若しくは盛會の席に臨めば、恰もかくの如き光景を見ること常にありし也。彼等貴婦人等はもとよりいひあはせて講習したりしにはあらねど、流行の自

然の結果として、殆どいひあはせたらんやうに同じさまの媚態を物せり、平生講習などせるにやと思はるゝばかりなるが、かたはら痛さに、斯くは訓練に擬して刺れるなり。

All this is done with a close fan, and is generally learned in the first week.

以上はすべて閉ぢたる扇をもて物することに御座候、而して最初一週日間に習ひ得るをもて通例といはし候。

再釋すれば以上の使用法などは、如何なる交際なれぬ少女にても、苟も交際場へ出て來るほどの者は行ふ所なれど、以下の巧妙なる嬌態に至りては、老練の媚婦にあらざれば能し得ぬところといふ意。これより以下の文、尤も作者の特色を現す。

“The next motion is that of Unfurling the Fan, in which are comprehended several little flirts and vibrations, as also gradual and deliberate openings, with many voluntary fallings asunder in the Fan itself, that are seldom learned under a month's practice.

その次ぎは扇をひらく法に御座候、此のうちには種々の細き振りかた、顛はせかたなども含まれをり、又次第にゆる／＼開く法、かねては自然にハラ／＼と

開かする法なども有之候、これは一ヶ月間の實習にて習ひ得ることは稀に候。
 This part of the exercise pleases the spectators more than any other, as it discovers on a sudden an infinite number of Cupids, garlands, alters, birds, beasts, rainbows, and the like agreeable figures, that display themselves to view, whilst every one in the regiment holds a picture in her hand.

此の段の練習は他の何れよりも観者を悦ばすること一層に御座候、蓋し突如として無数の戀の神花かづら、祭壇、鳥、けもの、虹、さては同じたぐひの面白き畫どもを發現いたし候ふが故なり、こは隊伍中の各人が其の手に一畫圖を持する間、一時に目前に顯はるゝ所に御座候。

戀の神以下は、扇面に畫きたる畫様をいふ。戀の神はキューピッドといふ盲目裸体の童神なり、手に弓矢を携ふ。此の矢にあたるものは戀慕の闇に迷ふとなり。此の神を盲目としたるは「戀の闇」といふ比喻なり。▲「祭壇」或は「供物壇」とも譯す、神に供物をそなふる時に用ふる机又は臺をいふ。

“Upon my giving the word to Discharge their Fans, they give one general crack, that may

be heard at a considerable distance when the wind sits fair.

さて扇を發射せしむの號令を與へ候ふや、彼等は一齊に凜然たる響を發し候、これは風向よろしき日などには、いみじく隔たれる處にても得聞かるべく候。

This is one of the most difficult parts of the exercise; but I have several ladies with me, who at their first entrance could not give a pop loud enough to be heard at the further end of a room, who can now Discharge a Fan in such a manner, that it shall make a report like a pocket-pistol.

此の段は使用法中のいとくむつかしきものゝ隨一に候へども、予が門下なる若干の婦人は、其の入門の當時には、室の極端にて聞くに足らん音をだに得成さず候ひしが、今は懷中ピストルのやうなるいみじき物音を成さん程に能く其の扇を發射し候。

扇子を使用することに熟れたる者が半無意識にして物する種々の媚態を、物々しく教授するやうに説き來たる所、此の諷刺文のをかしみ也。▲「凜然たる音」とはバチリといふ音なり、我が國人が扇を開閉してバチリと音さすると同様の所爲に

て、煙草を吸ひなれたる者が指頭にて煙管を弄ぶたぐひなるを、それを替古せでは叶はぬことのやうに物々しく説けるゆゑにをかしみ生ず。此の般諷諧のあぢはひは翫味してみづから知るべし。

I have likewise taken care (in order to hinder young women from letting off their fans in wrong places or unsuitable occasions) to show upon what subject the crack of a fan may come in properly.

予はまた(あらぬ場處、さてはふさはしからぬ場合に、若き婦人の扇を發射するをといめんとて)扇の憂然は如何なる事柄に適當するかを頗る留意して教示いたし候。

按ふに、當時の婦人等が扇を鳴らししは幾分か暗號の氣味ありしなるべし、例へば他の服裝をそしめる時、又は「看一看せよ、あの人の風采は可憐ならずや」とか、又は其の他何事かを相知らせん爲に扇を鳴らししことあるべし。然るに交際なれぬ若き婦人などは、かゝる例を知らず、只人真似に意味も無く扇を鳴らすことあり、かくては上流の風儀に叶はずと、例のまかつめらしく教授の一ヶ條としたるがをかしみ

なり。

I have likewise invented a fan, with which a girl of sixteen, by the help of a little wind which is enclosed about one of the largest sticks, can make as loud a crack as a woman of fifty with an ordinary fan.

予はまた新に一扇子を工夫いたし候、その最大なる骨の一には少許すこしばかりの風を含ませ置き候へば、十六歳の少女もその助によりて尋常の扇をもてる五十歳の婦人のに同じきすさまじき響を發し得べく候。

此の段はさほどに扇を鳴らすことが大切なる時尚ならば、寧ろ器械ぞかけの扇子を用ひなば手輕なるべしといふ意を婉曲に物したるなり。

“When the fans are thus discharged, the word of command in course is to Ground their Fans.

扇のかく發射せられ候ふや、次ぎに來たらん號令は扇を擱おろけいにて候。

This teaches a lady to quit her fan gracefully when she throws it aside, in order to take up a pack of cards, adjust a curl of hair, replace a fallen pin, or apply herself to any other

matter of importance.

二九二

こは婦人たちが骨牌の一組を取りあげ、又は愛敬毛を整へ、又は落ちたる留針を元の如くし、さては其の他あらゆる緊要の事どもをせん爲に、扇を傍へ投げやる時、そを志なやかに物するの法を教ふるものに御座候。

軽々貴婦人等が媚態をかぞへ來たる所、却りて妙。緊要の二字全幅を諷し得て輕妙。

This part of the exercise, as it only consists in tossing a fan with an air upon a long table (which stands by for that purpose) may be learnt in two day's time as well as in a twelve-month. 此の段は只態致よく其の扇を豫め其の爲に置かれたる長卓子の上に投するに過ぎざれば十二ヶ月間にて、將た二日間にて、習ひ得らるべく候。

“When my female regiment is thus disarmed, I generally let them walk about the room for some time; when on a sudden (like ladies that look upon their watches after a long visit) they all of them hasten to their arms, catch them up in a hurry, and place themselves in their proper stations upon my calling out Recover your Fans.

我が女隊が斯く素手と相成りたる時、予はまばらく彼等をして室内を逍遙せしむるを通例といたし候、やがて突如として、猶彼等が長坐の後急、に其の懐中時器を見るがごとく、一同急ぎ走り戻り、あわて、其の武器をとらへ、さて予が扇を復せいと呼ぶに及びて、其の正當の位置に復し候。

此の段は、た時尚を直寫す、當時の婦人等がいひ合はせたらんやうに自然に行へる所を取りて、修練の後に行ふこと、せるがをかしみ也。

This part of the exercise is not difficult, provided a woman applies her thoughts to it. 此の段の修練は心を用ひて習ふときはむづかしきものにあらず。

“The Fluttering of the Fan is the last, and, indeed, the masterpiece of the whole exercise; but if a lady does not misspend her time, she may make herself mistress of it in three months. 扇をはたかすることは最後の法にして、實に全修練中の奥ゆるしに候へども、若し時をむだにせずして、學習いたし候はば、多分三ヶ月内にて通達し得らるべく候。

I generally lay aside the dog-days and the hot time of the summer for the teaching of

this part of the exercise; for as soon as ever I pronounce Flutter your Fans, the place is filled with so many zephyrs and gentle breezes as are very refreshing in that season of the year, though they might be dangerous to ladies of a tender constitution in any other.

予は通例狼星日及び夏の暑き間をば此の部の練習に取りのけちき候、其の故如何となれば予が扇をはたかせいと命じ候ふや否や、ちびたらしき微風と涼風と忽ち室内に充滿いたし候儀ゆゑ、暑き時候にこそ頗る爽快なるものに候へど、他の季節には或は孱弱き躰質の婦人などに危険これあるべくやとぞんぜられ候ふためなり。

危険の二字點じ得て妙。

“There is an infinite variety of motions to be made use of in the Flutter of a Fan: there is the angry Flutter, the modest Flutter, the timorous Flutter, the confused Flutter, the merry Flutter, and the amorous Flutter.

そもく扇のはたきかたの儀は實に千差万別にして、其の用法くさく有之候、例へば腹立たしげなるはたきかた、温淑げなるはたきかた、怯けたる

かた、ちどつき狼狽へたるかた、嬉しく樂しげなるかた、情ありげなるかたなど。

Not to be tedious, there is scarce any emotion in the mind which does not produce a suitable agitation in the fan; insomuch, that if I only see the fan of a disciplined lady, I know very well whether she laughs, frowns, or blushes.

簡短に申候はんに、凡そ人心の感動にしてそれに適當せる搖動を扇子に現せざるものは殆ど無之候、例へば予などは斯道に熟練せる貴婦人の扇だに見いたし候へば、其の人笑へるか、顰めるか、將た赧顔せるか、容易に判知し得る程に御座候。

婦人等が其の場の躰裁をつくらふため、俗にいふてれかくしの爲に扇を利用する鹽梅を極めて婉曲に諷嘲せるなり。平安朝の貴婦人等が如何に繪扇を利用せしかを想像せば、思なかばに過ぐるものあらん。

I have seen a fan so very angry, that it would have been dangerous for the absent lover who provoked it to have come within the wind of it; and at other times so very languishing, that I have been glad for the lady's sake the lover was at a sufficient distance from it.

予は嘗て甚しく立腹したる扇を見て候ひしが、そは此の珍事の原となりし不在の情郎が、若し其の風下にちかづき候はば頗る危険なるべしとぞんぜられし程なりき、又嘗て觸らば落ちんやうにいとく力無げなるをば見受け候ひき、されば予は其の婦人の爲に、おはれ其の情郎たらん人の遙かに隔たりてあれかしと祈り候ひき。

人を主とせず扇を主としたるは妙也、諷刺の婉曲を味ふべし。▲Languishing はいとく力無げなるをいふ。かゝる折には男心の癖として間々自惚心を起こし、此の女我れに情ありなど思ふならひなれば、當の婦人が思はぬ迷惑を蒙ることあるべし、其の情郎たらんもの、傍にぬこそ當婦人の爲なるべけれとなり。此の解はデイトン氏の解に據りたるなれど、尙聊かうなづきがたき節あり。或は languishing を單に「力無げに」と譯して、愁然たる婦人の形容とせば如何。さすれば此の一句の解下の如くなるべし。曰はく、予は此の婦人の情郎のあたりにあらずらんを願ふ、何となれば若しかゝる折に情郎來たらば此の婦人或は得忍びかねて、稠人中をも顧ず如何なる愁歎場を現出し來たらんも圖りがたければなり、云々。尙再

考すべし。

I need not add, that a fan is either a prude or a coquette, according to the nature of the person who bears it.

申すにも及ばざる儀に候へども、扇は其を携ふる人々の品質次第にて、貞女ともなり、媚婦とも相成候。

又人を主とせずして扇を主とす、諷刺文の本領。▲Prude とは媚婦の反對、力めて行儀を粧ひ貞淑を粧ふ女をいふ。必ずしも褒美の稱にあらずと知るべし。但し女の品格を上下するは女自身の爲人にあり、扇に罪もなく咎も無しと、扇の爲に餘地を存したる筆致、何でも無きことのやうなれど、老成の筆法なり。

To conclude my letter, I must acquaint you, that I have from my own observations compiled a little treatise for the use of my scholars, entitled, The Passions of the Fan, which I will communicate to you, if you think it may be of use to the public.

さて終に臨みて諸君に申しあぐべきは、予は自身の觀察に基きて門弟等の用にとて「扇子の情欲」と題したる一小論文を編纂いたし候ふが、此の書の若し

世間にも入用あるべう思し召され候は、予はそれを諸君にもお傳へ申すべく候。

I shall have a general review on Thursday next, to which you shall be very welcome if you will honour it with your presence. — "I am," etc.

(又)次の木曜日には總ざらへを行ひ候ふ筈に有之候、諸君若し臨場の榮を賜はり候はば、謹みて歓迎仕るべく候。某頓首。

▲I am, etc. は彼なたの書簡文例、etc. は「等」の義、「予は足下の順僕」云々の語を略したるなり。こゝには某頓首と義譯せり。

“P. S.—I teach young gentlemen the whole art of gallanting a fan.”

追啓 予はみやびやかに扇をやりとりするの全法をも年少の紳士がたに教授いたし候。

婦人に對する諷刺一轉して年少紳士に及ぶ、輕妙。P. S. は羅句語 post scriptum の略「追啓」の義。

“N. B.—I have several little plain fans made for this use, to avoid expense.”

注意 費用を節するため無地の扇いろ／＼備へ置き候。

一結妙といふべし。總じて流行、時尚は驕奢を銜ふを主とするものにて費用の問題は提出すべからざる筈なるゆゑ、此の一句矛盾を極む、隨うてをかしみ一倍す。

讀者よく／＼此の一文を通讀再讀せば、諷諧の本意を會得するに庶幾からん。▲N. B. は nota bene の略「善く注意せよ」の義。

評釋の六

ウオオヅチオスの抒情詩

其の詩題の斬新なる、其の思想の温雅なる、其の觀念の深邃なる、其の詩人の天職を意識せる等の點に於いて、英國詩界の革命家と崇められ、一時はブルテール、ポープ、シルレル、レッシング等をすら凌駕すとまでに稱へられしウイリヤム、ウオオヅチオスは西紀元一千七百七十年英國カムバアランド州なる一村に生まれ、同八百五十年に逝りき。彼れは幼きより多情多感にして自信の念頗る強かりき。後年其の甥の需めに應じて自家の經歷を叙せる文中の一節にいはいはく、我が母常にいはいれたるは我が子等五人の中ウイリヤムばかり生ひさきの心にかゝるはなし、彼れは善事にてか悪事にてか遂にいぢむるきものとなりぬべしと。母をしてかばかり心を痛めしめたりしは我が心の執拗に、氣まゝに、過激なりければなり。今だに記臆すべし、ニスなる祖父の家に往きける時、かりそめなる侮辱を受けたるより自殺せんと企てしが、白刃を見るに及び心おくれして止みき。また或時、兄リチャードと同じ家に

行き、客の間にて獨樂を弄びし折、壁上にかけ並べたる家族の畫像を見、兄に向かひ、其の一を指して、御身鞭もて此の婦人の像を破らずやといふに、兄否みければ、我は直ちに鞭をあげて、其が下着のあたりを貫きたり、云々と。執拗と云ひ、氣まゝと云へば不徳に近けれど、其の多感にして自信強き氣質は、既に當時に現はれたりと云ひつべし。其の多感なるは、よく凡べてに同情して貴となく、賤となく、事物の中に生命を見出だし、所以、其が自信の念強かりしは時流に超越し自家の天職を確守して、勝を最後に期せし所以なり。

按ふに、ウオオヅチオスの大なる所は、深く詩人の天職を意識して生涯を詩に捧げたるに在り。先人の卑とし小とし細として筆を着くるに及ばざりし、寧ろ着くる能はざりし、自然界、人間界を描寫して、其の美處を看取し發揮したるに在り。彼れはポープ等がわざとらしき擬古彫琢の風に反對して、現實に則り、活語を用ひたりしが、毎に清高なる韻致ありて、淺露粗笨に陥らざりき。自然に歸れといふ時世の呼聲に和しながら、(バイロンの如く)破壊に終らざりて、能く自然主義を建設せしは彼れなり。他、が粗笨とし枯燥なりとする事物を取りて、彼れは之れに與ふるに耀々

たる靈を以てせり。一片の花、一滴の水、賤の女、乞食の童、一として彼れが涙に値せざるはなく、且つ其の之れを描くや、平易茂樸うち見たる所、一の藏する所なきが如し、志かも沈思黙誦、其の神に會するに及べは、津々たる幽趣、掬べども盡きざる概あり。是れ蓋し其の思想の高雅にして其の同情の涙の遍く濺がれたればなるべし。彼れ曾て云へらく、大なる詩人は凡べて教師なり。余は教師として尊ばるゝか若しくは何者とも思はれざらんことを願ふと。

ウオヅナオスは、到底抒情詩人なり、劇詩の作としては、劇として、詩としても見るに堪へずと評せられたる。“The Borderers”といふ悲劇あるのみ。

彼れが著作多けれども出版の當時に好評を博せしは絶えてなし。彼れが最大傑作の一なりと評せらるゝ“The Excursion”すら出版の當時には批評家チェッフリー之れを爲すなき駄作なりと嘲り、バイロン亦た眠たく煙たき詩にして余の厭ふ所と罵りき。詩人の不遇なるウオヅナオス如きは稀なり、而してかゝる不遇の間に立ちてその天職を確守せしは更に稀なり。

ウオヅナオスが抒情の作中、多く人の知りたる

“We are Seven.” 『我等は七人なり』

“Lines composed a Few Miles above Tintern Abbey.”

『チンタアン精舎の數哩ばかり上にてものせる詩』

“The Fountain.” 『泉』

“Michael.” 『マイケル』

“To the Daisy.” 『ひな菊に』

“The Solitary Reaper.” 『只ひとり麥刈る少女』

“To the Cuckoo.” 『呼子鳥に』

“She was a Phantom of Delight.” 『かれは悦樂の影なりき』

“Ode to Duty.” 『本務に與ふ』

“Laodomeia.” 『レーオダマイア』

“To a Skylark.” 『告天子に』

“Sonnets composed upon Westminster Bridge.”

『ウエストミンスター橋上にてものせる小歌』

"Lucy Gray."

『ルーシー・グレイ』

"Intimations of Immortality from Reflections of Early Childhood."

『幼時を憶うて不死を知るの歌』

又長篇の名高き

"The Excursion."

『漫遊記』

"The White Doe of Rylstone." 『ライルストンの白鹿』

など、此等の諸篇いづれも傑作として數へらるゝものの中に就きて"the Excursion"は九章より成り、白鹿の詩は七章より成れる長篇にして、前者は經營慘憺の作、ウオヅチオスの人物及び心的生涯は躍如として其の中に現ぜりと稱せらる。但し彼れが作の普く愛誦せられて人口に膾炙せるは短篇なり。詞意共に清楚溫雅、題を卑近に取りて清高幽遠の意を寓せる所、何れもウオヅチオスの特質を表はせり。

呼子鳥に

To the Cuckoo.

「呼子鳥に寄する歌はウオヅチオスが小品中の佳作にて、此の作者が殊なる詩想を窺ふべき好階梯なり。

さて詞句の評釋には要無き事に似たれど、cuckooの解に關して少しく辯ずべき事あり。從來cuckooは音の似たるまゝに郭公と譯して杜鵑のこととしたれど、支那にて郭公といへる鳥は果して杜鵑と同一なりや否や。又支那にて謂ふ郭公と西洋にて謂ふクックーと同一なりや否や。ウオヅチオスなどの作によりて按ずれば、頗る疑はしきふし無きにあらず。

ほととぎす杜鵑は一名を怨鳥ともいひ、夜啼達旦、血漬草木、凡鳴皆北向とも見え、子規、杜宇、蜀魂など異名す。又曰はく、杜鵑大如鵠而羽、鳥其聲哀而吻有血、土人云、春至則鳴、聞其初聲、則有離別苦、入惡聞之云々と。又曰はく、形すゝみだかに似て、背はうすくろく、腹は白し、また腹にも翅にも白き斑ありて、口の中赤く、頭に豎の毛おひたり、また足はあをばみて、前の指のまたに薄き皮あり、此の鳥みづからは、巢をつくらずして、鶯の巢をかりて棲む云々(辭林)と。

さてかなたのクックーとは如何なる鳥かと見るに、曰はく、クックーは cuculidae と呼べ

る鳥の一類にして其の種いと多し、鳴く聲の殊なるによりて此の名あり。印度亞弗利加にすめる鳥にて、夏季となれば北方に移る、英國に來たるは四月ごろにて、八月の中ごろには又歸り去る。尾は長く且つ圓やかにて、翼はた長し、指は樹枝を掴むにたよりよきやうにもせられたり。巢はみづから作らで、他の小鳥の巢に卵を置くを例とす云々と。巢をみづからつくらぬほどは我が杜鵑によく似たれど、クックーは晝啼く鳥、杜鵑は夜啼く鳥、且つ不如歸といふ啼聲もテッペンカケタカといふ啼聲もクックーといふ啼聲とは似たる所なし。又東西人情の殊なるによりて物の音を聞く耳もあなじからずとはいへ、支那及び皇國の人の悲し、すさまじ、と聞く聲を、かなたにては樂し、と聞くもいかい。現にウオヅテオスは此の鳥を *lilthe new-comer* (樂しげなる珍客) と呼べり。志かしながらある米國の學者は、嘗て我が國に來たりて西京に遊びし折圓山近傍の旅館に在りて、寺々の鐘の音を聞き、いと樂しく感ぜらるゝと或人に語りきといへば、物の音色は其の人の聯感次第にて、全く反對にも解釋せらるべくや。

それはともあれウオヅテオスの此の作を讀まん者は幾分か疑團無き能はざるべ

し、彼れの歌ふ所は、郭公即ちほととぎすにあてはまるべきふしは尠くて、むしろ所謂呼子鳥に、をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな、こたへぬになよびとめそ呼子鳥、佐保の山邊をのぼりくだりにとある其の呼子鳥にあてはまるべきふし多ければなり。例へば其の姿を定かならずといへる、長閑なる眞晝の谷間に啼くといへる、wandering voice (そこともなくさまよへる聲) といへるなど、皆杜鵑には適せずしてむしろ呼子鳥にかなへりと思ふがいか。况や我が國にても呼子鳥の異名をクックー、コウドリ又はカンコドリなど呼べるをや。

或書に曰はく、呼子鳥は唐にて喚起鳥とて、春の中つかた鳴く鳥にてツ、鳥のことなり、ツ、く、と鳥の子を呼べば來る故と云ふ、又はコドリとて、四月郭公ほととぎすの來るさきに啼く鳥也、此の鳥は、ハ、コ、く、と鳴くゆゑ呼子鳥といふと。又眞淵翁の説なりといふを引きて、呼子鳥は春の頃より夏かけて啼く鳥也、其の聲人を呼ぶが如く聞こゆるによりて呼子鳥といふ、カボドリといふも此の鳥也、今俗のカンコ鳥といふものなり、呼子鳥喚子鳥の字音よりとなへ誤れるなり、云々。尙下の句意を味ひて判斷せよ。

あはれ 樂しげなる新客よ 我れ(曾て) 聞きつ
O blithe new-comer! I have heard,

(今も)聞きつよき
I hear thee and rejoice:

あはれ呼子鳥 汝れなしも鳥とや呼ぶべき

O enckoo! shall I call thee bird,

はた只 ちまよへる聲音とや(呼ぶべき)

Or but a wandering voice?

あはれ樂しげなる新來賓よ、我れ曾て汝が聲を聞きつ、

今もまた聞きてよろこぶ。

あはれ〜呼子鳥、汝れをしも鳥とや呼ぶべき、

はた只 さまよへる聲とや呼ぶべき。

我れ幼きころ、屢々山野にそゝろありきして樂しげに啼く汝れが聲に、世を忘れ、我れを忘れ、恍として別天地に遊べるやうに思ひしこともありしが、立つ年波に人となりて浮世の塵垢に染みたる今も、尙汝れが聲を聞きてよろこぶ。あはれ、さるに

ても呼子鳥よ、聲ばかりして姿は見えぬあやしの鳥よ、汝れをしも鳥とや呼ぶべき、
はた只處定めずさまよへる聲音とや名くべき。おぼつかなくも呼子鳥といふ意
此の一句にいちじるからずや。

草の上に臥してさるは

While I am lying on the grass,

なが二きだの叫び聲を 我れは聞く

The twofold shout I hear;

岡から岡へ なが聲は渡るとおもふ

From hill to hill it seems to pass,

且つ遠へ 且つ近へ

At once far off and near!

草の上に臥してある間、二きだの汝が叫び聲を我れは聞く、

このもかのもとに、汝が聲は渡るとおもほゆ、

且つ遠く 且つ近く。

▲「二きだの叫び聲」とはクック〜と毎に二聲づゝに段を附けて啼けばなり。

ウオオツチオスの抒情詩

▲ seems はかゝる場合にはいつも「ちもほゆ」又は「ちもはる」と訓ずべし。

何氣無く只啼くなれど (春の)谷に

Though babbling only to the vale

うらゝかに日影を花咲く(谷に)

Of sunshine and of flowers,

なが聲はもてく 我れには

Thou bringest unto me a tale

夢の日のむかしがたりを

Of visionary hours.

うらゝかに日影を花咲く谷に、

何氣なく只啼くなれど、春の谷に、

汝が聲は持來 我れには、

夢の日のむかしがたりを。

▲ babbling とは何の意味もなくつぶやくをいふ、小見のかたこと、の如きを指すことにては呼子鳥の啼く聲に何の意味も無げなるをいふ。▲ 汝の春の谷に向かひ

て啼くや何の意味も無げなれど、幼き折に汝が聲を聞きて無限の悦樂を感じにし我れは、今も汝が聲を聞けば、未だ濁世の汚れに染まで夢の如く、幻の如く、恍惚として楽しく暮らし、幼時の事どもを想起するなり。他人は知らず我が耳には汝れがクク、ク、と啼く聲は、夢の現の昔がたりをもて來るやうに思はるゝぞと也。

ちうらしや〜 春のまなづか

Thrice welcome, darling of the spring!

今だにも 汝れは 我れには

Even yet thou art to me

鳥ならや 見えぬ或物

No bird—but an invisible thing,

あそびわね ある不可思議や

A voice, a mystery.

その回へ聲や 學童のハルヒ

The same whom in my school-boy days

我が聞やし 其の聲や

I listened to; that cry

サオオツチオオスの抒情詩

我れをして百ちたび顧盼せしめし

Which made me look a thousand ways

くちむらに

木に

空に

In bush, and tree, and sky.

めづらしや、春の寵兒よ、今だにも我れは汝れをば

鳥としもおもほえず、目に見えぬ不可思議の物

或奇しき聲音とこそおもへ。

小學校にありしころ、我が耳に聞きなれし、その同じ聲音とこそ思へ。

我れをして(そこかこゝかと) くさむらに、木に、空に、

幾たびもく見かへらしめし、その奇しき呼ばひ(とこそ思へ)。

▲welcome とはよくこそ來ぬれの義、あなめづらしや、など珍客に對していふ

と同じ心なり。▲春のまなご、春のはじめに來鳴く鳥ゆゑにいふ。▲今だにも云

々、幼きころは汝の聲を天籟のやうに感ぜしことありしが、今尙其の感なきにあら

ず、我れは汝を鳥としも思はず、眼には見がたき物、一箇の不可思議物、一箇の不可思

議なる聲とこそ思へ、の意。

汝れを尋ねて 我れはまばくさまよひにき

To seek thee did I often rove

杜を

綠野を

Through woods and on the green;

而も常に汝れは (我が爲の) 豫望なりき 戀なりき

And thou wert still a hope, a love;

常に焦れて求むれど一たびも(姿は)見えて

Still longed for, never seen!

汝れを尋ねて 我れはまばくさまよひにき、

杜のなかをも、綠の野べをも、

而も常に 汝は我が爲の戀なりき、行末をちぎる聲たりしのみ、

常に焦れて尋ねぬれども、一たびも姿は見えて。

▲我が爲の豫望云々、いつかは相見るを得べしとたのまるゝのみにて、いつまでも姿を見ると能はざりき、といふ意。▲戀なりき云々、我が爲の戀人なりきといはん

ウオオゾチオスの抒情詩

ほどの義。▲常に焦れて云々原文を直訓すれば常に焦れて求められたる而も曾て見られざるとなる。即ち分詞的形容句なり。この *still* といふ語を「常に」と訓ずると「尚」と訓ずるとによりて意義いたく相違す、注意すべし。▲*hope* といふ語はた然り、從來希望と訓じ來たりたれど妄ならず、*hope* に願望の義いと薄し、「豫期」「豫望」「期待」又は「末のたのみ」などの意勝ちたり、殊に「*I hope* 云々」などの場合に於ては「よもや云々ならんと思ふ」といはん程の義となれるが多し。

而も我れなが聲を

今も尚えきくなり

And I can listen to thee yet;

草原に打臥して

Can lie upon the plain

えきくなり(なが聲を) (そいろにも)我が心の

And listen, till I do beget

めでたかりし極樂の其のいにしへに立還るまで

That golden time again.

而も我れ 汝が聲を 今も尚えきくなり、

草原に、打臥して えきくなり、汝が聲を、

そいろにも、我が心の (なが聲にうかれく)て

めでたかりし極樂のそのいにしへに立還るまで。

我れ人となりてより世の塵垢に汚れたれど、尚汝が聲に耳傾けて汝が奇しく妙なる聲に心耳を澄ましむるを得るぞ嬉しき。草原に打臥して汝が聲に心耳を澄ませば、我が心いつしかに名聞、利慾の羈絆を脱して、又も幼時に返る心地す、絶えて五濁に汚されざりし人生の黄金期、幼時をいふに歸る心地す。▲*beget* again は復すの意、再び手に入るの義、本訓は意を酌みて物せり。▲*Utopia* が幼時を追慕する念の切なるを「吾等は七人」と照らし合はせて見るべし。

あはれ多幸の鳥かな 我がともからが歩む地も(なが聲をきくときは)

O blessed bird; the earth we pace

又見ゆれ

Again appears to be

きはろしの奇しき里とも

An unsubstantial, fairy place;

ウオオツチオスの抒情詩

(目に見えぬ)汝がふさはしのすみどころ

That is fit home for thee!

あはれ幸鳥、汝が聲を聞く時は、我が歩む此の下界も、
又見ゆれ仙郷とも(をさなかりし折におなじく)、
形なきまぼろしのいと奇しき里とも見ゆれ、
目に見えぬ汝がふさはしのすみどころ。

餘韻は必ずしも説くを要せざるべし。ウオヅチオスの自然を愛する情のいかに深く、いかに切なるかはクックの呼ばふ聲にだに我れを忘れ、人世を忘れ、恍として別乾坤に遊べるに其の一斑を想見すべし。

幼時を憶うて不死を知るの歌

Ode on Intimations of Immortality from Recollections
of Early Childhood.

此の高尙幽玄なる作は、なかばは一千八百〇三年に、なかばは同六年に成れり。いさゝか長きに過ぎたれど、此の作の由來に關する作家自身の註脚は此の詩を善解せんと欲する者の一讀すべき價值あれば、左に其の大意を譯出す。

こは予がグラスミヤなるタウンスエンドに寓せりし折の作也。初の四解を物してのち、尠くとも四春秋を経て稿を繼ぎ、竟に完成するに至りたり。堪能細心の讀者は説かずとも予が意を知りたまはめど、さりとして此の作を物せし折の、予が特殊なる感情と閱歷とを語る、必ずしも無要ならじ。はじめ予が幼かりしや、如何にしても、死といふことの我が身上に來るべしと信ずる能はざりき。予嘗て歌うて曰はく

あどけなきをさなご、輕やかに息づかひし、生ける氣を手に足におぼゆるをさなご、など知らん 死てふことを。

と。予がかく思ひ込めりしは必ずしも動物的生氣の外に熾んなりしが爲に、あらず、むしろ靈氣の内に制止すべからざるものあるを覺えたればなりき。以爲へらく他人は如何になりゆくらんと、予は彼のイノツク又はイライチ

ヤなどいふ古神仙にひとしく、生きながら羽化して昇天するを得べきなりと。かゝる感想を抱けりしからに、予はあらゆる外界の物象を見ても、そをば外部に實在せるものとしては見る能はず、否、彼等はた我が身にひとしき虚靈不思議なる物にて、我が身とは分離すべからざるもの、即ち我が一身と同躰同源のものゝやうに思ひたりき。されば小學校に通學せし途すがらも予は動もすればかゝる虚靈界に遊神して、恍惚として我れを忘れ、やがて樹木又は塚塙などをひたとつかみて、辛くも我れに復りしと聞えあり。(中略) 按ふに幼時目睹する所の物象の夢裡に見る所の物の如く、且つ活ける如く且つ美麗なることは、人皆の容易く回憶し得る所なるべければ、予は今こゝに絮説するに及ばず、さもあれ予は此の事をもて人間に前生ありといふ事の證左なりと見做して此の作のうち物したれば、或は世の敬虔なる人々の誤解を招き、予はかゝる信仰を奨説せんとするなりと思はれんも圖りがたし、故に一わたり辯へおく要あり。蓋し、かゝる感想はいとゞ漠然たるものにて、靈魂不死に關する吾曹が本覺中の一原素たるのみ、敢て信仰として奨説すべきほどのものにあらず。

たゞし人間前生の説たるや彼の默示録中にも所見なしといへども、さりとて此れと衝突すべき記事もなく、且つや彼の「祖墮落」の一事はほゞ此の前生説と相類する所ありて暗に此の説を幫助する力あり。此の故にや人に前生ありといふ感想は、夙に諸國俗の念頭に入りて彼等の普く信ぜし所彼の希臘の碩學「プレート」の説の如き、將た此の思想に胚胎せる由古學を修めたる者の善く知る所なり。アルキミヂーズはいはば、我れ若し我が槓桿を据うべき處をだに得ば、世界を左右せんこと成しがたきにあらずと。あのが心の世界に關して誰れか同様の感なからん。たまゞ興感に驅られて靈魂不死の歌を物するや、我れ我が心界の幾原子を敢て左右するの必要を感じつ、すなはち所謂前生説の頗る信ずるに足るを思ひ、之れを利用して以て我が作詩の礎となしにき、云々。

原文や、晦澁譯文更に晦澁なれば、讀者或は其の要領を得るに困しまんか。要するに、ウオオツチオスの此の作は幼時の淨懷を追慕するの切なるに成れり、而して其の思慕の由來を釋して所謂前生説に歸因すとなし、更に釋して靈魂の不死、不滅、な

るの理は幼時の感想に照らして争ふべからずとなせるなり。尙くはしくは詞句を釋するに及びて瞭然たるべし。

はじめて此の作の世にいでしや、當時批評壇に覇權を握りし『エヂンバラ評論』の主筆記者ヂェフリーは難じて曰はく、讀むべからず、解すべからず」と。他の文學雜誌『リテラリー・レチスタア』の記者は曰はく、讀者をして不快を感ぜしめ、怒を發せしむるたはごと」と。蓋しウォヰオツオスの詩想は高遠幽妙にして、時尙にさきだつこと數十歩なりしが爲に、能く之れを解し得る者當時殆ど絶無なりしなり。かゝる幽玄の作なれば拙き訓釋などの力をもてして能く作意を表し得べしや否や、甚だ疑はしく思はるれど、讀者諸子の深切なる注意と相俟つことを得ば其の要旨ほどは傳ふるを得んか。

題に用ひたる Immortality といふ語は、作者の意にては eternality といふ義に用ひたるに似たり。彼れの意は不死といはんとするよりは、前生後生に亘りて無窮即ち永劫存在といはんとするにあり、たゞし eternality の語は廢語に屬し、さりとて eternity といふ語はた妥當ならざる所あるゆゑ、止むを得ず immortality の語を填した

るものなるべし、即ち三世恒存といはん程の義に用ひたるが如し。

第一解

I.

昔て時ありき

牧場も

杜も

流水も

There was a time when meadow, grove, and stream,

此の下界も

あらゆる尋常の現象も

The earth, and every common sight,

我れには 見えし(時ありき)

To me did seem

靈光をもて粧はれたりと(見えし時ありき)

Apparell'd in celestial light,

(正に是れ(夢裡に見る榮光清新)と一般)

The glory and the freshness of a dream.

今はむかしと同くかざりて

It is not now as it has been of yore;—

ウォヰオツオスの抒情詩

我れいつかたに向かはんも

Turn wheresoe'er I may,

夜にもあれ 晝にもあれ

By night or day,

嘗て見たりし其の物を

今はまた見る能はず

The things which I have seen I now can see no more!

牧場も杜も流水も 下界も森羅の万象も

靈しき光につままれて 我れには見えし時ありき、

たとへば夢裡に見る如く、清く尊くあざやかに。

(まかるに) 今はむかしと同じからず、

我れいつかたに向かはんも、夜にも晝にも、

むかし見たりし其の影を、今はまた見ることも能はず。

「幼少の折には睹る物悉く靈光に包まれたるが如く見えたりしが、今は我が心塵垢に汚れたるが故にや、如何なる物を見るも舊の如くなる能はず」と幼時の淨懷をなづかしく慕はしく思へるなり。▲夢裡に見る榮光云々は譯に見えたる如く、さな

がら夢幻の景なりき」といはん程の意、更に悉しくいへば清く尊くあざやかに詠めたりし森羅万象の靈しき影のいつしか悉く消滅し去りたる、さながら樂しき夢の驚きさめて其の記憶の尙かすかに残れるが如し、即ち彼の幼時見し盛觀は恰も夢裡に見る莊麗の景、清新の致にひとしかりきといふ意。

▲of yore は「其のむかし」の義、即ち幼時を指していふ。▲it is not now 云々の字は共に漠然と用ひたり、意味よりいへば「睹る所の万象」といはんほどの義。

第二解

II.

虹や今も尙來たりまた往く

The rainbow comes and goes,

(今も尙)可憐なり 薔薇の花

And lovely is the rose,——

嫦娥(はた)嫺然として(今も尙)

The moon doth with delight

ウオオツチオスの抒情詩

其の四邊を顧盼す 蒼穹に雲無き時

Look round her when the heavens are bare;

水(よみた) 星(よみた) 夜(今尙)

Waters on a starry night

麗(よみた) 且(よみた) 美(よみた)

Are beautiful and fair;

旭光の産れ(よみた) (はた今も尙) 莊嚴なり

The sunshine is a glorious birth;

而も尙 我れは知る 今(よみた) 往(よみた)

But yet I know, where'er I go,

榮光の

此の下界より過ぎ去りぬるを

That there hath passed away a glory from the earth.

虹(今も尙) 出沒し、薔薇(今も尙) 可憐なり、

月(はた今も尙) 嫺然として 空(よみた) 晴れたる時 四邊を顧盼し、

星(よみた) づく夜の水の色 (はた舊に依りて) 艶且つ美なり。

彼の旭日の産れ(よみた) いづる 將(よみた) 舊に依りて 莊嚴なり。

而も尙我れは知る、(今は) いづこに往くも、

榮光の 此の下界より過ぎ去りぬるを。

▲「虹や來たり又往く」とは虹の引き渡しまた消え去るをいふ。▲「嫦娥はた嫺然として」云々、月を人に擬して其の麗しく四方八面に照り渡れるを美人の樂しげに打笑みてあたり打ながむるに喩へたるなり。▲「旭光の産れいづる」云々、原文には「日光はた榮光燦爛たる産出なり」とあり、即ち「太陽はた榮光の燦爛たること舊時の如くにして東山より産れいづる」の義、東山の頂より旭日のはじめて昇る光景の莊嚴華麗なるをたゞへていふなり。▲「あはれ榮光の」云々、虹の美舊の如く、薔薇の美舊の如く、月の美、水の美、旭日の美、すべて舊日と異なる所なけれど、而も尙我れは知る、下界の眞壯觀の今は既に消失してまた之れを見るに由なきことを、云々の意。

第三解

III.

今(よみた)

衆鳥のかく樂しげなる歌をうたふ時

Now, while the birds thus sing a joyous song,

ウオオゾ、チオスの抒情詩

And while the young lambs bound
As to the taber's sound,

我れこの音を來たりわね

つと悲しき物思の

To me alone there came a thought of grief;

A timely utterance gave that thought relief,

なほはこゝろをか癒ちし

And I again am strong.

我れまた心すこやかなり

今も飛泉はせのく其の喇叭を吹き鳴らす

The cataracts blow their trumpets from the steep,——

懸崖の頂より

No more shall grief of mine the season wrong:

我れ一個の悲傷を以て豈に復た此の好時節を殘さずけんや

I hear the echoes through the mountains throng,

我れは聞く山彦の山を経てむらがり來たるを

The winds come to me from the fields of sleep,
And all the earth is gay;

風(はた)我がほとりに來たる 尙居眠れる野面より

而して全土靡然たり

Land and sea

陸と海と

Give themselves up to jollity,

、ぞりて嬉笑し

And with the heart of May

五月の情を以て

Doth every beast keep holiday;——

百獸皆休樂す

Thou child of joy,

汝 怡樂の兒よ

我が周邊に叫へかし

Shout round me, let me hear thy shouts, thou happy

なが叫ぶ聲を聴かせしよ

ウオオツテオスの抒情詩

いでや衆禽のかく樂しげに歌へる時、見羊のかく嬉しげに踊れる時、
 鼓の音色に伴れての如くかく樂しげに踊れる時に、
 いと悲しき物思ひの 我れにのみこそ來たりぬれ、
 さもあれ恰も好き機に 我が鬱懷を洩らし、かば
 其のむすぼれし思ひも解けて、我れまた心すこやかなり。
 今や許多の瀧津瀬も、峻しき崖の頂より(佳節知らせて)鳴り轟く、
 我が身ひとつの悲傷の故に 豈に此の好季節を殘ふべけんや。
 今や山彦も嬉しげに山のかなたより群り來たり、
 風はた眠れる野面より 我がかたはらに吹き來たる。
 全土驪然たり。陸地も海も
 皆こぞりて嬉笑し、百獸はた五月の情を以て休樂す。
 あはれ汝、怡樂の兒よ、呼ばへ、我が周邊に、

汝が叫ぶ聲を聽かせてよ、汝多幸なる牧羊童よ。

春風駘蕩の好季節鳥獸皆怡樂す、我れひとり哀傷す、他無し、幼時の淨懷を喪失せるを哀しむなり。さもあれみづから心をはげまし、時いまだ後れざるうちに歌に鬱悶を洩らすことを得てしかば、胸宇爽然として我が心また强健なり。今や諸山の瀧津瀬も、斷崖の巔より簌々と漲り落ちて、方に佳節を知らせ貌なり、我が身ひとつの悲傷のゆゑに此の好季節を殘ふべけんや。いでや山川禽獸と共に、我れもまた嬉笑し、休樂せん。

▲諸山の瀧津瀬とはウオヅチオスが愛好せりし湖畔の諸瀑布を指す。▲喇叭を吹き鳴らすとあるは春來たりて水漲り瀧の盛んに落つる聲を喇叭に喩へたるなり。彼方にては喇叭は事を報ずる時に用ふ。▲山彦云々、山彦は古來彼方にては女體の神に擬する例なり、嚴冬の間は黙して幽谷に籠居し、春來たれば四面賑はしくなる故、其の歡聲に呼應して出て來たるとなり。▲百獸はた五月の情を以て云々、百獸の beast とす、語、Dreast (胸)の誤ならんといふ説ありと聞きしが、予が讀める三異本はいづれも beast とものしたり、且つや beast と讀みて意よく通ず。按ふに、

此の一解はむねと山水禽獸の春をたのしめる様を寫せるなれば、はじめにまづ諸鳥を詠じ、次に羊兒を詠じ、更に他の獸に及ぶ、すなはち山野牧場に戯れ遊べるあらゆる畜類の上に及ぶ。百獸の語、次の牧、羊、童といふ語に相呼應して意義瞭然たり。▲五月の情とは陽春の情の義、五月は彼方にては尤も楽しき期節、我が彌生、卯月などに相當す。▲keep holiday とは「休樂す」の義。▲多幸なる牧羊童よ、云々、陽春の候に當りて、尤も自然の好風光に怡樂せりと見ゆるもの禽獸に超えたるはなかるべく、又此等禽獸を管理して之れと共に無念無想げに逍遙せる春の野づらの牧羊童は見るからがいと楽しげにて、自然を愛する此の作家の艶羨措く能はざる所なるべし。

第四解

IV.

ふまし等多福なる衆生よ 我れは聞き
Ye blessed creatures, I have heard the call

汝等が相呼ぶを

我れは見る

Ye to each other make; I see

諸天の笑ふを

歡呼する汝等と共に

The heavens laugh with you in your jubilee;

我が心は汝等が祝祭に在り

My heart is at your festival,

我がかろん(はた)賀冕をいだたけ

My head hath its coronal,

汝等の福ひをあぐまべし

我れは感ず 我れは悉く之れを感ず

The fulness of your bliss, I feel—I feel it all.

あはれのふしや

我れ若し(ひとり)懸然たらば

Oh, evil day! if I were sullen

地其の物だに盛飾すならに

While the earth herself is adorning

此のうつくしき五月のあしたを(盛飾すなるに)

This sweet May morning;

且つや　なまならちも　揃むなるに
And the children are pulling,

四方に(田ヤ)

On every side,

千百の山あひに　遠く且の廣き(山あひに揃むなるに)

In a thousand valleys far and wide,

清新なる花どもを　日も温く照りむたり

Fresh flowers; while the sun shines warm

そよごつて(空をたふす)

母のひなに小躍りするに

And the babe leaps up on his mother's arm:—

我れは聞く我れは聞く

いと楽しく我れは聞く(汝等が歡呼の聲を)

I hear, I hear, with joy I hear!

こぼるゝ僅かに一樹あり　多き中の一樹あるのみ

But there's a tree, of many, one,

又も一の牧野あるのみ　我が曾てながらたる(一の牧野あるのみ)

A single field which I have look'd upon,

此の二者は共に或處を去りぬる、とを語す

Both of them speak of something that is gone:

我が脚となる露臺の花よ

The pansy at my feet

(また)同じを語を反覆す

Doth the same tale repeat:

あはれいづちにか逸れ去りし彼のまぼろしの靈光は

Whither is fled the visionary gleam?

今こゝろにかある

彼の榮光と彼の夢とは

Where is it now, the glory and the dream?

あはれいまし等多福なる衆生よ、我れは聞きぬ、汝等の相呼ばふを。

我れは見る諸天の嬉笑するを、歡呼する汝等の聲に和して。

(我れ將た汝等に同感して) 其の心汝等の祝祭に在り、

我がかうべ將た(汝等と共に) 祝賀の冠冕をいたゞく心地す。

汝等の盛福をあくまで我れは感ず、我れは悉く之れを感ず。

あはれ忌々し忌々し　我れ若しひとり愁然たらば、

地だにもいと春めきて(千草の花のいろくに)
 此のうつくしき陽春の あしたの野邊を盛飾すなるに。
 またをさなきが打むれて) 四方にはるけくたちいで、
 果なき四方の山あひに、けふあざやかに咲きいづる
 千草の花を摘むなるに。 將た春日影温かに
 母のかひなのみどりごも 小躍りすなる折なるに。
 あな思々し、思々し、我れ若し獨り歎きしをらば。
 (否々、我れもまた同嬉せてやは) 然り、我れは聞く、我れは聞くなり
 (いまし等が相歎呼する聲々を)……………
 とはいへ(心ばかりかくはやれども)(我が心今はいにしへの如くならず)
 目に見る樹々は多かれど、多きがなかに只一樹のみぞ、
 打詠めたる四方八方の野は多かれども、只一野のみぞ、只此のふたつの
 みぞ語るなる、
 消えて跡かたなき其のいにしへの夢まぼろしの面影を。

我が足もとなる壺董の 語るもあなむき物がたり。

あはれ、いづこへ失せぬるぞや彼のまぼろしの靈妙光は、

あはれ、今はいづこにか在るぞ 彼の夢心地の壯觀は、

▲「多福なる衆生」云々、森羅万象を悉く活物視してかくは呼べるなり。 ▲「諸天の笑ふ」云々、地上の万象の相歎呼するに和して天上界はたさいめき笑ふとなり。 ▲「賀冕をいたゞく」云々、いにしへ希臘羅馬の祝宴の席にては賀冕をいたゞくを例とせり、其の古事によりてかくいへるなり。 ▲「evil day」とは「不祥の日」と直譯す、意義は前譯に見えたるが如し。 ▲「とはいへ僅かに一樹あり」云々、我れ強ひていにしへに立還りて汝等と歎を共にせんと欲すれども、哀しきかなや、我が心既にむかしの心にあらざ、花を見るも、樹を見るも、山野、林泉を見るも、また彼のをさなかりし折の如く、恍として夢幻の妙境に遊ぶこと能はず、多きが中に只一樹のみ、多きが中に只一野のみぞ僅かに往時を想起せしむ、而も徒らに往時の怡樂の去りてまた復しがたきをほのめかすのみ、我が脚下なる壺董の花の仄かに語るところ將た之れに同じ。 嗚呼々々幼時の淨樂は竟にまた享くべからざるか。 嗚呼、彼の夢幻の靈光はそも

いつちにか逸し去りし、今はそもいつこにある、彼の夢幻の榮光は。▲末句 the glory and the dream は所謂ヘンダイヤチスと稱する修辭の一法、殆ど dreamy glory といはんほどの義を、律呂風調の爲に、態と引きはなし、形容言たるべき語を名詞の如く物したるなり。▲詞句、風調の妙は一々に説くに及ばず、訓釋を熟讀して諸子みづから玩味せよ。

第五解

V.

人の 生まるゝは 眠りて(過去を)忘るゝのみ
Our birth is but a sleep and a forgetting:
人と共に昇る靈魂は すなはち 人の命の星は
The soul that rises with us—our life's star—
嘗て他處に其の没する處を有しき
Hath had elsewhere its setting,
面して遠くより來たるなり
And cometh from afar;

全く忘りしたるにあらざり

Not in entire forgetfulness,

全く剃丁せられたるにあらざり

And not in utter nakedness,

否(尙)燦爛たる雲羅を牽きて

人間は來たるなり

But trailing clouds of glory do we come

天の神のみもとより 人間の故郷なる(天の神のみもとより)

From God, who is our home:

上天人のかたはらにあり

人の(尙)いとけなきや

Heaven lies about us in our infancy!

牢獄の暗き影漸くせまらる

Shades of the prison-house begin to close

われは人の長ずるまへに

Upon the growing boy,

而も尙彼の光明を見

又其の流れいづる源をも(見る)

But he beholds the light, and whence it flows,

ウオオゾチオスの抒情詩

(又)其の嬉樂中に之れを見る

He sees it in his joy;

ちて彼の青年や

日毎に東方にははかりのへく(青年や)

The youth, who daily farther from the east

尙(流石に)造化の祭司なり

Must travel, still is nature's priest,

彼のまはちかほはるしは

And by the vision splendid

そが行く道に伴へり

Is on his way attended;

竟に

大人(となるに及び)其の靈光の消え失せて

At length the man perceives it die away,

平々凡々たる日光とおとろふるを知る

And fade into the light of common day.

人の此の世に生まるゝは

眠りて過去を忘るゝのみ、

(譬へば、日輪の夜の明くると共に

東山よりかゝやきいづる如く、)

人の生まるゝと共に昇る靈魂は

人の命の星ともいはん靈魂は

此のうつゝ世に昇りぬる前に

他處に出没の地を有しき、

而して其のうつゝ世に生まるゝや

はるけき方より來たるなり、

(さもあれ他界の生活を)

全く忘了して來たるにはあらず、

(將た他界の靈裝を)

他の燦爛たる雲の裳裾を

否(人間に生まるゝ折も)

天つ神のみもとより、

志りへに牽きつゝ來たるなり、

天つ神のみもとより。

人間の故郷なる

天上界は四邊に在り、

夫れ人のいとけなきや、

五濁に暗き牢獄の影

其の漸く長ずるや、

而も尙わらはべは

暗檐として四隅に薄る、

其の照りいづる源を見て

往にし淨界の餘光を仰ぎ、

往にし樂土の影を見る。

其が日々の娛しさに

(是非もなや)日と共に

さて彼の青年も、

次第々々に東方より

(流石に薰染淺ければ)

彼の燦爛たる榮光は

尙其のゆくへに伴隨す。

竟に大人となる時は

たふとしと見し妙光も)

とほざかりゆく青年も、

いまだ自然の神官たり

彼のまばゆき幻は

(まばゆかりし幻の色あせて
平日の光と化す。)

作者第四解を作して第五解を作せしまでには二星霜を経たりといふ、隨うて第四と第五との間や、思想の聯絡せざるがごとき感なきにあらず、故に或は難じて、急に過ぎたりといへり。要するに、ウオオヅテオスの真意は、人間に前生あるを信じ、人の此の世に生まれて前生を記憶せざるは其の次第に五濁に薰じて真如の妙光に隔たるが爲に外ならず、さればこそ幼より老に至る間の經驗と感想とに徴するに、尤も幼なる時尤も深く自然に同感し、長ずるに隨うて次第に自然を悦ぶ念を減ずるなれ、よりて思ふに、人の生まるゝは、譬へば睡眠より驚き醒むるが如し、其の前生を忘れはつるが爲に前生あるを信ぜざれど、其の實は前生無きにあらず、忘れた

るのみと。人間に前世ありといふ思想は、歐洲に在りては希臘のソクラテーズ、プレト、ピサゴラス等の唱道せし所就中プレトの説は早くよりかなたの詩人に喜ばれて其の吟懐に影響せし所尠からず。其の説によれば人間の前生は天上の世界なり、今の人間の祖は天人にひとしかりしなり、今の人の常に理想の世界を想像して止まざるは、蓋し無意識の間に往にし天上界を追慕するなり、云々。ウオオヅテオスの本解中に謂へる前生説は、明かにプレトの旨に胚胎せるなり。
▲「はるけき方」とは、天上界をいふ。 ▲「造化の祭司」、自然の神官、共に「自然的生活を敬愛する者」といふ義。 ▲「東方」とは、日出の方、即ち天上界の意。

第六解

VI.

下土はたおのが特有のたのしき品を(取りあつめ)その前垂に滿載す

Earth fills her lap with pleasures of her own;

彼れ將た慈愛の念を有す 其のもちまへにふかはしき

Yearnings she has in her own natural kind,

ウオオヅテオスの抒情詩

加ふるに幾らかは眞の慈母の心もち

And, even with something of a mother's mind,

はにかしむる見込も有らば

And no unworthy aim,

(下土といふ)此の里びたるものとの媪も 其の力の限りなす

The homely nurse doth all she can

おのゝやしなひ子を共に棲むなのことせんとて

To make her foster-child, her inmate man,

そが嘗て知りし榮光をも忘れさせ

Forget the glories he has known,

其が來しつたの天宮をも忘れさせんと

And that imperial palace whence he came.

(さもあらばあれ下土もまた

此の媪下土はたおのが特有の

其の前垂に満載す、

下土てふ性にふさはしき

さすがに厭離すべきにあらざ、

樂しき品の數をつくして

彼れ將た慈愛の念を有す。

慈悲愛憐のこゝろはあるをや。

加ふるにいくらかは

剩へはづかしからぬ目的もあり、

下土と名に呼ぶ此のめのも、

(そが上天よりあづかれる)

おのれと共に棲みぬべき

そが嘗て知れりし天上界の

來しかたの宿なりし

まことの慈母の情さへあり、

里びたれども此の乳母、

彼れ將た力の限りを盡くし、

人間といふやしなひ子を

下界の人となさんとて、

かゝやく榮光を忘れさせ

天上殿をも忘れしむ。

此の段は幼時の淨懷を遺失したるおのが鬱悶を慰諭せんが爲に、下界の志かすが
に厭離すべからざるをいふなり。一たび長じて後は再び幼時の大悅樂を経験す
る能はずと雖も、成人にまた成人の悅樂あり、例へば、其の智の深遠となりゆくが如
きは是れなり、もとより彼の天上界のこよなき幸福には比ぶべくもあらねど、現世間
將た樂しからざるにあらざ、云々。作者は此の意をうたはんと欲してまづ上天(即
ち前生)を慈母に比し、下土(即ち今生)を乳母に比し、彼れをみやびたる貴き婦人とし、
此れを里びたるいやしき媪とす、又人をして其の前生を忘れしむるは、畢竟此の養

母が抱持せる頗るはづかしからざる目的に基くなりとす。如何なる目的ありて
志かするかは、後々の解を讀めばちのづから明かなり。
▲「前垂に滿載す」とは村媪などが種々の果實などを前垂に盛りて見孫にわかち與
ふるに思ひ寄せたる比喻なり。

第七解

VII.

見よ彼のなまなつを 其が新生の幸福の間に(樂しみ遊ぶなまなつを)

Behold the child among his new-born blisses,

マシュー程の大ぢぢの大談のいとし兒を

A six years' darling of a pigmy size!

見よ彼れが

ぢのが手細工の間に横たはるを

See, where 'mid work o. his own hand he lies,

やな母がキスの囁きに抱かして

Fretted by sables of his mother's kisses,

其の父の眼より来る光明を身にソけて

With light upon him from his father's eyes!

見よ其が足もこには

或小圖案又は小繪圖(ちり)

See, at his feet, some little plan or chart,

そが人生の空想より(來たる)或斷片(ちり)

Some fragment from his dream of human life,

新に學ぶる技巧もてそがみづから造り上げたる(斷片ちり)

Shaped by himself with newly-learned art;

結婚若しくは祝宴など

A wedding or a festival,

哀悼若しくは葬式など

A mourning or a funeral;

ちり今はかゝる事 其が心に叶ふ

And this hath now his heart,

されは、いへる事の爲にとて彼れは其の歌を作るなり

And unto this he frames his song:

ウォオマンチオスの抒情詩

やがては彼れ其の舌を適せしむるならん

Then will he fit his tongue

或は商業の問答に或は戀の問答に又は争鬪の對問に

To dialogues of business, love, or strife;

而もそと久しからし

But it will not be long

抛擲せらるゝに至るならん

Ere this be thrown aside,

然して新に樂み誇りて

And with new joy and pride

此の(同上)小俳優は他の役を演ずること力をむこ

The little actor cons another part;

絶えず其が十人十色の劇壇を充しつゝ

Filling from time to time his "humorous stage"

あらゆる人物をて

麻痺せる老年に至るまで

With all the persons, down to palsied age,

人生が其の陪從中に具し來たる(麻痺せる老年に至るまで)
 That Life brings with her in her equipage;
 其が全職の
 As if his whole vocation
 無終の模擬にあらん如くに
 Were endless imitation.

見よ、をさなごの始めて此の世に生れいで、其の新福に圍繞せられていと
 樂しげに嬉戲せるを。見よ、ビクミー程の大きさの童が嬉戲せるを。
 此の段は無心無邪なる幼兒の現世に生れいでたる初めを叙説す。▲「ビクミー」と
 いふ語は希臘語よりいでたり。肘より手首までの長さをビクミーといふ、凡そ一
 尺三寸程なり、故にビクミーとは極めて矮小なる人種の稱ともなる、小人島人種と
 いふことしもなる。こゝにては小兒をいふなり。▲「六歳兒」とあるは、いたづら盛
 りのあちゆる小兒を指せるなれど、當時作者の念頭に特に存せりし一幼兒あり、そ
 は其の詩友コールリッチが愛兒ハートトリ、コールリッチなり。ウオヅテオスが他
 の小品に「To H. C.; Six Years Old」と題せる作あり、そは特にハートトリの幼態を歌へ

るものなり。本節と照しあはせ見れば、思ひなかばに過ぎぬべし。

見よや、其のをさなごが己が手細工物の間に横はりて遊べるを。その母が激しき接吻の跡はほのかに頬を飾り、其の父が慈眼の光りは常に其の身を照しつゝ。

▲ fretted とは語こゝにては ornamented の意なり。▲ sallies は突然と襲ふことの義。按ずるに、突然いだしめて幾たびも頬摺することを指せるならん。其の頬摺(接吻)の跡薄桃色をなして美しといふ義か、或は fretted を besetted と釋して「母の接吻の突撃に攻め圍まれて」といふ程の比喻とせるもあり、之れも一釋なるべし。▲ 此の段は慈母と慈父とに掌上の珠とめていつくしまるゝをさなごが種々に玩具を取り散らし、ふと思ひつくまゝに手當り任せにたはいなき小細工を物して遊び居るさまを歌へるなり。

見よや、其のをさなごの足元には、小き圖案らしき者もあれば、繪圖らしきものもあり。いづれもをさなごが此の人生に關して想ひ浮べたる空想の斷片なり。やゝ智慧づきて學び得たる小才覺もて、件の空想の斷片をば物の

形に造り成せるなり。

小兒のやゝ智慧づくや、頻りに物真似をなし、小細工をよろこぶ。或は冠婚喪祭の真似ごとをなし、或は饗宴、或は旅行、或は建築、或は庭園、さまざまの物を模擬するなり。小き圖案のたぐひは建築若しくは庭園などの圖案なるべし。而して此等は皆小兒が空想せる人生の片影なり。小兒の人生知識の斷片をばそが小技巧もて具形にせるなり。

結婚若しくは祝宴など、哀悼若しくは喪式など。

冠婚喪祭の真似は小兒のまづ喜ぶ所なり。

さて、今はかゝる真似事が彼れが心に叶へるゆゑ、小歌めく物を作りいだすも常にかゝる事に因めれど、やがてかゝる真似にも飽きて、或は商賣の問答をまねび、或は男女の情話を真似し、或は口論喧嘩の躰など、意の赴くまゝに口真似するに至りぬべし。

嗚呼、移り易きはをさな心かな。或時は冠婚喪祭の模擬をよろこび、小歌めく物を作りて口ずさみつゝ、冠婚喪祭の真似ごとをなせど、又忽ちに心移りて、こたひは商

人が顧客を迎へて賣買する折の口物を眞似、又或は仔細らしくも情婦、情郎が口物をまねびて「おまへは旦那さま、わたいは奥さま」の稚態を演じ、又忽ちに一轉して「何だ、此の野郎の口論句調を模擬す、云々。」▲こゝに用ひたる how 及び then は「或時は……或時は」の意に近し。

而もそれもまた久しからで、飽かれては抛棄られ、彼れは又新しき興に驅られて、さながら彼の俳優が種々の役目を演ずる如くに、此の幼き俳優も又新に工夫を凝らし、樂しげに、誇りがに、更に他の役目を演ずるに至る。

▲cons は「孜孜」として意を注ぐ」といふ程の義。▲小兒が種々の人情、風俗を模倣し來たるさまを俳優の諸種の人物に扮するに喩ふ。

所謂「十人十色人さまざま」の劇壇を設置して、ありとあらゆる人物を伴の劇壇に登らしめ來たる。幼より老に至る人間生涯の大行列の其の最後の陪從たる麻痺の老爺に至るまでも、皆是れ此の小優人が扮裝し得て剩さゝる所。

▲humorous stage とはシェイクスピア、ジョンソンなどいふエリザベス朝の劇詩作者

の筆に見えたるごとき奇癖ある人物のいつる舞臺をいふ。Humour の語今は滑稽、諷と譯すれども、昔は「氣癖」などいふ意に用ひたり。我が江島屋、八文字屋などの作に所謂「形氣」といふ語に相當せり。即ち一特癖ある可笑しき人物を humorous stage といへり、隨うて humorous stage といへば「十人十色人さまざま」の形氣の奇人物輩出する舞臺といふことになるなり。▲小兒の人生を模倣するや、おのれと同年輩の幼兒よりはむめて、終にはよひくの老爺の態をすらも模倣するに至る。壯より衰に至るまでの人生の大行列、一として模倣せられざるはなし、云々。

其が全職のはてしなき模擬に存したらんやうに。

小兒の模倣を力むるや甚し。さながら模倣をもておのが全職と思へらんが如し。

第八解

VIII.

汝(小兒)よ 其の外貌に其の無邊際の

Thou, whose exterior semblance doth belie

ウォオツチオオスの抒情詩

靈性を藏せる汝よ

Thy soul's immensity;

汝よなき賢哲よ

今尙其の先性を保續せる賢哲よ

Thou best philosopher, who yet dost keep

汝こそは群盲間の活眼

Thy heritage; thou eye among the blind,

汝は聾にして啞にして(而もよよ)無窮の甚深を解讀す

That, deaf and silent, read'st the eternal deep,

とこしなへに無窮の心の往來する(無窮の甚深を解讀す)

Haunted forever by the eternal mind,—

偉なる神仙よ

多福なる豫言者よ

Mighty prophet! Seer blest!

眞理の住する汝の如きは

On whom those truths do rest,

獲まくほりして我がともがらが終生困々悶々する(其の眞理の住する汝は)

Which we are toiling all our lives to find;

闇に迷つて 墓中の如き闇に迷つて(終生困々悶々する)

In darkness lost, the darkness of the grave!

嗚呼汝をさなごよ。其の無邪氣なる外貌の底に無邊際の靈性を包藏せる

幼兒よ、嗚呼汝は眞に無上賢哲なる哉。(他の人間は利慾、名聞に蝕せられて

過去の淨懷を遺忘し去り、殆ど彼の天上界にて享有せりし其の良性を失ひ

たるに)今尙依然として其の先性を保續せる汝よ。嗚呼、汝は賢哲なる哉。

汝こそは群盲中の活眼と稱すべけれ。汝こそは、學ばずして、聞かずして、言

はずして、而も能く無窮甚深の天意を(とこしなへに無窮の心が來往する

其の甚深の消息を)解する者といふべけれ。嗚呼、かくの如く大眞理の宿り

住する汝の如き者は(小兒は)まことに偉なる神仙かな、まことに幸ある豫言

者かな。我々世塵に染みたる輩が、いかで得てしがなく、と終生困々悶々

して、而も屢々闇にさまよひ、墳墓の底に墮ちたる如く、大闇黒に彷徨して得

がてにすなる大眞理の常に宿れる幼兒の身は。あなたふと、あな羨まし。

幼兒の無邪無心にしてちのづから天意を達得し、不知不識にして無窮に來往せる

うつくしさを口を極めて讃せるなり。

汝が頭上には汝が不死の靈性

Thou over whom thy immortality

日輪の如く永住す 猶主の奴に於けるか(と)

Broods like the day, a master o'er a slave,

除却すんがゆる照臨なり

A presence which is not to be put by;

(嗚呼)汝小き子よ なきなけれども汝が生(の頂に)立(ま)す

Thou little child, yet glorious in the might

天賦の自由を享けたる爲に榮光赫耀たる(小き子よ)

Of heaven-born freedom on thy being's height,

なごてかく切に努めて

喚起し來たるぞ

Why with such earnest pains dost thou provoke

避くべからざる束縛を持ち來(よ)き歳々を

The years to bring th' inevitable yoke,

(なごて)かくおろすにも自家の幸福と抗闘せんことするぞや

Thus blindly with thy blessedness at strife?

嗚呼、汝が頭上には、汝が不死無窮の靈性ながら大日輪の如く永住し、照臨す。譬へば主の奴に君臨して其の進退を督するが如し。まことに除却すべからざる照臨なり、必然の關係なり。嗚呼、汝小き兒よ、汝はをさなければども榮譽赫耀たり。汝が當生は蓋し人生の極頂なり、無上無比の最美の境なり、最清淨の境遇なり、天賦の自由の力によりて汝が身は小なるも、榮譽は甚大なり。然るになどて日々に努めて、みづから日々に敢て努めて世の塵垢に染み來たるぞ。歳と共に淨懷の汚れ來たるは、所詮己みがたき所なるに、などて汝は自ら努めて次第に年齢を加へ來たるぞ。年を加へば利慾、名聞の桎梏は終に避くるに由なからん。など汝はかくの如くあるかにも、盲目にも、天賦の幸福と抗闘するぞや。

小兒の齡を加ふると共に、其の天性の美を失ひ、俗塵に染み來たるを慨するなり。

たちまちに汝が心も其の塵俗の負擔を得ん

Full soon thy soul shall have her earthly freight,

而して世習は重きこと積霜の如く深きこと殆ど生命の如く

And custom lie upon thee with a weight

ウオオツチオオスの抒情詩

汝か上に横たはらん

Heavy as frost, and deep almost as life!

悲しむべきかなや、今こそあれ、やがて忽ち汝が淨き其の心もまぬかれがたき塵俗の負擔の爲に壓せられん、世人のすなる汚習悪俗はいましが心に積重して、其の重く除きがたきことは嚴冬の霜雪の重きが如く、其の深く透徹することは殆ど生命其のものゝ人生に深く貫透せるが如くならん。
作者が無邪を重んずること如何に深く、悪習俗を憎むこと如何に深きかを味ふべし。

第九解

IX.

あな喜ばしや

我が殘燼の裡に

O joy! that in our embers

(尙)或物の活存するは

Is something that doth live,

性の尙忘れざらん

That nature yet remembers

わしも飄忽たりし物を

What was so fugitive!

The thought of our past years in me doth breed

わが心ぞ

Perpetual benedictions: not, indeed,

彼の忝しと思はんに尤も相當せるものゝ爲にはあらず

For that which is most worthy to be bless'd;

彼のなまなごが單純なる信仰箇條即ち娛樂と自由との爲にはあらず

Delight and liberty, the simple creed

いそがしき時も休める時も常に(あどなき)其の胸に

Of childhood, whether busy or at rest,

勇みはいたく望みをもてる(なまなごが單純なる云々)

With new-fledged hope still fluttering in his breast:

あな喜ばしや、我々人間が幼き時の淨懷は既に殆ど燃え盡きぬれども、尙ま

かすがに其の殘燼のうち、幼き時の面影をとめたる或物の活存すること
 そ嬉しけれ、さしも飄忽として飛び去り易き其の物を、性の尙記すること嬉
 しけれ。今も尙往にし年々のことを回想すれば、永久に嬉し忝しと思ふ心
 を我胸に醸さるゝ。とはいへ嬉し忝しとは、最も喜びて至當なるべき其の
 物のためにあらず、幼きころに我が抱きし彼の單純なる信仰箇條を、只ひと
 へに無邪氣なる歡樂と不羈天真の生活とを專念せしをさなごゝろを思ひ
 いて、めでたし尊しと悦ぶにはあらず。然り、あどなき胸のうち、日ごと、
 時ごと羽根の生ひいづる樂しき希望をはいたかせて、いろがしき時も、休め
 る時も、只ひたすらに樂しかりしをさなき頃のあどなきを志かすがに指し
 ていふにはあらず。

此の段は齡を加ふるに隨うて人々の心汚れ來たれども、さすがに尙舊淨懷の記憶
 の減せるにあらねば、今尙天性の善美なるを想起し、これによりて靈魂の過去未來
 に通ふを知り深く人生の忝きを感じずといふ義。▲幼きころの單純なる信仰箇條
 とは大人の信仰箇條の複雑なるに對して、*creed* は宗教上の用語也、をさなき

時は氣隨氣儘に娛樂せんと欲するより外に餘念なきをいふ。▲かゝるあどなく
 無邪氣なる心はもとより忝き天の賜なれども、こゝに忝しと思ふとはそれにはあ
 らず、否、其の無邪の心の外に我が感謝する他の天の賜あり、云々。▲indeed といふ
 語場合によりては、*「ちやすがに」*などいふ義を含むと知るべし。

これらの事の爲にとて我れ高唱するにはあらず

Not for these I raise

感謝讃歎の頌を(高唱するにはあらず)

The song of thanks and praise;

否 彼の執拗なる疑念の爲に

But for those obstinate questionings

感覺に關する疑念及び外物に關する疑念の爲に

Of sense and outward things,

我が身より萬物の脱し去るが如く消え去るが如く感ずる心の爲に

Fallings from us, vanishings;

實在せりとは思はれざる諸の世界に動ける物に關して

Black misgivings of a creature

ウォオマンチオスの抒情詩

空漠と抱けりし疑惑の爲に

Moving about in worlds not realized,

高尚なる天性の爲に 其の前にいづる時は我々人間の肉性が

High instincts, before which our mortal nature

罪を犯せる者の如く愕然として震ひおのゝく(高尚なる天性の爲に)

Did tremble like a guilty thing surprised!

然り、これら幼時のあどけなき信條の爲に讃歎感謝するにあらず、否、下に謂ふ諸種の想念の幼時に存せりしを感謝するなり。所謂諸種の想念とは、彼我が五官をもて感覺する所を現に在る物とは信む得ずして、かた意地にも之れを疑ひ、すべての外物を夢、幻の如く疑ひ思ひし其の心、樹木屏障の如きをすら現實には在らぬ物と疑ひ、握りて見つ、觸れて見つ、時には恍として此等の物の我れを離れ去るかと思ひ、見る／＼消え去るかと思せし心、其の他あらゆる世界を空虚なる幻影と疑ひ、そこに動ける動物をも幻象ならんと疑ひし其の心、また彼の天成のいみじき本能、卑近を憎み高遠を愛し、かりそめにもいやしき目前の樂欲に惑溺せざらんとする高雅の天性、此の天性

に對しては、現在にのみ拘泥する人のいやしき肉性は、さながら大罪を犯せる者の如く自然にして愕きおのゝく、これら高尚なる諸想念の爲に、予はそいへるにも感謝するなり。

此の段は、此の長歌のはしがきに譯しおきし著者が自白を参照して、真意の在る所をさとるべし。蓋し、我々人間の耳目に觸るゝ所の萬物は畢竟するに幻影たるに外ならず、即ち空虚なる現象たるのみ、不死不滅にして萬古不易なるは此等現象を作りいだす心靈の外にはあらず、即ち一切萬物は悉皆是れ心靈の所造云々とは著者が幼時に疑ひ思ひし所、長じてフレイト一等の學説を知りていよ／＼信せんと欲する所。ウオオツチオス思へらく、學説にすがりてはじめて靈魂の常住を知り、若しくは萬物の幻象たるを疑はんか、是れ恐らくは妄想ならんが、無邪清淨なりしをさなごゝろに自然にして萬物の實在を疑ふは、是れ豈天の我れに告げさせたまふにあらずや。學ぶ所なくしておのづから知る、心靈の眞に靈なるを知るべきにあらずや。これ豈人の心靈の無窮に來往する證にあらずやと。

否、これら幼時の想念の爲に(感謝讃歎云々)

But for those first affections,

これら朦朧たる記憶の爲に(感謝讃歎云々)

Those shadowy recollections,

これら想念や記憶や如何なるものにあるらんとも

Which, be they what they may,

尙我が一生一切の大光明の源泉なり

Are yet the fountain light of all our day,

尙我が心眼の大炬たり

Are yet a master light of all our seeing;

我々が心を保持し撫育して擾然たる幾十の年々をも

Uphold us, cherish, and have power to make

永劫無窮なる大沈黙の生存中に於ける僅々數刹那たらしむる力あり

Our noisy years seem moments in the being

決して死ぬることなく

Of the eternal silence; truths that wake,

常に起坐せる眞理なり

To perish never;

不注意怠慢も滅ぼす能はず狂氣めく努力も滅ぼす能はず

Which neither listlessness, nor mad endeavour,

大人の力も小兒の力も

Nor man nor boy,

樂しき事の怨敵たる如何なるものゝ來たるとも

Nor all that is at enmity with joy,

到底全廢する能はず將た全滅する能はず

Can utterly abolish or destroy!

否々前にもいへる如く、予が深く感謝するは件の想念の爲にこそ、これらを
さなき折柄の自然のいみじき想念を忝しとは思ふなれ、これら朧に想起せ
らるゝ往時の想念をよるこぶなれ。そも、これらの想念は、夢に似たり
とも、まぼろしに似たりとも、如何なるものにあらんとも、兎も角も、此の想念
こそは、我々人生の一切を照らす大光明の源泉なれ、我々人間が心の眼に其

の指すかたを知らしむることよなき炬光とも見なすべきなれ。然り、これら
想念こそは、我々人間が加よわき心をさへ扶け、擁護し、撫育し、騒然又擾然
たる憂き事繁き年々をも、夢まぼろしと思はしめ、永劫無窮の大沈黙的生活
の、別に嚴として存在することを悟らしめ、其の大生活にくらぶれば、人生五
十の春秋は僅々數刹那に外ならずと大悟せしむる力あり。然り、これらの
想念こそは萬古不易の眞理なれ、常に生存し、常に起坐し、曾て死すること無
き眞理なれ。此の想念や、此の眞理や、何者か能く之れを滅せん。不注意怠
慢も之れを滅ぼす能はず。狂氣めく努力をもて之れを滅ぼさんと試るも
能ふまじ、大人の力も、小兒の力も決して之れを滅ぼす能はず。樂しき事の
怨敵たる禍も、悲しみも、悵鬱も、辛苦も、人間一切の凶災もいかでか之れを全
廢し得ん、いかでか之れを全滅し得ん。

一切萬物は心靈の所造と疑ひ思ひたる想念を争ふべからざる眞理と思惟し、心靈
の不死不滅は此の想念によりて斷信し得べしと思へるゆゑ、深く此の想念をたふ
とめる也。▲ uphold, cherish, have power 等は affections 及び之れと格を同うせる recol-

lections を主とす。即ち三行前なる which の動詞なり。▲ truths も affections 及び
recollections と同格、隨うて末の which は truths の代詞としても affections 等の代詞とし
てもいづれともさしつかへなし。▲ eternal silence は不死不滅、不言不語の心靈をい
ふ。

さるが故に 空のよくなる季節には
Hence, in a season of calm weather,

よしも内地にはるかに在る
Though inland far we be,

我々の心眼は 彼の不死不滅の海を見る
Our souls have sight of that immortal sea

こゝに我々をめて來にし(海を見る)
which brought us hither;

たちまちかしのくに旅しつまつ
Can in a moment travel thither,—

彼岸に遊ぶ子等をも見

And see the children sport upon the shore,

ウオオゾチオスの抒情詩

とこしなへに巻き返る大なる海の聲をも聞く

And hear the mighty waters rolling evermore.

かるが故に、年老い來たる今日だに、幸ひに空長閑なる季節には、心虚平にして名利の念鬱勃たらざる時には、よしや遙かなる内地に在るも、よしや清淨無垢なりし幼年の時代を離るゝと遠しと雖も、今尙髣髴として我々を此の現世にゐて來にし其の永劫の波濤を見る、肉眼にこそは得見ざれ、我が心の眼には常住不壞の淨樂境、今尙ほのかに見らるゝ也、かゝる淨念の浮べる時には、我が心窈窕としていつしか汚き現世を離れ、忽然として一刹那に、來しかたの海に旅しゆきて、件の海の岸邊に遊ぶ無邪氣の兒の影をも見、また永久に巻き返す永劫海の大濤の高く偉いなる聲をも聞く。

幼時の淨懷を追想し、幼時の疑惑を回憶すれば、靈魂不死の眞理は照々乎として火を睹るが如し。苟も心平にして虚ならんか、今尙過去の追想は禁せんと欲して禁ずること能はざらん。我が心如何に淨境に遠ざかりたるも、時としては心眼髣髴として前生を見、忽ちにして前生に還り、無垢の小兒と共に遊び神秘高大の天樂を聞く。▲原詞を熟讀して比喩の幽遠と辭の莊嚴とを玩味せよ。

第十解

X.

Then, sing, ye birds, sing, sing a joyous song!

And let the young lambs bound

As to the tabor's sound!

We, in thought, will join your throng,

Ye that pipe and ye that play,

Ye that through your hearts to-day

ウツナツチオナスの抒情詩

悦ばしむるをばほめる汝

Feel the gladness of the May!

其のむかし赫耀たりし光明の

What though the radiance which was once so bright

とつこなへに我が目より今奪はれしも何かあらん

Be now forever taken from my sight,

草に天光を見る時を 花に妙光を見る時を

Though nothing can bring back the hour

また得がたしとも何ぞあらん

Of splendor in the grass, of glory in the flower;

そを我々はなげむるべし 否むべし

We will grieve not, rather find

まりにに残れる物に於て力草を見いださん

Strength in what remains behind,

彼の本具の同感に(力草を見いださん)

In the primal sympathy

彼の同感や一たび存せし上からは常に存在してあるべき也
which having been, must ever be;

(又)人間の艱苦のうちにあり

In the soothing thoughts that spring

おのづから湧きこむ慰撫に於て

Out of human suffering;

(又)死後まづも洞觀する信仰に於て

In the faith that looks through death,

(又)賢明なる思慮をもちくる年々に於て

In years that bring the philosophic mind.

既に靈魂の不死を悟り、人生を頼もしと知るからは、何を苦しみてか徒らに
惆悵として懊惱たらんや、されば歌へや諸鳥よ、歌へ、樂しき歌を歌ひてをさ
なき羊の子等をして、鼓につれて踊るが如くに、勇ましく跳躍せしめよ、我が
ともがらも、いでやいで、身こそは老いたれ、心ほどはいかて汝等に劣るべき。
いづ諸共に舞ひ歌はん。笛吹き歌ふ汝等よ、遊びたはるゝ汝等よ。時しも
春の樂しさを溢るゝばかりに胸にたゝへて、戯れ遊ぶ汝等よ。我れも浮れ

て諸ともにいざや歌はん、いざ舞はん。嗚呼其のむかし幼き折に赫耀たりし光明の今は影なく消え去りて、今は早やとこしなへに、我が眼に見ること能はざれど、今は早や幼時とちがひ、草を見ても淨境の影を去のび、花を見ても天上界を想像し、毎に妙光に接觸する至幸の境界にはあらざれども、嗚呼、何かあらん、返らぬ事は歎かざるべし。否、むしろ今も尙後に遺れる天賜あり、其の遺存せる天賜にこそ我が力草を求むべけれ。夫れ彼の本具の同感は(外物と自己との間に自然に成りたてる同感は)人間本具の性にして、現に一たび存せしからは、常に存してあるべきなり。他と我れとは共に不滅の心霊也、他は我れなり、我れは他なり、我他彼此の別無しと相同感する心あるは、豈いみじき力草ならずや、又人の世に苦海といへど、其の辛酸のうちよりこそ人の心を安愉する慰めぐさの涌きいづれ。又みまかりし後までも洞觀し得て安立すなる其の信仰をこそ頼みとせめ。又年毎に加はりゆく賢き智恵をこそ頼みとせめ。

▲人間の艱苦のうちより自から涌きいづる慰藉に於てとは、大艱苦、大辛酸は適く以て人をして大悟せしむる縁也、塵慾のはかなきを知り、肉の樂みの暫且なるを悟り、やがて正覺に赴くべき縁となる也、ほい佛教の思想に同じ。▲幼時の淨懷を失ひしは可惜しけれど、本具の同感の日々に長じ、安心立命の縁の日々に加はり、不死を悟り得て泰然たる確たる信仰の日々に定まり、春秋と共に悟道の進みゆくは頼もしとなり。

第十一解

XI.

あはれさらば汝をさちの石泉よ、牧場よ、丘よ、森林よ
 And oh ye fountains, meadows, hills, and groves,
 我々がまことの相畔くことあるふしとは夢にだに思ふなり
 Forebode not any severing of our loves!
 今も尙我が心の底にはいまさらが力をおほゆるなり
 Yet in my heart of hearts I feel your might;
 子が唯一の悦樂を棄てたるも(畢竟は)
 I only have relinquish'd one delight,

ウオオツチオオスの抒情詩

更に常に汝等が勢力の下に生活せんが爲のみ
To live beneath your more habitual sway.

あはれ、さらば、汝をちこちの泉野、山林よ、とこしなへに我が友たれ、汝を愛する我が心は今もいにしへに異なることなし、我れと汝等と相畔くことあるべしとは夢にだに思ふなかれ。うはへこそはあれ、我が心の底は今も尙舊の如し、汝等が我れを動かす力はた舊の如し、我れは依然として汝等が感動力の偉いなるをおぼゆるなり、蓋し、我が年波の寄するにつれて、まばらく汝等を棄てたるは、我が唯一の悦樂たる汝等とまばし相隔たりしは、畢竟、人生の苦味を味ひ、彼れの苦と汝の甘とを對照し、ますます汝等の美なることを知り、幼時にもいやますばかりに、常に汝等の勢力を深く鋭く感じ得んが爲なるのみ、決して汝等を棄てたるにあらず。

予は今も尙愛するなり

岩に激して流れ下るを、ちこちの小川ともを

I love the brooks which down their channels fret,

其の水の輕きが如く、輕やかに飛び走りしなき折にも勝るばかりに

Even more than when I tripp'd lightly as they

又新しき朝陽の其の清淨なる光明も

The innocent brightness of a new-born day

今尙依然として可憐なり

Is lovely yet;

又夕陽の周圍に集まる(其の美しき)むら雲も

The clouds that gather round the setting sun

浮世の榮枯盛衰を觀察せりし目もて見れば

Do take a sober colouring from an eye

(昔しは絶えて見るを得ざりし)嚴肅なる色彩を帯び來たる

That hath kept watch o'er man's mortality;

今も尙自然の風物は、予の切に愛する所、岩に激して流れ下る清き小川のうつくしさは我れ今も尙愛するなり。其の川の水の輕きが如く、あなたこなたと飛び走りて、山野に遊びし幼年の、其の折にすら勝るばかりに、又東山にさし昇る朝日の光りの美しさは、我れ今見てもいとめでたし。又夕陽を圍繞する金色燦爛たるむら雲も、浮世の榮枯成敗を觀察したりし目もて觀れば、一種別様の趣きありて無常轉變の理を悟得せしむる媒なり。

更に走りくらへして更に賞を得たるなり

Another race hath been, and other palms are won.

あはれかたづけなきは人の心なり人情は生活のまじな也

Thanks to the human heart by which we live;

かたづけなきは慈悲、悦樂、畏怖の念なり

Thanks to its tenderness, its joys, and fears;

我れに取りては咲きいづるいと淺ましき野花だに

To me the meanest flower that blows can give

涙をもて發表するには餘りに甚深なる物思ひを起さしむ

Thoughts that do often lie too deep for tears.

▲「更に走りくらべして」云々とは、浮世の辛酸を経たればこそかく新たに自然の美
を感じるを得るなれ、同生涯をつゞけたらば、此の甚深感を得る能はざりしならん
の意。▲畢竟、天然の眞美を悟るは、或は愛し、或は樂み、或は怖れ、辛酸甘苦さま々
の世味を味ひたればこそなれ、さすれば感謝すべきは人間のもたる情の恩也。今
や我れ種々の辛酸を経たる甲斐に、區々たる野花を詠めてだにかゝる甚深の感を

なす。涙をもて發表し得るは尙感の甚深ならざるものなり、涙に表出する能はざ
る程の情思浮ぶ、是れ情思の至切なるものなり、往にし清淨の世界を想ひ、靈魂の不
死をも悟る、是れ皆悲喜に鍛へ來し人情の賜なり、云々。

評釋の七

シェイクスピアの劇詩

シェイクスピアの作と稱せられたる脚本あまたあるなかに確かに彼れが作なりと認められたるはおよそ三十六篇に過ぎず。これらは一千五百八十八年(作者二十四歳の時)より同六百十三年までの作なり。然るに作者シェイクスピアは一千五百六十四年に生まれて同六百十六年五十二歳にてみまかりぬれば、絶筆は四十八九歳の折なりしなるべく、隨うて其の著作期はおよそ二十五年なり、そを其の作に現れたる技倆、結構、着想等の異同を元として大別すれば四期となる。第一期は作者が修行期ともいふべき時にて、即ち諷刺諧謔を主としたる喜劇及び「ロミオ、アンド、ジュリエット」といふ悲劇とを作りし時代也。第二期は史劇と快活なる喜劇とを作りし時代、さて其の三期は深刻なる悲劇とちも、快活にしてうら、嚴酷なる喜劇とを作りし時代、さてまた其の四期は沈靜嚴肅にして而も優美爽快なる悲喜混交の劇を作りし時代なり。彼れが著作は此の四期に於て著き異同あり、着想の優劣

はいふまでもなく、文章、結構にも著き差違あり。此の故にシェイクスピアを知らんと欲すれば、尠くとも此の四期に就きて一二篇宛は讀まざるを得ず。例へば、第一期の代表としては彼れが處女作とみづから稱せし『ギョーナス、アンド、アドニス』といふ叙事の詩、兼ねては『ロミオ、アンド、ジュリエット』など。第二期の代表としては『キング、ジョーン』、『ヘンリー四世』、『リチャード三世』など、並びに『マアチャント、オフ、エニス』など。第三期の代表には所謂四大悲劇『ハムレット』、『マクベス』、『キング、リヤ』、『オセロ』など。第四期の代表には『テムベスト』、『ウインタアス、テール』など。シェイクスピア研究の方法よりいへば、第一期、第二期と順序を追うて評釋するかた穩當なるべきが、爰には態と第三期の作を擇びたり。蓋し第一期の作には所謂懸けことば、語呂、口合等多ければ、解釋最もや、こしく、よし釋し得て巧なるも能くは會得せらるまじき故なり。さて又第二期の作も喜劇をさて置きていへば、英國史に疎き人には興味甚だ深からず、且つは歴史上の管々しき註釋を加へんもうるさし。加之、技倆も着想も第三期のに劣りたり。所詮本評釋の主旨はシェイクスピアの作意、文脈等の片影を其の一作の幾齣のみによりて示さんとするにあれば、成るべく

は傑れたるを取るかた寧ろ至當なるべしとて、遂に四大悲劇の隨一なる『マクベス』をえらぶことゝせるなり。

マクベス

Macbeth.

此の作脱稿の年月に關しては種々異説あれど、假に一千六百〇六年といふを正しとすべし、讀者は此の作をもて作者が全盛の時の作と思へば足れり。此の作の材料は作者と同時代の史家ホリンシェッドといふが著し、蘇國の歴史よりいてたり。人物の姓名も、事實の大躰も、すべて彼れによれるなり。もと件の蘇國史は正史よりは野史に近くて、我が『太平記』などに似たるものなるを、作者がところ／＼ぬきとり、つなぎあはせ、更にまた潤色したるなれば、事實はいふに及ばず、主人公と立てたるマクベスの性質も正史のとは同じからず。活歴史といふことを史劇の本意なりとせば、シェイクスピアの如きも、太く脚本の本領を誤りたる作者の

一人なるべし。

此の作の數場の中なる幾十節はシェイクスピアが筆ならずといふ説あり。云々の句より云々の句までは他の作者ミッドルトンといふが挿入せしなりなど、明かに指摘せし學者もあり。此の事シェイクスピア研究の爲には大切な件なれど、入門釋義には必要とも思はれず、此の故に言はて叶はぬ分の外は皆省くことゝすべし。シェイクスピアの臺帳は我が國のとちがひ、床の淨瑠璃といふものもなく、明細なる道具立、書割、若しくは衣裳の詠へ等もなし。唯大鉢の場割とおよその舞臺面を示せるのみ、又人物の科介、思入れ等も、たまさかに大要をかき入れたるのみ、詳しくきことは無し、此の釋には種々管々しきことを書き入れたれど、それらは本文になきものと知るべし。

シェイクスピアのも、作によりては、ほとく幕毎に開場詞の附きたるもまた末に閉場詞のつきたるもあれど、此の作には無し。

DRAMATIS PERSONAE.

DUNCAN, King of Scotland.	Young STIWARD, his Son.
MALCOLM, DONALDIN, } His Sons.	SEXTON, an Officer attending on Macbeth.
MACBETH, BANQUO, } Generals of the King's army.	Boy, son to Macduff.
MACDUFF, LENNOX, ROSS, MENTETH, ANGUS, CAITHNESS, } Noblemen of Scotland.	An English Doctor.
FIANCE, Son to Banquo.	A Scotch Doctor.
STIWARD, Earl of Northumberland, General of the English Forces.	A Soldier.
	A Porter.
	An Old Man.
	LADY MACBETH.
	LADY MACDUFF.
	Gentlewoman attending on Lady Macbeth.
	HECATE, and three Witches.
	Lords, Gentlemen, Officers, Soldiers, Murderers, Attendants, and Messengers.
	The Ghost of Banquo, and other Apparitions.

SCENE—In the end of the Fourth Act in ENGLAND: through the rest of the Play, in SCOTLAND.

登場人物

蘇國王	ダ	ン	カ	ン	貴紳	メ	ン	テ	イ	ス
同長子	マ	ル	コ	ム	同	ア	ン	ガ	ス	
同次子	ド	ナ	ル	ベ	同	ケ	イ	ス	チ	ス
蘇國の將軍	マ	ク	ベ	ス	バン	コ	ー	子	フ	リ
同	バ	ン	コ	ー	英軍の將(ノサムブランド伯)	シ	ワ	ー	ド	
貴紳	マ	ク	ダ	フ	同	一	子	少	シ	ワ
同	レ	ン	ノ	ッ	マ	ク	ベ	ス	近	臣
同	ロ	ッ	ス		セ	イ	ト	ン		

マクダフの男(少童)
 英廷の侍醫一人
 蘇廷の侍醫一人
 兵卒一人
 門番の男一人
 老翁一人
 マクベス夫人
 マクダフ夫人
 マクダフ夫人の侍女一人
 女魔並に三妖婆
 貴紳、官人、武士、刺客、從臣、使者、
 數十人
 バンコーの靈並に其の他の妖怪

場處——第四段の末段は英國其の他はすべて蘇國

ACT I.

SCENE I.——An Open Place.

Thunder and lightning. Enter three Witches.

第一段

第一場 野外

雷鳴電光 三妖婆登場

Act の原義「動作」、Scene の原義「景」なり、こゝには意譯を掲げたり。此の二語シェークスピアの作にては、右の如く意譯しても、若しくは Act を「幕」若しくは「套」、Scene を「齣」と譯してもよけれど、Scene は必ずしも場。若しくは齣と譯しがたき場合他の脚本にはあり。例へば、佛の喜劇などに見えたる Scene はむしろ景、又は舞臺面と譯すべきものなり。何となれば、登場の人物が増減する毎に舞臺面の變換するを第一景、第二景と名づければなり。若し獨舞臺を第一景とすれば、申上げます云々といひながら侍士のいで來て問答するは第二景なり。さて此の侍士去りてまた獨舞

シェークスピアの劇詩

臺となれば第三景となるなり、餘は之れに準ず、されば時としては一幕中に數十景を含めることあり。シェークスピアにはさること絶えて無し、彼れが *Scene* と名づけたるは殆ど我が「場」と同じものなり。

舞臺の構造當時はなほ粗末なりしかば、道具立、書割なども總て當場のおもむきをほのめかすに過ぎざりき。或は荆棘の小枝をこゝかしこにさしはさみて深林の有様を知らしめ、或は小石五つ六つ散らし置きて濱邊なる由をきかせたることもあり。爰は「何村、何町など」札に書きて舞臺に掲げたることもありきとぞ。我が能狂言の舞臺面に似たりき。餘事ながら我が國今日の舞臺は道具立の大げふなること趣向こそ異なりたれ、西洋今日の譲るべしとも思はれず、むしろ本式に棟柱などを釘附にする所よりいへば彼れよりも贅澤なりと評すべし、是れ或は將來にシェークスピア風の作を出だすことを妨ぐべき一因縁とはならずや、道具だてを頼む心が作者の念頭を離るまじきゆゑなり。シェークスピアの作を見るに善美悉く其の作の詞句、人物が科白しやくせりふの間にあり、彼れは眼に訴ふることよりも心に訴ふることを専とせしこと明かなり。或は彼れは道具立等の粗略にて依頼しがたき

を知りし故に、自然全力を人物の上に致し、にやあらん。兎に角、道具立などを離れても趣味深きがまことのドラマなるべし。

野外とあるは舞臺面のおほよそを詠へたるなり、版によりては「荒野」と記したるもあり。雷鳴、電光とあるも詠への道具鳴物なり。三、妖姿とあるは我が國の「いづな使ひ」などやうの老婆なり。登場とは妖婆の三人連れ立ちて場に入るをいふ。

シェークスピアの作にては、幕あきて後人物の登場すること十中八九の例なり、又一場果つる毎に出場の人物悉く立ち去るを十中八九の例とす、いづれも直に舞臺面を換ふるに便宜なれば斯くしたりしならん。勿論登場、退場ともにシラセ無く、床の淨瑠璃も無し、我が國の劇を観慣れたる目には随分間の抜けたるものなり。此の劇の大筋は、蘇の王族マクベスがはじめは無二の忠臣なりしが、中ごろ逆心を生じて其の君ダンタン王を弑し、奸計をもて巧に弑逆の跡をくらまし、首尾よく國王の位に登りてまばらくは榮華に誇りたりしも、終にダンカンの王子マルコムを爲に誅戮せらるゝに至るといふ筋なり。第一段のはじめの趣はマクベスがダンカン王の勅命を蒙りてペンコーといふ將軍と共に、西方群島の領主マクドナルド

が謀叛したるを征伐し、勝利を得て凱旋する由を妖婆が妖術によりて早くも豫知し、途中に待ちうけて魔道に誘はんと試むといふ筋立なり。妖婆が人を魔界におとすといふことは當時の謬信にて、シェークスピア時代の脚本若しくは小説類などには間々見えたり。

第一場の當頭に雷といろき稲妻ひらめく物すごき有様を見せて三妖婆をあらはしたるは、此の黯慘たる悲劇の發端たるにいとよく叶ひたり。案ずるに、第一場は妖婆等が已に魔法を修しはて、將に立ち別かれんとする所なるべし。我が劇なりせば爰は後ろ黒幕などなるべければ、三妖婆の場を退くと共に幕を落とし、第二場陣營の場となるべき者ならん。そも、道義の日輪漸没して主人公マクベス罪惡の奈落に墜つるといふが此の劇の要點なれば、序幕に小暗き夕方の景色を點出したること暗に主觀的斜陽をも示すに似て面白し。

1 *Witch.* When shall we three meet again,

In thunder, lightning, or in rain?

甲妖婆

またも三人が會はん日はいつぞ、雷鳴り、ひかりて、雨ふる最中に。

此の一齣は悉く韵話より成りたれど、風調の美は移しがたし。總じて作者は嚴肅高雅沈痛等の場合をはじめとして、およそ重要な限りは、律語を用ひたり。韵を押したるは、特に優雅なる場合か、嚴肅なる場合也、尤も此れも彼の四期によりて相違あり。妖婆は卑しきものにはあれど、爰にてはいと嚴に宣せたり。▲末句の or 或は and と書き做せり、故に譯文は and の義に釋したり。

2 *Witch.* When the hurley-burley's done,

When the battle's lost and won.

乙妖婆

彼の騒動の終はらん折に、彼の勝敗のきまらん折に

▲彼の騒動とは官軍と叛徒との鬪戦をいふ。「勝敗」云々とあるも同じ。句拍子と音律の都合とによりて斯くは重ねたるなり。▲hurley-burley といふ語其の發音の中におのづから動擾の義を現す。

3. *Witch.* That will be ere the set of sun

丙妖婆

それぞ夕日の沈まぬころ。

1. *Witch.* Where the place?

シェークスピアの劇詩

甲妖婆 さて其の場處は。

マクベスに出逢ふべき場處を問ふ。先づ時を問ひ次に處を問ふ。

2 *Witch.* Upon the heath.

乙妖婆 いつもの野べにて。

▲ *heath* は荒れ果てたる岡なり。妖婆等の如き化生の物の屢々ゆきゝする處と見えれば意を酌みて「いつもの」と釋しつ。今も其の地なるべしと信ぜられたる處蘇國にありて物凄き場處なりと云々。

3 *Witch.* There to meet with Macbeth.

丙妖婆 かしこにてマクベスを俟ちあはさん。

原文には「其處にてマクベスにあはんずため」とあり。されど此のあたり張音の數不足して韻律の少しく亂れたるを思へば、原文に二三音の脱落あるにやとも思はる。先輩既に「候(即ち *lane*)」といふ一語を挿入れて張音の不足を補はんとせり、又或註釋家は此の白の前へ「シテまたたれにあはん爲ぞ」といふ意味にて *whom* といふ語を挿入して丙妖婆の白をば其の答の如く作りなせり、そは *when, where, whom,*

と三問にもてなさんとなり。爰には諸釋を參酌して前文の如く譯しつ。さて此のトタンに彼方にて妖猫の啼く聲すと思ふべし。此の猫は妖婆が使役せる怪獸なり。鼠色の猫を「グリーマルキン」又は「グリマルキン」といふ。啼くは其の主を呼ぶなり。

1 *Witch.* I come, Graymalkin.

甲妖婆 オ、今參る、グリマルキン。

2 *Witch.* Paddock calls.

乙妖婆 アレ蟄が呼うてるる。

▲「蟄」も亦使役せらるゝ動物なり。此の蟄は丙妖婆の使ふと見えたり

3 *Witch.* Anon!

丙妖婆 やんがて。

これにて三人打連れ立ちて去らんとす、乃ち諸共に左の句を唱す。

All. Fair is foul and foul is fair;

Hover through the fog and filthy air.

Exeunt.

シェークスピアの劇詩

皆々 きよきはきたなし、きたなきはきよし。いざ諸共に漂はむ、いぶせき空の
いぶせき狭霧に。

此の句前と同じく韻語にて四張音の句を用ひたり、歌といふべきにはあらねど、
おのづからなる風韻ありて尋常の白とは異なり。此の四張音句といふは作者が
妖婆若しくは妖怪などの白にのみ用ひたるものなり。魔物はすべて逆境を喜べ
るものなれば人間の善美とするものを醜惡なりとし、人間の醜惡とするものを善
美と思ふなり、其の故に狭霧の中を潜りいぶせき空にたゞよはんといふなり、いぶ
せきを喜べばなり。▲filthy air とは狭霧こめて小昏くいぶせき空をいふ。

SCENE II.—A Camp near Forres.

Alarm within. Enter King Duncan, Malcolm, Donalbain,

Lennox, with attendants, meeting a bleeding Captain.

第二場 フォレス近在の陣營

鐘鼓騒然(奥にて) ダンカン、マルコム、ドナルバイン、レンノック

ス、從臣數人と共に登場、手負ひの武官に邂逅す。

フォレスは地名、蘇國北東部エルシン州にあり、マクベス、バンコーの兩將が凱陣の
途中此の里に到らんとして圖らず妖婆に出であひし由ホリシエドが蘇史に見
えたり。陣營とは蘇王ダンカンが本營をいふ。アラ、ムは義譯すれば鐘鼓騒然
といふに當るべし。奥にてとは舞臺の奥の方の義。マルコム、ドナルバインは共
に蘇王の王子、レンノックは公卿前に見えたる登場人物の表とあはせ見るべし。
ダンカン王に邂逅せる手負ひの武官は、フォリオ版には Captain とあり、後の版には
Sergeant とあり、爰にあげたる原文は前者に従ひたるなれど、恐らくは後の方正し
かるべし。此のサアゼントの解いろくなれど、近衛の武官といふが最も穩當な
る解と見ゆ。此の武士の役廻りは所謂御注進に似てまからず、むしろ手を負うて
戰場より退きたる途中にて、圖らず王の目にとまりてかく軍物語に及べりと見る
がよかるべし。

Dun. What bloody man is that? He can report,

As seemeth by his plight, of the revolt

シェークスピアの劇詩

The newest state.

ダンカン 何者ぞや、血にまみれたるあれなるをのこは。容子によりて察するに、彼れは賊兵等が最近の模様を語り得べし。

▲ revolt といふ語爰にては賊軍(叛徒)と解すべし。血の字、幾たびとなく用ひられて全篇を貫ける、さながら血をもて斑々たる足跡を残したるが如し。

Mal.

This is the sergeant

Who like a good hardy soldier fought

'Gainst my captivity. Hail, brave friend!

Say to the king the knowledge of the broil

As thou didst leave it.

マルコム 彼れこそは先つころ、捕はれんとせし予を救ひて殊勝のはたらきをなし、武官に候へ。珍らしや勇士、汝が戦場を退りし折に見聞したる一伍一什を疾く陛下に申しあげよ。

▲「殊勝のはたらき」云々、原文には「善き勇敢のものゝふらしく」とあり。▲「珍らしや」

原文には Hail とあり。ハールとは祝賀の詞、汝が健ならんとを祝すといふ原義なり。

Cap.

Doubtful it stood,

As two spent swimmers, that do cling together

And choke their art. The merciless Macdonwald——

Worthy to be a rebel, for to that

The multiplying villainies of nature

Do swarm upon him——from the Western Isles

Of kerns and gallowglasses is supplied:

武官 さん候ふ、見分きかねてぞ候ひし、疲れ果てたる酒の達者が雙方互ひにからみあひて、角うたりしも斯くやらん。残忍なるマクドンワルド、あらゆる悪事を生みいづべき悪念心に群りたれば、叛逆人の張本には、いとふさはしきマクドンワルド、西の方なる島々より夥多の軍兵、驅りあつめて、輕き打物、重き武器とりくになりける其の行装。

シェークスピアの劇詩

And Fortune, on his damned quarrel smiling,
 Showed like a rebel's whore: but all's too weak,
 For brave Macbeth——well he deserves that name——
 Disdaining Fortune, with his brandished steel,
 Which smoked with bloody execution,
 Like valour's minion,
 Carved out his passage, till he faced the slave;
 And ne'er shook hands nor bade farewell to him,
 Till he unseamed him from the nave to the chaps,
 And fixed his head upon our battlements.

加之「時運」の女神も笑顔を作り媚を呈して、賊が娼婦と成果てたり。されども争でか「味方に敵せん、名にし負うたる勇武將軍、時運」には目もかけて、まこと「武勇神」の愛見の如く揮閃かす刃の血煙、縦横無盡に血路を開きて、なんなく賊首にめぐりあひ、彼れが胴の真中より、頤骨のあたりまで、さと切りさきて其の首

とり我が陣頭に懸けられたり。

▲「見分きかねて」云々、勝負を見分きかねたる意。▲「角うたりし」云々、互ひにからみあひたるため雙方共に其の技倆をほしいまゝにするを得ずして、共溺れにならんとせりといふ意。▲「あらゆる悪事」云々、此のところ原文には multiplying といふ語を用ひたり、此の語の意味は「悪事を増殖すべき」といふ意味なり、短く譯しがたければ本文の如くに譯しつ。原文に of nature とあるは「人の身にそなはれる」といふ程の義。此の一句の原意は「人の身にありといふ子を生むべき悪念が彼れが身に群りたれば猶蒼蠅が食物に群りて忽ち蛆を生むが如くに穢き悪念を増殖するや必せり、かるが故に彼れは賊首たるに適當せり」といふ意。▲「時運には目もかけず、時運は敵の方にありと見たれども事ともせず、却りて時運を卑めり」といふ意。▲「勇武將軍」原文には「勇武のマクベス」とありて「勇武」といふことを綽號の如くしたれど、東西語法異なれば譯には「マクベス」といはずして「將軍」としたり。▲「勇武神の愛見、前の時運の女神」に對していへり。泰西にては時運を人に擬して女性とすること常なり其の定めなき水性が娼婦などの心に似たればなるべし。▲原文の末に「握

手して別かれむともせざりき又さらばともいはざりき」といふ辭あり、其の意は「マクベスがマクドンワルドにめぐりあひて格闘し勝負決するまでは別かれざりき」といふ心なり、即ち敵將の戦死を嘲れるなれど管々しければ譯には省けり。▲我が陣頭「原文には、我が凸字壁に懸けたり」とあり。▲kerns并にgallowlasses、前者は輕き武器を携へたる兵士、後者は重きを携へたる者。▲西の方なる島々」とは蘇國の西にあるヘブリヂーズ群島をいふ、マクドンワルドの所領也。

Dun. O valiant cousin! worthy gentleman!

ダンカン　ホ、勇ましき從弟が振舞でかしたり〜。

▲「從弟」とはマクベスをいふ、これも史によりてまか作りたるなり。▲「でかしたり〜」原文の意は「あな尤けき貴紳なるかな」。

Cap. As whence the sun gins his reflection

Shipwrecking storms and direful thunders break,

So from that spring whence comfort seemed to come

Discomfort swells. Mark, King of Scotland, mark:

No sooner justice had, with valour armed,

Compelled these skipping kerns to trust their heels,

But the Norway lord, surveying vantage,

With furbished arms and new supplies of men,

Began a fresh assault.

武官　味方はこれに力を得て、昇る朝日のうらく〜と晴渡りたる彌生の空に、いと物すごき霹靂船くつがへす大あらしの忽然として起るが如く、快樂沸くよと見えたりし泉のうちより不測のわざはひ、御聽あれや蘇國のおほ君、大義を戴く武勇の刀風、迷足輕き木の葉武者を、物の見事に走らせたる、味方が隙にノルウェイ國王、血ぬらぬ打物、新手の軍勢、どつとおめいて横合より、息をもつがせず攻掛けたり。

▲「味方はこれに」意を酌みて添へたり、原文には無し。▲「昇る朝日」云々、原文には「太陽が其の反射をはむむるところより」とありて、解釋さま〜なり、其の中最も穩當なるは本文に譯したるが如き意味なるべし。案ずるに、彌生の空ははじめて春暖

となる時にて所謂春分也、まかるに此の季節にはおそろしきあらしの起ること常なり、案外の異變といふ事の喩に春分のあらしを引き來たりたるなり。▲木の葉武者、原文には「飛びはねる輕器兵」とあり、輕き打物を携へたる兵士は身輕なればイザ敗北となれば武器を頼みて戦ふことをせずしてひとへにそが踵に依頼して走るとなり。木の葉武者は其の義譯。

「ルウエイ國王」賊首マクドンワルドに應援して兵を出だし横合よりマクベスが軍を襲へるなり。此の王の名はスエハハと稱せり。

Dun. Dismayed not this

Our captains, Macbeth and Banquo?

ダンカン

シテそれが爲に我が兩將、マクベス、バンコーは狼狽へたりしや。

原文には「狼狽へたりしや」とあれども、東西語法異なれば本文の如く譯しつ。

Cap.

Yes,

As sparrows eagles, or the hare the lion.

If I say sooth, I must report they were

As cannons overlarged with double cracks:

So they

Doubly redoubled strokes upon the foe.

Except they meant to bathe in reeking wounds,

Or memorize another Golgotha,

I cannot tell——

But I am faint, my gashes cry for help.

武官　さん候、雀にあうたる高根の鷲、兎にあひし獅子の如くに。實事を語り奉れば兩將軍は大砲が二倍の彈藥得たりんやうに、勇氣日ごろに幾倍なし、向うに前なき奮撃突戰、沸きたつ血けぶり、血汐の海に浴せられん所存なるか、さなくば第二の骸骨岡を此國にきづかんそのありさま。さりながら、もはや息きれて奏しがたし、それがしが深手の疵口助を求め候なり。

▲「さん候」こゝには「然り」の意味に用ひたり、「狼狽へたりしや」といふ問に答へて「然り、狼狽へたり」と答へたる也、すなはち、雀に遭ひし鷲、兎に遭ひし獅子の如くに狼狽へ

たり、いひ換ふれば「毫も驚く色なかりき」といふ意味なり。かく反語を用ひて答へたればこそ其の次に「實を語り奉れば」といひ改めたるなれ。此の武官深手を負ひながら屢々戯謔の言を吐けり、下文にダンカンが「汝の言葉云々」といひて其の勇氣を稱する言葉と照しあはせて見るべし。

原文に cracks とあるは砲發の響なれど、修辭法に謂ふ換喩にて因と果とを相換して彈藥の義となるなり。▲骸骨岡の原語 Golgotha は地名、ヂエルサレムの東北なる少し高き岡なり。原義は「骸骨が原」といふ程の義、古代の刑場なり、本文には屍骸積みて山をなすといふ趣をいはんとて用ひたり。

Dun. So well thy words become thee, as thy wounds;

They smack of honour both:—Go, get him surgeons.

[Exit Sold, attended.]

ダンカン 勇まし〜、言葉も、負傷もいとよく汝が身に叶ひて武士たるの面目見えたり。誰そある、彼れを外科醫が許〜。

「武官介抱せられて退場」

「痛手に屈せざる物語といひ、負傷といひ、勇士たるに耻かしからず、いとよく武士の眞面目に叶ひたり、此の二者(言葉と負傷と)の上に汝が譽ある武夫たる證見えたり」となり。▲smacks といふは「徴を現せり」といふ程の義。

Who comes here?

誰ぞ、あれへ参るは。

以上武官の軍物語、あまり業々しくしてまことしからずといふ説あり。或はまた第二場はシェークスピアの筆にあらざるべしとて種々の理由をあげたるもあり、管々しければ爰には略く。

Enter Ross.

ロス登場

ロス侯勝軍の報道をせんとて戦場より蘇王が本營に來たれるなり。

Mal. Worthy thane of Ross.

マレム オ、あれこそはロスの侯爵。

原文の worthy とす語は其の身分に耻かしからぬ又は有徳なる等の意味をもて

る語なれど、かゝる場合に用ひたるは多くは尊重の意味を含めるのみにて深意なし。故に侯爵の二字を添へて義譯したり。以下かゝるたぐひ多からん、一々断らるべし。

Len. What a haste looks through his eyes! So should he look,

That seems to speak things strange.

レノンキス さても忙はしげなる眼光。さもあらん、あれこそは奇異なる事變

をば報せん使節。

Ross. God save the king!

ロス 天神わが大君を護らせたまへ。

こは猶、陛下萬歳などいふがごとし。國君にあへる折かくいふは彼方の習俗なり。

Dum. Whence cam'st thou, worthy thane?

ダンカン 侯爵、何處より参られしぞ。

Ross. From Fife, great king,

Where the Norweyan banners flout the sky,

And fan our people cold. Sweno himself,

With terrible numbers,

Assisted by that most disloyal traitor

The thane of Cawdor, began a dismal conflict;

Till that Bellona's bridegroom, lapped in proof,

Confronted him with self-comparisons,

Point against point rebellious, arm 'gainst arm,

Curbing his lavish spirit: and, to conclude,

The victory fell on us.

ロス 惶れながらファイフより、ノルウェイ軍の大旗が虚空に羽うちて味方を煽ぎ、身の毛いよだす戦場より。さても敵將スエノー王は、猛兵あまた引卒し、不忠不義の叛逆人コードルに應援せられておそろしげにも押寄せたり、然るに味方の「マーズ尊神」百鍊鐵の甲冑に身を固めて一騎と一騎彼れにいであひ、互ひに刃の鋒より火花をちらして戦はれしが、終に難なくとりひしぎて、勝

利は味方に歸して候ふ。

▲「虚空に羽うち」原文には「虚空を戯弄し」といふ程の意味にものして敵の軍旗が傲然として翻へるさまをきかせたり。此の一句に就きては種々の解あり、官軍全勝の後にファイフを立いでたる使者なるべきに「身の毛いよだす」云々といふは不都合なり、斯くては賊軍が勝を得たりしに似たりといふ評あり。或は float の前に did といふ語を加へて過去に讀ませたるもあり、されど散文とはちがひかゝる、律語の詩にては語格を破ることも間々あるべし、さなくともかゝる語法は修辭法に謂ふ現寫法の一例として解すべきなり。▲「スエノー王」は前に見えたるノルウェイの王なり。▲「ゴードル」はダンカンの臣にしてひそかに敵に應援したるものと見るべし、志からざれば後段に至りて解しがたき所あり。▲「マーズ尊神」原文には「彼のベローナの花婿」とあり、ベローナは羅馬の軍神にして女性なり、常に血見、火見、飢兒といへる三侍女を従へて來たるものと傳へたり。爰にては羅馬の軍師マーズ神の事としてマクベスの綽號としたれど、正傳にはたがへり、マーズはベローナの夫にあらざり。▲「百鍊鐵」原文には「保證の甲冑」とあり、堅固なる甲冑の義なり。▲「一騎

と一騎」此の原文の直譯は「自家をもて」とあり、互ひに一騎打にて優劣を決せんとしてといふ程の意なるべし。▲又原文に point rebellious とあるは叛賊の鋒の義なり、シエークスピアには往々形容、言を物主格の名詞のやうに用ひたる處あり。

Dun.

Great happiness!

ダンガン ホ、よろこばしや〜。

Ross.

That now

Sveno, the Norway's king, craves composition;

Nor would we deign him burial of his men

Till he disbursed at Saint Colme's Inch

Ten thousand dollars to our general use.

ロス

されば敵將スエノーも勢ひ挫けて和睦を乞へり、されどもセント、コ

ムの島にて軍用の資一萬弗をば味方に、献納致し、まては賊が死骸の埋葬を
もつやく許さず候ひき。

▲「セント、コルム」は蘇國フォースの入江にある小島なり、今はインチ、コルム、又の名コ

シエークスピアの劇詩

ロンバ島ともいふとぞ。▲「一萬弗」時代ちがひなり、ドライといふ貨幣は一千五百十八年ポヘミヤにて鑄造せし「Thaler」といふ貨幣よりはじまれり、かゝる時代ちがひはこの作にも他の作にもあまたあり。

Dum. No more that thane of Cawdor shall deceive

Our bosom interest : go pronounce his present death,

And with his former title greet Macbeth.

ダンカン 此の上はロードルをして再び予が信任にそむきて不軌を企つることあらしむべからず。疾く彼れを死刑に處せよ。且つかれが爵は之れをマクベスに移し授けて其の凱旋を賀ぎ來れ。

▲bosom interest「クラークは「親密の愛情」と釋したり、深く信任して寵用したる心」といふ程の義。

Ross. I'll see it done.

ロス 心得て候ふ。

▲原文の直譯は「勅命心して取行ひ候ふべし」。

Dum. What he hath lost, noble Macbeth hath won.

[Exeunt.]

ダンカン あはれロードルが失ひたるをば忠臣のマクベスが得たりけり。

(一同退場)

以上第二場は序幕なれば取りいで、評すべき程のことなし。此の齣にては作者力めてマクベスが勇武絶倫なる證を擧げたり、彼れが戦に臨みては獅子の如きこと後に對照の必要あり、心にとめ置くべし。ダンカンがマクベスを信任寵用する心、此のたびの勳功によりて大に増加したる趣、王が白にいちじるく見えたり。王さきには輕々しくロードルを信用して彼れの叛するに及ぶまでは聊かも其の野心をさとらず、今やうやく過をさとりながら、また輕々しくマクベスを寵用せんとす、作者暗に此の王の不明を點示す。

SCENE III.—A Heath.

Thunder. Enter the three Witches.

シェークスピアの劇誌

第三場 フォレス近在の荒野

雷鳴 三妖婆登場

此の場も前と同じ日の事なり。三妖婆約束の如く再會してマクベスが來たるを俟てり。妖婆が白は例の如く律語にて第八行以下は押韻したり。

作者が用ひたる通常の律語は韻を踏まざる二單音づゝの五歩より成れり、而して各歩の第二單音を張音となせること例なり、まかれども、ひとへに此の躰をのみ用ふるときは千篇一律となりて恰も七五若しくは五七の句拍子を全篇に通じて用ひたらんやうにて興薄く且つは心もたゆまるべし、此の故にや作者便宜を計りて或は張音の置きどころを換へ、或は變躰の律歩をまじへなどして巧に同調の弊を避けたり。さてかゝる變則にもおのづから定規ある由はアボットが著『シェークスピア、グラムマー』を見て知るべし。

1 *Witch.* Where hast thou been, sister?

2 *Witch.* Killing swine.

3 *Witch.* Sister, where thou?

甲妖婆 姉御よ何處へ往ておぢやつたるぞ。

「先刻別れて後何處に何事をしてありしか」と問ふ意なり。此の段の妖婆等が詞づかひは第一場に見えたるに比べて遙に下卑たり。下段の評註とあはせ見るべし。

乙妖婆 豕を殺してゐる申した。

妖婆人を怨むことあれば其の人が飼へる豕を妖術をもて殺すといふこと當時の謬信なり。此の謬信近きころまでも残りたりきとおぼしく、アチソン、スコットなどが著述にも同じ趣のこと見えたり。

丙妖婆 姉御よ、そもじは何處に。

甲妖婆 に向ひて問ふ。

1 *Witch.* A sailor's wife had chestnuts in her lap,

And mounched, and mounched, and mounched:—

'Give me,' quoth I:

'Avoint thee, witch!' the rump-fed ronyon cries.

Her husband's to Aleppo gone, master o' the *Tiger*;

Put in a sieve I'll thither sail,

シェークスピアの劇語

And, like a rat without a tail,
I'll do, I'll do, and I'll do,

甲妖婆　されば、聽いてたもれや、さる船長の婢が前掛に栗の實をのせて、喰ふ程に、むつりくく。わしにも給べといへば、エ、退れ、妖術婆と、肥満のまつかきめが絶叫くさる。あいつが亭主は、タイガル號の船長で、アレッポーへ往てある筈。見よ、今に篩に駕つて風を使うてあしこへわたり、尾無鼠に化けて見をれくく。

妖婆が仇をなすはかゝる瑣屑の事に基くと信ぜしは當時の妄想なり。▲篩に駕りて飛行すと云ふも當時の謬信也。▲尾無鼠、妖婆は變化自在にして如何なる動物にも化け得れども其の尻尾無しと云々。鼠となりて、タイガル號の中に潜み船底をくひやぶりて海水の注入するやうになさんとなり。即ち婢に對する怨を其が夫に向ひて修めんとするなり。▲アレッポーは地名。▲I'll do. は今に怨を晴すべし」の意。

2 Witch. I'll give thee a wind.

1 Witch. Thou art kind.

乙妖婆　一手の風はわしがやらうぞ。

妖婆は風を使役し且つこれを賣るものなりといふこと當時の謬信なり。爰にては友達づくゆゑ無代價にて順風一手を贈らむといふ也。一手の風とは東南の風若しくは南西の風などいふ意。

甲妖婆　あかたでけ。

3 Witch. And I another.

1 Witch. I myself have all the other;

And to every point they blow

All the quarters that they know

I' the shipman's card.

I will drain him dry as hay;

Sleep shall neither night nor day

Hang upon his pent-house lid;

メーグスマヤの劇詩

Posters of the sea and land,

Thus do go about;

Thrice to thine, and thrice to mine;

And thrice again, to make up nine.

Peace! — the charm's wound up.

乙妖婆

見せてたもれ何ぞ〜。

甲妖婆

歸り途て難船させて溺死させた水夫の拇指。

案ずるに我がまへかたの手柄を誇示するなるべし、かの嬋が夫をもまづこの如くせんといふこゝろか。

(奥にて陣太鼓の音)

マクベス、バンコーが凱陣の太鼓の音なり。

丙妖婆

アレ〜聞こゆるあの太鼓は、たしかにマクベス。

これにて皆々よろしくこなし、聲を揃へて歌ふ。

皆々

まがつ日の神につかふる姉妹は、陸と海との急使、手に手を取つてぐら

るぐる、ぐうるぐる。三度は汝の三度は吾の、もいちど三度、ぐうるぐる、ぐるぐる、これで恰ど九たび。シツ〜。呪符はもう出来た。

▲「狂津日の神」云々、原文には「人間の宿命をつかさどる姉妹」とあり。宿命といふことは多くあしき命に用ふれど、固より禍とはおなじからず、いまだ妥貼なる譯語を得ざれば假に本文の如くに譯しつ。案ずるに、希臘の鬼神誌に「宿命の神」といふ三體の姉妹あり、長を Clotho、次を Lachesis、末を Atropos といへり、長は人間の命の糸車をかへ、次は糸をひきいだし、末なるが缺もてこれを切ると、云々。爰にては此の三姉妹の役廻りを三妖婆にさせたりと見ゆ。此の一節の韻語は妖婆等が互ひに手をひきわひてぐる〜と踏りまはりながら唱ふなり。一人につき三度づゝ都合九たびめぐるはまじなひと見えたり。三九の數のことは既に前に解きたり。

以上妖婆が性質は悉く當時の謬信によりて作り設けたりと見ゆるものから、第一場に見えたるもの、並に下文に見えたるものとは痛く相異なる所あるに似たり。下文なるはあくまでも「狂津日の神」につかふる姉妹といふ趣見えて神々しきまでに物すこし、まかるに以上見えたるは、其のいふことも、詞づかひも、無下に卑しう品

下りて我が國にいふ飯綱使ひなどに髣髴たり。これは宿命の神の役廻りをせさせんといふ作者が本意とは稍々違へるに似たらずや。此の故に或は第三場のはじめの部分は他人が書加へしならんなどいふ説もあり如何にや。其の議論の一端はハドソン氏著『シェークスピア』第二卷マクベスの條下に就きて見るべし。

Enter Macbeth and Banquo.

Mac. So foul and fair a day I have not seen.

Ban. How far is't called to Forres? — What are these,

So wither'd, and so wild in their attire,

That look not like th' inhabitants o' th' earth,

And yet are on't? Live you, or are you aught

That man may question? You seem to understand me,

By each at once her choppy finger laying

Upon her skinny lips; you should be women,

And yet your beards forbid me to interpret

That you are so.

マクベス並びにバンコー登場

マクベス かやうに陰晴定まりなく、きよくまたきたなき日はそれがし曾て見つること無し。

「先刻までは晴天うららかにしていとめでたき日和なりしに、倏忽としてかゝる雲霧たちこめたる悪しき空合となれること不審醜と美とを一時に現じたるかゝる不思議の天氣は予未だ見及びしこと無し」といふ義。解説いろ／＼なれど、右にいへるやうに解くが最も穩當なるべし。また空の俄に曇りたるは妖婆が魔術に因ると解すべきなり。此の白中の *fair and foul* といふ語第一場なる妖婆が *fair is foul* といふ語に呼應す。ダウデン氏は「マクベス」いまだ妖婆と相見ずといへども其の心既に妖婆と相通じたる由は此の語の相呼應したるを看ても知るべし云々。案ずるにマクベスが逆心は妖婆が刺戟を得て増長したるのみ、其の素は其の心に存したりと解すべし。

バンコー 此の處よりフォレスまでは路程如何ばかり候ふやらん。

シェークスピアの劇詩

空曇り、雷轟き、前途漠々たり、バンコー、マクベスに向ひて本營への距離を問ふ。其のトタンに妖婆の姿を認めて愕然たるこなし。

や、あれなるは何者ぞ、顔色はまわみ、着たる衣はみだりがはしく、人間界に在るべしとも、見えぬ姿の在りとし見ゆるは。

マクベスいまだ妖婆を見ず、バンコー先づ彼等を見ると解すべきか、否、恐らくはマクベスの目はバンコーよりも先に彼等の姿を見たりしならんが、口を開くこと能はざりしなりと解するが穩ならん。マクベスが口を開かざるは無意識の間に我が心の我れを答むることあればなるべし。

いかに、汝等は生あるか。人間の問答し得べきなるものなるか。まわみたる唇へ齊しくひゝわれたる指を置くは、さては我が意を解したるよな。さるにても女とは見ゆれども口髭あるは。

妖婆は容貌老女の如くにして口邊に髭あり、云々、これもまた當時の謬信なり。

Macb. Speak, if you can: what are you?

1 *Witch.* All hail, Macbeth! hail to thee, thane of Glamis!

2 *Witch.* All hail, Macbeth! hail to thee, thane of Cawdor.

3 *Witch.* All hail, Macbeth! that shalt be king hereafter!

マクベス 返答せよ、物いひ得べくば。汝等はそも何者ぞ。

甲妖婆 萬歳マクベスどの。萬歳グラミス侯。

▲「グラミス侯」はマクベスが現爵なり。

乙妖婆 萬歳マクベスどの。萬歳コードル侯。

前場の末にダンカン王がロース侯に命じてマクベスをコードル侯に叙せよといひつけつれども、マクベスの未だそを知らざること勿論なり、妖婆は逸早くもそのことを豫知せるなり。

丙妖婆 萬歳マクベスどの、萬歳々々やがて國王となりまさんずマクベスどの。

▲all hailといふも、hailといふも、爰にては共に「萬歳」の義なり。▲マクベスひそかに野心あり、我が心より外には知るものなしと思ひたるに、今ゆくりなくも道破せられたり、彼れ豈愕然として慄然たらざるを得んや。案ずるに此の刹那には未だ

欣然として將來の成功を思ひやるべき違なかるべし、故に目をみはり、口をつぐみて愕然とすのしくのみ。

Ban. Good sir, why do you start, and seem to fear
Things that do sound so fair?—I' the name of truth,
Are ye fantastical, or that indeed
Which outwardly ye show? My noble partner
You greet with present grace, and great prediction
Of noble having, and of royal hope,
That he seems rapt withal: to me you speak not.
If you can look into the seeds of time,
And say which grain will grow and which will not,
Speak then to me, who neither beg nor fear
Your favours nor your hate.

バンコー マクミスのど、なにとて和殿は打おのゝきておはするぞやいとめで

たう聞かるゝことを。いかに、誓言汝等は幻影なるか、但しはおもてに見えたる如きか。同僚マクミスどのを汝等現爵を以て賀ぎ、且つ未來の榮進を祝し、剩へ遂には國王ともなるべしと云へり、爲に彼の一人は恍惚たり。我れには汝等絶えて語らず。やをれ、化生のもの、汝等は「時」の懷にありといふ機運の種子をうかいひ見て、何れの粒が生長なし、何れがせざるかを語るを得るか、いざさらば語れ、我が爲にも。我れは汝等の愛をも求めず、また汝等が憎みをもおそれず。

1 *Witch.* Hail!
2 *Witch.* Hail!
3 *Witch.* Hail!
1 *Witch.* Lesser than Macbeth, and greater.
2 *Witch.* Not so happy, yet much happier.
3 *Witch.* Thou shalt get kings, though thou be none :!
So, all hail, Macbeth and Banquo !

I Witches. Banquo and Macbeth, all hail!

甲 妖婆 萬歲。

乙 妖婆 萬歲。

丙 妖婆 萬々歲。

甲 妖婆 マクベスどのに比ぶれば、劣れども優る福壽海。

乙 妖婆 幸は一層少けれども、やしほにまさる幸ありて、

丙 妖婆 國王とこそはなりたまはね、國王あまた生みたまはんず。されば皆

祝へや二方を。萬歲マクベスどの、萬歲バンコーどの。

甲 妖婆 バンコーどの、マクベスどの、萬々歲。

妖婆既にバンコーを祝し終りて薄ドロにて去らんとす、此の時までは惘然たりしマクベス、遠にあわてたる聲を振りたてゝいふ。

Macb. Stay, you unperfect speakers, tell me more:

By Sinel's death I know I am thane of Glamis;

But how of Cawdor? the thane of Cawdor lives,

A prosperous gentleman; and to be king
Stands not within the prospect of belief,

No more than to be Cawdor. Say, from whence

You owe this strange intelligence? or why

Upon this blasted heath you stop our way

With such prophetic greeting? Speak, I charge you.

[Witches vanish.]

マクベス まて、まちね、解しかぬる物のいひやう。語れ、更めて我れに答へよ。父のシテル逝りたれば、我がグラミスの侯たることは我れもまたこれを知れり、されどもコードルの侯とはいかに。

▲「解しかぬる」云々、直譯は「まて、汝等不分明なることをいふやからよ」云々とあり。

▲「imperfect 爰にては「曖昧」の義なり。▲「父のシテル」、ホリソンシエドの蘇史に據れり、正史にフィンレーとあるを字形の似たるより訛りたるならんと云々。▲マクベス熱くなりて問ひ反へず語氣に一物あること明かなり、内心平かならば他が何とい

はうと問ひ反へさずともあるべし、内外呼應する所あるゆゑに聞流しがたきなり。
 コーデルの侯は尙存^{てんぞん}へて、今現に時めけるをや。また國王とならんなど、は、
 此れ彼れ共に信じがたし。

コーデルが賊軍に應援したりしことはマクベス知らぬことあるべからず、然るに
 時めき榮えたりといふは心得がたし、態と心の喜を掩はんとてシラバクレたりと
 するも、様子を知れるバンコーの前なれば其の甲斐なかるべし、作者の筆のぬけ目
 かと云ふ説あり。デイトン氏辨じて曰はく、コーデルの應援は秘密なりしゆゑに
 マクベスは知らざりしならん、げにや後段にアングスが長々しくコーデルの罪
 状を數へたつるあたりを比べ見れば、コーデルの叛逆は意外の變にて、マクベスは
 いふに及ばず、多數の人々が心附かざりしこと、解釋して當然なるが如し。

▲「信じがたし」直譯は「信用の見込の中に立たず」とありて「信じて豫望すべき限りに
 あらず」と譯すべきものなり。

語れ、いづくより汝等^{きみら}はかゝる奇怪の知識^{しよせ}を得たるぞ。また何故^{なせゆゑ}にかくの如
 く艸木^{くさき}もあらず野のゆく手を遮り、わが行末をば祝するぞ。語れ、語れ。

▲oweはhaveの義。▲blasted heathは第一場にthe heathとありしと同じものにて
 blastedは酷熱にやかれて草木の枯れ果てたるといふ程の義。▲「語れ、語れ」原文に
 は「語れ、我れ汝等に禱る」といふ程の義にて、chargeと使ひたり。chargeは爰にては
 「誓願す」若しくは「疾く乞ふ」などの義なり。▲マクベスが血眼になりて將に消え去
 らんとする妖婆の姿を見送りて豫言の確定を聽かんとするさま見るやうなり。
 ▲「我が行末」云々、意譯なり。

(妖婆消滅)

Ban. The earth hath bubbles, as the water has,
 And these are of them. Whither are they vanished?

バンコー 土にも泡あること水にひとしと聞く、彼等は其のたぐひならん。
 さてもいづくへ消失^{きえ}せしか。

驚きながらも淡然たる所にバンコーとマクベスとの胸懷の差見えたり。此の邊
 コーデルリッチの評面白し、其の『シェークスピアに於けるLecture』を參看すべし。

Mach. Into the air; and what seemed corporal melted

シェークスピアの劇詩

As breath into the wind. — Would they had stayed!

マクベス 空氣の中へ。あり／＼見えつる其の形が風に溶けゆく息の如くに。
残りをし／＼。

▲corporeal は coporeal にて「有形なるもの」と訓ずべし、形容詞なり。▲「風に溶けゆく息」コールリッチも稱へしが、寒き空の折にあひていとめでたき比喩なるべし。▲「残りをし」原文には「今まばし」といふまほしかりしを」とあり、マクベスが遺憾の面色見るが如し。

Ban. Were such things here as we do speak about?

Or have we eaten on the insane root

That takes the reason prisoner?

Macb. Your children shall be kings.

Ban. You shall be king.

Macb. And thane of Cawdor too? went it not so?

Ban. To the selfsame tune and words. Who's here?

バンコー 果して彼等は爰にありしか、今噂すなる化生の者は。

▲「今我々が噂すなる妖しの女等は、實際爰に出現してありしか、將た夢にてはなかりしか」といふ意。

但しは我々兩人は、彼の分別を奪ふといふ毒草の根にあてられたりしか。

▲「分別を奪ふ」分別力即ち理性を失はしむる毒草といふ義、原文には「分別を虜にす」とあり。當時此のごとき毒草ありと信じたりしなり。henbane 即ち「菲沃斯」とか譯するもの、別名を insana といふ「狂亂草」の義、これを服すれば發狂すればなるべし。本文にいへる毒草は即ち此の insana のことならんといふ説あり。

マクベス いかにもバンコー、和殿の子孫は國王たらんと。

妖婆が言葉マクベスの念頭を離れず、口をつぐむ能はずしてバンコーに語る。

バンコー 和殿はまた國王たらんと。

バンコーは戲謔の口調にてかくいへるならん。ホリンシニッドの蘇史によれば、此の問答は雙方とも戲言のやうに記したれど、作者は別に用意あるにや。

マクベス またコードルの侯爵たらんと。いかに、志か申さたりしや。

バンコー いかにも、さか申しなり。

直譯は「其の通りの調子と言葉とにて」といふ程の義、即ち全く「宣給へる通りなり」の意なり。此のトタンにロッセ等入り來るをバンコー目早く見て

バンコー かしこへまゐるは何人にや。

ト彼なたを見こむ。

Enter Ross and Angus.

Ross. The king hath happily received, Macbeth,

The news of thy success ; and when he reads

Thy personal venture in the rebels' fight,

His wonders and his praises do contend

Which should be thine or his : silenced with that,

In viewing o'er the rest of the selfsame day,

He finds thee in the stout Norwegian ranks

Nothing afraid of what thyself didst make,

Strange images of death. As thick as hail

Came post with post, and every one did bear

Thy praises in his kingdom's great defence,

And poured them down before him.

Ang.

We are sent

To give thee from our royal master thanks ;

Only to herald thee into his sight,

Not pay thee.

Ross. And, for an earnest of a great honour,

He bade me, from him, call thee thane of Cawdor :

In which addition, hail, most worthy thane

For it is thine.

ロッセ並びにアングラス登場

二卿ダンカン王の勅命によりてマクベスを迎へ賀せんとて來れるなり、我が劇に

シェークスピアの劇詩

謂ふ、勅使のお入りなり。

ロツス　いかにマクベス、足下がこたひの勝戦を君聞こしめし及ばせられ、御よろこび斜ならず、また足下が身を挺んで、みづから賊將と格闘ありし、其の注進をみそなはして、御驚歎と御稱美とが御心の中に相たゝかひ、いづれの方を勝れりとも決めかねさせたまひしが、

▲happilyとあるは「喜びて」の義と解すべし。▲success、時々は只結果、といふ義に用ふることもあれど、爰にては本文の如く解すべし。

爰は勅使の言葉なれば或は「足下」を、其方など譯するも可からんか。當時thouといふ代名詞は概して「you」とは區別して用ひたり。thouは多く君上より臣下に、若しくは長者より下輩に向ふ時に用ひたり。アボットを看るべし。

▲「御驚歎と御稱美」云々のあたり原文紛亂して文理明かならず、諸説を參酌して本文の如く譯したり。▲thine or hisとせるthineはpraiseに係りhisはwondersに係れりと見るべし、云ふ心は如何にせば其の驚歎を十分にいひあらはしてマクベスを稱美することを得べきかと心中惑ひ迷へりとの義。

遂には御口をつぐませられ、尙も其の日の戦ひの餘の注進を御覽すれば、足下敵中に切つて入り、ノルウェイの猛兵を屠り、見るも忌々しき「死の相」をまのあたりに現じながら、絶えて怖るゝ色無かりし勇敢無雙の一伍一什。

▲「遂に御口」云々、原文には「それを」もて沈黙して」といふ意味の句を用ひたれば解釋くさくあり、本文はクラークに據れり。▲stout、爰に「はbold and resoluteの義とシミットは解せり。▲死の相、原文には「死の肖像」とあり、死といふものゝ肖像は此くの如きものかと思はるゝばかりに多數の人を屠殺して骸の山を築きたりといふ意。▲「忌々しき」はstrangeといふ語を意譯したるなり、悉しくいへば、並々の武士ならばかゝる恐ろしき死の相を見たるのみにても恐怖すべきにみづから其の相を製り出だしながら怖るゝ色なし、云々の義。

▲「繁きこと」の如く、踵を接する早馬、早使、皆足下をば我が國の大干城と稱へつゝ、注進御前に降りそゞげり。

▲「繁きこと」云々、一本には「繁きこと」taleの如くとあり、taleとhailと字相似たれば誤れるならん。若し「tale」を正しとせば、數ふる違なきほどに「な」義譯すべきか。

アングス これによりて陛下それがしらをさしつかはされて、御感のみことのりを傳へしめたまふ、すなはち我々兩人は足下を御前へ將てまるれよとの御使功に報いんの御使ならず。

すなはち招待の使にして功勞を賞する使にはあらず、報賞は別にみづから下し賜ふべしといふ意。

ロッス また御殊遇の印として取あへず足下をばコールドルの侯に叙せよとある君の御説。

▲「御殊遇の印」原文には質、又は手附金と譯すべき earnest といふ語を用ひたり。すなはち該爵は只今より足下の有と相なりたり、いとく尤けき侯爵閣下、いざ祝しさふらはんず、萬歳々々。

原文に addition とあるは爵の義なり。今までは勅使の詞、此の祝詞は同輩以下となりていふ心持なるべし。

Ban. What, can the devil speak true?

Macb. The thane of Cawdor lives: why do you dress me,

In borrowed robes?

バンコー これはいかに、邪神が實を語り得るか。

バンコー 妖婆が豫言せしことのおたりたるを驚く。▲「邪神、或は妖魔」とも譯すべし、妖婆が事ふる魔神を指す。

コールドルの侯は存生なるに、借もの、装束をばなにとてそれがしに着せたまふぞ。

▲「装束、禮服なり、只一通の隠喩としても解し得べけれど、爰は特に當時作者の時代の叙任式を見せたるならんといふ説あり。其の説によれば、アングス、ロッスの兩人がコールドル侯爵の官服をさへげて舞臺にて装束更めの式を行ふやうに作りたるなり、云々。

Ang. Who was the thane lives yet:

But under heavy judgment bears that life

Which he deserves to lose. Whether he was combined,

With those of Norway, or did line the rebel

Macbeth's story's poet

With hidden help and vantage, or that with both
 He laboured in his country's wreck, I know not;
 But treasons capital, confess'd and proved,
 Have overthrown him.——

アングス　かの侯爵にてありける人は、げにいまだ存へたれども、重き御咎の下つたれば、失ふべきが當然の命を辛くも支ふる有様。彼れ果して賊軍と一味合夥なしたりしか、但しはひそかに應援して賊魁を助けたりしか、はた雙つながら兼ね行ひて御國の破滅を企てたりしか、そはそれがしの存せぬ所。

▲原文に *who was* 云々とあるは *he who was* 云々の義かゝる省畧法はシェークスピアには間々あり。▲重き御咎下りといふゆゑに「辛くも支ふる」とはいはせたるなり。

▲原文に *line* とあるは「助く」の義。▲*rebel* とあるは爰はマクドナルドのこと也。さもあれ、こよなき逆罪は、自白せられ、證據擧がりて、全く彼れを滅し了んぬ。これにてマクベスよろしく思入。

Macb. [*Aside*] Glammis, and thane of Cawdor!

The greatest is behind.—— Thanks for your pains.——

Do you not hope your children shall be kings,

When those that gave the thane of Cawdor to me

Promised no less to them?

マクベス　クラミス……コールドル……

マクベス 傍をむきて獨語す、これを「獨白」といふ、見物人には聞こゆれど、舞臺の人物には聞こえぬ積りなり、わが能の、狂言にてすなる獨語と同じ呼吸なり。

最大なるものは尙殘れり。

妖婆が豫言二つまでは的中せり、第三の最大なる豫言、即ち國王になるべしといふ豫言は尙殘れりと肚の中にて思ふなり。かくいひさして氣を變へ

御使御苦勞に存じ申す。

アングス、ロスの二人に對ひていふ。胸間に磅礫たる野心を押しかくし、さらぬ躰にもてなすなり。さてバンコーに對ひ、小聲にて

いかに頼もしとはおぼさぬか、我れにコールドルの爵位を約せし妖婆等が和殿

の子孫には王位を與へんと豫言しつれば。

Ban.

That, trusted home,

Might yet enkindle you unto the crown,

Besides the throne of Cawdor. But 'tis strange:

And oftentimes, to win us to our harm,

The instruments of darkness tell us truths;

Win us with honest trifles, to betray us

In deepest consequence.

Cousins, a word, I pray you.

マシユー

そをば悉く信ぜられなば、遂にはコーデルの爵位の外に、王位をも

得まほしうおぼさうするぞよ。

▲「悉く」とは妖婆が豫言を悉く信ぜば終には王位をも望むに至るべしといふ意、enkindle とは鼓舞すといふ義に解すべし。

此の一言はバンコーがマクベスに野心の萌さんかと恐れて諫めたる言葉なり。

下の「さる」にても奇怪至極といふ詞は、むしろ獨語の趣あれば、此の諫の詞とは或は別ならんといふ説あり。いかにや。

さるにても奇怪至極の事かな、人を邪道へ誘はん爲に邪神等の時に實を語り、まづ些少の驗を見せて、大事におとしいるゝ例もあり。

▲harm といふ語こゝにては邪道の義に解するを可とす。▲妖婆、原文には「暗黒の具」とあり、暗黒魔界の器械となりて動く化生の物といふ程の義、即ち妖婆等を指す。▲大事に、原文には「最も深き大切なる場合(又は結果)」とあり

以上バンコーがマクベスを誡めたる言葉なれど、忽ち顧みて他人と物語る呼吸より推し測れば、さまで深切なる諫言とも思はれず。バンコーが爲人を評せんとせば、此のあたり殊に注意して觀るべし。さてロース等に向ひて

▲御兩所申しきこえたきことの候よ。
▲Cousins とは諸侯相呼ぶ時の稱呼なり、御兩所といはんよりは「兩卿」などいはんかた品位には叶ふべきか。この白終りてバンコーはロース、アングスの兩人と共に少しく後へ引退り、小聲にて相語る介をすと思ふべし。

但し此の談話は別に意味あるにあらず、マクベスに獨白をいへせんための便宜なり、下のマクベスの白は看官にのみきこえて三人には聞こえぬ積り也、即ちマクベスが胸中に思念する所なりと思ふべし。我が國の劇にてはかゝるあたりは總て思入のみにてすまふこと十中八九の例なり、これ我が國の劇に緻密なる情懷を表現したるもの、妙き由縁の一つにやあらん。

Macb. [Aside] Two truths are told.

As happy prologues to the swelling act

Of the imperial theme. — I thank you, gentlemen. —

The supernatural soliciting

Cannot be ill: cannot be good: if ill,

Why hath it given me earnest of success,

Commencing in a truth? I am thane of Cawdor:

If good, why do I yield to that suggestion

Whose horrid image doth unfix my hair

And make my seated heart knock at my ribs,

Against the use of nature? Present fears

Are less than horrible imaginings:

My thought, whose murder yet is but fantastical,

Shakes so my single state of man, that function

Is smothered in surmise, and nothing is

But what is not. —

マクベス (傍白) ニケ條までは適中せり、

妖婆の豫言ニケ條までは的中せり。

これぞ正しく天が下をすべらぎといふ外題にて大活劇の演ぜらるべき幸先

見する開場詞。

人物の白に梨園の詞を用ふること作者の慣手段にて、其の例いくらもあり。開場詞とは幕開前に唱ふ歌にて、多くは當一幕の大意などを語るものなり。

豫言ニケ條までの中したるによりて考ふれば、國王となるべしといふ豫言も多分

は的中すべしと、マクベスが肚の中にて思へるなり。さてかく獨語しつゝも其の氣をさとられまじとて

方々かたじけなく存じ申す。

といふ。こはアングスとロースとの挨拶なり、使者を勞ふ言葉なり。さてまた獨語す。

この奇しき衝動は、悪にもあらず、善にもあらず。悪ならば、なぞて「實をもて端を開きて大事成就の保證を與へん。

▲solicitingとは何となく心を衝動するものあるをいふ、心、いられの義なり。▲earnestとは既に前にも見えたる手、附金といふ語なれど、こゝには保證と譯したり。

既にコーデルの侯爵たり……

善なる證據には、我れは妖婆のいひし如くコーデルの侯爵になり了りぬ、これ豈大事成就の前兆ならずや。

善ならば、例にたがひてかく奇しく心亂れ、かゝる怖ろしき幻影現れ、身の毛よだち、沈靜なりし心臓が胸うつばかりに鼓動なさんや。

▲例にたがひ、原意は、性の習ひ即ち日ごろの經驗に反してといふ義。▲奇しく心亂れ」の原語 that suggestion なり。此の suggestion といふ語を temptation といふ義に用ふること間とあり、即ち誘惑の義なり。▲胸うつばかり、原文には肋骨を打つとあり。▲沈靜なりし、いろ／＼の解あれど、蓋し本文の意に外ならず。

若し此の心地、悪しき事の兆ならずば、斯くわれをして慄然たらしめ、鮮血淋漓たる弑逆の幻像を心眼に映せしめ、平然とおちつきてありし心臓を鼓動し、はげしく肋骨を打つほどに動悸を感ぜしむることなからんに、といふ程の義なり。

想像は現實に優るのならひ、わが怖ろしき弑逆はまだほのかなる幻なれども、心は爲に攪亂され、臆測に作用塞がり、現ならぬもの、外に現なる者も無し。

▲想像「云々、喜ばしきことも怖ろしき事も未然のうちが感深し、現に其の物に出てあひたる時よりも、かうかあゝかと想像する間の怖ろしさは一倍なる習ひなりといふ意。▲こゝの fear といふ語は「怖ろしき事」といふ義。▲ほのかなるは but といふ語を義譯したる也。▲心は爲に、原文は人の心を一國に喩へたり、single とは應援もなき孤獨の國家といふ程の義にて、かよ、わきといふ義を含めり。▲臆測に「云

々、行末の事をさまざまに疑惑揣摩するが専となりて、心の作用はそがために塞がれたりとの意。▲「現ならぬ」云々、今日の前に無き未来のことにみに心を奪はれて現在の事物は在りとしもおぼえずとの義。

以上マクベスが自問自答の胸懷なり、弑逆の念胸間に磅礴し、只管未来の事のみを想像するが爲にほと／＼現在のわれを忘れんとしたる様をいへるなり。

Ban.

Look, how our partner's rapt. —

Macb. [Aside] If chance will have me king, why, chance may crown me,

Without my stir. —

バンコー

御覽ぜよ、同僚には何故にや思案にかきくれ……

これはバンコーが二卿にさ／＼やける言葉なり。

マクベス

果たして王となるべくんば……おのづからにも冕を得つべし、わ

が手をば下さずとも。

▲chance は「偶然」の義即ち「運」の義。▲stir 所爲といふ程の義。

若し偶然の運によりて王となり得べきものならば、わが手をは下さずとも九五の

位にも即くことを得べし、弑逆の念は思ひとまるべきか、と一たびは思ひ惑へるなり。

Ban.

New honours come upon him,

Like our strange garments, cleave not to their mould

But with the aid of use. —

Macb.

[Aside] Come what come may,

Time and the hour runs through the roughest day.

バンコー

新に賜はつたる官爵は異様なる衣服にひとし、被なれぬうちには兎

角その身にそぐはぬならひ。

これもバンコーが傍よりマクベスを評して二卿にさ／＼やける言葉と見るべし。

▲「被なれぬ」習ひの助けなくてはとなり。▲「身にそぐはぬ」原文の意は其の型にシ

ツクリはまらぬといふ義。

マクベス

(傍白) 兎も角もあれ、荒るゝ日もやがてぞ時經つ。

「何事の出来するともまゝよ總べて運を天に任せん、荒れに荒れたる日も時刻たて

ば夕なぎの空となる例なればと獨語するなり。▲「時たつ」原文には「時と刻とはい
と荒き日をも通過す」とあり。runn」といふ動詞本來は單數の主格に應ずべき動詞
なりされど時と刻とは語は二つなれど其の意は一なれば當時の文法に志たがひ
て斯くは用ひたる也。是の如き例外にも數とあり。此の白の意につきて管々し
く解したるもあれど要するに「かななるつらき日もつひには長閑なる夕べとなら
ざるべしや」といふ程の義にて蓋し當時の俚諺をいひかへたるものならんとクラ
ーはいへり。

Ban. Worthy Macbeth, we stay upon your leisure.

Macb. Give me your favour : my dull brain was wrought

With things forgotten. Kind gentlemen, your pains

Are registered where every day I turn

The leaf to read them. Let us toward the king. —

Think upon what hath chanced, and at more time,

The interim having weighed it, let us speak

Our free hearts each to other.

Ban. Very gladly.

Macb. Till then, enough. — Come, friends.

[Exeunt.]

バンコー マクベスどの、一同御便宜をおまち申すぞ。これはバンコーがマクベスを催促する詞なり。▲leisureとは「足下の御都合即ち
貴意といふ程の義。▲全文の原意「われ／＼一同貴意を俟てり、もはや御立あれ」。
マクベス あら赦しめされ、おぞましくも忘れしことをば思ひ出だすに心を
とられて……

▲favourとは寛恕の義。

兩卿の心勞は心に録して長く日ごとくに拜讀なさん。いざさらば君のみもと
記臆の帳面に書記し永く二卿の恩を忘る可からずとなり、マクベスが二卿への甘
言なり。かくてバンコーに向ひ、小聲にて

今日の儀に就いては和殿も宜しく御思案あるべし、後日よく勘合して互ひに包みず心のうちをば。

バンコー　こなたよりもねがふところ。

マクベス　まづそれまでは、此の場は此のまゝ。いざたまへ、方々。

(一同退場)

SCENE IV. — Forres. A Room in the Palace.

Flourish. Enter Duncan, Malcolm, Donalbain, Lennox, and Attendants.

第四場　フォレス王宮の一室

喇叭亂吹　ダンカン、マルコム、ドナルベイン、レンノックス、從臣
數人と共に登場。

Dun. Is execution done on Cawdor? Are not

Those in commission yet returned?

ダンカン　コードルの死刑をば行ひつるか。吩咐たるものどもは、いまだ

歸りきるらんか。

Mal.

My liege,

They are not yet come back. But I have spoke

With one that saw him die: who did report

That very frankly he confessed his treasons,

Implored your highness' pardon, and set forth

A deep repentance. Nothing in his life

Became him like the leaving it: he died

As one that had been studied in his death.

To throw away the dearest thing he owed,

As 'twere a careless trifle.

マルコム　いまだ参着せず候へども、最後に彼れを見しもの、先刻報じて候ふには、彼れ尋常に白狀なし、謹んで陛下の仁恕をねがひ、後悔の色面に見れ、かねて死ぬる業を習ひうかべてありけんやうに、命を棄つること敵履のごとく、

いと殊勝なりし最後の振舞、これこそ彼れが一生のこよなきほまれと聞こえ候。

▲ My liege とは「我が大君」の義、譯文には省けり。 ▲ have spoke 今の文法に従はば have spoken とあるべきところなり。 ▲ set forth とは profess 若しくは exhibit の義にして「顯す」と譯すべきものなり。 ▲ 死ぬる業を習ひ浮べてありけんやうに「study」といふ語は梨園の科語にして「熟達」といふ程の義、例へば「荒事に study せり」といへば「荒事に熟達せり」といふにひとし。爰はコールドルの死に就くこと歸するが如きをほめて死ぬる事に熟達せる者の如しといふなり。 ▲ 「命」原文には「彼れが有る最も尊きもの」とあり、生命のことなり。 ▲ 「敵履の如く」原文には「毫も心を注めざる瑣屑のもの」とあり、命を抛つこと敵履を棄つるが如しといふ意。 ▲ 「一生のほまれ」彼れが一生中の美事、其の死際のいさぎよきを以て最上とすといふ義。 ▲ became とは Grace の義にして「飾る若しくは譽を與ふ」など譯すべし。

コールドルの最後の模様を those in commission 即ち死刑執行を申附けられたる者の口にいはいしめずして「マルコムにいはいしむる是は一種の省筆にして東西古今の作

者が慣用の法なり。

Dun.

[There's no art]

To find the mind's construction in the face:

He was a gentleman on whom I built

An absolute trust. —

ダンカン 人の心の淑慝を面に読みえん術もなし、彼れこそはあくまでも予が信任せし縉紳なりしに、

▲ mind's construction とは心の解釋の義、こは此の作者の特殊なる文法なり。テイ
トンは心の結構といふ義に解したれど「解釋」と訓むべし。 ▲ 「彼れこそは云々、原文には「彼れは予が圓滿の信任を築き置きし縉紳なりき」とあれど、爰はマクベス等が入り來れるを見て俄に言葉をとめたる氣味ありと知るべし。

Enter Macbeth, Banquo, Ross, and Angus,

O worthiest cousin!

The sin of my ingratitude even now

シェークスピアの劇詩

Was heavy on me. Thou art so far before,

That swiftest wing of recompense is slow

To overtake thee: would thou hadst less deserved,

That the proportion both of thanks and payment

Might have been mine: only I have left to say,

More is thy due than more than all can pay.

マクベス、バンコー、ロース、アングラス、登場

從弟のぬし。

こは王がマクベスの入り來たれるを見ていそがはしく呼びかけたる詞なり、推重の意を含みたりと知るべし。

おことに負ける我が罪をば、今しもないところぐるしう思ひをりたり。

原文には「今も今とてわが負義の罪わが心の上に重かりき」とありて、王がマクベスに對する禮儀の意を表せり、俗解すれば「そなたの功勞に十分報酬することが出來ぬゆゑ甚だすまぬと思つてゐた」。

あはれ和君の功勳は、いと高く雲に沖りて、疾き報賞の翼も及ばず。

マクベスが勳功を大鳥に喩へ、報賞を小鳥に譬へ、功大にして賞及ばずといふ義をいへり。

今一段低くかりせば、相應に感賞せんこと、朕が力にも適ふべがりしか。

原文の直譯は下の如し、感謝と報酬との相應の割合が予が力の中にありたらんことを望めるからに、おことの功勞の一しほ尠かりたらんことを欲するなり、本文はこの意を翻譯して義譯せり。▲mineは in my power といふ義に解すべし。

おことが得べき報賞は、我が全力もて報い得んよりもやしほにまさり入しほにまさるといふより外には言葉もなし。

▲thy due おことが予より得べき筈のもの、即ち報酬の義なり。▲more than more's たく力をいれていへる言葉なり。

ダンカン王の人を知る明無き由は前にもいへり。コーデルの叛逆によりて人心の窺ひ知りがたくして信ず可からざるを歎じながら、其の舌いまだ乾かざるにマクベスを信む用ふる此の如し。所謂一を知りて二を知らざる也。又ダンカンの

褒辭の溢美なるを味ふべし。

Macb. The service and the loyalty I owe,
In doing it, pays itself. Your highness' part
Is to receive our duties; and our duties
Are to your throne and state, children and servants;
Which do but what they should, by doing everything
Safe toward your love and honour.

マクベス

臣下たるの本分は、之れを行ひ候ふが取りも直さず報にて候ふ。

▲ *service and loyalty* とは *loyal service* といふ義にて「忠義の務」といふ意なり。形容詞と名詞とを二分して二つながら名詞の形にして並べ用ふる法此の作者の慣用なり、すなはち語は二つなれど意は一つなり、此の故に *pay* といはて *pays* といふ *pays* は單數の主格に伴ふべき動詞なり。▲ *owe* はわが負ふと同じ義に解して可し。▲ *pays itself* 爰には「すなはち報なり」と譯したり。全體の大意は「臣僕たる某は其の君に對して、忠勤を盡すことを得れば、取りも直さず大なる報賞を得たるにひとし、

此の上もなき本望なり、何ぞ別に報賞を望み申さんや」となり、マクベスが王に對する僞善の言なり。

また陛下の御分は、そを受け納めたまふにあり、それがしらは皇室の兒孫、國家の臣僕、陛下に對しまるらせて愛敬の微衷に背くことなくよろづ執り行ひ候はんは、固よりそれがし等が至當の務、御勅なかくに勿體無し。

▲ *safe toward* 云々、直譯は「陛下の愛と尊敬との方角へ安全に」とあり、陛下を愛敬する心に少しも違はざるやうに」といふ義なり。▲ 「御勅なかくに」云々、は意を掛みて添へたり、口に蜜ある賊臣が腹の劍のするどきを思ふべし。▲ 「臣等は」云々、此のところ原文には「而してわれ」の「本分は」とありて下段の *which* といふ代名詞も此の本分といふ語を承けたり。

此のうち王はバンコーを迎へ、握手して

Dum. Welcome hither:
I have begun to plant thee, and will labour
To make thee fall of glowing.——Noble Banquo,

シェークスピアの劇詩

That hast no less deserved nor must be known
 No less to have done so ; let me unfold thee
 And hold thee to my heart.

Ban.

There if I glow,

The harvest is your own.

Dun.

My plenteous joys,

Wanton in fulness, seek to hide themselves
 In drops of sorrow.—Sons, kinsmen, thanes,
 And you whose places are the nearest, know,
 We will establish our estate upon
 Our eldest Malcolm ; whom we name hereafter
 The Prince of Cumberland : which honour must
 Not, unaccompanied, invest him only,
 But signs of nobleness, like stars shall shine

On all deserters.—Hence to Inverness,
 And bind us further to you.

Macd. The rest is labour, which is not used for you
 I'll be myself the harbinger, and make joyful
 The hearing of my wife with your approach :
 So, humbly take my leave.

Dun.

My worthy Cawdor !

Macb. [*Aside*] The Prince of Cumberland ! That is a step
 On which I must fall down, or else o'erleap,
 For in my way it lies. Stars, hide your fires :
 The eye wink at the hand ; yet let that be ;
 Which the eye fears, when it is done, to see.— [*Exit.*]

Dun. True, worthy Banquo : he is full so valiant,
 And in his commendations I am fed ;

It is a banquet to me. Let us after him,

Whose care is gone before to bid us welcome :

It is a peerless kinsman.

[Flourish. Exeunt.

ダンカン よくぞ参られし。

王がバンコーへの挨拶なり

われ既に移し植ゑてかく御身をば培養ひ初めたり、此の上は力を盡して尙彌生にも生長すべう思ふぞよ。

われ御身を登用しはじめたり、此の上はますく立身するやうに力を盡し得さすべしといふ意を植物に喩へていへり、ダンカン王の仁恵に厚きを看るべし。

いともいみじのバンコー、御身が功勞もマクベスに劣らざりき、また劣らざるゆゑよしをも彼れとひとしなみに知られざる可からず、いざかき抱きてわが胸のほとりに保たん。

此のところ王、バンコーが手を取りてねんごろに其の功を賞するこなし。

バンコー 君が御恵みの露に沾ひて、そこに生立ち候はば稔らん果實は叡慮

のまに

君が御胸のほとりに生出て幸に生長することを得んにはその木に生ふる果實はいふまでもなく大君の叡慮のまゝに摘とらせたまへとなり。▲ Snowといふ語爰にては密着といふ義と増長といふ義と双つながらを含めり、王が植物に喩へたるを承けて、われ若し君が寵用を得て榮ゆることを得ば粉骨碎身を厭はずして君が爲に忠勤をはげむべしと答へたるなり。

ダンカン あまりに澤なるわが喜悦の溢れては居處を失ひ、愁の雫の中にしるも潜みかくれんとするぞかし。

原文の直譯は「わが澤山なる喜び、あまりの充分に餘りあまりて、愁の雫の中に其自身を藏さんとすとあり。▲「愁の雫」とは涙のことなり。▲爰の大意は「皆が忠義の志厚きをきゝて嬉しさ胸に餘り、喜び極りて悲しみを覺え、そゝろに涙おつるぞ」といふ義なり。ダンカン王の質直にして慮淺きを表し得て餘あるが上に無邪氣なる老王の涙脆きを寫したるところ味ふべし。

子等よ、親族よ、侯爵らよ、また皇室に因近き分際、の輩よ、うけたまはれ。

シェークスピアの劇詩

四五七

▲「子等」マルコム、ドナルベインを指す。▲「親族」マクベスを首として指せるか。▲
 「皇室に因近き」云々、血統身分の最も皇室に近きといふ程の義なり、これもまたマク
 ベスを主として其の他をも指せる詞也。▲「うけたまはれ」原文には「知れよ」とあり、
 「下にいふが如く取定」たればさやう承知いたしてくれよ」といふ意なり。

朕このたび長子マルコムを王位の継嗣と定めたり、今より後は一の宮をカン
 バアランドの公と稱ぶべし。

ホリンシェッドの蘇史によるに、當時蘇國の王位は世襲の定ならざりき、また王在世
 の間に継嗣を定むると間々あり、志かる時は継嗣と定まりたる君をカンバアラン
 ドの公爵と稱せしと猶英國にて皇太子をウエールス公爵と稱するが如し、云々。

▲estate とは爰にては「威嚴」若しくは「位」といふ義、即ち王位、若しくは王たるの威嚴
 としふ義也。▲will establish の will は「べし」といふ例の意義よりも強く「欲す」といふ
 義よりも強く「決したり」といふ程の義に解すべし。▲まゝは人君みづから稱する時
 の詞「朕」といふに同じ、古へは單數なりしが中世より複數の代名詞を用ふる例とな
 れり。

たゞし件の榮爵はそれに伴ふ叙任もなく、只ひとかたにのみさづくべき筈
 ならず、高き位の標章は諸功臣が頭上にも、星の光と輝くべし。

▲「只ひとかたにのみ」云々、皇太子にのみかゝる榮爵を賜ひて他の者をなほざりに
 棄置かんは朕が本意にあらず、否、苟も功勞ある者どもは高位高官の徽章を星の如
 く身に着くべきぞ、即ち、おのゝその功勞に應じて昇進せさすべきぞ」となり。
 いざ、これよりインヴァネスへ……太義ながらおことにも。

▲「インヴァネス」マクベスが居城也。▲太義ながら、原文の直譯は「更にまたおこと
 の世話にあづからん」といふ程の義、これはマクベスへの挨拶なり、既にいろ／＼
 をさせたが更にまたそなたの居城へまゐりて厄介になりませう」といふ意なり。

マクベス 陛下のおんために用ひざれば息めるも猶勞するがごとし。
 これもまた賊臣が甘言なり、君の爲に用ひざる時間は休みてをりても心苦しく、つ
 らき勞働をしつゝあるにひとしとなり。

それがしみづから御案内の役目うけたまはり、これより、たゞちにまかりこし、
 行幸のおもむき妻にも聞こえて、よろこばせ候はん。

▲「御案内の役目」harbingerを釋したるなり「ハービンチャア」とは先驅して王の舎を定め置くことを司る王室附屬の官吏なり。▲hearingとは爰にては「耳」と譯すべし、かゝる用ひかた外にもあり。

マクベスの言葉の彌といて、彌と蜜よりも甘きを味ふべし。

恐れながら御ゆるし蒙り候ふべし。

▲「さるによりて」といふ意をいと輕くいへるなり。

これにてマクベス團洲張の足つき先にたちて幾足か行く、王その背を見送りて感心の思入。

ダンカン あはれいみじきコードル侯爵。

マクベス (傍白) カンバアランドの公爵……我が行手をさへぎる階段飛越えずばつまづかん。

マルコムが立太子の由をきいてマクベスが逆心いよく募れり、繼嗣のいまだ定まらざる間はダンカン王の老衰を頼みにして何事も運に任せんと思ひ定めてありしがかく繼嗣の定まりたる上は、もはや血を見ずして王位を得べき望絶えたり、

此の上は王をもマルコムをも無きものにせん、それにつきては此宵わが居城に行幸あるこそ幸ひなれ、こよひを過ぎたるべしと思ふなり。▲step、爰にては階の一段をいふ。此のところの直譯は「それぞ階の一段、そが上につまづきて倒るゝか、去からざれば飛越えざる可からず、わが行手に横はれゝば」。

星よ汝の光をつゝめ、明き光をしてわが黒きゆゝしき巧みごとを看せしめな。

▲「わが黒き」云々、「わがよこしまなる重大の望」といふ程の義。▲deepはheartfelt若しくはintenseの義にて甚しきといふ義。

こよひ弑逆を行はんといふ心あるゆゑ、先づ星にいのりて豫め夜の暗黒ならんことを欲す、これ色眼鏡をかけたる時には例よりもズウ／＼しき振舞をなす輩の卑劣心にひとしき怯懦の心事なり。マクベス勇武三軍に將たるに適すれども、良心の鋒を恐ること七才の兒女が狂犬を恐るゝよりも甚し。

手がするわざをば眼にな見せそ。

直譯には「眼をして手に對しては瞑してあらしめよ」とあり。

まゝよ、事成りたる後には見る目の慄くわざを、今宵過さず、ムゝ。(退場)

▲ which は that を承けたる關係代名詞なり。▲ Let that be とは「そのことをして出來せしめよ」の義。

ダンカン　いかにも御身のいへる如く、彼れは至りて勇敢なり、彼れをたふするほめことばは、われに取りてはこよなき響應。

▲ worthy Banquo はや、優待の詞なり。其方はじめ皆々がマクベスを稱讚するを聽きてわれは嬉しさ胸に満ちぬ、わが愛する從弟をほめらるゝはわれに取りては何よりの馳走、山海の珍羞をつらねてもてなさるゝより樂しとなり。

老王がマクベスを目送してペンコーが彼れを稱讚するをきゝながらホク／＼と打喜べる様を寫したり。

いざや彼れが後をまたはん、われをもてなしのもうけせんとして先だちていにし心じらひ、比ひなく頼もしき親戚よな。

(喇叭亂吹　一同退場)

原文には「彼れの心配はわれを善待する準備せん」と先にたちて往きぬとあり、これは「彼れは善待せん」ための心じらひを胸にもちて先にたちて往きぬといふ義なり。

▲「心じらひしつゝ、彼れは」といふべきを「彼れの心じらひは」とやうにもものすること韻語には間々ある破格の文法なり、一種の詞姿として看るべきものなり。『』といふべきを『』といふこと外にも例あり、或はいふ深愛の語と。

SCENE V. — Inverness. A room in Macbeth's Castle.

Enter Lady Macbeth, reading a letter.

第五場　インヴァネス　マクベス居城の一室

マクベス夫人書簡を讀みつゝ登場

マクベス夫人が容貌風姿についての論まぢ／＼なり。ダニエル、マクリーズが畫きたるによれば大がらにしてたくましき雄々しき悍婦の如くなれど、按ふにさはあらじとて博士バックニルが仔細に夫人が爲人を辯じてその容貌に及びたる論文例の「Mad Folks of Shakespeare」のうちにある。その畧に曰はく、かゝる神經過敏なる性質は妖艶なる風貌を具へて星眼すごみを帯び、體格はたキヤシヤなりしや明らかしと。性理上より推論せるバックニルが論證確實にしてほと／＼動かすべ

からざるが如し。此等異説の大概はフアチスが集註に就いて見るべし。

Lady M. They met me in the day of success; and I have learned by the perfectest report, they have more in them mortal knowledge. When I burned in desire to question them further, they made themselves air, into which they vanished. Whiles I stood rept in the wonder of it, came missives from the king, who all-hailed me 'Throne of Candor'; by which title, before, these weird sisters saluted me, and referred me to the coming on of time, with 'Hail king that shalt be!' This have I thought good to deliver thee, my dearest partner of greatness, that thou mightst not lose the dues of rejoicing, by being ignorant of what greatness is promised thee. Lay it to thy heart, and farewell.

夫人「凱旋の日彼のともがら途中に出て迎へ候ひき、われはいとも確實なる知らせによりて彼れらの道へることの迥かに人の智に越えたるを知れり。マクベスが途中より送り越せる書簡の文なり。▲彼のともがらとあるは妖婆等を指す。▲「いともたしかなる知らせ」直譯は「最も圓滿なる報知」とあるべし、されどこゝに知らせといふはあのが經驗といふ意なれば精確なるといふ意に圓滿と

解すべき由緒註釋家の説なり、即ち妖婆等が豫言せりしことは人智以上の占言なる由はわれ正に實驗によりて了知しをはんぬ、われは彼等が豫言せりしにたがはずコードルの侯に敘せられたりといふ意。

さてなほも問ひたいさばやといらだちしうち、彼れらはつと消えて氣となり了んぬ。

英のシッダンス女は女俳優の銜々たるものにてマクベス夫人に扮して絶技の譽ありしが「氣となり了んぬ」と讀みはてゝの愕の思入、空前の出来にして前幕なるマクベス、バンコーが親しく妖婆等が消滅を目送せし時の愕の思入にも十倍の感ありきといふ。▲burn は「心燃ゆ」といふ義にて「いらだつ」と譯す。

あまりの怪しさにわれかの心地なりしほど、敕使みつかひまり、われを賀こたはぎてコードルの侯爵とぞ呼びたる、そは其の前つかた妖婆等が祝詞いはことに用ひたりし爵なり、まかのみならずなほ行末のわが身をもいはひて「万歳國王となりぬべき君とぞほぎ候ひし。このこと身の光榮よかえを分わかつべき愛つとし人に傳へずもあらば、行末の榮達よろこびの御身みみの上にも契ちぎられたるをふつに知らずやあはさんずらん、いとく

ちをしかるべしとてなん。此のむね心をたまひてよ、安らかにあはせ。

▲「このこと」云々以下義譯なり、直譯は「この事を光榮をわかつべき最愛の妻に傳ふるが當然なるべしと思ひつ、そは御身に約束せられたる光榮を御身のいまだ知りたまはざるがために悦喜の分前を失ひたまふやうのことなかれかしとてなり、このことを御身の心の中にとめてよ」云々なり。▲ what greatness は that greatness which と解すべし。▲ rejoice は悦喜の義なれど譯文には「榮達」といふ詞の中に含めたり、榮達を rejoice の直譯と誤る可からず。▲ lay は只「据置け」といふ程の義。▲ farewell は人に別かるゝ時にいふ詞「自重せよ」といふ程のことろ、故に「さらば」といふ義に譯すこともあり。▲ これにて書簡の文句は終れり。

Glamis thou art, and Cawdor; and shalt be

What thou art promised. Yet do I fear they nature;

既にグラミスの侯爵たり、またコードルをも兼ねたまひぬ、やがて正しく約束のその分際ともなりたまはん。とはいふものゝ心、がりは御身の本性。

It is too full o' the milk of human kindness

To catch the nearest way. Thou wouldst be great;

Art not without ambition: but without

The illness should attend it: what thou wouldst highly,

That wouldst thou holily; wouldst not play false,

And yet wouldst wrongly win: thou'ldst have, great Glamis,

That which cries 'Thou must do, if thou have it;'

And that which rather thou dost fear to do

Than wishest should be undone. Hie thee hither,

That I may pour my spirits in thine ear,

And chastise with the valour of my tongue

All that impedes thee from the golden round,

Which fate and metaphysical aid doth seem

To have thee crowned withal.

餘りに慈悲深くあはすれば、最も手近き成就の徑を恐らくはえ取り給はむ。

シェークスピアの劇詩

原文には只「仁愛の乳汁」とのみあり、此の句人口に膾炙して竟には諺のやうになれり。夫人がマクベスを評して「仁愛深し」といふは最負目の沙汰なめり、その君を弑せんとする逆臣を「仁愛深し」とは背理なりといふ論あれど、夫人が謂ふ「慈悲」とは如何なる意なるかは下にいふ所と照らし合せなばいと明かなるべし。▲「最も手近き」云々、「最も手とりばやき方法」といふ意、弑逆を指す。

御身大志なきにあらざ、常に大望をばいだきたまへり。まかるもそれに伴ふべき不正心を缺きたまへり。

此のあたり原文簡古にして拙き筆に譯すべくもあらず、わきて敬語を添用して譯するときは辭意ともに冗漫となりて夫人が性情を寫すに適はず。

▲「それに伴ふべき」云々、その欲望を遂げんとすれば不正の心なくば叶はねど、わがつまには此の心なし、即ち大殘忍の勇氣なしといふ意。▲「wouldst」は「欲す」の義。

いみじく得まくおぼすものをば正しき手段をもて得んと欲し、

或は此の段を解して、御身が得まくおぼす高く貴きものを、それを云々とやうにいへれど穩かならず。▲「highly」は例のごとく尋常の副詞に解して「いたう」又は「い

みじう」など譯すべし。

きたなき振舞を厭ひながらも、不正なる目的をば遂げんと志たまふ。

「不正不義の振舞を行ふことは甘んぜずありながら不正ならては得がたきもの(即ち臣下にありながら國王たる位)を得まくおぼす」といふ意。

以上の句法これを對照又はアンチセシスの句法といふ、白をもて黒に對し、剛をもて柔に對する美術家慣用の手段と同一理のものにて奇しからねど、此のマクベスの劇は殊に對照の趣味に富みたり。第一段第一場に於て「fair is foul, foul is fair」と相背きたるものを對照して局を開きてより、全局を結び了るまで毎齣の脚色、人物、句法、いづれも對照の法に基けるものごとし。内柔にして外剛なるマクベスと外面如菩薩にして内心夜刃の如きマクベス夫人とを對したるをもてその最もいぢむるきものとせば、はじめ剛にして末に柔なるマクベス夫人とはじめ優柔にして末に果敢なるマクベスとの相違の如きも其の中の一例にや加ふべき。此のあたりハズレットの評論一讀の値あり。

喃高大きグラミスどの、御身が欲しとおぼすものに口あらば、君もしわれを得

まくおもは、斯々せよかしと呼ばふべきが、

此の段解釋まち／＼にて種々のあげつらひいとむづかし、數多の說を採りて本文の如く譯しつ。蓋し異説は句讀の論なり、前後の關係より考ふれば引抄文は「かく／＼せよ」の處にて切るを最も妥なりとすべし。

▲御身が欲しとおぼすものと王位(王冠)をいふ、さてその王冠に向ひて如何にせば汝を手に入れ得べきと問は、王冠は必ず「かく／＼せよ」と答ふるならんとの意をいと簡淨にいへる也。「かく／＼せよ」とは暗に王を弑殺せざる可からずといふ意を勻はしたる也。下に「それぞ即ち」とうけていへるは此の「かく／＼せよ」といへる句の中に籠りたる弑逆をさせるなり。

それぞ即ち我が夫がなさいらんと希ひ給ふよりは爲すを憚り給ふところ。

▲and that which とある此の that と which との間には is the act といふ詞を加へて見ば文義や、明かなるべし、即ちこれ御身が爲すを憚る業也とやうに解せらるべし。此の段尙くはしくいへば王を弑することは御身が本心に行はれずして置かんと希ひたまふにはあらじ、寧ろそを行ふことを憚りたまふのみならん、わが手を下さ

で王冠を得る術あらばなど、たゆたひたまふならん」と夫が心をあしはかりてその優柔不斷なるを咎むる言葉なり。

疾くこゝへ來ませ。御身が耳に我が此の魂を注ぎ入れん、此の舌の力をもて宿世怪しき不測の冥助の御身が頭に加べんとする其の冠をさまたぐる種々の障碍を罵懲さん。

▲that は「何々してんため」にとやうに戻りて訓む詞と知るべし。▲valour は「膽力」など、直譯すべき詞なり。▲其の冠、原文には「黄金の環」とあり、金環とは黄金冕のことをいへり。▲fate とは宿命の義、metaphysical とはこゝにては超自然即ち人間以上の義なれば二者を綜べて本文の如くに譯しつ。▲which 以下の直譯は「そをもて宿命と人間以上の援助とが御身にかうぶらせまくほりせり」といふ意。▲withal は with (も)とさふ程の義。▲doth seem をハンターは doth aim と解釋せり。

Enter an Attendant.

What is your tidings?

Att. The king comes here to-night.

シェークスピアの劇詩

Lady M.

Thou'rt mad to say it.—

Is not thy master with him? who, were't so,
Would have informed for preparation.

Att. So please you, it is true: our thane is coming:
One of my fellows had the speed of him,
Who, almost dead for breath, had scarcely more
Than would make up his message.

Lady M.

Give him tending;

He brings great news.

使臣登場

何ごとぞ。

使臣 此よひ當御城へダンカン陛下のわたらせられ候ふ。
夫人 あらまことしからずよ。殿は陛下と共に在さいるや。ともに在さん
には御まうけの爲にかねても御報知あるべき筈ぞ。

▲「あら」云々原文には「さいふそなたは正氣であるまい」とあり。▲殿は「云々」といひ

いづる前に思入あるべし。▲「殿」とはマクベスを指す。

使臣 恐れながら此のこと相違なく候ふ。候にも御こしあらせられ候ふ。
やつがれが同僚一人殿に先だちて馳歸り候ふが息もほとく絶々にて御使
のおもむきばかりを辛うじて述べて候ふ。
夫人 そのものをいたはりこらせよ。そのをのこそはいみじき消息を
ばもたらしつれ。

[Exit Attendant.] The raven himself is hoarse

That croaks the fatal entrance of Duncan

Under my battlements. Come, you spirits

That tend on mortal thoughts, unsex me here,

And fill me, from the crown to the toe, top-full

Of direst cruelty! make thick my blood,

Stop up the access and passage to remorse

That no compunctious visitings of nature

〜マクベスの國語

Shake my fell purpose, nor keep peace between
 The effect and it! Come to my woman's breast,
 And take my milk for gall, you murdering ministers,
 Wherever in your sightless substances
 You wait on nature's mischief! Come, thick night,
 And pall thee in the dunnest smoke of hell,
 That my keen knife see not the wound it makes,
 Nor heaven peep through the blanket of the dark,
 To cry, 'Hold, hold!'

使臣退場

わが城郭へダンカンのゆゑしき臨御を知らずるか鴉の聲もうら枯るゝ。い
 ざや怖ろしき精霊らよ、我が女の性を奪ひて頂より足の端さきまでも無慚の
 心をみなぎらせて、あくまでも身のうちの血汐を凝らせ、慈悲心の通路をたち
 ふさげや、女々しき心が残忍なる企を揺蕩して大事の妨害をせざらんため。

▲「鴉の聲」云々、或はいふ使者の息たえくとなりといふを聲のうらがれたる鴉の不祥
 を告げがほなるに喩へたるなりと、さりながら鴉はいづこにもある鳥なれば、こゝ
 は眞の鴉の聲が凶兆を示してダンカンが最後を知らせ、弒逆の成功をほのめかす
 なりといふ意に釋するかた、凄味一しほにきこえて面白かるべきか。クラレンド
 ン版のクラーク、またはモーベリなど前説なれど、ロルフはジョンソン等數家と共に
 後説を主張せり。▲「わが城郭」といふは傲慢にして夫をも呑める夫人が本性を見
 せたる詞なりといふ説もあれど、こゝはロルフがいへる如く、此の場合の自然の詞
 ならんのみ、深意ありと釋するは例のイリホガなるべし。▲「精霊」人間の悪事を助
 長せさする魔物を指す。▲「mortal」こゝにては「怖ろしき」即ち deadly 又は murderous
 の意なり。▲「unsex」女の性を奪ひと訓ず、男化せよとなり。▲「top-full」あふるゝば
 かりの義。▲「血を凝らせよ」原文には「血を濃くせよ」とあり、「かたまらせよ」といふ
 におなじ、血の淡しきは心ごまも洒落愚直にて血の濃くかたまれるは心も猛く陰
 忍嚴酷なりとやうに思へりければなるべし。▲「access と passage」律格の都合にて
 用ひたるなれば二者を合せて「通路」と譯す、正當には「慈悲への通路」といふべきなり。

▲ visitings. シミットは attack (攻撃) と釋せり、compunctions と visitings との二字を合せて意譯せば「慈悲心の猶豫」といふ程の義。▲ keep peace 「仲裁す」又は「立入る」などの義、大望と其の實行との間に入り來て仲裁を試るやうの事なからん爲にの意。

やあれ、目には見えぬ悪魔らよ、人の悪事を助けんためには、汝等はいづこへもおもむくと聞く。いざ女々しき我が胸に入り來て此の甘き乳を苦き胆汁と變へよかし。

▲「悪魔らよ」原文には「虐殺の司よ」とあり、虐殺の事をつかちぐる agent といふ程の義。▲「目に見えぬ」原文には「目に見えぬ substance (形にて) と副詞に用ひて wait といふ動詞に添へたり。▲ sightless は invisible の義に訓むべし。▲ nature's mischief とあるは「人間の悪事」と譯せば能く原義に適はん、nature といふ語人の心のことに人間といふ義にも通用すればなり。▲「甘き乳」云々前にも見えたと同じく慈悲心の義「苦き胆汁」はそれに對して「いへる殘忍の心也。Gall (胆汁) と原音の濁れるを「いのしる」とやはらげては味も無し、胆汁と濁りたる音に讀まばいさゝか優らん。來よ烏婆玉の夜の空、冥府の黒煙をもて汝が總身を包めかし、我が利劍の物す

らん創口を見せぬ爲に、また蒼天が黒闇の帳ごしに隙見して、まてなんど呼ばはぬために。

▲「烏婆玉の空」原文には「濃き夜よ」とあり、昏く不透明なる夜色をいふ。前幕にてマクベスが星に禱りていへること、符節を合するやうに夜の黒からんことを願ふ、罪惡を行はんとする輩の卑怯の心術一味なり。▲「冥府」は地獄、地下の常闇をいふ、そこよりも來たる最も黒き煙をもて更に夜の總身を包めとなり。▲「帳ごしに」原文の blanket といふ語につきてむづかしげに説くもあれど幕帳といふ釋最も正確なり。シエークスピアのこの悲劇には黒幕を用ふること例なりき、作者みづからも折々は此の黒幕より見物人を隙見せしことありけらし、梨園の樂屋詞を用ふるが癖の作者なれば、こゝもまからんといふ説あり。▲「蒼天」星月の光を直接には指せれど、間接には天道(神の光明)をいふ意と釋してよし。

Enter Macbeth.

Great Glamis! worthy Cawdor

Greater than both, by the all-hail hereafter!

シエークスピアの劇詩

マクベス登場

大いなるクラミス侯爵、いみじきコードル侯爵、その二つの榮爵にもいやまされるわが夫、行末万歳のほぎごとあれば。

これは夫の入來るを見て急ぎ呼びかけたる言葉なり。この一句も嘗てシッドンス夫人が好評を得しセリフにていひまはしにむづかしき呼吸ありとか、胸に充ちたる喜悅が一時に破裂して此の「行末万歳」といふ句となりたるなれば、語氣、目ざしなべて未來の榮えを今日^まのあたり見つゝあらんやうの思入に伴ふべきなり。

Thy letters have transported me beyond

This ignorant present, and I feel e'en now

The future in the instant.

Macb.

My dearest love,

Duncan comes here to-night.

Lady M.

And when goes hence?

Macb. To-morrow, as he purposes.

Lady M.

O never

Shall sun that morrow see!

Your face, my thane, is as a book where men

May read strange matters; to beguile the time,

Look like the time; bear welcome in your eye,

Your hand, your tongue; look like the innocent flower,

But be the serpent under't. He that's coming

Must be provided for: and you shall put

This night's great business into my despatch;

Which shall to all our nights and days to come

Give solely sovereign sway and masterdom.—

Macb. We will speak further.

Lady M.

Only look up clear;

To after favour ever is to fear.—

Leave all the rest to me.

[Exeunt.]

御玉章は我が身をば行末の祥知らざりし現身の彼方に移しつ、さながらに後の榮をば今眼前に見る心地。

▲「現身の」云々、われの現在の身は末の吉凶禍福いさゝかも知らずでありけるを御玉づさによりてはるかに後の日のことまでも知りつ、されば皇后となりぬる曉のさまをかくいふ目の前に今感覺すとなり。さはいへど ignorant present は例として行末の事知らぬ現在といふ境界とやうに廣く解するかた更に精しといふべし。

マクベス わが愛し人よ、ダンカン王こよひ我家に臨御あるなり。

大喜憂は双つながら言葉妙し、いはんや心中に良心と逆意との人知らぬ闘争ある時をや。

夫人 さていつこゝを立たせませうぞ。

夫人早く既にマクベスが胸底を看破し來たる、夫婦か逆意暗投暝合す。

マクベス 明日の朝明なり、おぼし定めさせられたるによれば。

夫人 あはれその朝明をば日輪の見ざるべきぞ。

日輪を活物にしたる粧點なり、これを活バテンコフイーン喩といふ。意は「ダンカン王をして明日の旭日を見せしむることなかるべし」なれど、日輪をして明日の朝を見させじと換へたるが文の修飾なり。

なう、わが夫よ、御身の面もち人は人々が奇異なる事柄を讀まんずる書ぞかし。

▲「わが夫」原文には「侯爵」とあり、心ありての言葉なるが如し。「御身が面色に心配の氣色の歴々」と見えたるは、奇異なる事柄をかたる書の如し、忽ち人々の目につかん、くはしくはいはい、好意もてる東道と見ゆるよりは、奇怪なる心即ち逆意もてる主人と見られなるとなり。

世をあざむかんとおもひたまは、世の様にふさはしうもてなしたまへ。

▲「To beguile time」こゝにては「世間を欺く」とやうに解すべき也。▲「世の様に」云々、

世間並の面色してあれといふ義。かゝる處にては「世」の字最も善く time に適す。

眼の裏にも手にも舌にも愛敬たゝへて陽は邪なげなる花の陰にひそむ蟻ともなりておはせ。

▲「手にも」とは握手などの場合をいふならん。▲全句の意は笑の中に刃を藏して

あれとなり。蠟燭の花の色を装へとなり。

臨御のまうけせてはかなふべからず。こよひの一大事は何事も打任せたまへ、それぞやがて末永く無上至尊の権力をわれく夫婦が握らん緒。

▲ dispatch は management の義措置と譯す。▲ shall この處にては無論須からく何々すべしといふ程の義に釋すべし。▲ solely 「われく夫婦のみの掌裡にと釋すべし。▲ sovereign sway 云々は例の通り一處に集めて本文の如くに解するがよし。

マクベス 此のことにつきては尙あらためて談はんず。言葉の零碎にして簡短なるなか／＼に意味長し。

夫人 兎も角も氣しき麗しくもてなしたまへ、色を變ふるは心に怖れある微候ぞかし。

顔色に曇りたる心配の氣色を見せたまふなの意。▲ ever 「常に」と訓ず譯文には省けり。▲ 色を變ふる云々、favour は顔色の義なり、色を變へなば忽ち人にわが心中に怖れあると、即ち野心あることを見すかされんとなり。▲ この白によりて案ずるに、夫人は尙あらためて談はんといひし夫が語の中に猶豫不斷の意味の外尙物

あるを認めたるに似たりとクラークはいへり。

餘事は何事にもあれ皆我れに任せたまへ。

只心の底を人に知られぬやう力めたまへ、餘の事はわれに任せよとなり。

(退場)

SCENE VI.—The Same. Before the Castle.

Hautboys and torches. Enter Duncan, Malcolm, Donalbain,

Banquo, Lennox, Macduff, Ross, Angus, and Attendants.

第六場 マクベス居城前

ホーボイ并に松炬 ダンカン、マルコム、ドナルベイン、バンコ、レンノックス、マクダフ、アングス并に従臣等登場

ホーボイとは尺八に似たる木製の樂器の名なり、即ち開場の鳴物なり。松炬とあるは松炬を携へて道をてらしダンカン主従を案内するマクベスが家臣等なりと見て然るべし。

Dum. This castle hath a pleasant seat; the air

Nimbly and sweetly recommends itself

Unto our gentle senses.

Ban.

This guest of summer,

The temple-haunting martlet, does approve,

By his loved mansionry, that the heaven's breath

Smells wooinly here; no jutting, frieze,

Buttress, nor coign of vantage, but this bird

Hath made his pendent bed and procreant cradle:

Where they most breed and haunt, I have observed

The air is delicate.

ダンカン 此の城の位置はいともめてたし、肌はだに觸るゝそよ風も、かぐはしうして爽かなり。

▲seat とは場所柄の義、こゝに「位置」と譯す。▲肌はだに觸るゝ云々、直譯は「空氣爽かに

且つ心地よくわが柔和なる覺官をたのしましむ」といふ意也。▲「柔和なる覺官」とは覺官の柔和なりといふ義にあらずして覺官に觸るゝ風柔かなりといふ義。かくの如く動詞に附屬すべき詞を名詞に附屬せしむること此の作者の志ばくする所也。▲recommends itself こゝにては「なぐさむ」若しくは「たのします」といふ義に解すべし。▲本文に「心地よく」を「かぐはしう」と譯せしは意譯也。此の城外の風の艸木の香氣を帯びて何となく香はしきをいふ。

バンコー 神の宮居にまば来てふ四月しがつの空のまらうど鳥、燕が好みの鏝細工こてぎやくに巢を作りて候ふは、大空おほそらの息いきのなつかしくもこゝに匂へる正ただしきあかし。

▲「大空の息」云々、風のと也。▲なつかしく「他を誘はんとするやうに」といふ義。

大意は燕といふ鳥は空氣の清爽なる處に巢をかくることを好めるものなり、その鳥の巢がかけられたるによりて推すれば此のあたりは土地柄よしと見えたり。

▲「まらうど鳥」とは夏になれば必ず來たる珍客の如しとてかくいふなり。

惣じて燕つばきと申す鳥は、檐端のき、塀べい、柱はしら、かけあるは便宜の角々すみぐに吊床つるしどを掛けまうけ、また雑屋ぞうやをも建候ふ、彼等の最もすだち易く、又最も好めるあたりは、空氣おほか

た爽かなりと、かねても見聞及びて候ふ。

▲ frieze は通例腰線と譯したり、大柱の上部なり、こゝには「柱かけ」と意譯す。▲ But-floor とは煉瓦などにて作りたる壁柱なり、意譯して「塀」といふ。▲ 雛屋、原文には「雛を生育する搖籃」とあり、雛屋といふ詞或は當たらざるかも知らねど、假に用ひたり。▲ 原文中の But といふ語は「外は」と訓ずべし、即ち、此の鳥が吊床、雛屋を建て設けざる檐端、塀等は殆ど一もあることなしとやうに訓ずべきなり。▲ haunt とはまばくら往來すといふ程の義なるゆゑ、最も好める」と意譯す。

以上ダンカンとペンコーとの問答は何の意味もなきやうなれど、後段の慘劇と對照していと妙なり、今將に虎穴に入らんとしてありながら、それを夢にも知らずしていと樂しげなる老王のさま哀れなり。大かたの人間は明日屠らるゝをも知らず牧場に戯るゝ羊に似たり。修辭上よりいふも、此の長閑なる問答の後に怒濤狂浪のやうなるマクベスの獨白ありてこそ變化の妙は見らるゝなれ。此のあたりの評古人既にいひ盡くしたれば、今また蛇足を加へず。

Enter Lady Macbeth.

Dun. See, see, our honoured hostess——

The love that follows us sometime is our trouble,

Which still we thank as love. Herein I teach you

How you shall bid God yield us for your pains

And thank us for your trouble.

マクベス夫人登場

ダンカン や、わが女刀自の來ましつるぞ。

此の詞はペンコーに對ひていへるなり。原文には「見よ、わが尊き女主人がといひさしたり、こゝに honoured とあるは尊稱に用ひたるにて和訓すれば人名の下に加ふる敬語位に當たるべし。▲ 女刀自、少しく穩かならねど、女東道」といふ和訓を得ざれば、かくは譯したれど、女ある」と訓じて可し。

實やつきまとふ切なる情はなか／＼にわづらはしけれど、その眞情はまかすがに我人共によるこぶ例。されば御身に誨ふるとあり、けふ御身等をわづらはすも畢竟は朕が眞情の所爲なれば、朕が爲に神の冥助を祈り、かういたづき

シェイクスピアの劇詩

をせさするも朕が恵なりとおぼされてよ。

此の段の大意は下の如し、切なる情もあまり切にして五月蠅くつきまとふときは間々わづらはしく思はるゝものなり、所謂悪女の深なさけなどの例なり、志かれどもさるは真情の切なるより生ずることなりと思ふ故に、五月蠅くわづらはしく思ひながら其の深切をよるこぼざるを得ざるためしなり。此の道理によりて今われ御身にいひきかすことあり、朕が今日御身等の許に参れるは定めし右の五月蠅き深情の類ならめど、その然る所以は御身等を深く愛するより出でたることなれば、なかくに斯かる厄介を掛けらるゝを忝しと思ひ、神に對ひて此の厄介を與へたる朕に褒賞として冥福を下げよと禱り、又朕に對ひてはかゝる苦勞を與へたる惠を謝せよとなり。是れ老王が嬉しさの餘り陽氣なる戯言をいへるなりと見るべし、夫人に對ひての挨拶也。▲bid God yield usは「我れに酬いせよと神に申せ」と訓ず。

Lady M.

All our service

In every point twice done, and then done double,

Were poor and single business to contend

Against those honours deep and broad wherewith

Your majesty loads our house: for those of old,

And the late dignities heaps up to them,

We rest your hermits.

マクベス夫人 よし我輩万事につきて七重に八重に奉公の忠義を盡くし候ふとも、陛下がわが家に賜けさせたまふ深く大いなる御恵に比べ奉れば、及ばん由もなき些少なる御奉公、先に下し賜へりし光榮といひ、此のたび積み加へさせたまへる官爵といひ、何をもつてか報いたてまつらん、我々夫婦は幾久しく陛下が榮えを禱らん受施僧。

▲single とは元孤獨の義也、こゝにては「かよはき」と訓ず。▲七重に八重に「云々の原意は「忠勤を二倍し四倍すとも、山海の君恩に比すれば尙單一孤獨の趣ありて痛く劣れり、決して敵する能はず」の義。▲honours、こゝにては「恩恵」と訓ず。▲loads「飾る、積む」の義より轉じて「賜く」の義となる。▲late 本義は「近ごろ、なれど、此の度」と訓ず。▲我々夫婦「云々、原文には「我々君が受施僧となりて存す」とあり、受施僧と

は布施を受けて養はれるる貧僧の義にして常にその檀那の冥福を禱ることをも
て務とするものなり。

夫人の巧言のいとく美しうして前に彼れが謂へりし「蠅かくす花の色」に如何に
似たるかを觀よ。

Dum.

Where's the thane of Cawdor?

We counsel'd him at the heels, and had a purpose

To be his purveyor: but he rides well;

And his great love, sharp as his spur, hath hold him

To his home before us. Fair and noble hostess,

We are your guest to-night.

Lady M.

Your servants ever

Have theirs, themselves, and what is theirs, in compt,

To make their audit at your highness' pleasure,

Still to return your own.

Dum.

Give me your hand;

Conduct me to mine host: we love him highly,

And shall continue our graces towards him.

By your leave, hostess.

[Exeunt.]

ダンカン コードルの侯爵はいづこにおはすぞ。いかで彼の人の踵を追ひ、
疾くぬけ驅してそが膳夫ともならばやと思ひたりしが、元來侯は騎馬の達人、
ましてや刺輪の鋭さにもいやまさりたるいみじき忠心、その忠心の刺輪あれ
ば、彼の人をはるかに疾に先だち家路へ馬をば走らせたり。やよや美しく氣高
き女東道、疾は今宵御身の客となるべきぞよ。

▲「踵を追ひ」云々、後れむとて接近して追尾せりといふ義。▲「膳夫」の原語 Purveyor
はハーピンチャアが御幸の時國王に先だちて行在所を定むる務あるが如く、總じて
國王の膳部の用意を豫定することを務とする役員なり。爰は老王が戯れて「朕若
し侯よりも先に此處に來たらば、侯の膳番となりて」逆に侯をもてなさばやと思
ひまうけたりき」といへるなり。▲「刺輪」馬を刺戟する器なり、靴に着けてあり。▲

「いみじき忠心」云々、刺輪にもまさる忠義の真情が侯の心を刺戟してその馬を疾駆せしめたりといふ義。▲「御身の客」云々、御身の世話を受くべしとなり。

マクベス夫人 君が臣たる我々は、それが家人をもその身をも、またそれが有てるなべての物をも且く陛下に借りたるなれば、何時にてもあれ敵慮のまに／＼、陛下に献らん日ごろの願ひに候ふなり。

▲「家人」子孫並に家人をいふ。▲「そが有てる」云々、財産をいふ。▲auditとは「最後の計算」の義。▲in comptとはaccountableの義「計算すべきものとして」又は「委託せられたりとして」と譯す。▲此の原文の詳譯は下の如し、君が臣下たるものは陛下の御意次第にてそが家人をも其の身をもその所有物をも、いつにても(三)陛下の所有として返しまるらすべき責任ありと信じ、勅命あらば直ちに借用物の決算せんと常に覺悟してまかりあり。▲returnをクラークはrenderと釋したれど、通常の意味に解しても差支なかるべし。

ダンカン いざ御手を貸したまへ、主人が許へ案内あれ、朕深く彼の人を愛す、此の寵愛行未長くかはらざるべし。ゆるされよ女刀自。

これにてダンカン王マクベス夫人にちのが手を與へて握手し、先にたちて奥へ入る。

(一同退場)

SCENE VII.—The Same. A Room in the Castle.

Hautboys and torches. Enter, and pass over the stage, a Sewer, and divers Servants with dishes and service. Then enter Macbeth.

第七場 マクベス居城内の一室

ホーボイ并に松炬 配膳の役人并びに種々の家僕等くさぐさの食器を携へて舞臺を通過す、さて後にマクベス登場

Sewerの本義は「毒試役」なれども、後には「配膳方」の義となれり。serviceとは處によりてはcourseの義ともなれど、此にては「膳碗器皿」といふ程の義に解すべし。

Macb. If it were done when 'tis done, then 'twere well

It were done quickly: if the assassination

マクベスの劇詩

Could trammel up the consequence, and catch
 With his surcease success : that but this blow
 Might be the be-all and the end-all here,
 But here, upon this bank and shoal of time,
 We'd jump the life to come. But in these cases
 We still have judgment here ; that we but teach
 Bloody instructions, which, being taught, return
 To plague th' inventor. This even-handed justice
 Commends the ingredients of our poisoned chalice
 To our own lips. He's here in double trust :
 First, as I am his kinsman and his subject,
 Strong both against the deed ; then, as his host,
 Who should against his murderer shut the door,
 Not bear the knife myself. Besides, this Duncan

Hath borne his faculties so meek, hath been
 So clear in his great office, that his virtues
 Will plead like angels, trumpet-tongued, against
 The deep damnation of his taking off ;
 And pity, like a naked new-born babe,
 Striding the blast, or heaven's cherubin, horsed
 Upon the sightless couriers of the air,
 Shall blow the horrid deed in every eye,
 That tears shall drown the wind.—— I have no spur
 To prick the sides of my intent, but only
 Vaulting ambition, which o'erleaps itself,
 And falls on the other.——

マクベス

一擧して事終らば、如かじ速に行はんに。

此の段種々の議論ある處にて解釋者によりて原文の釋義同じからず、本文は最も

穩當なりと思はるゝ近世多數の説に因る。▲一擧して「云々」とはダンカン王を今夜竊かに弑殺してそれにて万事首尾よく收まり、何の故障もなく我が身王位に即くことを得るものならば、一刀兩斷速に暗殺を行ふが上策なりといふ義。すべてマクベスが獨語なり。

暗殺の羅の中にそが結果をも搦めとり、害はなべてこれを滅し、利は悉く捉らへ得べくば……

原文の直譯には「若し暗殺がその結果をも搦めとり、且つその滅絶をもて成功を捕へ得べくば」とあり、是れ暗殺を鳥獸を捕ふる時に用ふる羅に喩へたるなり。マクベスの意には我れ今宵暗殺といふワナを用ひてダンカンを殺さんと思へるが、若し王を殺すと同時に弑逆の後に生ずべき百般の結果（我が身にとりて不利なる結果）が悉く斷滅せられて我が身に何等の危害もなく大望成就の幸福を享有することを得べくんば——我れ敢て弑逆を行はんとなり。▲his surcease とあるhisはhisの義にして結果といふ語の代詞と見るべし。▲surceaseは斷滅の義なり。

只此の一擧のみが事の全局を盡さんには……今生の終局ならば……

▲Thatはso thatの義に訓ずべし。▲原文の直譯は「只此の一擧が此處、此の娑婆にてだに事の全軀にして且つ事の全終ならば」とあり、即ちダンカンを殺さば事悉く成就圓滿し、尠くとも今生にては何等の恐れもなく其の王位を繼承して榮華に身を終ることを得べきものならばといふ意。

只娑婆にてだに、劫の海の此のさゝやかなる淺洲にてだに……

▲「劫の海の」云々、劫の字を無量時の義に用ひて假にタイムの譯語となせり。時は無盡無窮にして過現未に貫通するもの猶大洋の茫洋として限涯を示さざるがごとし、人間の一生は此の無量劫に比ぶれば刹那なり、猶茫茫たる海洋中の小沙灘がその大海に比していと／＼小なるがごとし。マクベス思へらく、若しダンカンを弑して安穩に今生の榮華にだに耽ることを得べくんば、只此の娑婆にある間のみにてても可なり、彼の劫の海の一小沙灘の外ならぬ此の娑婆にある間のみにてても可なり、何の危害もなく平穩に一生を終り得べくば、我れは未來の危険と冥罰とを恐れずして敢て現在の慾望を遂げんと。

敢て將來の危険を冒さん。

未來の冥罰をも恐れずして敢行せんといふ意。

とはいへ、かゝる場合には常に現世の制裁あり。

「とはいへ斯かる弑逆などの場合には(未來の冥罰の外に)現世の制裁といふおそろしきものありの意。所謂四知逃れがた、惡事遂に露見して罰の到るべきをいふ。

かりにも不仁を教へなば其の例忽ち應報して教へしものを苦ましむ。

「若し弑逆といふ不仁の所業を行ひて臣下にして君を弑す例を示さばたとひ我れ王位に登るとも我が臣また殺逆を謀らんといふ程の義。原文のまゝを譯せば我れ只殘忍の惡例を人に示さば其の惡例は必ずや教へし當人(inventor)に返報して之れを苦め惱ますこと自然の理なりといふ意。

公道の手に私無しおのが盛りし毒盃をおのが唇へもさゝぐることわり。

「おのれにいでつるものはおのれに返へる」といふ義公道を人に擬していふ也。即ち彼れは公平なる手をもてれば人へのみ飲ませんとてわが盛りし毒酒を必ず我れにもさゝぐとなり。

そも彼れの此處に在るやその信任に二重の故あり。

▲「彼れの」ダンカン王を指す王のわが家に臨御ありたる二重の信任を具へたまへり我が二心無かるべきを信じたまふべき理由二重なりといふ義但し原文の trust といふ語こゝにてはむしろ安心の保證といふ意を含みたり「信任」と譯したるはふつゝかなるべし。

マクベスが脚躡の原因先づ現在の罰を恐るゝ處より來たりさて後に倫理上の原因に及ぶ未來の冥罰を恐れずといふ言葉によりてマクベスが神を信せずまた無形を重んぜざるを觀るべし。

第一我れはその近親にして老臣なればつや／＼かゝる業行ふべきにあらず。

第一の信任の存する所以をいふ。▲「かゝる業弑逆をいふ。」

次には今宵の東道なればたとひ逆賊のありとても戸鎖をかため我れ之れを防ぐべき筈いかでかみづから刃を擧ぐべき。あまつさへダンカン王は寛仁にして下をあはれみ國君たるの大任にさしも過失なく在したれば、

▲「寛仁」云々原文には「さしも柔和に其の職權を行ひたり」とあり。職權とは國王の

特權のこと、即ち專横なる振舞無くていと溫柔に下を御せりといふ意。當時の民が王の常に刑罰をゆるがせにして動もすれば婦人の仁政に失するを歎ける由史に見えたり。▲原文の 'clear' といふ語は清淨といふ義なり、過失なきを汚點などの無きに思ひ寄せたる語なり。

それを亡きものにせん墮獄の罪を若し企つる者あらば、彼の人が目ごころの淑徳、喇叭舌の天使の如く高らかにその無罪を辯疏し、

「王が平素の温厚寛仁の美德が辯護人となりて高らかに王の罪無き由を辯じ、王を弑したる者の大逆を詰責すべし」となり。▲喇叭舌、其の聲の大にして天上天下に鳴りわたるをいふ、即ち天使が聲の形容也。

また惻隱を呼ぶ聲は今生れたる嬰兒のいと甲斐無げに風に駕り、或はまた世人の惻隱に訴へて王の弑すべからざりしを明かにするに便宜なる事情あらば、その惻隱を呼ぶに足るべき事情はわざと甲斐なげに打萎れ、今生れたる嬰兒のやうに人々の目に見られてこゝかしこに傳はり、天下の同感を呼ぶならんといふ意を、處々に傳はるといふ處より「風に駕る」とはいふ也。こゝの pity とは

語もと惻隱、慈悲などいふ義なれど、本文の如く譯さざれば義通りがたし。▲naked、いと加よわけなるをいふ。

さなくば人の目に見えぬ空の飛馬にまたがれる天つすだまのいと猛く、怖ろしの悪業を皆人の目に吹き傳へなば、

人の同感を呼ぶに二様の法あるを云ふ、前には嬰兒のかよわきをまねびて憐れを呼ぶかと推測し、次には天津すだまの如く猛く烈しく慈愛の情を喚起するかと推測するなり。▲人の目に見えぬ空のはゆまとは風のことなりといふ説あり、類例、外にもあり、さりながら文字の通りに見るとも義は通るべし。▲「天つすだま」とは天帝に事ふる精靈、慈悲をつかさどる神使也。▲「皆人の目、前に風に駕るといひ、後に又人の目に見えぬ風、やうなる馬に、乗るといひたれば、其の縁にて、吹き傳へ」とはいふなり。▲「目」といふは下の「涙の雨」を呼起さんための筆法也。

降りしきらんず涙の雨は、荒るゝ暴風も和ぐばかりに。
雨ふりしきれば風しづまるといふ俚語あり、涙の雨のしげきをあらはす張喻なり。

右を看ても左を觀ても我が企を刺戟すべき刺輪とては絶えて無し、只乘りに乗る野心のみが徒らに急りて的を乗りこし、あらぬ方へ……(墮ちなんとす)。馬を刺戟するに刺輪といふを用ふ、そをもて馬の右左なる腹部を撃てば馬駈いづるなり、こゝはそれに喩へていふ。原文には「我が企の兩脇を刺戟すべき刺輪なし」とあり、こゝに「右を看ても左を觀ても」と義譯す。大意は君若し榮紂の如く無道ならば、天下の爲又は道の爲といふ事を刺輪として弑殺の企を鼓舞すべく、或はまた我れ君に怨あらば修怨の爲又は復讐の爲といふ事を刺戟として我が企を取行すべきなれど、我が場合には一もさる刺戟を得べき傳手なし、我が王を殺さんとするは全く自家一身の野心非望より出でたるの外ならざれば也。只野心のみ盛んに急りて此の弑逆といふ馬の背にまたがらんくと力むれど、これとてもあまり急らば首尾よく馬背にまたがり得て、或はあらぬかたへ墜落せんも圖られず、即ち榮譽光榮を得んとするが我が本來の望なれど、野心のみに急りて王を弑せば、徒らに惡名と耻辱とのみを得ることあらんかの意。

此の一節はむかしより異説紛々たる條なり、大抵直譯にうつしたれど、此の末句の

如きは如何ともまがたし、予が諸註によりて考へ得たるまゝを假にものしつ。さて on the other の後に side といふ語あるべしといふ説はほゞ定まりたるに似たれど、尙そを書き加ふべしといふ説と此處はいひかけて黙したる思入なれば加へざるを可とすといふ説と二つあり、げにヤマシベス夫人の上場と同時に急にふりかへり見る思入あるべきなれば、譯文にては「墮ちなんとす」だけを言ひ残して思入とすべきにや。

Enter Lady Macbeth.

How now? what news?

Lady M. He has almost supped. Why have you left the chamber?

Macb. Hath he asked for me?

Lady M. Know you not he has?

Macb. We will proceed no further in this business:

He hath honoured me of late; and I have bought

Golden opinions from all sorts of people,

ホークスキャットの譯註

Which would be worn now in their newest gloss,
Not cast aside so soon.

マクベス夫人登場

さて如何に。様子はなにと。

マクベス夫人 夜の供御もはやまゐりぬ。などで御前を退ん出たまひし。

マクベス 我れをば尋ねられしか。

マクベス夫人 さては御身にはそを知らせたまはずにか。

按ずるに夫人マクベスのすべりいでつるを彼の企を行はん準備なるべしと推測せしなるべし、未かるに夫の「我れを尋ねられしか」といふ面地を見れば全く覺らざるの躰なり、王がまばく尋ねつることなれば元より承知にて席を避けたりとのみ思ひたりしにといふ思入にて、さては「云々」とはいへるなるべし。マクベスその氣色を見てとりて

マクベス 嗚、我が妻よ、彼の事はもはや行ふまじ。

此の一語夫人の耳には突爾の發砲を聞く思ひあるべし。

近く彼の人榮爵を我れに賜ひ、我れ且つ上下の人々より秀き譽をば購ひ得たり、その光澤の尙鮮なるや、そがまゝ且く着用すべし、いそぎて棄つべきにはあらじ。

▲「秀けき譽」原文には「黄金の好評」とあり、此の黄金といふ語は俗にいふ立派といふ程の義、類例あり。▲「購ひ得たり」從來の勳功等にて貴賤の名望を買ひ得たりといふ意。▲「その光澤の云々、名譽好評を新裁の美服に喩へていふ也、下に「着用すべし」とあるも同じ比喩なり。▲此の白を聴く間の夫人の思入を想像すべし。

Lady M.

Was the hope drunk

Wherein you dressed yourself? hath it slept since,

And wakes it now, to look so green and pale

At what it did so freely? From this time,

Such I account thy love. Art thou afraid

To be the same in thine own act and valour

As thou art in desire? Wouldst thou have that

Which thou esteem'st the ornament of life,

And live a coward in thine own esteem,

Letting 'I dare not' wait upon 'I would,'

Like the poor cat i' the adage?

マクベス夫人 さては先刻のは空望なりしか、御身が打被ぎて在せしは、酔ひ
じれたる偽勇氣なりしか。

この原文を直譯すれば、御身が先刻身を粧ふ料としたりしあの當來の出世の望
(Hope) はさては酔ひゑれてありつるかといふ義也。▲「打被ぎ」とは上文にマクベ
スが名望を美服に比しつるを縁にして、謀叛の精神をかたむる」といふ意味をかく
衣服に縁のある言葉にていひ表はせるなり、譬へば寒暑を防ぐ料にとて裘褐を着
する如く大惡事を行はんために未來の立身といふ頼み、即ち Hope をもてその精
神をかたむるをいふ。

全軀の大意は、わが夫先刻は出世の豫望をもて謀叛の精神を粧ひかため、あくまで
も此の大望を成就せん勇氣ありと見えたりしに、今更かう突爾に變心せられた

るは甚だ以て心得がたし、さては先刻身に被りて在せしは眞成の甲衣にてあら
ざりしか、あの頼もしげなる行末を思ふ勇氣は眞正銘の豫望にはあらで、只一時
亂酔の餘りに成れるえせ勇氣即ち空望なりしかといふ意、即ち Hope の活 喻なり。
更に再釋すれば、先にはわが夫末の望に援けられて勇氣凜々たりしが、今は然らず、
さては先の勇氣は酔どれの勇氣なりしか、醒むれば忽ち衰ふる勇氣なりしかとい
ふ意。

その酔ひじれの空望が熟睡して今更驚き醒めたるにか、
空望を酔ひたる愚人に比し、熟睡して酔ひの醒めたる愚人の顔色の痴々しきを空
望の破れたる時の心持の痴々しきに喩ふ。

先がたはおめず恐れずして見し物をば斯く痴々しう色蒼ざめてながむるは。
(今更驚き醒めたるにか。)

酔ひたる當座の勢ひよき顔色と酔ひざめのわをじろき貌とを對照し、以て暗に先
の凜乎たりしマクベスの勇氣と今のいふ甲斐なき臆病氣とを對照し、先には弑逆
の企に對して何の恐るゝ色もなかりしに、今はそを見ること宿酔の痴人があをさ

め貌してあたりを見廻はすが如き風情なるは何事ぞやと罵りはげます言葉なり。註釋家によりては此の言葉を直ちにマクベスを罵る言葉のやうに釋したるもあれど、その意義を釋するに當たりて止むを得ずまかいひなしたるのみならん、こは *hope* を敵手どりていふなれば、婉曲の言葉なること明らけし。▲ *Green* といふ語は *simple* 又は *foolish* と釋す「痴々しう」の義。

けふよりは我れを愛しいとみたまふ御心こころをもまた其の如しと思ふべきぞ。「我が夫つまが心の變り易きことかくの如くならば、我れを愛したまふ情も蓋しまたかくの如くなるべしと思はん」となり。

此の一句夫人が女性たる本躰を見せていと妙なり、第五場のはじめに擧げたる夫人が容姿に關する論を參觀せよ、マクベス夫人が美にして艶なるにあらざれば此の言葉まかすがに力弱く情移らざるべし。

言ふ甲斐なし、心に斯うと欲ほひながらも、それを打出だして勇敢に行ふことを憚りたまふや。

この原文に見えたる *act and valour* は *darling* と釋すべし、かゝるかきかたを「ヘンダ

イヤヂス」の法といふ即ち詞を二つに分けて同一の意義を表する法なり、類例あまたあり。

榮譽の極みとおぼす物を、手に入れまくおぼしながら、みづからおとしめて卑怯者になりたまはんとや、欲ほしとは思へど敢ては得せぬ彼の、諺の猫のごとくに。

▲「榮譽の極みと」云々、原文には「人生の粧飾と」云々とあり、即ち國王の位のこと也。

▲「わが身をおとしめ」王位を希ふは大丈夫の望なりとかねてしものたまひながら甘んじて大丈夫の望を抛擲するは卑怯の振舞ならずや。▲ *in thine own esteem*, &c. とは「御身みづからの眼中の卑怯者とならんとにや」といふ意。▲「諺の猫の」云々「猫は水中の魚を欲す、されどその足の濡れんことを厭ふ」といふ俚語あり。▲「欲しとは」云々、原文には「敢ては得せぬといふ心を欲しといふ心に侍まらせて」とあり。

Macb.

Pr'ythee, peace.

I dare do all that may become a man;

Who dares do more, is none.

マクベスの劇詩

Lady M.

What beast was't then,

That made you break this enterprise to me?
 When you durst do it, then you were a man;
 And, to be more than what you were, you would
 Be so much more the man. Nor time nor place
 Did then adhere, and yet you would make both:
 They have made themselves, and that their fitness now
 Does unmake you. I have given suck, and know
 How tender 'tis to love the babe that milks me:
 I would, while it was smiling in my face,
 Have plucked my nipple from his boneless gums,
 And dashed the brains out, had I so sworn as you
 Have done to this.

マクベス やよひそかに。丈夫の爲すべきことならば我れ敢てこれを爲さ

んが、そが上を敢てせんは眞の人の道にあらず。

「大丈夫たる名に耻ぢざる行ひならば」となり。▲「そが上を」云々、大丈夫の行ふべき道の外にいてたることを行ふは眞の大丈夫にあらずとなり。こゝの「人にあらず」の「人」は原文にては man とありて前の man と同語なり、されど此の man の字は「男」とも「人」とも訓ずる詞なるゆゑ、夫人はこれを態と人の義に解して下の激語を吐けり。

マクベス夫人 さあならば彼れはそもいかさまの獸なりしぞ、前がた企をば御身にすゝめてわなみに傳へさせつるは。

「志からは先刻御身の口を借りてわなみに謀叛の企を傳へしは何者ぞ、あの聲音こそわれは男魂の聲音なりと思ひしが、さては彼れは人間ならぬ野獸などの聲なりしか」の意。▲ break は disclose 又は communicate の義、或は confide の義にも釋せり。

彼の企を敢てせんと思ひこみたまひし時にこそ御身大丈夫にて在しつれ。彼の企を敢てせんと思ひこみたまひし其の折こそなか／＼に大丈夫らしくありつれの意。前の「(人)男にあらず」といへるマクベスの言葉を駁す。

いやが上にも望をかけ、かくして大丈夫らしく振舞はんとこそおぼしつれ。

原文には「其の折の身分よりも立優りたる身分(國王)になりのぼりて一しほ眞の丈夫たるに耻ぢざるやう振舞はんとおぼしたりき」とあり。▲to be moreとあるはby being more と釋すべし。「その上を敢てせんは云々といへるマクベスの前言を破するなり。moreといふ詞を疊めばこそ原文に風調の美の存するなれ。

時も處も其のをりはふつゝいかなりしに、その二つを製りてもと思ひこみたまひしならずや。

▲adhere は中と釋す、機會も場合も其の折は双つながら事を行ふに不適當なりしに、御身は尙屈する色なく、強ひて機會を製作しても本意を遂げんとこそ思ひたまへりしかの意。

今その二つが自然にいで來て、首尾と一のふに及びてはなか／＼に逡巡したまふ。

▲「その二つ」とは時と處とのこと、圖らずも王のみづから臨幸ありて此の城内に宿りたるをいふ。▲首尾云々の原文は「時と處との折にあひたること」が御身の決心を「打碎けり」とあり。▲madeといひ unmakeといふ此の通音に文飾存す。

われは幼孩をばはごくみつれば、我が乳を吸ふ嬰兒のいとほしさはよく知りたり、されど若し一たびかくせんと人に誓言したらんには、その嬰兒がほへえみて我が面打まもれる折にだも、まだ生をいいてぬ齒肉をわが乳房より引放ち、かいつかみて擲ち、頭を微塵となさまく思ふを。

此の見殺すべしと誓ひなば我れは敢て其の誓約を實行すべしとなり。

Macb If we should fail?

Lady M.

We fail!

But screw your courage to the sticking-place,

And we'll not fail. When Duncan is asleep—

Whereto the rather shall his day's hard journey

Soundly invite him—his two chamberlains

Will I with wine and wassail so convince,

That memory, the warder of the brain,

Shall be a fume, and the receipt of reason

A limbeck only : when in swinish sleep

Their drenched natures lie, as in a death,

What cannot you and I perform upon

Th' unguarded Duncan ? what not put upon

His spongy officers, who shall bear the guilt

Of our great quell ?

マクベス 若し事敗れなば？

夫人に勵まされてマクベスの心また漸く動く、まかれども事の成否を危ぶみて僅に此の一句を挿む。

マクベス夫人 敗れなば！

この一句異釋の叢なり、原文にはマクベスが「若し吾々が失敗するとせば」といひつゝるに對して、其の言葉の半のみをうけて「吾々が失敗する」といはせたり、さればこれを「吾々が失敗すると、や、いかでさる恐れあらんや」と排斥したる義にも解し得べく「吾々が失敗する、まかあらば万事終らんのみ、さる杞憂はせずもあれ、成ると思ひて

敢てすべし」とも解し得べく、又は「吾々が失敗するとか、或はさることもあらんが、何ぞそれに關するに及ばん」とも解せらるべし、シッドンス夫人が此の一句を三様にかひわけしこと人の知る所也。予は前の三者の中第一を採る、即ち「何條さる恐れあらんや」と激しくマクベスの懸念を斥けたる言葉と見る也、是れ最も此の夫人の感情にかなへりと信ず、第二の釋のごときは例のイリホガにしてあらぬ付度なり、さてこの譯文を「敗れなば」としたるは原文の *what not* の直譯も本意もかく譯してこそ却りて其のまゝに見らるれと思へばなり、即ちマクベスの言葉を聲の下より繰返したるなり、かゝる鸚鵡がへし此の作者の癖なり。！の標こゝにてはとやの思入のゑるしと見るべし、若し第二の解釋を採らば！を。に改むべく、また第三の釋を取らば？に改むるか又は明かにとや又はとかといふ語を書き加へて然るべし。

ひたすらに根ざし強く勇氣をば引きしめたまへ、さあらんには事の敗るゝ氣遣ひ無し。

▲ sticking-place とあるはチヂといふ物を巻きあぐる根本の處をいふ、茲の比喻は樂

器若しくは或機械をチヂにて巻きあげてそれらの作用をなさしむる時の趣に思ひ寄せて、勇氣をかたうせよ」といふ意味を表はせり。原文の牙音並に齶音に富みて、夫人が切齒して言ふらん風情のいとよく見えたるを味ふべし。

ダンカン王の熟睡してあらん間——晝の旅路の疲にて一しほ昏睡せられんは必定なり——近侍の一人には、酒をしひ、祝酒すゝめて、頭衛る記臆力は煙と消え、智惠の在所はランピキの器のやうにならんまで、儂みづから盛りつゞしはべらん。

▲ the rather 一層と訓ず、こゝにては俗語の「イッソ奇麗」「イッソ疲れた」などと同義なり。
 ▲ wassail とは人の健康を祝ぐ爲に飲む賀盃のこと、又賀酒のこと。▲ convince とは overcome の義、即ち「盛りつゞす」といふ意。▲ 智惠のありか、原文には「理性の入りたる」とあり、脳髓の一部をいふ。▲ 「ランピキ」蒸溜罐のこと、こはもと亞刺比亞語のアラムビッキより轉訛したるなれば、即ち我が俗のいふランピキの器のと也。彼等が豕のごとく熟睡し、死人のやうに酔臥したらん時、衛士もなきダンカン王に何の業か爲し難かるべき。

▲ Their drenched natures の drenched の本義は「浸透したる」といふこと、此の三詞を義譯して「酔ひつゞれたる三人が」と訓ず。▲ in a death を「死人のやうに」と訓ず、death に a 字を冠せたるに此の義含まれたり。

海綿のごとくに酔ひ浸りたる近侍等になにの罪か被せ難かるべき、弑逆の大罪は彼奴等が身にこそ負はめ。

▲ spongy 此の語間々泥酔漢の義に用ひらる。▲ quell とは murder (虐殺) の義なり。
 ▲ what not put upon 此の what と not との間、can といふ詞を加へ、not と put との間、be といふ詞を入れて解すべし。put upon とは被せるといふ義、衣服を着するに用ひ、國俗の謂ふ罪を他人にきせるといふにちなじ。

Macb.

Bring forth men-children only;

For thy undaunted mettle should compose

Nothing but males. Will it not be received,

When wo have marked with blood those sleepy two

Of his own chamber, and used their very daggers,

シェークスピアの劇詩

That they have done't?

マクベス あはれ只男兒をのみ生みたまへ、その不敵なる性根にては男の外をば得も造りいでたまふまじ。さらば件の眠れる二人を帳内にて血汐にまみらせ、また彼等が短劔を事の用に供せんには、皆人疑はずして彼等が爲せる業と信認ふべきか。

▲ received とは believed の義なり。

Lady M.

Who dares receive it other,

As we shall make our griefs and clamour roar

Upon his death?

Macb.

I am settled, and bend up

Each corporal agent to this terrible feat.

Away, and mock the time with fairest show:

False face must hide what the false heart doth know.

[Exeunt.]

マクベス夫人

誰れかは異さまに考へえん、われく夫婦が聲うちあけて崩

御を歎き悲しむべければ。

▲「誰れかは異さま」云々、誰れかさにあらずなど異さまに考へてわれくを疑ふやうのことをせんといふ意。

マクベス わが心決したり、此のおそろしき業せんために、ある限りの力をひき絞らん。

▲ bend up は弓などを満月の如くひきしぼるにいふ詞。▲ corporal agent 「身の力」と直譯す、筋力といふ意、すべて大力士が強弓をひきまぼりてすばらしき猛獸などを射取る業に思ひ寄せたる喩なり。

いざさらばあなたへ、こよなくうつくしう見せて、周囲の目をあざむきたまへ。▲「うつくしう」云々、野心のちともなきやうに見せかけてとなり。▲「周囲の目」原文には「世をあざむけ」とあり、此の「世」の字前にも見えたり、「周囲の人」といふ義。▲「うつくしう」適譯ならじ、最も野心なげにといふ意也。

いつはり心の深き企はいつはりの面をもて蔽はざるべからず。不義不信の心を false heart といふ即ち謀叛心なり。▲「いつはりの面」とは心にも無

ACT II.

SCENE. I.—Inverness. Court within Macbeth's Castle.

Enter Banquo, and Fleance with a torch before him.

第二 段

第一場 マクベスが居城の内庭

バンコーその君と共にマクベスが居城に宿りたるが、心中安からぬ所ありて眠に就くこと能はざれば、其の子フリヤンスに案内させて庭内を逍遙す。フリヤンスは十四五歳の童なりと思ふべし。前段のつゞきなり。

Ban. How goes the night, boy?

Fle. The moon is down; I have not heard the clock.

Ban. And she goes down at twelve.

Fle.

I take 't, 'tis later, sir.

Ban. Hold, take my sword.——There's husbandry in heaven; Their candles are all out.——Take thee that too.——

A heavy summons lies like lead upon me,

And yet I would not sleep: merciful powers,

Restrain in me the cursed thoughts that nature

Gives way to in repose!

Enter Macbeth, and a Servant with a torch.

Give me my sword.

Who's there?

バンコー 冠者よ、もう何時であらうぞ。

フリヤンス 自鳴鐘の音は聞えませねども、月はもう沈みました。

バンコー 月の落つるはたしか十二時。

フリヤンス イ、エ父上、もう少しおそうござりませう。

原文に「I take it」とあるは「予が思ふ所によれば」の意。take は conceive の義なり。

バンコー 待ちやれ、此の劔を受取つてたもれ。

フリヤンスに帶劔をわたす。▲hold は「待て」といふ義。▲take は「受取れ」の義。

天上界にも節儉あるにや、燭火は皆消えたり。

▲「燭火」星のことなり、おひく夜の更けて星影の稀になれるをかくいふなり。

それを取つてたもれ。

短劔などをも脱してフリヤンスにわたせるさまか、帽子若しくは上被などにやといふ説もあり。一説にいはく、バンコー妖婆が豫言の爲に動かされてそらに邪念の鬱勃たるを禁ずる能はず、かるが故に兇器を悉く脱し去りてみづから制するなりと。此の説によればバンコーもまたマクベスと同じ病に罹れるなり、或は謂ふ、バンコーが武器を脱せしは忠臣マクベスが居城に宿りたれば武器の必要なしと思ひてなり、他念あるにあらじと。

瞼は鉛をもて壓さるゝ如く眠たきと限なければ、眠に就かんと好ましからず、

悪夢を見んことを恐るゝなり、自制の執意を離れたる邪念がそらに夢中に働きてダンカンを弑する等の大逆罪を行ふ夢を見することあればなるべし。

あはれ大慈大悲の神々就眠ればいつしか心ゆるみて胸に浮ぶ忌々しき妄念、はらひたまへ。

バンコーはた多少妖婆の爲に動かされたること此の言葉にて明かなり。此のあたり評釋者の推考を要すべき所なり。

マクベス後に、一僕先に、松炬をもちて登場。

やよ我が劔を。

これはフリヤンスに對ひていふなり。

それなるは何人なるぞ。

Mach. A friend.

Ban. What, sir, not yet at rest? The king's abed:

He hath been in unusual pleasure, and

Sent forth great largess to your offices.

シェークスピアの劇誌

This diamond he greets your wife withal,
By the name of most kind hostess; and shut up
In measureless content.

Mach. Being unprepared,
Our will became the servant to defect,
Which else should free have wrought.

Ban.

All's well.——

I dreamt last night of the three weird sisters:
To you they have showed some truth.

Mach.

I think not of them:

Yet, when we can entreat an hour to serve,

We would spend it in some words upon that business,

If you would grant the time.

マクマス

怪しうは無ゝもの。

原文には「友なり」とあり、即ち敵にあらざ、曲者にあらざるの義を含めり。

バンコー ヤ、いまだ御寐ならずか。陛下には既に休ませたまひぬ、殊の外に
みけしき麗しく、御城内なる役所々々へは夥多しき賜を下したまひつ。且夫
人へは此れなる金剛玉を贈らせられて、いと忠實なる女刀自へとの御ことの
り、さて限りなき御満足にて夜殿に入御ありたり。

shut up 云々のあたり原文に多少の脱字などあるにや、解釋思ひく／＼なれど、件の
shut up を concluded 即ち「其のみことのりを終結したまひぬ」といふ義に解するが多
敷なり、或は此の意を推して「帳内に入りぬ」と解したるもあり。こゝには折衷の譯
を掲げつ。

マクマス 些も心まうけの候はざりしたため、さなくば自由なるべかりし我意

もわが意のやうにあらで、足らぬがちに役せられ、何事もふつゝか千万。

バンコー 万事上々の首尾。いかに、それがし先刻夢のうちに彼の三個の妖
婆を見たりき。

▲「last night」こゝにては「先刻」と釋す、かゝる例此の作者には屢々あり。

彼等の貴下に語りしことは現にいくばくか適中せり。

マクベス 彼等のことはそれがしふつに思ひ寄らず、さりながら貴下若し只一時ばかりの便宜をだに、我等に許したまはんには、聊か彼の件につきて、語り申したき筋のあり、さる機を許したまはし。

▲「我等」といふ語は國君の自ら稱する時に用ふる語にして「寡人」又は「朕」の義に當れり、マクベス既に國王に成りのぼりたるやうに思ひてかくいふなりといふ解あれど、さか々にや。

Ban.

At your kind'st leisure.

Macb. If you shall cleave to my consent, when 'tis,

It shall made honour for you.

Ban.

So I lose none

In seeking to argument it, but still keep

My bosom franchised and allegiance clear,

I shall be counselled.

Macb.

Good repose, the while!

Ban. Thanks, sir: the like to you.

[Exeunt Banquo and Fleance.

マクベス

いつにてもあれ、便宜とちぼされん折にこそ。

貴下が厚意をもて我れと談話せんとちぼされん時にいつにても貴命に應ずべしとの意をうやうやしくいへるなり。形容詞をかくの如く使ふこと此の作者の常なり。

マクベス

若しそれがしが申さん事に貴下同意せらるべくば、その折に到り

てそれぞ貴下の榮譽となるべし。

此の一節辭意曖昧にして頗る文格をも誤れるに似たれば先輩の解一定せざれど、態とちぼろげにいへるならんといふ一説面白ければ、本文は態と逐語譯のやうにせり。▲ consent を解して或は plan の義とし、或は一語にて unanimity with me といふ意を含めりとしたるもあり。又 when 'tis は之を解して「その事成らん時」としたるが多數なり。

バンコー　そを増さむと求むとてそを毀やぶくることなくば、また我が心の汚
るゝことなく、且つは忠勤缺くるなくば、何事も御言葉にまたがふべし。

▲「そを云々、前の榮譽を指して、そ」といふなり、榮譽を増長せんと欲するに當りて従
來得たる榮譽即ち良臣たる面目をそこなふやうの恐れなくばとなり。

マクベス　さらば安らかに休ませられよ。

バンコー　忝わづかし、貴下きげにもまた。

(バンコー並にフリヤンス退場)

以上の對問の意殆ど解すべからず、マクベスの王を弑せんとする心は既に全く決
したるに、他日此の件につき、談合せんといふこと心得難きに似たり。或は深夜
就褥せずして庭内を漫歩する處をバンコーに認められたるゆゑに、他日の嫌疑を
避けんがため態とよそ／＼しくかくらゝるにや。此のあたりまた評釋家の推考
を要する所なり。

Macb. Go, bid my mistress, when my drink is ready,

She strike upon the bell. Get thee to bed.

[Exit Servant.]

Is this a dagger which I see before me,

The handle toward my hand? Come, let me clutch thee:—

I have thee not, and yet I see thee still,

Art thou not, fatal vision, sensible

To feeling as to sight? or art thou but

A dagger of the mind, false creation,

Proceeding from the heat-oppress'd brain?

I see thee yet, in form as palpable

As this which now I draw.

マクベス　疾くゆきて夫人おんなに飲料ののみものの準備いそ整ひなば呼鈴よびかねを鳴らしたまへと白
せ。

▲「飲料」とは就褥前に服用する藥湯のたぐひなるべし、但し此の呼鈴はダンカンタンカンを
殺すべき便宜を知らすべき爲のものなり。後の文とあはせ見るべし。

シエークスピアの劇詩

其方も休みがよいぞ。

(従僕退場)

マクベス只一人となり呼鈴の鳴るを待つ、忽焉として一箇の短劔眼前の虚空に現
じ來たる。

こは短劔なるか、我が眼前にあらはれたるは、我が方へ柄をさしむけ。

速に搦めといふものゝ如し、マクベス心殆ど亂れて、

いで捉へん。

かけよりに捉へんとす。

我が手には止まらざれど、尙さながらに目にぞ見ゆる。あなゆゝしき幻影見
えても、手には取られぬ影よな。心の所爲か、逆上たる頭腦が生みたる偽物か。
尙も見らるゝ劔のかたち、まぶしく掲焉に、我が抜き放つ此れにも劣らず。
マクベス短劔をぬきはなちて彼れ此れをくらへ見る。

Thou marshall'st me the way that I was going;

And such an instrument I was to use.

Mine eyes are made the fools o' the other senses,

Or else worth all the rest: I see thee still;

And on thy blade and dudgeon gouts of blood,

Which was not so before.—There's no such thing.

It is the bloody business which informs

Thus to mine eyes.—Now o'er the one half-world

Nature seems dead, and wicked dreams abuse

The curtained sleep: witchcraft celebrates

Pale Hecate's offerings; and withered murder,

Alarmed by his sentinel, the wolf,

Whose howl's his watch, thus with his stealthy pace,

With Tarquin's ravishing strides, towards his design

Moves like a ghost—Thou sure and firm-set earth,

Hear not my steps, which way they walk, for fear

Thy very stones prate of my whereabouts,
 And take the present horror from the time,
 Which now suits with it.——Whiles I threat, he lives:
 Words to the heat of deeds too cold breath gives.——

[A bell rings.]

ム、我がゆくかたへ導せんとかげに其の如き利き具をば將に用ひんと欲せしなり。

汝幻影、汝は能くわが意を解したり、汝の如き鋭利なる具を用ひて我れは王を弑せんと企てつゝありき。

眼のみが他の覺官にあざまるゝ物笑ひとなりたるか、目に見るのみが實なるか。

我が目の觀る所虚なるか、我が觸官等の感ずる所虚なるか、手には取られねど目には顯然たり、手の證する所か、目の證する所か、いづれが實にしていづれが虚なる。

尙も見ゆる短劍。あまつさへ刃面と柄元とに前には見ざりし血汐の滴。

此の空中の短劍を舞臺に實現して見すべきか、又はすべてをマクベスが神経作用と解して實物を示さず、所謂思入のみにて短劍の空中に現じ、血汐の淋漓たるさまをも觀者に想像せさすべきかといふことにつきて先輩の説くさうあり、これもまた評釋家の見解による事なり。但し短劍を實現するを今の劇場の通例とすと聞けり。

やゝありてマクベス心やう／＼おちる、夢のさめたるが如き思入。

何條さやうの物あらん、有りと見えしは我が残忍の心の所爲。

▲ bloody business は之れを釋して「残忍なる purpose 即ち目論見」とすべし、蓋しマクベスは短劍の空中にあらはれたるをひとへに神経の作用なりと思へり。こゝに至りてマクベス心を静め、更にキツとなりて思入あり。

今や世界の半にわたりにて万物死したる如く、綺帳の眠も悪夢に驚く。時得貌なる妖婆等は生白きヒケートに贅をさゝげて祀を執行し、懽せぬめる刺客はそが衛士といふ狼の時分を知らせて吠ゆる聲に驚き醒めて、まづこの如く邪淫無慚のタルクインが歩武をまなび、指す方へぬき足して、亡靈のやうに忍びよる。

本文に引けるは總て當時の謬信なり、草木も眠る丑三ツのすごみを形容せる言葉也。▲「タルクイン」云々とはリウクリシヤを辱めんとて深夜に閨房へ忍びよりし時の足つきに思ひ寄せたる也、タルクインが貞婦リウクリシヤを辱めし事實は盛遠の袈裟師直の鹽冶の妻に於ける物語の如く有名の事實なり、此の作者が壯年の作に此の殘虐の事を本としたる物語歌あり。

汝、不動堅固なる地よ、我が歩あしいづくへ往くとも、踏み鳴らす音をな聞きそよ、彼の石どもの聲立て、我が居どこを言ひのしり、機あしに適あふ夜半の怖ろしさを奪はぬために。

▲「彼の石どもの云々、聖書セント、リウクスの卷第十九章第四十節に、彼等が黙するならば石どもが直ちに呼ばんとし」といふ句あり、それに據りてかくいへるなるべしとクレーはいへり。▲takeは「奪ひ去る」の義。▲「怖ろしき」真夜中の寂寞たる物ずごさをいふ、即ち「さびしさ」といふ意。

言葉をもておびやかすや彼れは尙つゝが無し、行爲しわざの烈火にくらぶれば言葉は冷き息いきに過ぎず。

▲「彼れ、ダンカンを指す、此の二行押韻、givesはwordsの動詞なればgiveとあへきなれど格を破りてivesと相ひゝかせたり、かゝる破格他にも屢とあり。
(呼鈴鳴る)

I go, and it is done: the bell invites me.

Hear it not, Duncan; for it is a knell

That summons thee to heaven or to hell.

[Exit.]

往けば則ち事成就す。我れを誘ふあの鈴かねの音。

此の呼鈴はマクベス夫人が鳴らす所、時分はよしといふ知らせなり。

勿な聞きそよダンカンあの音ねを。あれこそは天國地獄のいづれへか汝を送る最さい後の鐘かねの音。

▲knellは葬送の時に用ふる鐘なり、此の二行また押韻、此の作者の臺詞壯年の作には押韻の處多けれど、『ハムレット』以後の作にはいと稀なり。

(退場)

SCENE II.—The Same.

Enter Lady Macbeth.

第二場 同前

マクベス夫人登場

此の段或は第二場とせずして第一場のついきとし、マクベスの退場と入れかはりて夫人が登場するやうに綴れるものあり、蓋し原版の解の相異なるに因るなり。時刻はいづれにしてもマクベス退場の後程無しと見るべし。

Lady M. That which has made them drunk hath made me bold;

What hath quenched them hath given me fire.—Hark!—Peace!—

It was the owl that shrieked, the fatal bellman,

Which gives the stern'st good-night.—He is about it.—

The doors are open, and the surfeited grooms

Do mock their charge with snores: I have drugged their possets,

That death and nature do contend about them,

Whether they live or die.

マクベス夫人 彼等を沈酔せしめし物、我が心をば奮ひ勵まし、彼等の心の火を消せし物、我れには猛火を與へたり。

夫人は酒氣を藉りて勇氣を助けたり、宿直の役人等は酒の爲に心火を打消されたり、我れはその酒といふ物の助にて勇氣奮ひ興りぬとなり。異釋を下したるもあれど本文の義争ふべからず。

や、あの聲は。

些細の物音にも心動ず、夫人が衷心の安からざるを見るべし。

今鳴きしは、鳥よな、おそろしの夜を知らせて「危ふし」と呼ばふといふ忌々しき夜まはり鳥。

梟を「火危ふし」と呼ばひて巡行する夜巡りの丁に喩ふ、當時の謬信に梟は災厄を知らすといふ事あり。▲ Good night を意譯して「危ふし」とす。

もはや事の最中ならん。戸口は皆開いてあり、従者らは酔ひつぶれておのれらが宿直の務を嘲みがほの高野生死をもわかたぬまでにと豫て牛乳酒を調

合しちきつれば。

五三八

▲「生死を」云々、原文の nature という語こゝにてはシミットの釋にしたがひて vitality の義とするを最も穩なりとす。▲「牛乳酒」酒と牛乳とを煮て強き藥劑を加味したる飲料就褥前に服するものなり。▲こゝの意味はいと強き藥劑を加へ置きたれば彼等は生死いづれともわかぬ程に爛醉してあるべしとなり。▲that は so that の義。

Mach. [Within] Who's there?—what, ho?

Lady M. Alack! I am afraid they have awaked,

And 'tis not done:—the attempt and not the deed

Confounds us.—Hark!—I laid their daggers ready,

He could not miss 'em. Had he not resembled

My father as he slept, I had done't.—

マクベス

(奥にて) や、そこなるは何者……や、や。

案ずるにマクベス先に老王を弑せんとて奥の間に赴きたりしが斷然手を下すべ

き勇氣乏しく廊下に踟躕せる際、夫人が獨語の片端を漏れ聞き、窺ふ人のありと思ひ、我れ知らず樓頭に走りもどりて下の方を見おろし、そいろに聲をたてたるなるべし。

マクベス夫人

や、彼等が目を醒まして、事成らぬにはあらぬか。

▲Alack としむ語恐らくは ah lack のつゝまりたるならん、嗚呼不幸若しくは失敗といふ意味を含める悲歎の語なり、南無三寶の意なり。

手を下しながら成らぬときは、我々が一期の破滅。

▲confounds は ruins の義、本文の譯はクラレンドン版の釋に據る。

や、あの音は。

心頻に搖動して些細の物音をも雷の如くに聞くなるべし。

短劍は好うして置きたり、よも見遺しは爲たまふまじきに。

侍従等が佩きたりし短劍をはぎ取りて事の用に供するに都合よきやうになし置きぬ、我が夫が短劍のある處を求め惑ふやうの事はなかるべしとなり。
眠貌が父君に似ざりしならば、すぐにも爲おほすべかりしものを。

夫の敢爲の勇に乏しきを危ぶむあまり、先刻短劍の準備などなし、折にダンカンを弑し了らざりしこと無念なりきと歎ずるなり。俗傳の蘇史によれば、夫人の父とダンカン王とは血筋の相近き中なれば容貌相似たる所ありしなるべし、夫人王の眠貌のものが亡き父の貌に似たるを見て流石に手を下しかねきといふ所女性らしくていと妙也。夫人が人間の女性にして魔界の女性にあらざること、これによりて著し。デュームソン夫人がその“Characteristics of Women”に於て評したるなど参照すべし。

Enter Macbeth.

My husband!

Macb. I have done the deed,——didst thou not hear a noise?

Lady M. I heard the owl scream and the crickets cry.

Did not you speak?

Macb. When?

Lady M. Now.

Macb.

As I descended?

Lady M. Ay.

Macb. Hark!

Who lies i' the second chamber?

Lady M. Donalbain.

Macb. This is a sorry sight. [*Looking on his hands.*]

Lady M. A foolish thought to say a sorry sight.

マクベス登場

や、我夫か。

マクベス 事は爲し果てたり。物音をば聞きたまはざりしや。

マクベス夫人 されば、梟の叫ぶ聲と蟋蟀せせくしの聲とを。

夫に向ひてはいとくちつきたるいひぶり也、さきに些細の物音に動じたるは格別なり。

前に蟋蟀のことは見えざれとも、や、あの物音はといひてまばく耳を傾けたる際

に聞けるなるべし。當時の謬信によれば、蟋蟀もまた人の死を豫告するもの也。物をのたまはざりしや。

此の一語以下評釋家の間に異論あり、ハンタア、フアテス等は此の一問を夫人の白とせずしてマクベスの白とせり、而して其の次なる When と Now とを並に疑問辭の語として夫人に言はしめたり。いづれの解釋が最も穩當なるべきか容易くは判じがたし。尙下の註をみて双方の當否を味ふべし。

マクベス 何時。

マクベス夫人 今がた。

ハンタア等の解によれば、マクベスが「物をのたまはざりしや」と問ひつるに答へて「何時？今がた？」と夫人が反問せるやうにしたり。

マクベス 降り來し時に？

異釋に従へば此の疑問辭の一語は斷定的となりて、マクベスが夫人に答へたる語となる也。

マクベス夫人 さなり。

異釋にても此の語は夫人の答なり。案ずるに、ハンタア等の解によれば此の「さなり」といふ言葉本文に於けるよりも遙に重し、即ち「さなり、獨語してありたりき」といふ程の義となる。

本文の解の如くば此の問答は未だ終結せざるものゝ如し、何となれば、物をのたまはざりしや」と夫人が問ひつるにマクベスは「何時」と反問し、やがてまた「降り來し時にか」と反問し、遂に「物いひき」とも、「いはざりき」とも決答せずして直ちに餘事に移ればなり。且つや夫人が問ひし如くにマクベス果して何事かいひきとすれば、それは前の「そこなるは何者」といふ白を指さるを得ざれど、こは樓上にて發せし言葉にして樓を下れる時の言葉ならぬことは、その未だダンカンを殺さる前に發したるを見ても明かなり。予はむしろフアテス等の說に従ひ句讀を改めんと欲するものなり。

マクベス や、あの音は……次の間には誰が臥せるぞ。

マクベス夫人 ドナルベインが。

マクベス あなあさまし、此の様は。

マクベス夫人　あなましなどは鳴呼なることを。
 (ちのが手をながめて)

原文には「あなまし」といはへは鳴呼なる妄想とあり。

Macb. There's one did laugh in's sleep, and one cried, 'Murder'
 That they did wake each other : I stood and heard them ;
 But they did say their prayers, and addressed them
 Again to sleep.

Lady M. There are two lodged together.

Macb. One cried, 'God bless us!' and, 'Amen,' the other,
 As they had seen me with these hangman's hands.

Listening their fear, I could not say 'Amen,'

When they did say 'God bless us!'

Lady M.

Consider it not so deeply.

Macb. But wherefore could not I pronounce 'Amen'?

I had most need of blessing, and 'Amen'
 Struck in my throat.

Lady M.

These deeds must not be thought

After these ways; so, it will make us mad.

マクベス　眠りながら一人は笑ひ一人は「人殺し」と叫びたり、それがために彼等互ひに驚き醒めにき。我れは立ちたるまゝ耳そばだててき、志かるに彼等は神に祈りてまたも眠らんと試みたり。

突如として弑逆の状況を語りいだし來たる、マクベスが心中心の鬼の心を責むる苦痛の外殆ど物無きが如きを見るべし。

マクベス夫人　あしこには二人の者が臥してあるをや。

此の言葉の本意明かならず、デイトンが引けるデリヤスの説によれば、*lodge* 即ち「臥す」といふ語に謎あり、爛酔してヘタバリ居るといふ義、即ち死人も同様なる二人の従者がヘタバリ居れることは余れも知れり、今更のやうに事々しう其の二人の事をのたまふは笑止なりとやうにマクベスを嘲りたる言葉なりと、云々。

デイトンは此の釋を排けて、こは寧ろ夫人の獨語同様のものと見るが優るべし、即ち夫が戦々兢々と心おくれて事を完成し得ざるが如き様子を見て、みづから代りて殘務を成就せんと欲し、ダンカンの寢處の模様などを豫め考へつゝある躰ならんといへり。予案ずるに、爰は只一通りの嘲弄の言と見るべきか、デリヤスの爛醉してヘタバリ居ると解したるはやゝ穿鑿に過ぎたるに似たり、只マクベスが人の物いひし事をぎやう／＼しく語るを聞きて、されば、かしこには二人の從者が王と共に打臥してある筈なり、人間なれば物をいはん、呼ばひもせん、何の不思議かあるとやうに、例の單刀直入的嘲弄をものせるなりと見るかた穩かなるに似たり。獨語といふ解は到底信げがたし、但しJodgeに「ヘタバリ臥す」といふ訓はあり。

マクベス その一人が「喃神よ、助けたまへ」と叫び、他のひとり「げに／＼と叫びたり、我が此の獄卒の手を見し時。」

▲「げに／＼」原文には Amen とあり、amen とは agere の義にして「志かあれかし」とも「げに／＼」とも訓ずべし、本文の場合は「げに／＼」我れも志か神に祈るなり」といふ程の義なり。▲獄卒の「云々、獄卒の如く血にまみれたる手」といふこと

彼等がおひえて「助けたまへ」といふをききて「實に／＼」と言はんとせしが我れは言ふこと能はざりき。

マクベス夫人 さな思ひ入りたまひそよ。

さう深く思ひ入りたまふとなり、夫人もすこしく氣味わるくなりし介。

マクベス さるにても、なにとて「げに／＼」といふことの叶はざりしか。我れも深く冥助をば欲しつるに「げに」といふ一句は喉にからみぬ。

苦しき時の神頼み、君を弑しながら神の冥助を求む、此の不條理と不都合との中に人情の機微こもりたり。心の鬼に責められて精神惱亂せるマクベスは其の言ふ所ほと／＼小兒に類す、叱咤三軍の驍將、万夫不當のマーズ尊神、今何處にかある。案ずるに、おほよそ私情酷しく激昂して我れかを忘るゝに至る際には、人大かたは小兒にひとし、私欲の爲に大に怒れる、私欲の爲に大に悲める、私欲の爲に大に喜べる等、其の言行に小兒の態あり。

マクベス夫人 かゝる事はさやうに思ひ入りたまふ可からず、果ては心の狂ひぬべければ。

例の嘲弄の口吻跡を失してやうく氣味わるげなる語氣味ふべし。

Macb. Methought I heard a voice cry, 'Sleep no more!

Macbeth does murder sleep,'—the innocent sleep:

Sleep, that knits up the ravelled sleeve of care,

The death of each day's life, sore labour's bath,

Balm of hurt minds, great nature's second course,

Chief nourisher in life's feast;—

Lady M.

What do you mean?

Macb. Still it cried, 'Sleep no more!' to all the house:

Glamis hath murdered sleep, and therefore Cawdor

Shall sleep no more, Macbeth shall sleep no more!

Lady M. Who was it that thus cried? Why, worthy thane,

You do unbend your noble strength, to think

So brainsickly of things. Go, get some water,

And wash this filthy witness from your hand.—

Why did you bring these daggers from the place?

They must lie there: go, carry them, and smear

The sleepy grooms with blood.

マクベス 何處とも無く聲ありて「もはや安眠無し。マクベス眠を殺したり、

と呼ばふ如く覺えたり：無邪清淨の眠を、紊れ心の綿糸を編み整ふる眠を、日

々の憂身の涅槃とも、勞苦をやはらぐる浴とも、傷める心の藥膏とも、大自然が

進むる二の膳とも命を育つる滋養物とも……

夫人がなだむるをも聞かざるものゝ如く、又も突爾として前の物語を繼ぎ、前にお

のが神経作用にて聞きし所の事柄を語る。此のあたりの妙は宜しく原文に就い

て味ふべし。

「無邪清淨以下をも、何處ともなく呼ばひし聲の語りたるやうに引用標の中に含ませて編みたる版本もあれど、無邪清淨以下の言葉はマクベスが下したる安眠の評釋たること論に及ばず。

▲「紊れ心の綿糸」原文には「心づかひの紊れたる綿糸」とあり、國文ならば紊れ心の麻糸などあるべき處なり。▲「日々の憂身の涅槃」とは眠れば日々の苦しき生涯を忘れ果つる効能あるをいふ。此處に列擧せるはいづれも「眠」といふものゝ効用を稱する也。▲「大自然が進むる二の膳」といふも、安眠といふものは自然即ち造化翁が人間に與へたる最美の珍珠にして、これによりて人間は日々の苦を忘れ憂を遣るといふ意也。安眠の効能を本文の如くに稱讚吟詠したる例他の詩人にもあまたあり。▲「二の膳」とはほゞ我が國に謂ふ「二の膳」といふとに通ひて調理の手際と食料の品質とを選りに選りたる珍膳をいふ。按ふにひとり現在界のみをもて人間常住の處とせば安眠にまされる樂は無かるべし、富み且つ貴きも上見れば限りなき樂欲の苦あり、有形の欲は満足するも無形の欲は妄想の無限なる間到底満足する時ある可からず。されば只現實界、物質界のみをもて人間の全世界と思へる輩が安眠をもて無上の安樂界と見做せること自然の沙汰なり、彼等にとりては安眠に次げる安樂界はひとり死といふ境界あるのみ、情死者の死を急げるなど一つは此の理によることなるべし。

神を信ぜず後世あるを信ぜざるマクベスが、良心の叱咤詰責に苦められて安眠の根の絶えたるを意識し、悲しげにその亡滅を弔ふ、此の實際的、物質的、人物にして此の言ある、趣味一しほ深しと評すべし。

マクベス夫人

何ごとをのたまふぞや。

慄然また呆然たる介こせし

マクベス

尙もそが叫ぶらく、もはや安眠なし。家のうちに鳴り轟きて、グラ

ミスが眠を殺しつればコールドルも最早眠らざるべし、マクベスもはや眠らざるべし。

グラミスといひコールドルといひまたマクベスといへる、按ずるに如何なる資格にてももはや安心を得る道無きに至りたりといふ心を強めていへるなり、別に深意あるにはあらず、いづれも心の鬼の聲なり。

マクベス夫人

誰そ其のやうに叫びつるは。

マクベスの言いよ／＼いで／＼いよ／＼奇怪なり、そのはじめは夫人もおぼえず慄然として自失せんとするが如き躰ありしが、此の時やう／＼我れにかへりて、例の

嘲弄の口吻を復し來たる。「誰そ其のやうに」云々、只一句、マクベスが長ゼリフを壓倒して尙餘力あり。おほよそ美しさ怖ろしさなどを語るには多く言はざる所に餘韻多く存するものなり、マクベスの述懐そのはじめはいとく物すごく聞ゆれど、やうく同じ事を繰返すに及びて痴人の夢物語に類したり、夫人が當初の慄然たりし感を排し去りて本來のマクベス夫人にかへり、夫の優柔を罵倒し來れる、蓋し當然の沙汰なり。

嗚、何事ぞや、さやうに物狂はしく物案じして、あたらし智力を弛べたまふは。

▲「あたらし智力を」云々、原文には「尊き力を弛べたまへり」とあり。こゝに謂ふ力とは智の力の義、to thinkの前に so as といふ接辭ある心にて讀むべし。

さる嗚呼なる物案じをするは神経病者の振舞なり、御身は性來の智力の消耗したるにや、ほとく狂人に類する物案じに沈みたまへりとなり、例の夫を勵ます言葉。

いざ往きて水をもとめて、その汚き手の證據を雪ぎたまへ。

原文には「その汚はしき證據をば御身の手より洗ひ去りたまへ」とあり、文章の都合によりて本文の如く轉換す。▲「手の證據」とはその手につきたる犯罪の證といふ

義、即ち血沙のことなり

などで此れらの短劍をば此處へは持來たまひつるぞ。

弑逆の場處に残し置くべかりし短劍をばマクベスがそのまゝに持來りつるを罵る。

あしここに置かずては適はぬものを。

疊みかけていふ夫人が口つき見るやうなり。

いざや疾く持往きて、眠りこけたる從者らに血沙をば塗りて來ませ。

Macb.

I'll go no more:

I am afraid to think what I have done;

Look on't again I dare not.

Lady M.

Infirm of purpose!

Give me the daggers. The sleeping and the dead

Are but as pictures; 'tis the eye of childhood

That fears a painted devil. If he do bleed,

シホークスゴヤの劇詩

I'll gild the faces of grooms withal,
For it must seem their guilt.—

Exit.—Knocking within.

Whence is that knocking?—

Macb.

How is't with me, when every noise appals me?

What hands are here? ha! they pluck out mine eyes

Will all great Neptune's ocean wash this blood

Clean from my hand? No, this my hand will rather

The multitudinous seas incarnadine,

Making the green one red.

マクベス いや／＼もはや往くまじきぞ。爲しつる事を思ふだにも我が心

安からぬをいかでかはまた見るべき。

叱咤三軍の驍將軍、万夫不當のマーズ尊神、今何處にかある。

マクベス夫人 わな無詮き心だましひ!

決心の堅固ならざるを責むる言葉。

その劔をわたしたたまへ、睡れると死にたるとは畫像におなじ。畫ける夜叉を恐るゝはいふ甲斐なき小兒の眼ぞ。いで／＼血の流れてあらば、それを罪ともに従者らの面に塗りつけ來ん。

罪と共に以下義譯也。此のところ原文に口合あるが故に直譯しがたし、原文のまゝを譯すれば、若し彼れ出血したらば我れそをもて従者等の面に鍍金せん、この事かれらが犯罪と見えざればかなはぬゆゑにといふ義にて、ギルドとギルトと相ひいきて一種の口合となるなり。此の口合といふものは國文のヒツカケ言葉とおなじ質のものなれど、國語の性質同じからねば英語にては到底我が國文にての如く自由に優美に使用せらるべきものにあらず。此の作者も壯年の作には好みて口合、語呂のたぐひを用ひたれど、晩年に近づくにまたがひ次第に之れを減少し、遂には道戯形の白にての外は殆ど全く用ひざるに至りぬ。本篇にては下の門衛の白を除きてはこゝの一句の外語呂口合絶無なりと覺ゆ。英にては口合は、最劣の頓智といひて痛く卑み、殊に崇嚴を專とする悲劇の中に口合、語呂などを挿むことは

ゆゑしき禁物の如くしたれば、マクベス夫人が此の白をも或は折に適はずとて非難せるもあれど、夫を嘲りて勵ます意を含みたれば、折に適はずとは不當の評なり、ましてや此の悽絶慘絶の最中に於て圖らずも此の皮肉なる嘲弄と浮薄なる滑稽の聲とをきくは、さながら物すごき古戰場又は眞夜中の墓場などにて思ひがけなく只一聲の笑ひ聲をきゝたるに似て、なか／＼に物すごさを増すべきをや。原文に「鍍金せん」とあるは血の色の深紅なるが金色に近ければなり、紅の金色を帯べるを思はゞ此の比喻の無理ならぬを味ふに足るべし。紅を金色と見做せる、類例あまたあり。

(退場、奥にて端戸を叩く音)

マクベス や、や、何處よりか端戸に音なふ物音。我れはそも如何にせしぞ、聞く音毎に驚かるゝは。何たる手ぞ此の手は。我が眼を引きも扱かん此の狀、鮮血にまみれたる此の手を打みれば我が双の眼抜け去らんとすととなり。

チフチューンが領したまふ大海原の水を盡すも此の手の血汐はよも雪がじ。

▲「チフチューン」とは海の神の名、我が海龍王にあたる。

否、却りて此の手の血汐が千波萬波の緑をも一色の紅に染めなさん。

▲multitudinousの本義は數限りなきといふ程の意なり、こゝにては、波の數の限り知られぬをいふ。▲seasと複數にしたれど海を無數といへるにはあらず。

Re-enter Lady Macbeth.

Lady M. My hands are of your colour; but I shame

To wear a heart so white. [Knocking.] I hear a knocking

At the south entry——retire we to our chamber.

A little water clears us of this deed:

How easy is it then!——Your constancy

Hath left you unattended,——[Knocking.] Hark, more knocking.

Get on your night-gown, lest occasion call us,

And show us to be watchers.——Be not lost

So poorly in your thoughts.

Macb. To know my deed, 'twere best not know myself.

[Knocking.]

Wake Duncan with thy knocking! I would thou couldst!

[Exeunt.]

マクベス夫人登場

マクベス夫人 わなみの手も御身の、色になりぬ、さはあれど白けたる心の臓を有たんは耻かし。

肝の臓又は心の臓の白けたるを怯懦の證に引くこと當時の例なり。こゝは夫人が侍従等に血を塗りて歸り來りての白なり。

(奥にて端戸を叩く音す)

あれ南口にて音訪ふ物音。いざ臥房に退り侍らん、ちとばかり水を注げば身は清淨。いかにいと容易からずや。

南口におとなへるはマクダフとレンノックスとなり、既に夜明けたれば王の迎ひに來れるなり。此の段、デ、クインシーの有名なる評論のあるところ、管々しければ今引かず。

堅固なる決心は我夫を棄て、去りぬと見えたり。

此の段、ハルフの釋による。▲constancy、こゝにては resolution 又は firmness の義なり。マクベスが茫然自失したる氣色を評したる夫人の言葉。

(奥にて端戸を叩く音)

あれ、又もおとなふ物音。我夫よ、閨衣を纏ひたまへ、ふと呼び出だされん折に、夜居したりきと見られぬために。

▲「閨衣」今の dressing-gown と云ふものゝこと、俗にいふ寢衣の事にはあらず、晝のまゝの正服を着し居らば徹夜したりきと知らるべければ、遽かに閨より起きいづる時に上に被ふる「閨衣」を着用してあるべしとなり。

嗚、そのやうに我れを忘れて、いと力無げに思ひ沈みて在するなよ。

▲poorly とは力無げに、又はみすぼらしくなどの意なり

マクベス 爲し、業を忘れねばこそ我れを忘るゝに優す術なし。

此の段異論のあるところなり、或は脱文あるにや。クラレンドン版の釋によれば、是れマクベスが「我れを忘るゝな」といふ夫人の非難に答へて「我れを忘るな」とは我

が爲し、悪業を記憶せよとの意か、我が爲し、悪事を忘れずば進んで善後の策を講ぜざるべからざるが、然かせんには殆ど無自覺の有様とならざれば叶ひがたし、即ち、我れを忘るゝが最上の方法なるべしといへるなりとて「To know my deed of?」「I were best not know myself.」と割きて讀めと教へたり。他の解釋も大同小異なり、予はこゝに意を酌みて本文のごとく譯しつ。すなはち、爲し、業を忘れねばこそ我れを忘れんとこそ思へ、心の鬼にかく責めらるゝ今の身は我れを忘るゝに優す術なし」となり。

(奥にて端戸を叩く音)

起セダンカンを、打叩きて、あはれ汝が力を以て能く彼れを起すを得ば！

(一同退場)

SCENE III.——The same.

Knocking within. Enter a porter.

第三場 同前

奥にて端戸を叩く音 門衛登場

此の段門衛の白は悉く鄙俗なる滑稽語呂、口合より成れるもの多く、殆ど譯すべからず。獨逸のシルレルが譯したる『マクベス』には此の段を改めて優美嫺雅なる一節となせり。蓋し此の莊嚴なる悲劇の中にかゝる陋俗の一節あるを相稱はずと思惟したればなるべし。このことに就きては例の異論むづかしく、或は門衛に關する此の一節は後人の機入にしてシェークスピアの筆にあらざると論じたるもあり、うるさければ今は總てこれを擧げず。解釋を主とする本文を意譯にせんも如何なれば滑稽の意を失ふこと不本意なれど、本文は成るべく原義をそのまゝに譯す、廻りくどき重々しき談話と見ゆるは譯文の所爲と知るべし。

Porter. Here's a knocking indeed! If a man were porter of hell-gate, he should have old turning the key:—[Knocking.] Knock, knock, knock. Who's there i' the name of Beelzebub?—Here's a farmer, that hanged himself on the expectation of plenty: come in, time: have napkins enough about you, here

シェークスピアの劇詩

you'll sweat for't.' [Knocking.] Knock, knock. Who's there, i' the other devil's name?—Faith, here's an equivocator, that could swear in both the scales against either scale; who committed treason enough for God's sake, yet could not equivocate to heaven: O! come in, equivocator. [Knocking.] Knock, knock, knock. Who's there?—Faith, here's an English tailor come hither, for stealing out of a French hose: 'come in, tailor; here you may roast your goose. [Knocking.] Knock, knock. Never at quiet! What are you?—But this place is too cold for hell. I'll devil-porter it no further. I had thought to have let in some of all professions, that go the primrose way to the everlasting bonfire. [Knocking.] Anon, anon! I pray you, remember the porter.

[Opens the gate.]

門衛 やれほんしきに叩きをるわえ。地獄の門番であらうものなら、嘸此節は門鍵の忙しうことであらう。

▲「ほんしき、indeed」の直譯滅法に又はあそろしくなどの意。▲「地獄の門番」云々、

これは嘲世刺俗の語なり、當今は惡事を行ふもの多きゆゑ天堂に昇るものは尠く地獄に墮つるものは多かるべし、此の故に地獄の門番となりてあらば定めし門の開閉に多忙ならんとなり。我が身分に引きくらべて地獄の門番を想ひやる、總て酒に酔ひたる介と知るべし。

(奥にて叩く音) 叩いたり、去つかりと叩いたり。

マクダフとレンノックスとが南口の端戸を頻に叩けど酔ひじれたる門衛は容易に之れに應ぜんともせず、管をまく鉢。

やい其處へ來たは何奴だ。ピエルゼポッパさまのお尋ねだぞ。

こはマクダフ等に問ふにはあらず、おのが想像の亡者に向ひて言ふなり、即ち地獄の門番に成りたる了簡にて、地獄に墮ち來れる亡者に問ふ思入。▲「ピエルゼポッパ」とは昔しフィリスチン人が崇拜せし惡魔の名。

はてな農夫だな。豊年らしいのに力を落してフランコ往生をした奴か。よい時に來さした。手拭の準備はよしか、今に油汗がずんと出るぞよ。

▲「豊年らしいのに」云々、これは當時の事實に原づけるならんといふ説あり、穀物の

價あがるべきを見込みて夥しき買占めをなし置ける農夫が其の年の豊年なるべきを見て落膽し自殺せし例ありとか。▲「油汗」云々、所謂焦熱地獄の呵責にあふ準備せよとの意。

(奥にて叩く音) 叩いたり〜。そこへ来たは誰だ。こんどは外の夜叉さまのお尋ねだ。

▲「外の夜叉さま」ピエルゼホップの外の夜叉といふ意。Halesの説によれば Belialといふ悪魔を指していへるならんとのことなれど、如何にや、こゝは只急に外の夜叉の名を思ひいだしかねての出鱈目なるべし。

いかさま汝は兩天秤の二枚舌で眞赤な空誓文をしくさつた奴だな。神さまのお爲ごかしにさん〜の曲事した重寶な二枚舌も、天へゆく用にはたゝなんだかの。さゝはいつたり、はいつたり。

▲「二枚舌」云々、此の段ヂェシュイト教徒に對しての諷刺なるべしといふ解を正確とす。ヂェシュイトはもと耶蘇協會々員の義にして、會は一千五百四十一年ロイヨラの創立に係る。此の派は正教會よりは邪宗を以て目せられたりき、或は二枚舌主

義の開祖とも稱せらる。兩意語を用ひて首鼠兩端の曖昧なる誓約などを主とするを刺れる也。▲「天へ往く用」云々、人間をあざむきし此の教徒の兩意語が遂に天帝をあざむき得ずして墮獄せるを刺れるなるべし、多少當時の事實に因縁したる場當りの白と見るべし。

(奥にて叩く音) 叩いたり〜、ずんと叩いたり。そこへ来たは誰だ。よう英吉利の裁縫師だ、佛蘭西がたの細袴の寸を盗んでそれで遂々墮ちて来たな。大將、はいつたり〜、爰は火熨斗をあぶるには恰好場所だ。

裁縫師が仕立物の寸を盗みて自家の利得とする悪弊は諷刺家の屢々材料とする所、佛蘭西の袴にも仕立かた色々あるべしと雖も、こゝはいと細き袴をいふならん、いと細き故にその中の切れを盗むこと最も難かるべき筈なり、志かるにそれをさへ盗み得たる竊盜巧者の裁縫師なればこそ地獄に墮ちたれといふ意か。▲「爰は火熨斗」云々、焦熱地獄にて汝が火のしをあぶるべしといふ滑稽。

(奥にて叩く音) 叩いたり〜、とんと静にして居をらぬ。やい手前は何だ。これも前と同じく架空の墮獄者に問ひかけたる詞。

志かしましてよ、地獄にしてはあんまり寒いわえ、地獄の門番はもう廢すべし。
 曉の風の寒さに酒の酔少し醒めかゝりたる介。

恒例の花道傳ひに消えずの焚火へやつてくるいろくの商人や職人實は
 幾らか通さずばなるまいと思つてゐただ。

▲「花道傳ひ」云々、娑婆の生活を謂ふ。▲「消えずの焚火」地獄の焚火をいふ、火葬の焚
 火の一時なるに比べて地獄の火を不滅といふなり。▲「primrose」とは蓮馨花のこ
 と、現在の樂欲界を蓮馨花路といひたる例「ハムレット」にも見えたり。

(奥にて叩く音) ハイ〜只今〜。どうぞ門番を忘れさつしやるなよ。
 お心づけを忘れさつしやるな、お祝儀を下さいといふ意。

(門の戸をひらく)

Enter Macduff and Lennox.

Macd. Was it so late, friend, are you went to bed,

That you do lie so late?

Port. Faith, sir, we were carousing till the second cock.

Macd. I believe, drink gave thee the lie last night.

Port. That it did, sir, i' the very throat o' me: but I requited him for his
 lie; and, I think, being too strong for him, though he took up my legs sometime,
 yet I made a shift to cast him.

Macd. Is thy master stirring?

Macduff 并にレンノックス登場

爺よ、かやうに遅くまで寝てゐるは餘程夜ふけてから寐たと見ゆ
 るな。

原文には「友よ」とあり、便宜のために「爺よ」と譯す。

門衛 はい〜、さやうでござりまする大盃で二番雞が鳴きますまで下さり
 ましてござりまする。

Macduff さてはその酒めが昨夜其方を平伏したのぢやな。

此れより以下門衛の答までは駄洒落なり、例の譯すべからざるものなれど語義の
 解釋までに譯し置くべし。▲原文に gave thee the lie とあるは「虚言者め」というた

なの義にして、武士が喧嘩を吹きかける時の詞をいうたなといふ意味、簡略にいへば、其方に酒が挑みしよなといふ義。全文の原意は、さては昨夜其方は酒と組打いたしたなとなり、本文に「平伏した」と用ひしは前の「白の動詞なる」に（横臥）に應ずべき口合なるを知らせんとての戯れなり。「組打いたしたな」といふかた原義に近し。

門衛 てござりまするわい、まかも此の喉んとことをど突きをりましたを、まんと返報してくれました。彼奴め到底敵はぬと思つたか、時々脚をすくはうと志をりましたを、やつとこさと投出してくれました。

此の段つまらぬ駄洒落なり。▲「喉んとこ」云々は前の「gave thee the lie」に應ずべき洒落なり。直譯をもていはんに「喉に於て虚言を人に與ふ」といふことは最も甚しき侮辱を加ふるといふ意なり、門衛は此の意味と酒の喉に入りし事實とを打混じて口合をいへるなり。▲時々脚を「云々は酒のために足元のよろめきしとをいふ。▲「投出して」云々とは「嘔吐し盡しぬ」といふ義、版によりては此の駄洒落だけは悉皆除きたるものあり、これらは實にあらざるもがなの白なり、向う正面の一時の笑を買はんために挿入せしものなるべし。

マクダフ さて城主にはもはや起出てたまひつるか。

Enter Macbeth.

Our knocking has awaked him, here he comes.

Len. Good-morrow, noble sir.

Macb. Good morrow, both.

Macb. Is the king stirring, worthy thane?

Macb. Not yet.

Macb. He did command me to call timely on him;

I have almost slipped the hour.

Macb. I'll bring you to him.

Macb. I know this is a joyful trouble to you;

But yet 'tis one.

Macb. The labour we delight in physics pain.

That is the door.

マクダフの劇詩

Macd. I'll make so bold to call,
For 'tis my limited service.

[*Exit.*]

Len. Goes the king hence to-day?

Macd.

He does:—he did appoint so.

Len. The night has been unruly. Where we lay,

Our chimneys were blown down, and, as they say,

Lamentings heard i' the air, strange screams of death,

And prophesying with accents terrible

Of dire combustion and confused events

New hatched to the woeful time. The obscure bird,

Clamoured the livelong night: some say, the earth

Was feverous, and did shake.

Macd.

'Twas a rough night

Len. My young remembrance cannot parallel

A fellow to it.

Re-enter Macduff.

Macd. O horror, horror, horror! Tongue nor heart

Cannot conceive nor name thee!

Macd., Len.

What's the matter?

Macd. Confusion now hath made his master-piece!

Most sacrilegious murder has broke ope

The Lord's anointed temple, and stole thence

The life o' the building.

Macd.

What is 't you say? the life?

Len. Mean you his majesty?

Macd. Approach the chamber, and destroy your sight

With a new Gorgon. Do not bid me speak:

See, and then speak yourselves.

[Exeunt Macbeth and Lennox.]

マクベス登場

われくの音なひに呼起されてか彼の人の参られて候ふ。

レンノックス おはやう候ふ。

原文は「幸多き朝を君の爲に祈る、尊き君よ」といふ義。

マクベス おはやう候ふ。

マクダフ 陛下にはもはやお目ごめにて候ふや。

原文には「候爵、我君には起き出でさせたまひつるや」とあり。

マクダフ いまだし。

マクダフ 陛下には時刻後れぬうちに伺候せよとの勅諭なりしに、ほとく其

の期をば外し申しぬ。

マクベス さざらば御寢所へ案内申さん。

マクダフ かゝる御勤勞は貴下の甘んじて勤めさせらるゝ所にて候はんが、

御苦勞たるには相違無し。

御案内御苦勞にぞんじ申す。

マクベス いやく、楽しき勞力は苦痛を癒し申す也。これぞ即ち御寢所口。

みづから甘んじてする骨折は其の勞たるを覺えず。▲physiosは動詞。

マクダフ 憚りをばかへり見ず、いでや推參つかまつらん、兼て仰せつけられ

し役目なれば。

(退場)

▲limitedは「特に定められたる」といふ程の義。

レンノックス 陛下にはいよく今日御發程あらせられ候ふや。

マクベス いかにも。まか御約定あらせられたり。

レンノックス さても昨夜は騒々しいことにてありたり、我々どもが打臥せしあたりにては煙突が吹き倒され、又噂によれば哭きあめく聲々、空中に聞こえ、或は又斷末魔の怪しき叫び聲、或は又機にあひて生れいでたる種々の怖ろしき凶事騒動を知らせ貌なる物凄き聲々、かてゝ加へて彼のまがくしき夜の鳥が夜明かしに鳴き叫びて大地も瘡にかゝりしやうに、なえ震ひきと人の噂。

▲「夜の鳥」鼻をいふ凶事の前兆なり。

マクベス げにも騒しき晩にてありたり。

レンノックス それがしなどが若輩の経験には思ひ出だすべき對例なし。

マクダフ 登場

マクダフ 怖ろしやくく。舌にも心にも思ふこと能はず、名づくること能はず。

原文にては「恐怖」を活喩して人に擬したり。

マクベス、レンノックス や、何事ぞ。

マクダフ 今こそ破壊が絶技をなしたれ。天罰知らぬ殘賊が、かみのみくら

を切破りて御玉の緒をば盗み去りたり。

此の白原文にてもや、誇張に過ぎて妙ならず、或はシェイクスピアの筆にあらじと疑ふ者さへあり。▲「かみのみくら」原文には「上帝の天祐によりて神聖にせられたる堂宇」とありて、一方の意義は字面の如く神聖なる堂宇へ賊の入りたることをきかせ、他方にはテムブルに身軀の義あるをもてダンカン王の身軀といふことをき

かせ、天祐を受けさせられたる陛下の御身といふ義を見せたり、即ち弑逆の賊をも神堂を冒瀆する盜賊に喩へたるなり。譯文は間に合せに「かみのみくら」といふ言葉をもて神と上とをきかせ、みくらに身と御庫とをきかせんとしたり。

マクベス なに、御玉の緒とや。

レンノックス それは我が陛下の御上なるか。

マクダフ

御寢所に近よりて新ゴーンの面を見られよ、ふた目と見ること

叶ふまじきぞ。それがしに物語れとなおほせられそ、見て後みづから御語り候へ。

▲「ゴーン」は古詩人の作中に見えたる醜惡無類の魔鬼、人一たび其の面を見れば恐怖のあまり石に化すといひ傳へたり。

(マクベス并にレンノックス退場)

Awake! awake!

Ring the alarm-bell.——Murder and treason!

Banquo and Donalbain! Malcolm! awake!

シェイクスピアの劇詩

Shake off this downy sleep, death's counterfeit,

And look on death itself! up, up, and see

The great doom's image! — Malcolm! Banquo!

As from your graves rise up, and walk sprites,

To countenance this horror!

[Bell rings.]

やあゝ人々起き出で候へ。非常鐘を鳴らし候へ。弑逆あり。パンコ
ーは、ドナルベインは在さぬか。マルコムの宮はいづこにぞ。起き出でたま
へ。疾く死の假面たる柔毛の如きあたゝかき安眠をば振落して、まこと
の死の相を見よや人々。

原文には「鳥の柔毛のやうに柔かき眠を拂ひ落せ、その死の肖像を「云々とあり、拂ひ
落せ」とは柔毛といふ詞より出でたるなり。

起きよ。見よ大審判日の面影を。

宇宙滅絶の日の面影とも思はるゝ此の大珍事を疾く見よとなり。

マルコムよ、パンコーよ、墓のうちより起き出でたらん亡靈のやうにさまよひ

来て、此の怖ろしさに相應せよ。

君等起きて来たれば幽霊のやうにさまよひ歩め、尋常の舉動をもて出で来たり
なば此の怖ろしき場合に相かなはざるべしとなり。激昂のあまりに言ひいてた
る語、原文にてすら誇張に流れたり。

スズ鐘を。

(警鐘鳴る)

Enter Lady Macbeth.

Lady M. What's the business,

That such a hideous trumpet calls to parley

The sleepers of the house? speak, speak!

Macd.

O gentle lady,

'Tis not for you to hear what I can speak:

The repetition, in a woman's ear

Would murder as it fell.

Enter Banquo.

ホルンズカヤの響

O Banquo, Banquo,

Our royal master's murdered!

Lady M.

Woe, alas!

What! in our house?

Ban.

Too cruel, anywhere.

Dear Duff, I pry thee, contradict thyself,

And say, it is not so.

マクベス夫人登場

マクベス夫人 何事ぞ、すさまじき非常の喇叭が家内の眠を驚かして陣頭會議に集ふるは。疾うく仔細を語りたまへ。

軍陣にて陣頭會議ある時には喇叭を吹き鳴らして兵士を呼集むるなり。非常鐘を喇叭と見做したる白なり。

マクダフ おゝ夫人か、それがしが語らんずることは孱弱き御身などが得聞きたまふべき事にあらず、女性は只聞きてだにも忽ち命を失ふべし。

バンコー登場

おゝ、バンコーぬし、バンコーぬし、大君弑せられたまひたり。

マクベス夫人 やゝ、なに、我が家のうちにてとか。

バンコー いづこにもせよあまりの殘虐、ダッフぬし、マクダッフぬし、よもそはまことにては候ふまじ。喃ダッフぬし、前の言をとりけして虚言なりきと仰せられ候へかし。

▲「ダッフ」とはマクダッフの略、親密なる間柄を表する畧稱なり、猶「豊後守どの」といは他人行儀なるべきを「豊後どの」と畧していは一段親交のなからひを表するがごとし。バンコー悲み驚きて此の凶報の夢などにてあれかしと願ひ、今の言葉を取消してよと哀願するなり、至極の人情を寫したるものなれども國俗には異様に感ぜらるべし。

Re-enter Macbeth and Lennox.

Macb. Had I but died an hour before this chance,

I have lived a bless'd time: for, from this instant,

シェークスピアの劇詩

There's nothing serious in mortality :
 All is but toys ; renown and grace is dead ;
 The wine of life is drawn, and the mere lees
 Is left this vault to brag of.

Enter Malcolm and Donalbain.

Don. What is amiss ?

Mal.

You are, and do not know't :

The spring, the head, the fountain of your blood
 Is stopp'd ; the very source of it is stopp'd.

Mal. Your royal father's murdered.

Mal.

O, by whom ?

Len. Those of this chamber, as it seemed, had don't :

Their hands and faces were all badged with blood ;

So were their daggers, which, unwiped we found upon their pillows :

They stared, and were distracted ; no man's life
 Was to be trusted with them.

Mal. O, yet I do repent me of my fury,
 That I did like them.

Mal.

Wherefore did you so ?

Mal. Who can be wise, amazed, temperate and furious,
 Loyal and neutral, in a moment ? No man.

The expedition of my violent love
 Outrun the pauser, reason.—Here lay Duncan,
 His silver skin laced with his golden blood ;
 And his gashed stabs looked like a breach in nature
 For ruin's wasteful entrance : there, the murderers,
 Steeped in the colours of their trade, their Daggers
 Unmannerly breeched with gore. Who could refrain,

That had a heart to love, and in that heart.
 Courage to make's love known?

Lady M.

Help me hence, ho!

Macd. Look to the lady.

Mal. [*Aside to Don.*] Why do we hold our tongues,
 That most may certain this argument for ours?

Don. [*Aside to Mal.*] What should be spoken here, where our fate,

Hid in an anger-hole, may rush, and seize us?

Let's away;

Our tears are not yet brewed.

Mal. [*Aside to Don.*] Nor our strong sorrow yet
 Upon the foot of motion.

Ban.

Look to the lady:—

[*Lady Macbeth is carried out.*]

And when we have our naked frailties hid,
 That suffer in exposure, let us meet,
 And question this most bloody piece of work,
 To know it further. Fears and scruples shake us:
 In the great hand of God I stand; and, thence,
 Against the undivulged pretence I fight
 Of treasonous malice.

Macd.

And so do I.

All.

So all.

Macd. Let's briefly put on manly readiness,
 And meet i' the hall together.

All.

Well contented.

[*Exeunt all but Malcolm and Donalbain.*]

マクドナルド、マクドナルド、マクドナルド、マクドナルドと共に登場

マクドナルドの独白

ておはします、打ひらいたる御、疵口は「破壊」が強ひて突き入るべきおのづからなる破間に似たり。此方を見れば賊臣が其の悪業の色に浸り、また其の劔はものすごくも凝り做す血汐の裳を着けたり、かりにも忠義の心ありて、そを示さんの勇ある者、誰れかは雲時也得忍ぶべき。

マクベス夫人 嗚々、あなたへ〜。

マクベスが白をきくうちに恐怖して叫ぶ思入なり。評論いろ〜あり。通常の説は詐りて恐怖を粧ひたるなりと釋す、或は眞に怖れたるなりといふ、こは夫人の性質の解釋によることなり。

マクダフ それ夫人を介抱あれ。

近侍に向ひての白なり、此の騒動のうちにマルコムは「ナルベイン」と耳語す。

マルコム (「ナルベイン」に向ひて傍白) など予と御身とは口をつぐみてあるやらん、そも此の事は我輩こそ尤も議すべき名分あるに。

▲argumentは「事柄」といふ程のとなり。「議すべき」云々と譯する、未だ穩かならざれど名分といふ字に折合はせんとて假にかくはうつしつ。

「ナルベイン」 (マルコムに傍白) 爰にて何條事の申さるべき、隠伏める運命が何時、錐穴のうちより突きいで我々二人を捉らんも知れねば。いざ彼方へ退りはべらん……涙はいまだ醸されず。

▲「錐穴」とは卜者が用ふるもの、此の穴のうちより出づる兆によりて人の未來の運を占ひしなり。本文は左右の臣等が心中の圖りがたくして善惡の運命の定めがたきを此れに喩ふ。▲退りはべらんの後、律わざと缺けたり、かゝる場合はなべて思入のあるところと知るべし。

マルコム (「ナルベイン」に傍白) またいと強き悲みもいまだ見れん運びにいたらず。

「運動の時に於てあらず」とある原文は、所詮は譯文の義なり。

バンコー 夫人に氣をつけめされ。

(マクベス夫人將てゆかる)

薄着は病を招かんの虞あり、被服をあらためて後また共に會合して、此の怖ろしき事件につきて再應の調べをなさん。恐と疑惑とに今は心の底定まりが

たし。

一つには自家の身の上を危み恐れ、二つにはあらぬ人に罪を被せてはすまぬと思ふ狐疑猶豫の念ありとて互に心の中搖蕩するなり。

餘人は知らずそれがしはいみじき神の御手みてを力となして、如何なる秘密のたくみのありとも、奸邪と闘ひ候はんずる所存なり。

マクダフ それがしとても。

皆々 我れくとも。

マクマス 先づ速かに被服をあらため、更に大廣間にて會合いたし候はん。

▲manly readiness とは前に naked frailties (裸軀の脆弱)といへるに對して「丈夫然たる身仕度」といへるなり。readiness は身仕度の義。

皆々 心得申して候よ。

(マールコムとマナルベインとの外皆々退場)

Mal. What will you do? Let's not consort with them:

To show an unfelt sorrow is an office

Which the false man does easy. I'll to England.

Don. To Ireland, I: our separated fortune

Shall keep us both the safer; when we are,

There's daggers in men's smiles; the near in blood

The nearer bloody.

Mal. This murderous shaft that's shot

Hath not yet lighted; and our safest way

Is to avoid the aim: therefore, to horse:

And let us not be dainty of leave-taking,

But shift away. There's warrant in that theft

Which steals itself, when there's no mercy left.

[Exeunt.]

マールコム 御身は何としたまはんずるぞ。あの輩こゝらとは事を共になすべからず、心に感ぜぬ悲みをも誠まことなき者はたやすく見す、予は英吉利へ逃れはべらん。

マクダフの劇詩

ドナルド・メイン 予はまた愛蘭士へ。未來の運を分かつ時は双方共に安全なるべし、今我々が在る處には笑の中にも劍あり、我れに血統の近きほど、血汐に縁ある逆意の虞。

血統の近きものほど逆意を企て、我々を失はんと圖るべしといふ義。 ▲ bloody は殘忍といふ程の義。

マルコム 射放たれたる賊箭はまだといまらん處を知らず、覘を避くるこそ安全なれ。されば疾く馬に。告別せんとてたゆたひたまふな、外に助からん望なくば、身を盗むともひがごとあらじ。人目を盗みて速うく。

(退場)

SCENE IV.—Without the Castle.

Enter Ross and an old Man.

第四場 マクベスの居城外

ロスと一老翁登場

Old M. Threescore and ten I can remember well;

Within the volume of which time I have seen

Hours dreadful and things strange, but this sore night

Hath trifled former knowings.

Ross.

Ah, good father,

Thou seest, the heavens, as troubled with man's act,

Threaten his bloody stage: by the clock, 'tis day,

And yet dark night strangles the travelling lamp:

Is't night's predominance, or the day's shame,

That darkness does the face of the earth entomb,

When living light should kiss it?

Old M.

'Tis unnatural,

Even like the deed that's done. On Tuesday last,

A falcon, towering in her pride of place,

マクベスの劇誌

Was by a mousing owl hawked at and killed.

Ross. And Duncan's horses—a thing most strange and certain—

Beauteous and swift, the minions of their race,

Turned wild in nature, broke their stalls, flung out,

Contending 'gainst obedience, as they would make

War with mankind.

Old M.

'Tis said, they ate each other.

Ross.

They did so, to the amazement of mine eyes,

That looked upon't.—Here comes the good Macduff.

老翁 七十年間の事蹟を老僕よく記憶なし其の浩漭なる巻中にて、ちそろしき時節又不思議なる事柄をもあまた、び見つれども、今宵の怖ろしさに比ぶれば前に知れるは取るにしも足らず候ふ。

ロッセ あゝ翁あれを見候へ、上天も亦人間のかゝる惨劇を慨みてか、此の淺ましき舞臺を威嚇す。

當時の劇場の舞臺には天井あり、之れを「天」と名づけき、悲劇を演ずる折には更に黒き布をもて掩ひきと傳ふ。本文は天色朦朧暗澹として今にもおちかゝらんとするが如きを劇に思ひよせていへるなり。

時器を見れば白日なれども夜の闇空の燈を覆へり。

▲「空の燈」原文には「巡行する燈」とあり、日輪のと也。或は此の travelling を travelling の誤として struggling と解したるもあり、さすれば「明滅の間に自争せる日輪」とも釋すべきにや。▲ strangles は縊殺すといふ義「覆へり」と訓じては意義淺々し。

さるにてもこは夜がひとり威勢を得たるによるか、そも又白日が耻ぢて出てぬか、活ける光の來べき時に、地の面の間に掩はれ墓穴の如く見らるゝは。

これら天變に關する白はすべてホリンシッドの蘇史に據りて作者が挿入したるなり。▲ predominate は天文學の科語なり。

老翁 げにやこれはこのたびの大悪業にも劣らぬ不思議に候ふよ。既に去ぬる火曜日には、高く舞へる一羽の鷹が地鼠捉る鼻の爪にかゝり死て候ふ。

ロッセ またダンカンの御乗馬がこは極めて奇怪にして、まかも確なる事實

なるが(本来)壯麗なる逸足にて貴顯達の最愛なりしが、如何にしけん暴に荒れ
 たち、厥を破りて躍りいで、人と戦はんとしたらんやうに制止すれども聞かば
 こそ、怒りに怒りて猛り狂ひ……

老翁 馬ども互ひに食あひぬと、人の噂にうけたまはり候ひしが……

ロウズ いはるゝ如く目のあたり、其のありさまを見たりし驚歎。あゝあれへ
 見ゆるはマクダフ。

Enter Macduff.

How goes the world, sir, now?

Why, see you not?

Macd. Is't known who did this more than bloody deed?

Macd. Those that Macbeth hath slain.

Alas, the day!

What good could they pretend?

Macd.

They were suborned:

Malcolm and Donalbain, the king's two sons,
 Are stolen away and fled; which puts upon them
 Suspicion of the deed.

Ross. 'Gainst nature still!

Thriftless ambition, that wilt ravin up

Thine own life's means!—Then 'tis most like

The sovereignty will fall upon Macbeth.

Macd. He is already named, and gone to Scone

To be invested.

Ross. Where's Duncan's body?

Macd. Carried to Colmekill,

The sacred storehouse of his predecessors,

And guardian of their bones.

Ross.

Will you to Scone?

Macl. No, cousin : I'll to Fife.

Ross.

Well, I will thither.

Macl. Well.—May you see things well done there :—adieu !—

Lest our old robes sit easier than our new !

Ross. Farewell, father.

Old M. God's benison go with you ; and with those

That would make good of bad, and friends of foes ! *[Exeunt.]*

マクダフ登場

世情はいかさまに候ふぞ。

マクダフ いまだ察したまはぬよな。

ロッシ 大悪人は何者にて候ひしぞ。

マクダフ マクベスにうたれし輩こそ。

ロッシ あゝ是非もなや。さるにても彼奴等はそも何の爲にかゝる逆意をば企てしか。

マクダフ 正しく主動者のありしならん、何故にヤマルコムの宮又ドナルベインの宮にはひそかに落ちゆかせたまひしゆゑ、彼の大逆の疑ひは御兩かたの身にかゝれり。

ロッシ これはた奇怪なる珍事にて候ふ。

前文に見えたる種々の妖兆に對して「これとてもまた」といふ子にして父を殺すことの不倫なるをいふ。

あくこと知らぬ大慾心がおのが命綱をばみづから貪り食はんとは。

▲「命綱」猶「幸福の泉源」といふがごとし、父王を指す。

さあらば恐らくは國家の主權はマクベスぬしの手に落つべし。

マクダフ 彼の人既に指名せられ、即位の式を行はんとてスコンの地へまゐられ候ふ。

ロッシ して、ダンカンの御骸は。

マクダフ コルムキルへ身をきゆきて候ふ、彼處は即ち代々の御廟、諸先王の御骨の守衛所。

ロッス 和君にはスコンの地へ参られ候ふか。

マクダフ いや、それがしはこれより直にファイフの居城へまからん所存。

ロッス それがしは今よりスコンへ。

マクダフ まからは和君にはかしこに於て、万事滞なく成就せんまで何くれと御注意あれかし。舊き衣の被ごゝろの、或は新衣にまさるも知れねば先づそれまでは此のまゝにて。

「國君替りて吾人の身の上に如何なる變動の起こらんも知れねば、それがしは居城に立歸りて様子を窺はん、君はかしこに参りて模様注意あるべし」といふ義。

ロッス 翁よ、さらばなるぞ。

老翁 みけしきうるはしくおはせ、悪をも善とし、敵をも友とせん人々の頭に

神のおほみ惠常永に宿れ。

(一同退場)

此の最後の句は禱の語、告別の禮辭なり。

英詩文評釋(完)

英詩文評釋附錄

『ハムレット』解題

『ハムレット』はシェイクスピアが天才の成熟期に成れる四大悲劇の一なり、即ち作家シェイクスピアが世路の幾辛酸を嘗め、閱歴世故に富み、人生に對する感想の漸く深刻となれる時の筆なり。

此の作は「デンマークの太子ハムレットの復讐」と題せられて千六百三年はじめて世に公にせられ、さて其の翌年に至りて、殆ど新に作したるが如くに訂正増補せりと添書せられて第二版出でたり。此の兩版の間にはいちじるき相違あるが故に、古來種々の説あり。コリヤー、ホワイト、其他二三家は説をなして曰はく、第一クォート版は、蓋し劇場の速記もしくは舞臺の白を傍より書き取りたるものにて正當の臺帳を寫せるにはあらむと見ゆれど、第二のクォート版は之れと異なり、明かに臺帳より直寫せるものなれば、信憑するに足る、云々と。然れども右兩版の間に

は甚しき差違あり、到底これを速記者の疎漏若しくは誤謬にのみ歸すること能はざるものあり、第一句章調格の上に差違あるのみならず、筋立及び主意の上にも甚しき相違あり。例へば第二版にては、オフィリアの出場を第一段第三場となし、第一版にては、第二段第二場となせるが如き、又第二版にてはボロニーヤス、レーナルドと呼び倣せる二人物の名の、第一版にてはコロンピヤス、モンタノールと名づけられたるが如き、又はハムレットの狂氣の模様、王妃の弑逆の罪に關係無げなる様の第一版よりも一際いちじるく描きいだされたるが如き、其の重なる差違なり。故に此の説は到底立ちがたかるべし。さてまた翻りてカルデコット、ナイト、ダイス等の説を検するに、彼等は謂へらく、第一クォーター版はたとへ若干の脱漏ありとするも、正當なる臺帳より直寫せる者なれば、原意を傳ふる點においては第二クォーター版に優れり、第二版はそれを脩補せるに過ぎず。而して所謂原臺帳はシェイクスピアが初期の作にして出版當時に作せられしにはあらず、云々と。ナイト等は固く此の説を主張せり。但し此の説もまた未だ悉く信じがたし。何となれば千六百二年以前にシェイクスピアが此の劇に筆を染めし證據あらざれば也。且つや沙翁の崇拜

家フランシス、ミイヤが千五百九十八年に出だし、著『パラチス、ダニヤ』の中に、沙翁が作を數へあげたる條あれど、其の中に、『ハムレット』の書名は見えず。之れに因りて考ふれば、『ハムレット』を沙翁が壯時の作とするはいかゞあらん、さて又クラーク、ライト等は謂へらく、ハムレットの事蹟に關する劇はシェイクスピア以前にあり。シェイクスピアが千六百三年に出版せし第一クォーター版には、件の舊劇の脚色の混入したる跡顯然たり。案ずるにシェイクスピアは千六百二年ごろ、他の舊劇を改修添刪せると同じ手續によりて、此の舊劇をも潤刪しはじめしならんか、千六百三年にあらはれし第一版は件の舊劇の不完全に修正せられたりしものなるべし、而して其の修正の全く了りて新に出版せられたるは千六百四年の第二クォーター版ならん。吾人はこの版を得て、はじめて完全なる『ハムレット』を得たるなり、云々と。又曰はく、要するに千六百三年に出でし第一版を精査せんものは、其の幾分は疑ひもなくシェイクスピアが自筆なると共に、然らざる部分はた多く混じたるを發見すべし、第一クォーター版の不完全なるは、シェイクスピアが件の古劇に筆を着けしこと只一度に過ぎざるが故なりと。この説は前の説に比して稍々妥當なるに近し、さ

れど、要するに皆揣摩臆測の説たるを免れず。むしろ兩版ともシェイクスピアが千六百二年以後の筆に成り、而して兩版の相違のいちじるきは、作者が第二版を出版するにあたりて、第一版に多大の修正を施し、が故なりと見るかた穩當なるべし。

『ハムレット』の推重すべき好悲劇となりしは、全く沙翁が天才に因れるものから、其の大筋及び脚色は彼れが創案に成れるにあらざ、否既に存在せりし『ハムレット』劇に基きて若干の新筋立を加へたるもの外ならず。こはナッシ又はロッヂ等の言に徴するも明かなり。獨逸にも當時既にハムレットに關する劇ありて、千六百三年のころには英國の俳優來たりてこれを演じきといふ。されば此の作は作者が荒唐蕪雜なる舊劇中より其の骨を取り、肉を換へ、且つ大に醇化して一大悲劇となし、ものなりといふかた正當なり。

作家が此の劇を物せしや、其の資料を野史より摭撫せしや明かなり。當時佛人某十二世紀の末に出でしサキソ、グラマチコスの『ロストリヤ、ダニカ』中よりハムレットに關する物語を譯出せしが、後幾ほどもなく英譯せられ、『ハムレット物語』と題して

出版せられき。沙翁は原書によりしか、はた英譯によりしかは明かならねど、是等史事實を參考せしはたしか也。劇中の重なる事柄は大抵史に傳ふる所と符合す。叔父が父を害するの件、叔父と母との結婚、ハムレットの伴狂、ポロニヤスの殺害、ハムレットと母との會見、ハムレットが英國に渡り再び歸りて復讐することなどは、皆史の事實によれる也。されど史にはハムレットが復仇の大義務を果たし、後、デンマークの王となりて再び英國に行き、かしこにて二婦を娶り、後つひに戦死せるよしを記したれど、劇中には此の事無し。

此の悲劇は古來種々の評釋論辯を経たり、此等を集むれば優に一大文庫を成すに足る。こゝに此等評論の一斑をだに紹介せん、餘地無ければ、只ハムレットが煩悶の因縁のみを左に少しく解説せん。

デンマークの太子ハムレットは、久しく獨のキッテンベルロの大學にありて、専ら理想界を家となせりき。然るに父王の時ならぬ計に接して、倉皇本國に急ぎ歸りて其の痛悼の涙未だ殆ど乾かざるに、母王妃は太子が日ごろ猜疑したる不徳の叔父クロイヂヤスと再婚せり、太子いよ／＼平かなる能はず。加ふるに、間もなく父の

横死は叔父の手に出でたることを聞知す、こゝに至りて太子が心は無限の悲哀と憤慨とを以て充たされたり。平靜安樂なる學窓の生活と此の現實界とは何等甚しき徑庭ぞ。未だ曾て世路の險艱を知らざりしハムレットにして此の至難の境遇の渦中に置かれたり。其の親愛する母妃にして尙果たしてかくの如きかと、彼れは轉々人心の頼むべからざるを感じたり。彼れが純潔なる理想の鏡に照らし來たれば、舉朝悉くこれ偽善のみ、虚飾のみ、阿諛のみ、腐敗のみ、懷疑厭世の念、豈生ぜざるを得んや。彼れは心友ホレーシヨを除くの外は皆腐敗せりと信じ、無邪氣可憐なるオフィリヤをすら己れに背ける者として疑へり。平等界、理想界の淨樂に耽りし抒情詩人ともいふべき多感にして聰慧なるハムレット、一朝此の坎坷凸凹せる差別界に出づ、見るもの、聞くもの一として、悽愴悲哀の媒たらざるはなし。疇昔の理想は悉く破碎せられ了んぬ、彼れは懷疑し、思索し、煩悶せり。此の時にあたりて、彼れをして差別の現世界を去る能はざらしめしものは、只復仇の一事あるのみ。彼れ一たび復仇の一事に思ひ到るや、奮然蹶起、自ら其の義務の重大なるを意識せざるを得ざりき。然れども其の心の沈靜するや、左眇右顧、直前して勇斷すると能は

ざりき。按ふに、ハムレットは復仇の一事に思ひ到らざる間は、爲我的也、薄志也、懷疑沈吟、世を厭ひ、人を憎み、理想破れ、確信碎け、自殺の念のみ動もすれば頭を擡げ來たらんとす、而も彼れが一片の良心は彼れをして此の差別界に於ける復仇の大義務を棄却する能はざらしめたり。彼れは叔父を殺さざる間は自らを殺す能はざりしなり。彼れは劇によりて叔父の心をためし、愈々其の罪跡の確實なるを認めながら、尙復仇を斷行する能はず、機會來たれば之れを逸し、逸してはまた之れを追ふ。此の間彼れが自意識はますます進み、自ら其の果斷の勇なきを譴むると切なり。自ら譴むるといよ／＼切にして實行ます／＼撓めり。蓋し彼れは一たび理想の破碎せられしより、宇宙人生に對する大確信、大信仰を失ひ、常不斷の懷疑思索に沈めり。蓋し差別界の活動は彼れの好まざりし所ならん、自ら前んで復仇の大任を果たすは彼れの好まざりし所ならん。然れども復仇の一事は必至の義務として運命より課せられたるを如何せん。現世に絶望せる彼れは其の baffled mind を以て尙此の重荷を擔はざるべからざるの地位に立てるを如何せん。爲我的にして感情的なる彼れは一躍差別界の羈絆を脱して平等界に逸せんとし、復仇の大義

務は彼れを拘束してあくまで差別界に活動せしめんとす、こゝに於てか彼れは煩悶し、懊惱せり、隨うて勇邁の氣いよ／＼挫けて躊躇逡巡す。これに反して叔父クローヂヤスは、ハムレットの己れに害意あるを知り、ハムレットが誤りてポロニーヤスを殺せるを機として英國に送り、かしこにて之れを殺さんとす。されどハムレットは辛うじて其の危難をまぬがれ、且つ彼れが船中にて盜賊にあひたる一事は彼れをして機會といふものゝ存するを知らしめ、機會の背後に攝理天命の存することを知らしめ、"The readiness is all" なることを固信せしめ、彼れをして髣髴一種の確信を造らしめたり。かくてつひに大破裂の結局に至り、必死の勇を奮ひて其の大任を果たし、其の身はた同時に斃れき。

或はハムレットを以て怯と評する者あり、然れども彼れに勇なしといふは妄ならず。其の紗を隔て、ポロニーヤスを刺し殺せる、船中にて盜にあひたる時の舉動の如き、其のレーヤルチーズと格闘し、又一躍王を刺せる如き、皆彼れが勇あるを證す。然れどもこは咄嗟の勇なり、一時感激の沙汰也、靜に考へ、徐に慮りて決行するの沈勇は彼れに於て見る能はず。これ蓋し彼れが固有の癖として其の思索の、兎角平

等界に向ひ、長く彼れをして差別界に停留せしむる能はざるが故ならん。彼れは僅々一二の事實より概括して直ちに普遍通理の世界に上らんとす。これ彼れが詩人的、哲學的傾向を帶べる所にして、其の一種高尚なる氣格の人をして欽仰せしむる者あると共に、其の果斷決行の世間人たるを得ざりし所以也。要するに本劇はハムレットが理想の破碎を描けるもの、又は彼れが自我の翼に乗じて平等界に逸し去らんとする傾向と、又差別界の必至的義務を果たさんとする心との衝突、軋轢を描けるの悲劇ともいふべきか。決行せんとしては回顧し、回顧しては奮起し、無限の懊惱、無限の煩悶を寫し出だせるもの、即ちこの悲劇の精髓なり。

シェイクスピアの悲劇は、多くは煩惱劇即ち主人公が煩惱の爲に自業自得の滅亡を招くより成れるもの、たとへば、オセロが嫉妬心の奴となりて夫婦の愛情を斷絶せる、リヤ王が僞愛のために眞の愛情を棄てたる、マクベスが野心の奴となりて君臣の羈伴斷絶せる、その他『アントニーとクレオパトラ』『コリオレナス』『タイモン』等皆一面より觀れば一主煩惱を経として悲劇を織り出だせる者と見るを得べし。而して『ジュリアス、シーザア』と『ハムレット』とは、これら諸作と其の性質を異にす、即ち

この二篇は何れも其の主人公が運命の必至的義務を負ひ、之れを果たさんとして失敗せるを描きたるものに似たり。フルータスは理想に偏して實際に暗きが爲に失敗し、ハムレットは懷疑思索に過ぎて果斷決行の意志乏しきが爲に失敗す。古來、名ある批評家が此の作を褒貶したるもの、及び此の悲劇の性質を論じたるもの紛然として數を知らず、今試に最大級の語をもて評したるもの、之れを擧ぐれば概ね左の如し。

- 社會の最も暗黒なる方面を描ける作(エルチル)
- 最も研究すべき劇(ドクトル、マジン)
- 沙翁の最も歎美すべき作(ポエル子)
- 最も哲理的なる悲劇(諸家)
- 最も非戯曲的にして最も不條理なる悲劇(ドクトル、ロテリヒ、ベチザックス)
- 最も不具なる作(モリツ、ラツプ)
- 最も卑俗蹊野なる作(デルテール)
- 最も演下がたき作(ハズリット)
- 最も整然たる論議を下しがたき作(カムベル)
- 無盡藏の劇(ランツ、ホルン)

又此の作を總評したる語を擧げんに

- 思想の悲劇
- 絶望性の悲劇
- 智力の悲劇
- 理想の破壊せられたるより生じたる悲劇
- 厭世懷疑の悲劇
- 境遇の悲劇
- 日耳曼國を個人に現したる劇
- 空想の甲斐無きを示せる悲劇
- など。くはしくは機を得て更に説くべし。今は只左の『ハムレット』の斷片譯を讀まん人の爲に僅かに枝折を設くるのみ。

(網島梁川子起稿)

デンマークの太子ハムレットの悲劇

(第一段其の一より同其の四まで)

登場人名

- | | | | |
|----------|----------|---------|------------|
| デンマーク國王 | 延臣 | 武官 | ハムレットの母、王妃 |
| クローヂヤス | コオテリヤス | バアナードー | グルトルード |
| クローヂヤスの甥 | 延臣 | 下士 | ホロニヤスの女 |
| 太子ハムレット | ローゼンクラッツ | フランシスコ | オフィリヤ |
| ノルエイ王子 | 延臣 | ホロニヤス家僕 | 公卿、官女、武官、 |
| フォオチンアラス | 延臣 | レイナルドー | 下士、水夫、使者、 |
| 大臣 | 延臣 | 俳優 | 其他従者等、若干名 |
| ポロニヤス | オスリック | 若干名 | ハムレットが父王の靈 |
| ハムレットの信友 | 延臣 | 墓掘の野人 | |
| ホレーシオ | なにがし | 二名 | |
| ホロニヤスの男 | 僧官 | 船長 | |
| レーヤルチーズ | なにがし | 英國使節 | |
| 延臣 | 武官 | 數名 | |
| ブルチマンド | マーセラス | | |

舞臺——エルシノリア宮城

第一段

其の一 エルシノリア宮城前の場

正面は巍々として中空に聳えたる古風なる宮城其の前の露臺に下士フランシスコ立番してゐる、かなたに入方の月すべて眞夜中の景色、こゝへ上官バアナードー武官の扮装にて入來り、フランシスコを透し見て

バアナードー「何者ぞや

トだしぬけにいふ、勇氣を粧ふうちに少々不氣味だといふ思入あるべし、これにてフランシスコぎよとして身構へすること

フランシスコ「アイヤそこもとは何人、すみやかに名のりめされ

トきつといふ、これにてバアナードー安心の思入

バア「殿下萬歳

ト恆例の合言葉をいふ、フランシスコも安心のこなし

フラン「バアナードー、どのではムりませぬか、バア、いかにも、フラン、刻限通りよくこそ御參勤下されました、バア、只今打つたは恰ど十二時いざ退つて休息さつしやれ

ラン「忝うゑる、イヤモ殿しい寒さでムります、實は最前より氣持わるく、
別條はムらなんだか、フラン「鼠一疋ごそつきませぬ、バアム、休息さッしやれ、
ン、ハ、バアア、こりやく、若し途中にて同役マーセラスまつたホレーシオどの
に出會めさらば、こよひは兩氏も夜衛の筈ゆる急ぎ参らるゝやう傳へておくりや
れ、フラン「心得ました

ト行きかけ

フラン「や、どうやら聞こゆるわの足音

ト露臺を下る、此のうち學士ホレーシオ、武官マーセラス入來たる、フランシス

コー行きむかひて

フラン「アイヤ待ツた、何人でムるぞ

トこれにて二人立どまり

ホレーシオ「みくにの良民、マーセラス「殿下の忠僕

ト恆例の合言葉をいふ

フラン「御兩所でムりましたか、お役目御苦勞に存じます、マーセラス「そこもとにも御

苦勞にムる、シテ何人がそこもとに代はられましたな、フラン「バアナードーどので
ムる〇御苦勞に存じます

ト會釋して立去る、兩人露臺に近づくこと

マーセラス「嗚々、バアナードーどの

ト大きく呼ぶ、バアナードーぎツくりこなし

バア「ヤア何者

トいひかけて氣をかへ

バア「や、ホレーシオどのではムらぬか、ホレーシオ「まづ其のやうなものでムる

ト冷然といふ、バアナードーはまちかねたといふこなし

バア「これは、ホレーシオどの、マーセラスどのにも、よくこそ御參會下されました
ホレ「何と彼の物は、こよひもまた出ましたかな

トなぶるやうにいふ

バア「イヤまだ何も見ませなんだ、マーセラス「イヤナニ、バアナードーどの、まご、我々
が見たりし怪異をホレーシオどのには全く神經の所爲だと申され、いッかな信と

は致されませぬ、さるによつて我々も共こよひは夜もすがら張番なし、いよ／＼妖怪出現いたさば篤とまのあたり實否をたし、ホレーシオどのは學者のことゆゑ、彼の亡靈と問答あるやう、強ひて御誘引申してゐる。ホレハ、何の出でまゐりませうぞ。バア、ハテさう一概におほせられずと、まづ志ばらくお下にムツて、我々共が二晩までもまざ／＼見たりし一伍一什今一應おき、下され。ホレ、志からは志ばらく座に着きまして、バア、ナードーどのお話を承りませうか。

トよろしく皆々捨石に腰をかける、バア、ナードー思入あつて

バア、ちやうど昨夜の眞夜中すぎ、北極星から西にあたるアレあの星があつたり、いつしか次第にめぐつて参り、煌々ときらめくころ、かく申す身共とマーセラスとが張番致してまかりあると、折から撞きだす一時の鐘……

ト此のうち(我國の芝居ならば薄どころになり、前王の亡靈朦朧とあらはるゝこと、マーセラス目早く見つけ

マーセラス、シツ／＼……アレあしこへあらはれ申した。バア、おかくれありし先王殿下の其の御すがたをそのまゝに、マーセラス、ホレーシオどの、そこもとは學者のことゆ

ゑ何とか言ひかけて見て下さりませ。バア、何とホレーシオどの、先王の御姿によう似てゐるではムらぬか。

此の時まで惘然たりしホレーシオやう／＼口をひらき

ホレ、いかに……不思議ともおそろしとも身の毛もよだつ光景でゐる。バア、アレ

／＼何か言ひかけてほしさうな。マーセラス、ホレーシオどの、問答しかけて御覽なされ

トこれにてホレーシオ進みいで、亡靈の方に向ひ

ホレ、やをれ汝は何者なるぞ、かくれさせたまひし大君の其の御軍装をそのまゝに、かく眞夜中に現れ來たるは……后天、后土、返答せよ、とう／＼

ト亡靈だん／＼に退く

マーセラス、氣にさかうたか。バア、アレ／＼、次第にかなたへ立去るやうす。ホレ、またうぞ、またうぞ、返答せよ、返答々々

トどろ／＼にて亡靈消える

マーセラス、とう／＼消えてなくなり申した、返答は好まぬと相見えませすわえ。バア、ホレーシオどの、いか／＼でゐる、えらう青ざめておふるえなさる、何と神經の所爲とのみ

は申されますまい、いかゞでゐるな。ホレ、肉眼を以て見ずもあらば、神かけ争でかはかゝることを信じ得べき。マーセラス、何と先王の御姿によう似申してゐらうがな、ホレ、和殿が和殿に似たる如くに……鎧はまさしく故殿下が彼の傲慢のノルエーと格闘ありし其の折に、着させられたる御物の具、怒氣を帯んだるまなざしも言葉戦ひむやくしと彼のポーランド氷原にて、櫓に乗つたる敵將を只一撃に懲らさせられし其の折からの御まなざし、奇怪なことを見るものぢやなア

ト不審の思入

マーセラス、まッこの如く二晩まで時刻も同じき丑三ッころに、武威を示して我々共が見張まぢかく通行なせしは、ホレ、何とも以て合點ゆかねど、只大むねを考ふるに、所詮何事か我が國に不思議の動亂起こらん志らせ

ト懸念の思入、マーセラスも思入あつて

マーセラス、それにつきて御兩所に承りたきことが、ムも角もあ下に、〇近頃何故とも心得難きは、國內こそつて夜の目もあはせず、かく嚴重なる毎夜の警戒、また日毎の大砲鑄造、剩へ外國よりひきもきらぬ武器の買入れ、それのみならず船大

工を無理往生にかり集めて、休日平日のわいだめなく、眉毛に火のつく晝夜兼行、如何なる大事のさしかゝりて、かゝる準備に及ぶことか、ご存じならば其の仔細を、なにとぞお聞かせ下されい。ホレ、その儀はそれがしお話し申さん、眞偽のほどは定かならねど、道路の噂に承れば、現に只今目前に見えさせられし先王殿下がまだ御位におはせしころ、方々も知らるゝ如く、前のノルエー王、フオチンプラスが不遜の廣言を怒らせられ、すなはち彼れが望みにまかせて一騎打の御勝負ありしところ、名に負ふ勇武の故、殿下なれば、フオチンプラスは其の場に落命かねて、軍國の掟に照らし負けたるものは其の領地を勝つたる方に納むべしと互ひに誓約ありけるゆゑ、若し不幸にして故殿下が件の勝負に負けさせられなば、御領地の幾分は敵王が手に落つべかりしを、同じ誓約の旨意によつてかなたの所領悉く我が大ぎみの御手に入つたり、あかるところ、右敵王の嫡子たる其の名もおなじきフオチンプラスは血氣無謀の若者なるが、此のたびノルエーの邊境にて、餌食にむらがる鳥合の暴徒をこゝかしこより驅り催し事を擧げんの結構あり、問ふまでもなく威力を以て亡父が所領を取り戻さん不敵の所存に外ならじと早くも看破せられしゆゑ、さて

こそ切ッて準備をなし、夜毎の警戒、日ごとの急使、今にも敵兵寄するが如く、國內こそッて騒動なすは皆此れが爲と存じ申す。バエ、いかさま、それに相違はムるまい、さすれば忌々しき物の怪が件の事變に因縁深き先王殿下をさながらの甲冑すがたいかめしく、張番なせる我れ、共がまのあたりを往來するもげにふさはしき次第でムる。ホレ、織座も眼に入れば物を視ると平かなる能はざるの例心にかゝる不祥のまぼろし。〇傳へ聞く其のむかし、羅馬共和國全盛のころ大シーザアの殺されし少しき前の事なりしが、地妖天變ならび起こり、亡者は残りなく墓をいで、羅馬の街頭にをめき叫び、白日さながら暗夜の如く血汐は雨露とふりそゞぎ、火焰の尾を牽く妖しの星剩へ大海原の潮の満干をつかさどる月影さへに常闇の、世も早や末期と見えたりし、其のいにしへの妖兆を、今まのあたりみくにうごに凶事を知らせの前表なるか、踵を接する天變地妖、ハテいぶかしき事どもぢやなア

トよろしく思入、此のトタン、以前の亡靈、再び朦朧とあらはるゝこと、ホレ、シオ目早く見つけ

ホレ、ヤ、見られよ、アレ、あしこへ、又もやまぼろし現れたり、〇いで、それがし

遮りと、めん、たとへ祟りをなさうぞとも、〇ヤ、ヨ、俟たうぞ、若し聲あらば、物いひ得べくば、語れ、返答せよ、道に叶へる手段を以て、汝が妄執を晴らさせ得べくば、語れ、返答せよ、知らば則ち避けらるべき御國の未然の禍ひを、汝若し知りてあらば、吾れに語れ、たゞしは兼ねて聞ける如く、閻浮に殘せし財寶に執着の念のさがたくて、浮びもえやらでさまよへるか、つゝまづ仔細を語りませい

ト此の時、鶏啼く、亡靈たぢ、となり、うしろへ、すすること

俟て、語れ、答へませい、〇それ、マーセラス、どのおとめなされ、マー、此のさす、また、打伏せませうか、ホレ、と、まらば、打伏せめされ、マー、心得ました、バエ、ソレ、こゝだ、ホレ、ソラ、こゝだ

マーセラス、まぼろしを追ひ廻し、打伏せやうとする、此のうち、亡靈消ゆること、マー、こりや、どうだ

皆々、呆れしこなし

マー、見るから、氣高き物の怪にかゝる、手荒き振舞なせしは、コリヤ、不了、見て、ムつたわえ、空氣にひとしき物で、ムれば、打擲なすも、手ごたへなく、所詮、無益の悪戯も、同然、よ

しなきことをいたしてゐる。アアあはや物言はんず風情なりしに、折から啼きだす
 鶏の音を、ホレ聞くとひとしく愕然と罪ある者が怖ろしき呼だしうけしもかくや
 とばかり、打おのゝきしその有様、且を報ぐるくだかけが其の朗かなる喉を開き大
 日輪を呼び醒ませば、或は海原、或は火焰、空中土中にさまよへる、無數無算の物の怪
 すだま、皆おのゝきて隠れ伏すと兼ねても傳へきゝたりしが、あかしを見たるは今
 がはじめて、マ、げに鶏のなくと其のまゝ消えてあとなく相成り申した、救世主が
 御誕辰を祝ふ季節に近づく時は、くだけ夜もすがら時をつくり、魔精ら之れに怖
 れをなし、絶えて横行いたさぬゆゑ、深夜と雖もまがごとなく、星物の怪もえ祟らず、
 いづな使ひも魔力を失ひ、天上天下息災無事、救世主が御威徳はさばかりたふとく
 あらたかなりとか、ホレ我れまたさやうに承りて、なかばは眞と信じ申す〇さりな
 がらアレ見られよ、はやひんがしの岡の上にあしたの露を分けのぼる腫々たる紅
 玉盤、夜の見張りもはやこれまで、御異存なくば我々どもがこよひ見たりし一伍一
 什をハムレットの宮に言上いたさん、我々にこそ物言はされ、彼の亡靈も宮さまには
 一定口を開きぬべし、臣たるの務として、君を思ふまごゝろよりも、此の事言上は

至當の順序、御兩所の御意見はいかゞてゐるな、マ、もとより望む所でゐる、幸ひ今
 朝宮さまに、御目にかゝる便宜の場所を、それがしよつくぞんじをれば、いざ御案内
 いたすてゐらう
 皆々はいる

其の二 エルシノア宮城内の大廣間

喇叭の聲のうち、國王クロイヂヤスさまに、妃ゲルトルド、ついで太子ハ
 ムレット、大臣ポロニヤス、其の男レイヤルチーズ、廷臣ブルチマンド、コオチリ
 ヤス、其の他名族侍士大勢つきそひ、まづかに入り來たる、やがて王と妃とは設
 けの玉座に着き、其の他一同よろしくすまふこと
 王、イカニ面々、我が爲には親兄たる御なつかしき故王殿下の崩れさせたまうて後
 日、いまだ淺かる故、我れ他共に思慕し奉るの情禁めがたく、全國こぞつて愁眉をひ
 そめ深く、諒闇に籠らんこと寔に人情の至當なれど、君子は哀みても傷らずとか、人
 情いかばかり切なりとも爲に公道をば忘るべからず、寡人此の道理を思ふがゆゑ

に、國家の前途を慮りて堪へがたき悲歎を忍び、悲喜哀歡を等分に、左の目には涙をたゝへ、右のまなこは笑ましげに、祝うて故殿下の葬儀を了へ、泣いて新婚の式を行ひ、前の嫂たるゲルトルードを此の度あらためて妃となし、此のデンマークの主權を分かつて、まツたあらかじめ此の儀については、遍く諸老輩の意見を諮詢し一同が協贊を経たりし條いと満足に思ふぞよ。○さてあらためて語るべきは、既に面々も存知の如く若輩者のフォオチンブラス寡人をば庸主と見侮りてか、但しは親兄の崩御によつて國內一定紊亂なし四分五裂と臆測なしか、假空の便宜を頼みとなし強迫めく使者を送り、先年其の父フォオチンブラスが彼の誓約書の明文によつて我が勇敢なる故殿下にさゝげたてまつりし舊領地を取戻さん不敵の結構。○さて今日た一同を集會せしめたるは餘の儀にあらざ、右フォオチンブラスが叔父老ノルエ國王こと、近年宿痾になやみ臥床を離るゝこと能はざるゆゑ、かゝる不軌の企あるをばゆめいさゝかも存せざる由、志かるに此のたびの徵募に應じまツた賦役に應ずるやからは皆彼れが治下の民衆なれば、之れを抑へとゞめんこと彼れが權内にあるべき筈なり、すなはち此の意を傳へんため寡人一書を志たゝめ置きたり、太

儀ながらコオチリヤスマツた副使としてブルチマンド、御身等兩人は今よりすぐ
に老ノルエーが許に下向すべし、たゞし御身等に委ぬる所はゆめ此の書中に認め
たる數箇條の外に出づべからず、此の儀よく心得候へ。兩人、ハ、王、さらばぞ
よ、神速なる復命によつて忠勤のほどを見せ候へ。コオチリヤス、ハ、愚臣等の力及ば
んかざり。ブルチマンド、この儀まれ何事まれ。コオチリヤス、ハ、忠勤盡くすて。二人、ござりませう。王
「ホ、ウさもあらん、さらば恙なき歸朝をまつぞよ。二人、ハ、ア
ブルチマンド、コオチリヤスよろしく敬禮してはいる、王思入あつてレーヤル
チーズに向かひ
王、さてレーヤルチーズよ、おことが申し條は如何なる儀ぢや、何か願ひごとがある
と聞いたが、願ひとは如何なる儀ぢや、當然の願ひならば何事にもあれ遠慮に及ば
ぬ、おことが父のボローニヤスは此のデンマーク王室の股肱耳目、外ならぬおこと
が願ひは予が求めても聽く所ぢや、願ひとは如何なる儀ぢや、遠慮なくいうて見や
れ。レーヤルチーズ、ハ、かたじけなき其のおことば、恐れながら佛蘭西國へ再遊の儀何
卒御ゆるし下し賜はりたくひとへに願ひあげ奉ります、御即位と承り國家の大

慶事此の上なしと、取るものも取りあへず立ち歸つてはムりますれど、公務既に終り大典滞りなく相すむ上は、再び心は佛蘭西へ立ち戻りたき微臣が衷情、恐れながら上御賢察なし下され御仁慈の御沙汰賜はりたく、ひとへに願ひ上げ奉りまする

トよろしくこなし、王思入あつて

王シテおことは此の儀につきて父ポロニヤスの許を得たるか○ポロニヤス、御身の意見は、ポロニヤス、ハ、恐れながら俸めが折るかへし繰り返しての切なる請願、止むことを得ずその請願に承引いたしてムりますれば何卒御許可下さりませやう、恐れながら願ひ上げ奉りまする

ト思入あつて

王、レーヤルチーズよ、志かあらば心任せ、いつにてもあれ出立しやれ、樂しき門出を祝ひ置くぞよ、レーヤルチーズ、ハ、ア

トよろしくこなし、王は太子ハムレットに向かひ

王、さてハムレットよ、叔父甥といひしは先の日、今は我が實子も同然、イヤ喃、ハムレット

ト此のあひだハムレットはかたはらに向き、舞臺の人物には聞こえぬふりにて、獨白をいふ

ハムレット、親たるには餘りあれども、尙至親とはなすに足らず

ト王は前の言葉をつぎ

王、これは志たりハムレット、如何なれば其のやうに打まづみてのみおはするぞや

トこれにてハムレット王に向ひ

ハムレット、イヤそれがしは浮きすぎてをりまする

ト思入あつていふ、妃も思入あつて

妃喃、ハムレットよ、哀傷にも程こそあれ、いつまで歎き慕へばとて行きにし水はまた歸らず、みまかりたまひし父上をばいたづらに慕はんより今上王を父御と思ひて、甲斐なき哀傷をば忘れたまへ、生きとし生けるもの誰れかは一たび死なざるべき、生者必滅は世のことわり、浮世の常ぢやと思やいのう、ハム、ハイ母上、いかにも常でござりまする、妃サア常ならば、何でそなたばかりには常ならぬやうに見ゆるぞいの、ハム、見ゆるとや母上、只表にのみ見ゆる類はそれがしが與り知る哀傷ならず、コ

レ喃母上、それがしが哀傷はナ、此の皂色の喪服はあろか彼のいかめしき虚禮の裝束、心にも無きそらためいき、そら愁歎の頬の上に、たとへば涙の河はなすとも、そら哀傷の形式をば如何程に重ぬるとも……げにそれらこそは見ゆる哀傷、餘所に目に見せん其の爲に人のすなるえせわざなれども、此のハムレットが心中には目に見せがたきかなしみあり、形に見ゆる數々は只其の假裝とごぞんじ知らずや

ト慨然たる思入にて次第に激昂していふ、此のあひだ王よろしく思入あつて

ハムレットに向かひ

王「いや喃ハムレットよ、亡き父を忘れざるは孝子の眞情、おことが切なる哀傷は、子たる者の道よりいへば稱美するにあまりあれど、またよく道理をわきまへたまへや、おことが父上も其の父を失ひ、其の失ひし父御とてもまた其の父御を失ひたまへり、子は親に後るゝ習ひ、喪に居ること若干日、以て哀悼の意を致すは、禮としても、情としてもさもありつべきとなれども、さりとて頑なに歎き哀しみ、まうねく亡き人を追慕なすは、第一天命に悖るの恐れ、男子のなすまじき哀傷なり、上は昊天に對し奉りて不敬不遜の所行といふべく、まッた信仰無き下根を表示す、短慮愚昧のふる

まひなり、其の故いかにとなれば、有爲無常は普通必然の常理なるに、なごて今更に事新らしく愚痴頑陋なる悲歎に及ばん、あさまし、上とも之れを非とし、亡き人も之れを非とし、天然はた之れを非とせん、まッた之れを道理に問はんに、世にかくの如き不條理あらんや、そもく父の子にさきだつは、もと是れ古今必至の定業、人誰れかたまぬかれ得ん、歎くは愚痴の至極ならずや、喃ハムレットよ、詮無き哀傷を地になげうち、寡人をば又の父と思ひ、おことはやがて我が位を襲ぐべき身なりと、世人に知らせ實の父にもゆづらざる我が恩愛をもさとりたまへ、さてまた切なる願なれど、再び日耳曼なるキッテンベルヒの大學へ立ち戻らんず希望は、寡人が最も好まぬ所、いかでこのまゝ朝にとままり、われく夫婦を慰めたまへや

トこれにて妃もハムレットにむかひ

妃「喃ハムレットよ、今も殿下のおほする如く、切なる母の心を察し、何卒此の地にとままりたまへ、海山へだつる外國へどうぞゆかいてゐてたもやいのう

トまみくといふ、ハムレットとぞ思入あつて母に向ひ

ハムレット「志からばおほせに志たがひませう、王「ホ、それでこそ孝子の眞情、長くテ

ンマークにるといまりて、我々ともろとも榮光利福をたのしみたまへ○喃妃よ、いと柔順なる太子が返答、心花爲にひらくる思ひ、このめでたさを祝するため、寡人は奥殿にて宴をひらかん、まッた祝砲は天にきこえ、天また之れに反響して、大デンマークの王家の賀宴を天上天下にとゞろかささん○いざさらば、面々にも

トこれにて喇叭を盛に吹き鳴らすこと、王をさきに一同ついてはいる、ハムレット

トひとり残り、よろしく思入

ハムレット「エ、此の硬き剛き肉のなどで此儘に溶解けぬぞ、此のまゝ溶解けて露ともならば、もしは自殺を大罪と神掟させたまはずば、せんすべもあらうものを、あさましや、〱思ひまはせばうとましや、あぢきなやな、無益しきは世のいとなみ、淺まし、汚らはし、只臭き物穢き物のみ見る目の限りはびこる有様、毒草いやが上に生ひ茂ッて種むすびゆく荒庭とてもかほどまでにはあるまじきぞ○いかなればかくまでに……父上かくれたまひてよりまだやう〱に二月ばかり、イヤ、〱まだ二月だに經たぬ間に○こよなくいみじき大君なりしを、それと彼れとを比ぶれば半獸怪に對する美貌神、泥土に對ふ天津雲、天津風の荒きにだにもゆめあてさせ

じと母上をばめていたはらせたまひしを……情なや又しても、坐ろに思ひいださるゝ……只二月前かた迄は睦めばます〱戀しさの募るばかりの御ありさま、離れがたなき御中なりしに、一月にも餘らぬうちに……イヤ、思ふまい、思ふまい、水性とは女の替名、もろきは女人の習ひなるを、とはいへ一月もたぬ間に○ナイ、オー、ヒ(神名)もかくこそと涙の雨にかきくれて野邊送りせさせたまひし其の履も乾かぬ間に、物の道理辨へぬ禽獸なればとて今まばしは哀しみ歎き慕ひつべきに……あさましや母上、人にもよれ叔父上と同胞とはいへ父上とは我がヘルキューリーズに似ぬ如く似ても似つかぬ現在の父上の御同胞と、結婚とは何事、まだ一月にもならぬほどに、淺ましきそら涙のいまだ臉に乾かぬひまに……急ぐも事によれ、不義の侶寢をかほどまでに急ぎたまふ御心根、うとましや情なや、是れいかでか善きことならん、國家の不祥は目前なり、

ト慨然として身もだへして歎くこと、折から人音する、ハムレット氣をかへ、壁にも耳あり、他もや聞く

ハム、此の胸の裂けなば裂けよ、ム、

ト此のうち前の場のホレーシオ、マーセラス、バアナードーの三人、打つれだちて入り來たり、ホレーシオ走り進みて敬禮する

ホレ、宮さまにはまづ御安泰にわたらせられ、ハム、オ、そちたちも恙なくて、ヤ御身は……オ、ホレーシオではないか、ホレ、御意の通りホレーシオでござりまする、御健勝の尊顔拜し奉り祝着至極に、ハム、そのやうに堅ういやるな、御身と予とは友だちではないか、シテマア思ひがけない、如何にしてキッテンベルヒの大學から

トいひかけてマーセラスに向かひ

ハム、オ、マーセラスか、マーセラス、ハ、宮さまには、ハム、オ、よくこそ

バアナードーに向かひ

ハム、御身もよくこそ

トあらためてホレーシオに向かひ

ハム、シテ御身は如何した譯にて、はるく、爰へはあいでヤツたぞ、ホレ、別に仔細とてもムりませねど、持前の懶惰根性が源となつて取しめもなき旅三昧、ハム、ア、コレさふまゝ、そのやうな悪口は御身の敵からでも聞きとむない、まして自ら悪名つけ

て、手に不愉快をば感せしめたまふな、御身は懶惰の人にあらず、そもく、如何なる用事あつて此の王城へはあいでヤツたぞ、暴酒を飲むとをば逗留中に學はうぢやまで、ホレ、實を申せば、御父君の御野邊送りを拜まん爲に、ハム、なぶるまい、虚言をいふまい、まことは此度の大婚儀を見に來ヤツたのであらうがな、ホレ、まことにさやうおほせらるれば、諒闇の程もなく御母上には御再嫁おそばし、ハム、サ、それが所謂節儉ちや、節儉といふものぢやわいの、葬式に用ひたる殘肴冷炙をそのまゝに新婚祝ふ膳立とは、肉も心も冷かなる……かゝるあさましきを見る程ならば、ホレーシオ、不俱戴天の仇敵を天堂極樂へも遣りたいわい、○父上が、亡き父上の御顔がまざく、と見えるわい、わい

ト慨然として虚空を見つめる、ホレーシオぎよつとしたるこなし

ホレ、エ、御父君……どれ何處に、ハム、イヤナニ予が心の眼に、ホレ、オ、さやうでムりましたか、○曾て一たびそれがしも龍顔拜せしことありしが、いとく、けだかき御かほばせ、ハム、ありとあらゆる淑徳を兼ね具へさせたまひし父上、またと此の世に父君にひとしき人を見ることがあらうや

ト哀惜の思入、ホレ、シオ言葉をあたらため

ホレ、イヤナニ殿下、昨夜まさしく御父君にお目にかゝったかとぞんじまする

ハムレット愕然として

ハム「ナニお目にかゝりしとは、た誰れに」
 ホレ「御父君故王殿下に」
 ハム「ナニ父君に、とはまた如何して」
 ホレ「その御驚きはさることながら、まばらく御心を鎮めさせられ、申しあぐる不思議の一條、何とぞお聞き下さりませう、其の證據人は此れなる兩士、ハム、何はともあれ其の仔細を、サ、早う聞かせてたも」
 ホレ「これなるマ、セラス、ベア、ナ、ド、の兩士、徹夜の護衛を承りて定の場所に相詰めをりしに、去んぬる二夜ひき續きて、草木も眠る真夜中頃にも怪しき姿を見たり、さて其の姿といッば頭より足の爪まで、甲冑隙間もなく取りよろひ、甲冑といひ舉動といひ御父君をそっくりそのまゝ、威儀凜然たるたちふるまひ、ゆるやかに濶歩なし、三たびまでも兩士がまなさき、わづか四五尺にも足らぬ處を悠然として行きすぎたりしを、兩士は畏れ且つ驚き、魂ひほと／＼身に添はざれば只一言だに聲は得掛けず、其のまゝそこをば通らせしといと／＼恐ろしげの物語、それがし竊に承り、實否をたゞさん

其の爲に昨夜兩士ともろともに徹夜の衛を致せしところ、聞きしに違はず時刻も姿も、片言隻句の相違なく、あらはれいで來しまぼろしは疑ひも無き御父君、ハム、エ、ホレ、其のかみ見えたてまつりし故王殿下の御姿に似たとはおろかるれがしが、此の双の手の似たるが如くに、ハム、シテその場所は、マ、すなはち我々兩人が夜衛の役を承りし御城外の露臺に於て、ハム、シテ御身はそれに向かひて何事か問ひ試みつるや、ホレ、さん候ふ、彼れに向かひて再三言葉は掛けましたれども、何等の返答をも仕らず、尤も、一たびは首をもたげておはや物言はんず風情なりしが、折から鳴きだす曉告鳥の聲にやおちし忽然と、風にゆらめく薄煙消えて跡なく相成りましてムりまする

トこのあひだハムレットよろしく思入

ハム、ハテ心得ぬ、奇怪なことを聞くものぢやなア

と不審の思入

ホレ「げに奇怪にはムりますれど、全く以て此の事は疑ひもなき事實なれば、此の儀を殿下に言上なすは、臣下の本分とぞんじまして、ハム、いかにも／＼よくこそ早く知

らせくれしぞ、とはいふものゝ心が、りり○今夜もそちたちは夜衛をいたすか
 マー御意にムりまする ハム、ム、甲冑を被てゐたと申すか バアとマー御意にムりまする
 する ハム頭より爪先まで隙間なく被てをツたか バアとマー御意にムりまする、いか
 にも頭の頂上よりたしかに足の爪先まで

ハムレット思入あつてホレーシオに向かひ

ハム、志からば顔ばせは見えなんだな ホレ、イヤ頬甲の引きあげてムりましたゆゑ
 ハム、すりやアノ見えたと申すか ホレ、御意にムりまする ハム、御怒りの顔色なりし
 か ホレ、イヤむしろ御愁傷の御かほもち ハム、シテ蒼白ておはせしか、但しは赤く見
 えたりしか ホレ、いと蒼白く見えさせられたり ハム、シテ、御身をば如何さまに
 打まもらせたまひつるぞ ホレ、御わき目もふらせられず、きと打まもらせたまひた
 り ハム、オ、其の場にあるあはせたらましかば ホレ、嘘や打駭かせたまひしなるべし
 ハム、げに、〇シテそのまぼろしは、長くそこに留まりをりしや ホレ、されば、ほい急
 ぎて物の數を一百まで算へん程もや バアとマー、イヤ、もうすこし長うムツた ホレ
 「イヤ、それがしが見し時にはタカマ、さばかりと存じ申した

ト此のうちハムレット心のおちるぬ思入、再びホレーシオに向かひ

ハム、鬚の色はいかゝなりしぞ、灰色を帯んでゐたか、どうぢや、ホレ、されば御在世
 の折から嘗てお見うけ申せし通り、黒きがなかに銀色帯びし ハム、ム、〇こよひは
 予も夜衛をなさん、或はこよひもいで來ぬべし ホレ、御意の如く、こよひも必ずいで
 來申さん ハム、まこと其のものかりそめにも亡き父上の御すがたにひとしき姿に
 いてたちなば、たとひ羅刹群り來り八大地獄脚下に開いて物言ふ勿れと禁むると
 も、我れ誓つて言葉をかけ、父君かさもあらぬか、事の實否をたゞさておかうか○喃
 人々よ、是れ迄包み藏せしならば、此の後も尙口をつぐみ、こよひ如何様なる事起る
 も、只肚のうちに合點なし、必ず共に口外いたすな、やがて御身らの誠の酬いをなさ
 ん時もあるべし、さらばぞよ、今宵十一時と十二時との間に於て露臺にてまたあふ
 べきぞよ 皆々、ハ、仰畏り奉る、我々力及ばん限り忠勤盡くすてムりませう ハム、忠
 勤とはいはずもあれ、只おたがひにまごゝろをば○さらばぞよ 皆々、ハ、ア
 皆々いでゆく、ハムレットひとり残り、ソット思入

ハム、父上の御なき魂が甲冑をめさせられて再び此の世に歸らせたまふは、さてこ

そ一定不祥の来るし、何事か非義非道のふるまひありと覺えたり、エ、片時も早く夜となれかし、○それまでは我が心よ、騒ぐまい、動ずまいぞよ○かくれたるよりあらはるゝはなし、たとひ大地の掩へばとて、非義非道の行ひのいつまでかくればつべしやは

其の三 ポロニーヤス館の一間

ポロニーヤスの男レーヤルチーズ、其の妹オフィリヤ姫、場に上る、レーヤルチーズは佛蘭西國へかしまだちの旅装立身、オフィリヤ姫も立身なつかしげに取りすがりて名残を惜む、此のもやう

レーヤルチーズ、荷物もすてに積みのせたり。オフィリヤどの、さらばぞや、嗚海原は隔つるとも、出船順風の便宜あれば、其のたび毎に眠つてゐいで、かならず音信を忘れまいぞや。オフィリヤ、それをお前は疑うてかいなア、レ、またハムレットさまの御いつくしみは、御戯れとよう心得、御本性とばし思やんなよ、そもじを兎やかうおほせあるは、ほんの一時の御浮氣、出來心といふものぞや、譬へば心早咲の春のはじめの壺葦、只

束の間の香こそあれ、やがてぞまほむ仇花の頼みがたきは人のこゝろ、只それほどの御情とよう心得てゐるがよいぞや。オフ、すりやアノたつたそれ程の、レ、オイノウ、ぢやによつてゆめ、心をば許すまい、總じて人といふものは此の筋や肉のそだつとも、氣もだん、に大きくなり、心もいつか三日月の満月とうつろふ世のならはし、今こそは彼の君もそもじを可愛とおぼしめさめ、また今こそは些ばかりも邪きみこゝろおはしまさねど、下ざまとはことかはり、やんごとなき御身なれば、何事もむづかしく、國家の爲、天下の利害と、いろ、儘にならぬ仔細もあつて、たとひ何様に御自身はそもじを可愛と思召しても、背かれぬは諸人の沙汰、國家の主となりたまへば、輿論によつて何事も取りさだめさせたまふゆゑ、御意のまゝにならぬは定さすれば、けふびの御おほせは、戲言も同然、未遂げがたいかねごと、所詮はデนมマーク全國の輿論に叶うたる事てなうては、御實行なされう筈はないゆゑ、かんまへてラツかり心をばゆるすまいぞよ、ゆかしらしいお言葉をば、信と思うて、輕々しう、靡かば染まる白絲の操を一たび穢すときは、取りかへされぬその身の辱、おそろし、く、喃いもうと、オフィリヤよ、ゆめ、備をおこたつて、邪慾の箭尖に

かゝらぬやうに心の砦を堅めませうぞ、何程謹慎が深うても、花の面を月にだに曝せばやがて口の端に蓮葉女子と唱はれて、こよなき淑徳の權化さへえまぬかれぬは誣謗の鋒、薔薇の蕾の兎もすれば春にえあはて無慚にも醜き螟蛤に喰はるゝ、女子もそれに異ならず、今を春べやわかゝとねびまさりゆく人の身の旦の花の芳紀には忌々しき蟲もつきやすく毒ある風も吹くぞかし、まことに油断は身の大敵、誰れ誘はねど春來れば我れから狂ふ心の若駒、必ず手綱をゆるるべまいぞや

ト姫をだきよせて、志みくといふ、オフィリヤ姫は、此の間始終、レーヤルチーズの貌を見あげたるまゝにて

オフィリヤ、アイナア、だんくの御教訓は、此の身の心の衛にして、きつと忘れはまませぬわいなア、シタガ兄上、アノお前も、よう皆が後言いふ、墮落僧侶と同じやうに他には険しい行きにくい荆棘の路を教へておいて、自身はそれとは裏うへなあだうつくしい仇花の咲き亂れた脇道をば必ず踏まいて下さりませや、レーオ、わしが事は氣遣ひ無用〇我れ知らず餘程のひまいり、ドレ出立を志ませうわいの〇オ、父上がトいふうち、ポローニヤス入り來たる、レーヤルチーズかくと見て走り迎へて

レーニ重に戴く御祝福は取りも直さず二重の幸福思ひがけずも再度の御いとまごひは此の身の仕合せ、ポローニヤス、ハテまだこゝにかレーヤルチーズ、船へく、何を思圖々々、帆は既に風を孕み、人は皆あくびたらく、サ、よい加減に船へく

トいひながら祝、福の式を行ふ、レーヤルチーズ一脚をたて、膝まづき、ポローニヤスは其の頭上に右手をさしかざし

ポロソレ、あらためて其方が冥福、レーハ、ア、ポロ、肝に銘し、骨に刻みて必ず共に忘れまいぞよ庭の訓、制止の條々、レーハ、ア、ポロ、肝に銘し、骨に刻みて必ず共に忘れまいぞよ、打いだしそ、友と親しむとも狎るゝ勿れ、おまたゝび試験の後此の友信するに足ると知らば、鐵の箴を以て之れを擁し、ゆめ我が心を離れしむるな、さもあれわいだめなく友を解化し、巢立たぬ雛と握手して掌の皮を厚くするな、鬭争口論かゝづらふな、されどかゝづらうた上からは一步も退くな、骨あることを敵者に知らせよ、誰が言にも耳は貸せ、口は誰が爲にもたやすく開くな、誰が説も皆聴くべし、我が見は言はぬに如かず、財囊の許さん限り身のまはりは立派にせよ、但し奇を衒ひ異を衒ふ

な、立派はよし、華美に過ぐるは醜し、衣裳は屢々人を表す、別けて佛蘭西の上流社會はこの道の大通きツ粹、おぞきこととして笑はれまいぞよ、さて恐ろしきは金の貸借、借手にもなる勿れ、貸手にもなる勿れ、借金は節儉の刃尖を鈍くし、貸金は動もすれば元をも失ひまツた其の友をも失ふ、さて今一ヶ條尤も大切なる庭訓○我れまづ我れに對して忠信なれ、さすれば他人に忠信ならんは、猶夜の晝に繼ぐがごとくならん○さらばぞよ、願はくは我が祈禱を以て長く其方が心に銘せん

ト物躰ぶツていふ、レーヤルチーズ恭しく敬禮して

レーヤルチーズ「さやうならば父上さま、お別れ申し上げます。ボロ、時分はよし、家僕等が待ちかねつらん、いざ片時も早く

トこれにてレーヤルチーズ、妹姫に向かひ

レー「オフィリヤなどのさらばぞや、最前いうたることを必ず共に忘れまいぞや。オフィ、アイ、此の胸に錠かけて必ず忘れることではない、錠はお前にあづけますわいなア

トこれにてレーヤルチーズよろしく思入、父と妹とに向かひ
レー「おさらばでムりまする

レーヤルチーズ別かれてはいる、後見送りてボロニーヤスはオフィリヤ姫に向かひ

ボロ「女兄が和女にいうた事とは、エ何ぢや。オフィ、ハイ、アノ外ではムりませぬ、ハムレットさまの事について、ボロ、ホ、それはよう心附いた○イヤナニ聞けば此の頃宮様が毎度おひとりて和女が許へ入らせられるげな、さて和女もまた何の思慮なくその都度ちやほやと御もてなし、えらう御入魂にまやるげな、若しそれが實ならば、(その様に手にいうて忠告をしたものがあるが、若しそれが實ならば、女、きツと予が言はねばならぬ、コレヤイ和女は不心得な者ぢやぞよ、身分をば存せぬか、誰れあらう大臣ボロニーヤスの女といふことを辨へをらぬか、マ一躰どうした譯ぢや、エ、ハムレットさまが如何なされた、包まず我にいやれ、サ、如何ぢや〜

トこれにてオフィリヤ貌をあげて
オフィ「サイナ、此の間中アノ、ハムレットさまが見をばいとしうおもふと被仰ツて、いろいろの約束をば、ボロ、何ぢや、約束……いとらしい……ハテわづけもない、そぢや此の道の怖いことをまだ些しも察りをらぬナ、コレヤイ其の約束とやらを和女や

眞實ぢやと思つてゐるか オフ、サア如何思つてよからうやら ホロ、サ、知らぬなら
ば教へてやる、コレ和女はとんと嬰兒も同然ぢやぞよ、そのやうな約束を、當になら
ぬ約束手形を、正眞正銘の金貨ぢやと思ふは、コレ手形とは名ばかり、手形の約束は
手堅うはないわい、オ手形といへば、これからはズツと品行を堅固うして、餘り宮さ
まと口きくまい、さうでないともう一つ地口りついて、此のポロニーヤスの貌が立
てがたいわい

ト持前の駄洒落まじりに小言をいふ

オフ、ぢやというて宮さまは些ともみだらなことはなさらず、眞實らしうおッしやツ
て、ホロ、らしう……サ、らしうが當になるものかえ オフ、くれ、僞でない證
據は、アノ神かけてと誓言して、ホロ、サ、それがすなはち阿房鳥を捕へる毘ぢや、兎
角血の氣の多いころは前後の辨別なくわツとなツて、誓言は口から出たらめ、コ
レむすめよ、そのくわツと燃えるものは眞實の情の火ではないわ、只光るばかり熱
氣はなく見る間に消える螢火同然、これから後はよう心得、必ず共にうか、と男
まじはりなりませぬぞ、たとひ逢はうとおほせあツても逢はぬほどの見識が第一、

命令でも受けたやうにツイ唯々と面出すまい、まツたハムレットさまはお齡もお若
く、ことには御男子でゐらせらるれば何事も自由のおからだ、其の御誓言が當にな
らうか、ゆめ、信とばし思ふまいぞ、總べて誓言といふ奴は不義の媒介、譬へば、經
文を口に唱へて善男善女をおぎむく賣僧、殊勝らしう被飾ツても衣と肚とは雲泥
万里、信ぜらるゝものではないわさ、さてあらためて申しきかす向後如何やうの事
あらうと決してハムレットさまと言葉をかはし、まツた御まじはりまかりならぬ、よ
いか、いひつけたぞよ、心得たか、サ、こちへ來やれ、 オフ、アイ、
二人いでゆく

其の四 城頭の露臺

太子ハムレット、ホレーシオとマーセラスとを將ていで來たる

ハムレット「身を斫るやうな風ぢや、きつい寒さではないか、ホレ、さやうでムりまする、ま
るで摘みきられるやうでムりまする、ハム、もはや何時であらうぞ、ホレ、まだ十二時
には少々程がムりませう、マーア、イヤ十二時はもう打ちましてムりまする、ホレ

「エ打ちましたか、さッぱり耳に入りませなんだ、スリヤ程もなく亡靈の現れ出づべき刻限なり」

ト此のトタン宮城内にて喇叭の聲盛に起こり、祝砲の音聞こえる、ホレーシオ

不審の思入

ホレ、我が君、アリヤ何事でムりまするな

ハムレット思入あつて

ハム、オ、あれこそは國王殿下が諸司百官を集へさせられ、こよひも徹夜の御催し、無禮講の御うたげに、足もとまどろの亂踏舞、殿下が賀盃を舉げさせられ、ラインの美酒を飲み干したまへば、其の盛徳を頌せんために銅鼓を鳴らし喇叭を吹き、天地もとよろくあの祝砲

トよろしく思入

ホレ、すりヤア、御慣例でムりまするか、ハム、オ、いかにも慣例なり、さりながら予は此の國に生まれいで、此のならばしに生長ちたれども、かゝる淺ましき慣例は、守らんよりも破らんをばむしろ面目とはなすべきなり、かゝる陋習のあればこそ動

もすれば我が國人が遠近人に誹謗せられ、豕よ亂醉漢よと耻づべき汚名をば蒙るなれ、また之れが爲に我が國人は、こよなき勳功を建つるといへども、尙其の譽のなかばを失ふ、かゝることは一私人の上にもまばあり、例へばこゝに或生得の疵瑕あらんにすなはち其の素生の賤しきなど、こは其の者の罪に非ず、何となれば天然は天然なり、人は其の源を擇ぶ能はず、然るに此の天然に得たる疵の、おひ／＼に増長なし、道理の範圍を越ゆるに至れば、又は或悪しき癖の次第に募り、禮法を紊るに及べば、其の者如何ばかり美德に富めるも、件の生得の缺點は宿命の徽章、造化の制服、終生不磨の印象なれば、他に如何ばかりの善行あつて其の徳如何ばかり高しといふとも、此の一點の疵瑕の爲に他は悉く腐蝕せられ、世のあざけりを招くに至る、只分厘の苦味を加へて太牢もすなはち喰ふべからず、是れ今の世のならばしなり

ト此のうち亡靈あらはる、ホレーシオ目ばやく見つけ

ホレ、ヤ、我が君、アレ、あしこへ

トこれにてハムレットも亡靈に目をつけ、慄然たるこなし

ハム、南無天使、天つ神々、護らせたまへ

トよろしくこなし

ハム、ヤオレたいしき亡魂にもせよ、邪曲なる怨靈にもせよ、蒼天の息をもちくるとも、
地獄の毒氣をもちくるとも、汝の本意は善にもあれ、悪にもあれ、いて語れ、物言はん
○いぶかしくもなつかしき其の姿、我れは御身を、喃、ハムレット殿下と呼ばん、オ、大
君よ、父上さま、喃答へたまへ、國王殿下、譯も知らさて此の儘に、別れたまふな、語りた
まへ、如何なれば、式の如くたふとき、御法の聲のうち、にまつられたまひし御なき魂
が、骸を包みし蟻びきの其の帷子を裂き破りて、迷ひいでさせたまへるぞや、如何な
れば、陵が其の磐石の巖戸を開いて、長閑にも葬られたまひし御なきがらをば、現世
にふたゝび戻しまるらせしぞ、そも何故ぞや、御亡骸にかく甲冑を纏はせられ、さら
でもいと怖ろしき闇浮の夜半の月の下に、再びあくがれいでさせたまふは、造化の
不思議に弄ばれて、常だに事理を分きかぬる無智蒙昧の人間が心も思慮も及ばざ
る此の怖ろしき有様は、喃何故ぞ、語らせたまへ、喃それがしがなすべきは如何なる
務に候ふぞや

と此の時亡靈ハムレットを手招きすること

ホレ、あちへくと手招きなすは、さては他聞を憚るならん、我が君にのみ何事をか傳
へ申さん所存と見えたり、マ、アレ、志きりに手をなびかせいとねんごろに我
が君をば、はるかあなたへ誘ひ申せど、ゆめく御こしあそばしまするな、ホレ、決し
てく御こしあるな

ト此のうち亡靈だんく退く、ハムレット尾いて行かうとする、二人遮りとめ
る

ハム、こゝにては物言はざらん、な、ム、志からば、あとあッかけて

トかけださうとする、ホレ、シオとめて

ホレ、こはそらなり、決してく、ハム、エ、はなせ、はなしませい、ハテ恐るゝに何及ば
ん、我れは此の身を針ほどにも惜しとは思はず、まッた我が靈魂は彼れ同様に不滅
なれば、彼れはた不死の靈魂に何等の害を加へ得んや、オ、又もや我れをさし
招く、いでくあとを

ト又かけいだす、ホレ、シオあわてゝだきとめ

ホレ「こは物にや狂はせまふ、そゝろに随ひゆかせられなば、或は狂浪怒濤のほとり、或は断崖絶壁のいとおそろしく聳え立って千尋の海に瀕めるあたりへ、畏き御身を誘ひまゐらせ、忽然として怖ろしき悪鬼羅刹と姿を現じ、御正氣を奪ひ御心を惱亂させ、如何なる大事とならんも知れず、只さる場所に臨みてだに、外に誘因無き折にも、千尋の海を脚下に見下し怒濤の響を聞く時は、心みだれ目くるめき我れを忘るゝ舉動なす、ゆめゝ誘はれたまふべからず

ト口早にいひ、尙あさへたる手を離さず、此の間太子はホレ「シオの言葉には耳をとめず、只管亡靈のいて行くかたをのみ打まもりて

ハム「オ、尙我れを招きたまふ〇いざさせたまへ、すぐに御あと尾ひ申さん

ト突然ふりはらつてかけださうとする、二人とめる

マ「マ、決しておこし遊ばしまするな ハム「エ、はなせ、はなせ、ホレ「イ、ヤ決してはなしませぬ、マア、くゝにござりませう ハム「エ、はなせ、はなせ、我が宿命が我れを促し四肢五體の小動脈皆くろがねとふしくれだち、ニメヤの獅子の筋をあざむく此の時亡靈またさしまねく

ハム「オ、尙も我れを招きたまふか〇エ、はなせ

トふりはなし、佩劔を抜く

ハム「妨げなさは手打にいたすぞ、すさりをらうぞ〇いざさせたまへ

ト亡靈についてハムレットはいる、二人あとに残り、貌見合はせ、よろしく思入

ホレ「あまりの事に御心惱亂なし、我れかを忘れたまへる有様 マ「さりとて此のまゝ仰せに従ひこゝにあらんは心元なし、これよりすぐに御あとをまたひ ホレ「いかにも〇いざもろとも

ト兩人身づくろひして

ホレ「さるにても此の結果は、如何なる事と相成るやらん マ「何れにもせよ御國のうち不祥事のあるまらせ ホレ「何事も天の配劑 マ「アイヤ、まづ御あとを尾ひ申さん

二人足早にはいる

(其の四終)

英詩文評釋附錄畢

16034

不許
複製

明治三十五年六月二十五日印刷
明治三十五年六月二十八日發行

著者

發行者

印刷者

發行所

印刷所

英詩文評釋上製與附
定價金壹圓六拾錢

坪内雄藏

京京市牛込區大久保余丁町百十二番地

高田早苗

京京市小石川區關口町二百番地

佐久間衡治

京京市牛込區市ヶ谷加賀町丁目三番地

東京專門學校出版部

東京府豐多摩郡戸塚村大字
下戸塚六百四十七番地

秀英舎第一工場

京京市牛込區市ヶ谷加賀町丁目三番地

英詩文評釋上製與附

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the title and author information.

東京專門學校出版部出版圖書目錄

早稻田叢書

米國プリンストン大學政治科教授
文學博士ワッドロオ、ワイルソン原著
法學博士 高田 早苗 譯

政治汎論

一名 沿革實用政治學
背皮金文字入上製 正價壹圓五拾錢
一千二百五十頁 小包料四百文

經濟原論

英國ケムブリッジ大學教授アルフレッド、マーシャル原著
法學博士 井上 辰九郎 譯
正訂大 (版一十)
背皮金文字入上製 正價壹圓貳拾錢
八百頁 郵稅拾八錢

國民銀行論

英國ウオルフ原著
法學博士 天野爲之助
柏原文太郎 譯

國民銀行論

一名 信用組合新策
背皮金文字入上製 正價壹圓
五百餘頁 郵稅拾四錢

新條約論

國際法 專攻 法學博士中村進午著
背皮金文字入上製 正價壹圓參拾錢
六百五十頁 郵稅拾六錢

經濟政策

英國シザウキック原著
法學博士 田島 錦治共譯
附外國貿易論
背皮金文字入上製 正價壹圓四拾錢
六百五十頁 郵稅拾六錢

經濟學研究法

英國ジョー、エー、キーンズ原著
法學博士 天野爲之助 譯

經濟學研究法

背皮金文字入上製 正價壹圓
四百五十頁 郵稅拾貳錢

近時外交史

國際法學會員 有賀長雄著
背皮金文字入上製 正價壹圓五拾錢
七百餘頁 郵稅拾六錢

英國國會史

英國ビー、シー、スコット原著
法學博士 高田 早苗 譯
背皮金文字入上製 正價壹圓參拾錢
八百餘頁 郵稅拾八錢

發賣元

博文館
東京市日本橋區本町三丁目

發賣所

有斐閣書房
東京市神田區一ツ橋通町

同

東京早堂
東京市神田區表神保町

同

吉岡書店
大阪市東區備後町四丁目

英國
文學博士
高田早苗
譯

英國憲法論

冊一全

附英國憲法講義
背皮金文字入上製 正價壹圓七拾五錢
九百餘頁 郵稅貳拾錢

英國
法學士
高野岩三郎
譯

財政學

冊一全

背皮金文字入上製 正價貳圓貳拾錢
一千六百頁 小包料四百文

佛國
故
酒井雄三郎
譯

歐洲外交史

冊二全

背皮金文字入上製 正價參圓五拾錢
一千六百頁 郵稅參拾六錢

日
背皮金文字入上製 正價金四圓
一千八百頁 郵稅四拾錢

國際法

冊二全

英國
シヤスチン、マツカシ
高田早苗
譯

英國今代史

卷上

一名女皇之御宇
全部三卷上卷千餘頁背皮金文字入
上製正價貳圓參拾錢 小包料四百文
文學士 姉崎正治著

宗教學概論

冊一全

背皮金文字入上製 正價壹圓五拾錢
六百餘頁 郵稅拾六錢

比較行政法

冊一全

背皮金文字入上製 正價金貳圓
八百頁 郵稅貳拾錢

萬國國力比較

冊一全

背皮金文字入上製一千頁
精巧圖面三拾餘頁插入
正價貳圓五拾錢 小包料四百文

安部
磯雄著

社會問題解釋法

冊一全

背皮金文字入上製 正價金壹圓貳拾錢
四百五十頁 郵稅拾貳錢

露西亞帝國

冊一全

背皮金文字入上製 正價金貳圓
八百五十頁 小包料四百文

國法學

卷上

背皮金文字入上製 正價壹圓七拾五錢
紙數七百頁 郵稅拾八錢

政治罪惡論

冊一全

背皮金文字入上製 正價金壹圓
三百五十頁 郵稅拾貳錢

米國
ヤチン、グ
文學博士
遠藤隆吉
譯

社會學

冊一全

背皮金文字入上製 正價壹圓卅五錢
五百五十頁 郵稅拾四錢

哲學概論

冊一全

背皮金文字入上製 正價壹圓四拾錢
五百五十頁 郵稅拾四錢

國際私法論

冊一全

背皮金文字入上製 正價壹圓四拾錢
六百頁 郵稅拾六錢

社會統計學

冊一全

佛國
浮田和民著

早稻田小篇

冊一全

背皮金文字入上製 正價金參拾錢
郵稅金四錢

十九世紀歐洲政治史論

冊一全

背皮金文字入上製 正價金壹圓
郵稅拾貳錢

西洋倫理學史

冊一全

背皮金文字入上製 正價金壹圓
郵稅拾貳錢

近刊

冊一全

背皮金文字入上製 正價金壹圓
郵稅拾貳錢

政治學及比較憲法論

冊二全

背皮金文字入上製 正價金壹圓五拾錢
郵稅十四錢

西洋倫理學史

冊一全

背皮金文字入上製 正價金壹圓
郵稅十四錢

近刊

冊一全

背皮金文字入上製 正價金壹圓
郵稅拾貳錢

政治罪惡論

冊一全

背皮金文字入上製 正價金壹圓
郵稅拾貳錢

國際法

冊二全

背皮金文字入上製 正價金壹圓
郵稅拾貳錢

露西亞帝國

冊一全

背皮金文字入上製 正價金壹圓
郵稅拾貳錢

社會問題解釋法

冊一全

背皮金文字入上製 正價金壹圓
郵稅拾貳錢

國法學

卷上

背皮金文字入上製 正價金壹圓
郵稅拾貳錢

政治罪惡論

冊一全

佛國巴里大學ルイ、ルノール原著
法國國際法教授有賀本長
法學博士 川平九郎雄序
新譯

國際法論
正價金參拾五錢 郵税金四錢

法學士 織田 一著

支那貿易
正價四拾錢 郵税金四錢

橫山正修編著

非鐵道國有論
正價金貳拾五錢 郵税金四錢

ドクトル、オウ、高木正義纂譯
フイロソフイ

(版三)
トラス
正價金參拾錢 郵税金四錢

米國シカゴ大學政治科教授
ハリリー、アラット、ジャッドソン原著
東京專門大 內暢 三譯

歐洲十九世紀史
正價金壹圓廿五錢 郵税金拾貳錢
總クロース上製四百餘頁鮮明地圖挿入
パチエラー、オウ、ロース松平康國編著

世界近世史
正價金壹圓廿五錢 郵税金拾貳錢
總クロース上製紙數四百餘頁
鮮明地圖挿入

長田忠一編著

佛蘭西史
正價金壹圓廿五錢 郵税金拾貳錢
總クロース上製紙數四百餘頁
鮮明地圖挿入

近刊
正價金壹圓廿五錢 郵税金拾貳錢
總クロース上製紙數四百餘頁
鮮明地圖挿入

小山松壽著

南清貿易
正價金拾五錢 郵税金六錢
各國勢力範圍支那交通産業圖挿入
英國アーチバルド、アール、コフリン原著
法學士 立作太郎抄譯

最近之支那
正價金三拾五錢 郵税金四錢
伯爵大隈重信講演

營公談
鮮明肖像入
正價金參拾錢 郵税金四錢
網島榮一 耶暮譯

快樂派倫理
正價金五拾五錢 郵税金六錢
法學博士 高田早苗抄譯

帝國主義論
正價金四拾錢 郵税金六錢

近刊

浮田和民編 史

希田和民編 史

浮田和民編 史

羅馬 史

松平康國編 史

英國 史

文學士 隈本繁吉編 史

獨逸 史

伊太利 史

文學士 坂本健一編 史

西班牙 史

文士 村川堅固編 史

西班牙 史

荷蘭 史

文學士 坂本健一編 史

北歐 史

長田忠一編 史

土耳其 史

法學士 三木猪太郎抄譯

犯罪學
正價金四十錢 郵税金六錢
ウイロービ、及ホサンケイ原著
浮田和民解説

國家哲學
近刊

歷史叢書
法學博士 高田早苗校閱
山本利喜雄著

(版再)
露西亞史
正價金壹圓廿五錢 郵税金拾貳錢
總クロース上製四百五十頁鮮明地圖挿入
パチエラー、オウ、ロース松平康國編著

(版再)
英國憲法史
正價金壹圓廿五錢 郵税金拾貳錢
總クロース上製四百五十頁鮮明地圖挿入

小崎弘道編 史

長瀬鳳輔編 史

中央亞細亞 史

文學士 高桑駒吉編 史

印度 史

文學士 矢野仁一編 史

清國 史

文學士 河合弘民編 史

近世殖民 史

文學叢書

(版再)
英文學史
文學博士 坪内雄藏著

總クロース上製美本九百餘頁
正價金貳圓 小包料四百文
五

高安月郊譯

イブセン社會劇

總クローズ上製 四百餘頁
正價金壹圓 郵稅拾四錢

冊一全

巢林子撰註

刊近

文學博士 坪内雄藏著

英詩文評釋

刊近

東京專門學校講師増田藤之助著

英詩文評釋

刊近

宮崎三味選

元祿名著集

刊近

英國タプリエ、エー、シヨウ著
日本 信夫淳平譯

歐洲貨幣史

刊近

米國エドワード、カロール原著
法學博士 天野爲之助
伊藤 藤 正譯

金融之原理及其實際

刊近

近刊

法學博士和田垣謙三郎 岸田虎三郎
コンラード氏經濟學

(上)國民經濟學 (中)經濟政策學
(下)財政學

法學博士松崎藏之助 岩城之寬
ハドレー氏經濟學

文學士梅若誠太郎 植原正直共譯
アダムス氏財政學

近刊

宮崎三味譯
支那史
小説艶

トルストイ伯著 尾崎紅葉 瀧沼夏葉譯
アンナ、カレニナ

フライタツケ著 登張信一郎譯
ソルウンド、ハアベン

フロウベル著 上田敏譯
マダム、ボヴリー

ハーディー著 梅澤精一譯
テ

ホーソン著 内田眞譯
スカールレット、レター

尾崎紅葉著
俳諧七部集略解

赤堀又次郎著
有職故實

法學博士天野爲之助 原田駒之助譯
クレアー氏外國爲替論

法學士 永井直好譯
ハッテン氏消費論

吳文 聰譯
スミス氏經濟統計學

法學士 柳田國男譯
クラーク氏分配論

文學士 杉江輔人譯
クローレー氏交通機關論

マスター、オウ、アーツ千葉鐵藏譯
埃國價值論

譯者未定
ボン、パーク氏資本論

譯者未定
デヴィッドソン氏債銀論



ストンダド著 千葉鐵造譯
英國小説進化論

ドワテン著 中島茂一譯
シェークスピア

早稲國文學會編述
諸曲評釋

島村龍太郎譯
歐米短篇集

森槐南著
元曲舉隅

經濟學叢書

伊國法學博士ルイギ、コツサ原著
日本法學士 永井直好重譯

社會經濟原論

總クローズ上製三頁餘頁
正價金壹圓 郵稅金拾錢

法律叢書

法學博士鳩山和夫 法學博士穗積陳重
法學博士高井政章 法學博士戸水寛人
帝國大學教授レインホルム

法學博士梅謙次郎 法學博士菊池武夫
帝國大學教授ハインリヒ、テルンアルヒ原著
獨逸伯林

法學博士中村進午 法學士副島義一
法學士瀨田忠三郎 法學士古川五郎合譯
山口弘一

獨逸民法論

冊四全

附獨逸民法正文正價金八圓

第一卷 總則 第二卷 物權

第三卷 債權 第四卷 親族、相繼

●正價 ○第一卷金七拾五錢 ○第二卷金七拾五錢
○第三卷金七拾五錢 ○第四卷金七拾五錢
●郵送料 ○第一卷金十六錢 ○第二卷金十六錢 ○第三卷
金二十錢 ○第四卷金二十錢全部小包料金五錢

法學博士鳩山和夫 梅謙次郎批評
獨逸ホーデルハイム、エンテマン原著
大學教授 法學士古川五郎 合
法學士堀内秀太郎 中村健一 譯

獨逸商法論

冊二全

紙數千二百餘頁 背皮文字入上製美本
正價金參圓五拾錢 小包料四百文
附獨逸商法正文

獨逸リスト原著
法學博士岡田朝太郎 閱
法學士乾政彦 共譯
法學士吾孫子勝 譯

獨逸刑法論

刊近

近刊

獨逸ヘッテル著 法學士堀口九万一 譯
國際公法
獨逸パウル著 法學士古川五郎 譯
國際私法
佛國フイオレ著 法學士宮本平九郎 譯
國際私法

法學士 青山 衆司 著

商行為

冊一全

正價 金七拾五錢 郵稅 金八錢

教科書類及雜書

海峽 依田 百川 序
省軒 龜谷 行 引
晚香 齋池 三九郎 編

文章真訣

冊一全

正價 金七拾五錢 郵稅十錢
體則別百篇 法則別百篇 時代別百篇

金卓庵序 土屋鳳洲序
三島中洲評 齋池晚香註

漢文綱要

冊一全

正價 金六拾錢 郵稅 金六錢

獨逸レーマン著
法學士古川五郎 共譯
法學士里見三作 譯
手形法論
法學士小山溫 法學士鈴木喜三郎 共著
民法要論
法學士 青山衆司 著
商法要論
法學士 胡倉外茂 著
海商法

法律教科書

冊一全

法學士 小山 溫 著

民法總則

冊一全

法學士 小山 溫 著

民事訴訟法

篇一第

法學士 今村 信 行 著

平家物語

冊一全

赤松受次郎 千秋夢庵共編

英語文章軌範

冊一全

正價 金六拾五錢 並製金五拾錢
郵稅金六錢

東京專門學校講師 増田藤之助 編

刑法評論

冊一全

總クローヌ類美本 紙數二百頁
正價金五十錢 郵稅四錢

法學博士 岡田朝太郎 贊評
判事 藤澤藤十郎 著

獨逸新商法正文

冊一全

法學士古川五郎 山口弘一 合譯
正價 金五十錢 郵稅金六錢

債權法總則

冊一全

法學士 平沼 一 郎 著
正價 金六拾錢 郵稅 金六錢

親族法

冊一全

法學士 牧野 菊之助 著
正價 金四拾五錢 郵稅金六錢

保險法

冊一全

法學士 和 仁 貞 吉 著
正價 金四拾錢 郵稅 金四錢

商法總則

冊一全

法學士 青山 衆司 著
正價 金六拾錢 郵稅 金六錢

物權法

冊一全

法學士 鈴木 喜三郎 著
正價 金五拾五錢 郵稅金六錢

新法典正文

冊二全

對照 法例・民法・民事訴訟法
民法之部 法施行法・人事訴訟手續法・外三法全二冊 正價四十五錢 郵稅八錢

商法之部

國籍法・商法・商法施行法・供託法全一冊 正價廿八錢 郵稅六錢

法典修正案理由書

冊二全

菊版 全二冊 一千五百頁
正價金七十五錢 郵稅一冊十四錢

刑法改正案參考書

冊一全

民法、法例、國籍法、登記、不動產登記法、民法施行法、商法、商法施行法、登冊

近刊

